

# 山口大学構内遺跡調査研究年報 V

1986

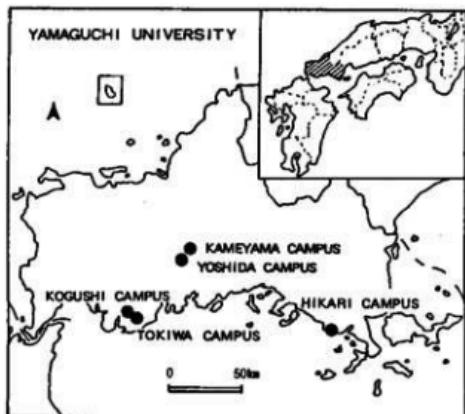
山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報 V

正誤表

訂正箇所	誤	正
37ページ 21行	銅津	鉱津
同 22行	銅津	鉱津
198ページ №48	神田遺跡の項	(削除)
199ページ №72	土師器	土師器・石棟
200ページ №95	後河内遺跡	後河原遺跡

# 山口大学構内遺跡調査研究年報V



1986

山口大学埋蔵文化財資料館

## 発刊にあたって

このたび、本学が昭和60年度に大学構内で実施した発掘調査の記録を、「山口大学構内遺跡調査研究年報V」として刊行するはこびとなった。

本学での埋蔵文化財の調査は統合移転に伴い昭和41年から実施しており、とりわけ、吉田地区は縄文時代から江戸時代におよぶ一大集落であることが明らかとなっている。また、埋蔵文化財資料館の設立以後は、各時代の集落の生活実態、変遷過程が次第に明らかとなっており、その成果として、地域の歴史をはじめとする集落遺跡研究に寄与する知見にはゆたかなものがある。

さらに、将来の文化創造の基礎をなす文化財を、歴史・文化のなかで体系的に把握するためには、集落跡で得られた成果に加え、埋葬跡を含めた今後の調査・研究が望まれる。

文化財を後世に末永く保存し、活用を図ることが国民的課題となっている昨今、教育・研究を通じ社会への貢献を使命とする本学においても、施設・環境整備と共に進む構内遺跡の調査・研究および保護は、周知の進跡上に立地する課題のひとつといえる。

しかし、両者は本質的には決して競合するものではなく、将来を展望した協調によって円滑に進めることができるものと確信している。

最後に、発掘調査および報告書の刊行にあたり、御理解、御協力をいただいた関係部局、各位に対し感謝の意を表したい。

昭和62年3月

山口大学

学長 粟屋和彦

## 序 文

山口大学構内遺跡調査研究年報Vを刊行することが出来た。予算措置の厳しい状況の中で、成果を確実に公刊することを許された学内の皆様に厚く御礼を申し上げたい。

報告の中には、四年間にわたり調査を継続した保存地区部分の成果を含んでいる。現状は埋めもどして整地し、説明板を掲げてあるだけであるが、将来、許されるならば史跡公園として活用して欲しいと考え、その復原案の一部も報告書の中にのせておいた。たとき台として将来計画検討委員会や環境整備委員会など、各方面からご検討をいただけた幸いである。

61年度の調査は、実働4ヶ月をこえる。その間も報告書作成のための内業を一方では統けた。助手1名、非常勤職員2名の作業量としては、能力を超えるところもある。人文学部考古学研究室の学生諸君の援助もあって初めて作業をこなせたともいえる。埋蔵文化財に対する傾向は、全国的にみた場合、だんだん風あたりが強くなってきてているように思える。効率ばかりを追求する社会全般の流れが、地味な基礎作業に対する評価を小さくするような傾向がみえてきているようにも思える。物いわぬ埋蔵文化財にかわって、その歴史的位置づけを、またそれが持っている意味を、出来るだけ一般の人達にもわかる、易しい言葉で語る。そのことが埋蔵文化財を理解してくれる人を一人でも作る道であろう。

考古学の使う言葉は、自分達だけでわかり、一般に理解されないものが多い。本報告書中の言葉も、決して上手な文章とはいえない。出来るだけ易しい言葉で、的確に表現する。そのため館員はもっと勉強する必要がある。今後とも山口大学の構内遺跡の調査が充実し、それが単にノルマとしての報告でなく、そこから新しい歴史的展望の開けるものであることを願っている。学内・外の皆様の御支援をお願いしたい。

1987年3月

山口大学埋蔵文化財資料館

館長 近藤喬一

## 例 言

1. 本書は山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、昭和60年度に山口大学構内で実施した調査に関し、昭和61年度末までに整理作業を終えた調査報告書である。
2. 現地における調査・研究は人文学部考古学研究室の協力を得て資料館員河村吉行・森田孝一が担当した。また、出土遺物の整理は同館員福島朝子・杉原和恵・奥英子が中心となり行なった。
3. 調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。
4. 実測は、人文学部考古学研究室の協力のもと、遺構を河村・森田が、遺物を付篇Ⅰについては河村、他については杉原が中心となり行なった。製図は主に奥が行ない、杉原が補佐した。本文の執筆は河村・森田・杉原が分担して行なった。
5. 現地における写真撮影は河村・森田が行ない、本冊子の遺物の写真撮影は河村があたった。なお、付篇Ⅰの遺構写真は吉田遺跡調査団の撮影によるものを使用した。
6. 石質の鑑定は山口大学理学部教授 松本洋夫氏、動・植物遺体の鑑定は同農学部講師 宇都宮宏氏に依頼し、懇切な御教示を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 本書の編集は館員が協力して行なった。
8. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。
9. 調査組織は次のとおりである（昭和60・61年度）。

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	黄 基雄〔昭和60年4月1日～5月9日〕
		タ	近藤喬一〔昭和60年5月10日～〕
	館員	河村 吉行	
		タ	森田 孝一〔～昭和61年8月31日〕
		タ	福島 朝子〔昭和60年4月1日～昭和61年3月30日〕
		タ	杉原 和恵〔昭和61年4月1日～〕
		タ	奥 英子〔昭和61年9月1日～〕
事務局		事務局長	五田 次雄〔～昭和60年11月30日〕
		タ	大谷 巍〔昭和60年12月1日～〕
本部庶務部		部長	内藤 信
庶務課		課長	金谷 英夫
		課長補佐	大多和泰則〔昭和60年4月1日～〕

庶務係 係長 片山 正雄 [～昭和61年3月30日]  
 野村 宗成 [昭和61年4月1日～]  
 本田 正春  
 岩佐 厚子  
 杉山美由紀 [～昭和61年3月30日]  
 深町 洋二 [昭和61年4月1日～]  
 中川イクミ [～ ]

10. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は昭和60年度）。

山口大学事務局庶務部 人事課長 南雲 修、同課長補佐 吉岡隆夫、同係長 西野雅博、  
 同係 河内和郎、池本誠也、給与係長 森田義富、同係 藤井純朗、  
 松本龍明  
 経理部 部長 森川辰雄、経理課長 幸 文雄、主計課長 進藤陸男、同課長補佐 本間 健、管財係長 小林和生、用度係長 野沢章三、同係  
 浜田千春、薪 達己、管理係長 山村美早穂、同主任 正司三喜男  
 施設部 部長 大西丈二、企画課長 比嘉真義、建築課長 管野國夫、同課長補佐 佐伯 敦、設備課長 中沢喜久雄、能務係長 梅村 霞、同係  
 三村文雄、第一工営係長 藤井 幸、同係 小川賀津夫、澤谷弘美、  
 第二工営係長 稲垣寛實、同係 河田徹也、第三工営係長 平田 治  
 電気係長 亦野高志、同係 小草建三、松田清司、機械係長 鈴木輝美、  
 同係 鹿嶋正則、岡田吉彦  
 学生部 部長 新中康弘、次長 石丸雄亮、学生課長 吉村 學、同課長補佐 鶴本拓司、学生係長 林 季生、同主任 山本直行、同係 辛崎克己、  
 大学会館主任 端野輝昭  
 医学部 事務部長 進藤春美、同次長 堀江 正、総務課長 坂井友造、同課長補佐 西澤喜昭、管理課長 萩田勝秋、同課長補佐 梅原儀助、  
 石川俊輔、庶務係長 原 和男、人事係長 有吉 明、管理係長  
 森屋 守、経理係長 松永次郎、施設係長 三浦幸一、設備係長  
 吉永峯生、同係 吉野高己、山本安雄、持留三郎、環境係長 藤井良雄、  
 同係 秋本尚武  
 経済学部 事務長 原田晃成、会計係長 中島岩弘  
 農学部 事務長 原田政明、附属農場事務長 宇山隆造、同係長 末永勝己、  
 同係 寺山幸夫、尾崎憲雄  
 教育学部 事務長 光永 等、同補佐 柳 等、庶務係長 柳 洋二、会計係長

森本茂雄、山口附属学校係長 林 威、光附属学校係長 伊藤敏徳  
人文・理学部 事務長 藤田善淳、同補佐 宮原 敏、中村義満、会計係長 藤川年章  
工学部 事務長 大庭静男、同補佐 片山美徳、会計係長 石川恒夫、同主任  
高崎明折  
人文学部考古学研究室  
字部シルバー人材センター  
調査補助員  
磯部貢文、井出吉彦、唐口勉三、川口幸子、佐藤邦子、西山和子、向 直也、森下靖士、  
吉田 寛、上野文子、柏木秋生、高下洋一、定池博之、馬場道則、内山 治、鎌田ちのい、  
辛鶴眞治、中原章子、南 時夫、森 恒裕（人文学部考古学研究室）  
作業員  
今住ゆきえ、浦山芳子、大隅恵美子、末岡琴美、中野満子、花村正枝、原 芳子、原口順子、  
藤田千代子、三川郁子、宮家静代、吉村幸子、米倉喜子、横山尚行

## 凡 例

1. 吉田構内における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した構内地区割のA～24区南西隅を起点（構内座標x = 0, y = 0）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。

$$\begin{cases} x = X + 206,000 \\ y = Y + 64,750 \end{cases}$$

2. 各遺構は下記の記号で表記した。  
竪穴住居跡……S B, 土壙……S K, 不明土壙……S X, 溝……S D,  
柱穴……Pit
3. 本書に使用した方位は吉田構内では国土座標を基準とした真北、他構内においては磁北を示す。
4. 標高数値は吉田構内、小串構内では海拔標高を示す。
5. 土器の実測図は下記のように分類した。  
断面黒ぬり……須恵器、断面白ぬり……繩文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、  
断面網目……陶磁器
6. 遺物の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」(1976)に準拠した。

## 本文目次

第1章 昭和60年度山口大学構内遺跡調査の概要 .....	(河村) .....	1
第2章 小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査 .....	(河村)	
1 調査の経過 .....		5
2 層位・遺構 .....		6
3 遺物 .....		9
4 小結 .....		10
第3章 吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査 .....	(森田・河村・杉原)	
1 調査の経過 .....		11
2 層位・遺構 .....		12
3 遺物 .....		32
4 小結 .....		42
第4章 小串構内医学部基礎研究棟新営に伴う試掘調査 .....	(河村)	
1 調査の経過 .....		49
2 層位 .....		49
3 小結 .....		50
第5章 小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査 .....	(河村)	
1 調査の経過 .....		51
2 層位 .....		52
3 遺物 .....		52
4 小結 .....		53
第6章 昭和60年度山口大学構内の立会調査 .....	(河村・森田・杉原)	
第1節 吉田構内の立会調査		

1 経済学部環境整備に伴う立会調査	55
2 農学部附属農場飼料圃排水溝修復整備に伴う立会調査	56
3 農学部附属農場農道改修に伴う立会調査	62
4 教育学部環境整備に伴う立会調査	63
5 中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査	64
6 大学会館環境整備に伴う立会調査	65
7 交通標識設置に伴う立会調査	69
8 農学部解剖実習棟周辺および附属家畜病院環境整備に伴う立会調査	70
9 理学部環境整備に伴う立会調査	71
<b>第2節 小串構内の立会調査</b>	
1 医学部看護婦宿舎改修に伴う立会調査	72
2 医学部環境整備に伴う立会調査	73
<b>第3節 常盤構内の立会調査</b>	
1 工学部尾山宿舎擁壁取設等に伴う立会調査	74
2 工学部受水槽改修に伴う立会調査	75
<b>第4節 亀山構内の立会調査</b>	
1 教育学部附属山口小学校散水栓改修に伴う立会調査	76
2 教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査	77
3 教育学部附属幼稚園環境整備に伴う立会調査	78
<b>第5節 光構内の立会調査</b>	
教育学部附属光中学校外灯改修に伴う立会調査	79
<b>第6節 その他構内の立会調査</b>	
熊野荘給湯機器取設に伴う立会調査	80

## 付篇

### 付篇 I

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）	河村吉行	81
-----------------------------	------	----

## 付篇Ⅱ

山口県内の弥生時代貯蔵穴について	森下靖士	175
一館蔵資料紹介一下関市六連鳥遺跡出土の朝鮮系無文土器	杉原和恵	185
山口大学埋蔵文化財資料館所蔵資料目録		197
山口大学構内遺跡調査要項		
山口大学埋蔵文化財資料館規則		202
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則		203
山口大学構内の主な調査		205
Summary		209

## 図 版 目 次

### <小串構内医学部外来診療棟新館に伴う試掘調査>

P L. 1 小串構内（医学部・医療技術短期大学部）全景（南西から）	213-214
P L. 2 (1) A トレンチ全景（東から）	5-6
(2) B トレンチ全景（北から）	5-6
(3) B トレンチ西壁土層断面（東から）	5-8
P L. 3 (1) C トレンチ全景（東から）	5-6
(2) C トレンチ土器層状遺構（北から）	5-6
P L. 4 (1) D トレンチ全景（南から）	5-9
(2) A トレンチ作業風景（南から）	5-6
(3) 出土遺物	9-10

### <吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査>

P L. 5 吉田構内全景（北西から）	211-212
P L. 6 (1) 調査地域全景（西から）	11-45-48
(2) A トレンチ全景（南から）	12-15-17-18

P L. 7	(1) B トレンチ全景 (北から) .....	15~17~18
	(2) C トレンチ北半部全景 (北から) .....	15~18
P L. 8	(1) C トレンチ南半部全景 (北から) .....	15~18
	(2) D トレンチ全景 (北から) .....	19~21
P L. 9	(1) E トレンチ全景 (北から) .....	19~22
	(2) F トレンチ全景 (北から) .....	19~20~22
P L. 10	(1) A トレンチ第1号土壙 (南から) .....	12~15
	(2) A トレンチ第1号土壙遺物出土状況 (南東から) .....	12~15~22~23~38
	(3) B トレンチ南半部遺構分布状況 (北から) .....	15~17~18
	(4) B トレンチ第1号竪穴住居跡 (西から) .....	15~17~18
P L. 11	(1) B トレンチ第1号竪穴住居跡遺物出土状況 (南から) .....	15~22~26~38
	(2) B トレンチ拡張部遺構分布状況 (東から) .....	15~17~18
	(3) C トレンチ第3号土壙 (南から) .....	16~21
P L. 12	(1) C トレンチ南端部遺構分布状況 (南から) .....	15~18
	(2) C トレンチ拡張部遺構分布状況 (西から) .....	15~18
	(3) D トレンチ第4・5号土壙 (東から) .....	19~21
	(4) D トレンチ南半部地山落ち込み状況 (南から) .....	19~21
P L. 13	(1) A トレンチ第1号土壙出土土器 .....	22~23
	(2) B トレンチ第1号竪穴住居跡出土土器 .....	23~25
P L. 14	(1) C トレンチ第3号土壙出土土器 .....	26~27
	(2) D トレンチ第4号土壙出土土器 .....	30~31
	(3) D トレンチ第5号土壙出土土器 .....	30~31
	(4) F トレンチ柱穴出土土器 .....	30~31
P L. 15	包含層出土土器 (縄文土器・弥生土器・土師器・瓦質土器) .....	31~34
P L. 16	包含層出土土器 (須恵器・磁器・陶器) .....	34~35
P L. 17	(1) B トレンチ第1号竪穴住居跡出土石器 .....	25
	(2) C トレンチ第3号土壙出土石器 .....	28~30
P L. 18	包含層出土石器・鉄器・その他 .....	36~38
<小串構内医学部基礎研究棟新營に伴う試掘調査>		
P L. 19	(1) トレンチ全景 (南から) .....	49

(2) 北壁土層断面（南から）	49-50
-----------------	-------

<小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査>

P L. 20 (1) 第一地点全景（北から）	51
(2) 南壁土層断面（北から）	52
(3) 第二地点土層断面（北から）	51
(4) 出土遺物	52-53

<昭和60年度山口大学構内の立会調査>

P L. 21 農学部附属農場飼料圃排水溝修復整備に伴う立会調査出土遺物	57-60
P L. 22 (1) 中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査出土遺物	64
(2) 大学会館環境整備に伴う立会調査出土遺物	65-68

**付篇Ⅰ**

<山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）>

P L. 23 (1) 昭和57年度調査区北端部全景（東から）	84-144
(2) 昭和57年度調査区西端部全景（東から）	84-144
P L. 24 (1) 昭和57年度調査区南端部全景（東から）	84-144
(2) 昭和59年度調査区全景（東から）	82-84
P L. 25 (1) 昭和60年度調査区全景（東から）	82-84
(2) 昭和61年度調査区全景（東から）	82-84
P L. 26 (1) 第1号竪穴住居跡（東から）	84-85
(2) 第2～6号竪穴住居跡（東から）	85-89
(3) 第7号竪穴住居跡（東から）	89-90
(4) 第4号土壙（南から）	92-101
P L. 27 (1) 第5号土壙（南から）	102-103
(2) 第8号土壙（南から）	103-105-106
(3) 第9号土壙（北東から）	106-108
(4) 第17・18号土壙（北東から）	116-117
P L. 28 (1) 第29号土壙（東から）	124-125
(2) 第42号土壙（東から）	126-127
(3) 出土遺物(1)	84-93
P L. 29 出土遺物(2)	93-101

P L . 30	出土遺物(3)	93~101
P L . 31	出土遺物(4)	93~101
P L . 32	出土遺物(5)	93~105
P L . 33	出土遺物(6)	105~110
P L . 34	出土遺物(7)	106~116
P L . 35	出土遺物(8)	115~121
P L . 36	出土遺物(9)	119~129
P L . 37	出土遺物(10)	129~131
P L . 38	出土遺物(11)	130~134
P L . 39	出土遺物(12)	87·88·90·100·101·115·116·130~134

## 付篇II

### <下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器>

P L . 40	六連島遺跡出土の弥生土器(1)	179~183
P L . 41	(1) 六連島遺跡出土の弥生土器(2)	179~183
	(2) 六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器	178~179

## 挿 図 目 次

### <小串橋内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査>

Fig.	1 調査区位置図	5
Fig.	2 土層断面図	7·8
Fig.	3 出土遺物実測図	9

### <吉田橋内大学会館環境整備に伴う試掘調査>

Fig.	4 調査区位置図	11
Fig.	5 トレンチ設定図	12
Fig.	6 A トレンチ遺構配置図	12
Fig.	7 土層断面図	13·14
Fig.	8 第3号土壤実測図	16
Fig.	9 B·C トレンチ遺構配置図	17·18

Fig. 10 D・E・F トレンチ遺構配置図	19・20
Fig. 11 A トレンチ第1号土壤出土遺物実測図	23
Fig. 12 B トレンチ第1号堅穴住居跡出土遺物実測図（土器）	24
Fig. 13 B トレンチ第1号堅穴住居跡出土遺物実測図（石器）	25
Fig. 14 C トレンチ第3号土壤出土遺物実測図（土器）	27
Fig. 15 C トレンチ第3号土壤出土遺物実測図（石器）	29
Fig. 16 D トレンチ第4号土壤出土遺物実測図	31
Fig. 17 D トレンチ第5号土壤出土遺物実測図	31
Fig. 18 F トレンチ柱穴出土遺物実測図	31
Fig. 19 包含層出土遺物実測図（縄文土器・弥生土器・土師器・瓦質土器）	32
Fig. 20 包含層出土遺物実測図（須恵器・磁器・陶器）	33
Fig. 21 包含層出土遺物実測図（石器・鉄器）	36
Fig. 22 昭和46年時における周辺地域の調査	42
Fig. 23 L-14区出土の滑石製模造品	43
Fig. 24 遺構分布図	45・46
Fig. 25 遺物包含層上面ないしは遺構面までの深さ	47・48
<小串構内医学部基礎研究棟新營に伴う試掘調査>	
Fig. 26 調査区位置図	49
Fig. 27 土層断面図	50
<小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査>	
Fig. 28 調査区位置図	51
Fig. 29 土層断面図	52
Fig. 30 出土遺物実測図	52
<昭和60年度山口大学構内の立会調査>	
Fig. 31 調査区位置図	55
Fig. 32 調査区位置図	56
Fig. 33 土層断面基本柱状図	57
Fig. 34 出土遺物実測図	58
Fig. 35 調査区位置図	62
Fig. 36 調査区位置図	63

Fig. 37	調査区位置図	64
Fig. 38	出土遺物実測図	64
Fig. 39	調査区位置図	65
Fig. 40	出土遺物実測図	66
Fig. 41	調査区位置図	69
Fig. 42	調査区位置図	70
Fig. 43	調査区位置図	71
Fig. 44	調査区位置図	72
Fig. 45	調査区位置図	73
Fig. 46	調査区位置図	74
Fig. 47	調査区位置図	75
Fig. 48	調査区位置図	76
Fig. 49	調査区位置図	77
Fig. 50	調査区位置図	78
Fig. 51	調査区位置図	79
Fig. 52	調査区位置図	80
付篇 I <山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）>		
Fig. 53	調査区位置図	81
Fig. 54	遺跡保存地区構造配置図	83
Fig. 55	第1号竪穴住居跡実測図	85
Fig. 56	第2・3号竪穴住居跡実測図	86
Fig. 57	第1・2・4・7号竪穴住居跡出土遺物実測図	87
Fig. 58	第4・5号竪穴住居跡実測図	89
Fig. 59	第6号竪穴住居跡実測図	90
Fig. 60	第7号竪穴住居跡実測図	90
Fig. 61	第1～4号土壤実測図	92
Fig. 62	第1・2号土壤出土遺物実測図	93
Fig. 63	第3号土壤出土遺物実測図(1)	96
Fig. 64	第3号土壤出土遺物実測図(2)	97

Fig. 65 第3号土壤出土遺物実測図(3) .....	98
Fig. 66 第3号土壤出土遺物実測図(4) .....	99
Fig. 67 第3号土壤出土遺物実測図(5) .....	100
Fig. 68 第4号土壤出土遺物実測図 .....	102
Fig. 69 第5~8号土壤実測図 .....	103
Fig. 70 第5~7号土壤出土遺物実測図 .....	105
Fig. 71 第8·10·12号土壤出土遺物実測図 .....	106
Fig. 72 第9~12号土壤実測図 .....	107
Fig. 73 第9号土壤出土遺物実測図(1) .....	109
Fig. 74 第9号土壤出土遺物実測図(2) .....	110
Fig. 75 第13~16号土壤実測図 .....	113
Fig. 76 第13号土壤出土遺物実測図 .....	114
Fig. 77 第14~17号土壤出土遺物実測図 .....	115
Fig. 78 第17~21号土壤実測図 .....	117
Fig. 79 第18·21~23号土壤出土遺物実測図 .....	119
Fig. 80 第22~25号土壤実測図 .....	122
Fig. 81 第24~26·41号土壤出土遺物実測図 .....	123
Fig. 82 第26·27·29·40号土壤実測図 .....	125
Fig. 83 第41·42·50号土壤実測図 .....	126
Fig. 84 第1~3号溝出土遺物実測図 .....	128
Fig. 85 柱穴出土遺物実測図 .....	129
Fig. 86 トレンチ出土遺物実測図 .....	130
Fig. 87 トレンチおよびその他の出土遺物実測図 .....	132
Fig. 88 主な弥生時代の竪穴住居跡検出遺跡分布図 .....	146
Fig. 89 竪穴住居の平面形態 .....	150
Fig. 90 竪穴住居の主柱数 .....	151
Fig. 91 竪穴住居の床面積 .....	152
Fig. 92 床面積に占める主柱間床面積(1) .....	154
Fig. 93 床面積に占める主柱間床面積(2) .....	155
Fig. 94 保存地区環境整備後の想像図 .....	165

Fig. 95 家屋復原住居(1) .....	166
Fig. 96 家屋復原住居(2) .....	166
Fig. 97 家屋復原住居(3) .....	167
Fig. 98 住居プラン復原例 .....	168
Fig. 99 溝、河川跡復原例 .....	168
Fig. 100 覆屋復原例 .....	168
Fig. 101 各地の遺跡整備例 .....	169
Fig. 102 円形竪穴住居跡設計例 .....	170
Fig. 103 方形竪穴住居跡設計例 .....	171
Fig. 104 住居プラン復原例 .....	172
<b>付篇II</b>	
<山口県内の弥生時代貯蔵穴について>	
Fig. 105 県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡分布図 .....	175
Fig. 106 県内の貯蔵穴の分類 (約1/40) .....	177
Fig. 107 各遺跡のV類貯蔵穴 (1/40) .....	179
<下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器>	
Fig. 108 六連島遺跡位置図 .....	185
Fig. 109 朝鮮系無文土器実測図 .....	186
Fig. 110 弥生土器実測図(1) .....	188
Fig. 111 弥生土器実測図(2) .....	189
Fig. 112 弥生土器実測図(3) .....	190
Fig. 113 朝鮮半島における無文土器臺の分布 .....	192
Fig. 114 九州・山口地方における無文土器臺の分布 .....	193
Fig. 115 山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 .....	211-212
Fig. 116 山口大学小串構内調査区位置図 .....	213-214
Fig. 117 山口大学常盤構内調査区位置図 .....	215-216
Fig. 118 山口大学亀山構内(幼稚園・小学校内)調査区位置図 .....	217-218
Fig. 119 山口大学光構内調査区位置図 .....	219-220

## 表 目 次

### <昭和60年度山口大学構内遺跡調査の概要>

Tab. 1 昭和60年度山口大学構内遺跡調査一覧表 .....	1・2
----------------------------------	-----

### <吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査>

Tab. 2 遺構出土土器観察表 .....	38・39
------------------------	-------

Tab. 3 包含層出土土器観察表 .....	39～41
-------------------------	-------

Tab. 4 出土石器観察表 .....	41
----------------------	----

### <小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査>

Tab. 5 出土遺物観察表 .....	53
----------------------	----

### <昭和60年度山口大学構内の立会調査>

Tab. 6 出土遺物観察表 .....	60
----------------------	----

Tab. 7 出土遺物観察表 .....	67
----------------------	----

## 付篇 I

### <山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）>

Tab. 8 出土遺物観察表 .....	134～142
----------------------	---------

Tab. 9 県内の弥生時代堅穴住居跡検出遺跡地名表 .....	156～163
----------------------------------	---------

## 付篇 II

### <山口県内の弥生時代貯蔵穴について>

Tab. 10 県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡地名表 .....	176
---------------------------------	-----

### <下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器>

Tab. 11 九州・山口地方の無文土器出土遺跡地名表 .....	195
-----------------------------------	-----

### <山口大学埋蔵文化財資料館所蔵資料目録>

Tab. 12 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵資料目録 .....	197～201
----------------------------------	---------

Tab. 13 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 .....	204
-----------------------------------	-----

Tab. 14 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 .....	204
---------------------------------	-----

Tab. 15 山口大学構内の主な調査一覧表 .....	205
------------------------------	-----

## 第1章 昭和60年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学構内には縄文時代後・晩期から近世にかけての集落跡の所在する吉田地区をはじめとして県内各地に分散する附属施設を含めた各地区に周知の遺跡が埋存している。

山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各地区において現状変更を伴う諸工事に際し、埋蔵文化財保護の観点から調査・研究を行なっている。すなわち、埋蔵文化財調査をする場合は、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、周辺における既往の調査結果や工事内容等を勘案しながら、埋蔵文化財に対する影響の度合に応じて立会、試掘および事前に区分した各調査方法に準拠して発掘調査を実施し、保護措置を講じている。

今年度は試掘調査4件、立会調査18件の計22件の調査を実施した (Tab. 1)。

Tab. 1 昭和60年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査地区	構内地区	構内地区割	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	挿図番号
試 掘	医学部外来診療棟新設予定地	小串構内		409	5月24日～ 7月10日	Fig.116 -8
	大学会館環境整備地区	吉田構内	L-14 L·M·N-15	592	7月11日～ 8月6日	Fig.115 -62
調 査	医学部基礎研究棟新設予定地	小串構内		11	7月15～17日	Fig.116 -9
	医学部看護婦宿舎改修予定地	小串構内		25.5	12月9・10日	Fig.116 -10
立 会 調 査	経済学部環境整備地区 (樹木移植地区)	吉田構内	K-21 L-20	5	7月12日	Fig.115 -63
	農学部附属農場飼料園排水溝 修復整備地区	吉田構内	R-16～19	30	11月7日、 <sup>2</sup> 2月26日、61年 4月23・24日	Fig.115 -64
	農学部附属農場農道改修地区	吉田構内	V-15・16	325	11月26日	Fig.115 -65
	教育学部環境整備地区 (樹木移植地区)	吉田構内	I-J-19-20	430	12月3日	Fig.115 -67
	中央ボイラー棟車止設置地区	吉田構内	O-P-16	2.5	12月13日	Fig.115 -68

## 昭和60年度山口大学構内道路調査の概要

調査区分	調査地区	構内地区	構内地区割	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	挿図番号
立	大学会館環境整備地区 (樹木移植地区)	吉田構内	L-M-15	9	12月23日	Fig.115 -69
	交通標識設置地区	吉田構内	J-20,N-14 O-18	3	12月23日	Fig.115 -70
	農学部解剖實習棟周辺環境整備地区(実験動物運動場設置)	吉田構内	P-Q-17-18	16	2月10日	Fig.115 -71
	理学部環境整備地区 (藤棚設置地区)	吉田構内	N-20-21	4	2月10日	Fig.115 -72
会	農学部附属家畜病院環境整備地区(アスファルト舗装地区)	吉田構内	S-T-19	270	2月24日	Fig.115 -73
	医学部看護婦宿舎改修地区	小串構内		20	12月3日	Fig.116 -11
	医学部環境整備地区 (樹木移植地区)	小串構内		40	1月14日	Fig.116 -12
調	工学部尾山宿舎擁壁取扱および下水管改修地区	常盤構内		65	10月18日	Fig.46
	工学部受水槽総改修地区	常盤構内		1.5	1月27日	Fig.117 -3
	教育学部附属山口小学校散水栓改修地区	亀山構内		1	9月5日	Fig.118 -2
	教育学部附属山口中学校球技コート整備地区	亀山構内		2	9月25日	Fig.49
査	教育学部附属幼稚園環境整備地区(樹木移植地区)	亀山構内		1	3月4日	Fig.118 -3
	教育学部附属光中学校外灯改修地区	光構内		1	11月15日	Fig.119 -3
	熊野荘給湯機器取扱地区	山口市 熊野町		7	1月13日	Fig.52

## 吉田地区的調査

試掘調査1件、立会調査10件の計11件の調査を実施した。

大学会館環境整備に伴う試掘調査は、昭和58年度に古墳時代～室町時代の井戸や畿内系瓦器、墨書き須恵器、石製鉢等、木簡を含む多量の遺物が出土した。大学会館敷地部分南側

の丘陵で実施したものである。環境整備予定地である前庭部は上・下二段に造成されており、上段部分では、昭和57年度の試掘調査で弥生時代～室町時代の多数の遺構が検出されており、当該地域が学内でも遺構の分布密度が極めて高い地域のひとつとして位置づけられている。しかし、下段部分においては埋蔵文化財に関する具体的な資料がなく、環境整備に伴う現状変更によって埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性があることから、試掘調査によって、事前に遺物包含層、遺構の分布状況およびその検出面までの深度を把握し、環境整備計画との整合をはかろうとしたものである。

その結果、弥生前期末～中期初頭の貯蔵用穴、後期後半の堅穴住居跡をはじめとして弥生時代前期末から平安時代にかけての土壙、溝、柱穴多数を検出し、旧地形や集落の立地、規模、構造、変遷を知る好資料となった。

また、遺物包含層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦質土器、石斧など、縄文時代から鎌倉時代前半にかけての多量の土器、土製品、石器のほか、鉄製品、鉄滓、磁器窯の窯体などが出土した。縄文土器は後期に遡る可能性のある粗製の深鉢で、当地域における集落の開始時期を遡らせる資料である。また、滑石、黒曜石の原材も出土しており、原産地から消費地への供給過程を知るうえで貴重である。

これらの遺構、あるいは遺物包含層が後世の削平により検出されなかった環境整備予定地下段の東北端部においては当初の計画どおり整備が実施されることとなったが、遺物包含層の厚く堆積している地域での植樹等に対しては立会調査、また学術上良好な遺構の埋存が確認された地域では、遺構面に達しない環境整備を実施することで合意が得られた。

10件実施した立会調査のうち、農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査では奈良～鎌倉時代の河川跡を検出し、この河川によって区分される少なくとも二つの集落の存在が想定された。この河川跡からの轍口と鉄滓の出土は、その集落内における製鉄の可能性を示唆するものとして興味深い。「遺跡保存地区」北東方で実施した教育学部環境整備に伴う立会調査では、小規模な谷が確認され、弥生～古墳時代前期の集落立地、規模を推定する資料となった。中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査では、9世紀後半のものと思われる須恵器が出土した。また、大学会館環境整備に伴う立会調査では、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、石鍋、砥石、鉄滓等が出土した。墨書のある土器は大学会館敷地部分について本学では三例目で、奈良時代末～平安時代初めの一般の集落と機能を異にする官衙、荘所等の存在を傍証する資料として注目される。

### 小串地区的調査

試掘調査3件、立会調査2件の計5件の調査を実施した。

医学部キャンパス南東部で実施した外來診療棟新営に伴う試掘調査では、顕著な遺構は検出されず、過去の調査でも同キャンパス内に普遍的に堆積しているグライ化した青灰色ないしは青黄灰色粘土層より、周辺地域からの流入品と考えられる中世～近代の遺物若干が出土したにとどまった。基礎研究棟新営に伴う試掘調査でも、擾乱土下位に同層の堆積が認められるが遺物はなく、同層の不安定な遺物の包含状況を示している。したがって、キャンパスを二分して走る市道の南北側では、今後、まだ調査が行なわれていない第一・二病棟および給食棟を含むキャンパス中央部を中心にした地域での、同層の有無と遺物の包含状況、および地山の確認が望まれる。

一方市道を隔てたキャンパス北東部地域では、看護婦宿舎改修に伴い試掘、立会調査、および樹木移植を中心とした環境整備に伴う立会調査を実施したが、近世の陶磁器若干が出土したにとどまった。しかし、調査面積が極めてせまく同地域での埋蔵文化財の具体的な埋存状況を把握するには、さらに、周辺地域でのより広汎な調査による資料の蓄積が必要であろう。

### 常盤地区的調査

立会調査2件を実施した。

キャンパス北東端部付近の受水槽改修地域のすぐ西には北へ開く谷が残存しており、現在のグラウンド周辺はこの谷を造成埋積したものであるという。立会調査では薄く堆積する擾乱土直下に黄橙色粘土の地山が検出され、東からの丘陵の谷への落ち込みが急峻であったことを示すとともに、丘陵部分での構内造成による大規模な削平が予想される。

また尾山宿舎では擁壁取設等に伴い南端部分で立会調査を実施した。同宿舎敷地内では地山が南へ下降し、比較的旧地形を残している南西部での調査が今後の課題となった。

### その他構内の立会調査

教育学部附属幼稚園、山口小・中学校の所在する亀山構内、教育学部附属光小・中学校の所在する光構内等で計5件の立会調査を実施したが、工事に伴う掘削深度内では顕著な遺物、遺構は検出されなかった。

(河 村)

## 第2章 小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査

### 1 調査の経過

宇都宮小串に所在する医学部キャンパス（小串構内）では、昭和58年度以降各施設整備に伴い埋蔵文化財有無確認のための数次に及ぶ試掘・立会調査を実施している。その結果、キャンパス中央部、北東部、南東部を除く地域では、調査の進展と呼応して基本層序の理解とともに埋蔵文化財の具体的な埋存状況が把握され、各整備計画に対する円滑な運用に寄与している。

しかし、昭和60年度に至り、医学部の長期整備計画の一環として外来診療棟新営計画が埋蔵文化財資料館運営委員会に提示された。同委員会は新営予定地における埋蔵文化財の分布状況に対する基礎資料が皆無であることから、埋蔵文化財資料館および関係部局との協議の結果、当該予定地における試掘調査を実施すべきであると結論づけた。これを受けて埋蔵文化財資料館は、昭和60年5月24日から7月10日にかけて当該新営予定地約2600

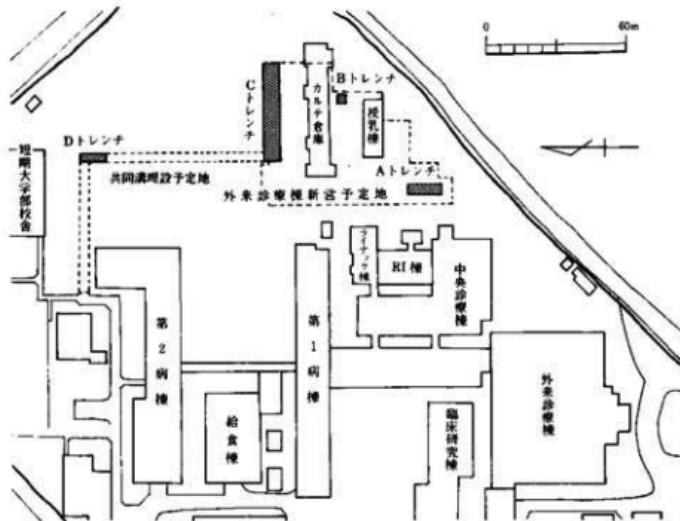


Fig. 1 調査区位図

m<sup>2</sup>のうち既設のカルテ倉庫および授乳棟を回避した地域に、3ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。また、同新宮建物付随工事において最深の掘削を要する総延長距離176mの共同溝埋設予定地についても、トレンチを設定して新宮予定地北方における埋蔵文化財の有無確認の調査を実施した。

なお、当該地域は、現在機能している中央・外来診療棟に近接しており、一般外来者および入院患者等の通行頻繁な地域であることから、各トレンチ単位で調査を完結することとした。また腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は手掘りによる分層発掘を実施した。

その結果、顕著な遺構は検出されなかったが、青黄色ないしは青灰色粘質土から周辺地域からの流入品と考えられる土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器など、中世～近代の遺物若干が出土した。

## 2 層位・遺構

### A トレンチ

新宮予定地最南端の授乳棟と中央診療棟間に南北に設定した4m×16mのトレンチである。現地表面の標高は約2.8～2.9m前後で、地表面下約200cmまで後世の人為的な厚い堆積層が認められる。地表面下約160cmで観察される厚さ20～40cmの石炭殻を含む灰褐色土の客土をはさんで上・下二層の旧耕作土が認められるが、いずれも出土遺物から大学占地前の新しい時期の耕作面と考えられる。なお、下位の旧耕作土直下、標高約0.9mにオリーブ灰色砂質粘土(HuelOY 6/2)が堆積するが顕著な遺構・遺物は認められなかった。

### B トレンチ

授乳棟とカルテ倉庫間に設定した3.5m×3.5mのトレンチである。現地表面の標高は約2.50m。現地表下約70～80cmまでは腐蝕土および構内造成時等の置土を含む擾乱土で、それ以下、Aトレンチの上位に対応する旧耕作土・旧床土と続く。その下位で、上面標高約1.2mに堆積する灰綠色土を掘り込んだ昭和初期の多量の土器、土製品を含む黒灰色土の充填した溝状の土器溜めが検出された。

### C トレンチ

カルテ倉庫に併行して設定した7m×40mのトレンチである。現地表面標高約2.20m。地表下約80cmで黒色有機質土層の旧表土が観察され、その直下に旧耕作土が残存している。旧耕作土下には整地土(客土)である灰黃褐色土を掘り込んでBトレンチで認められた昭

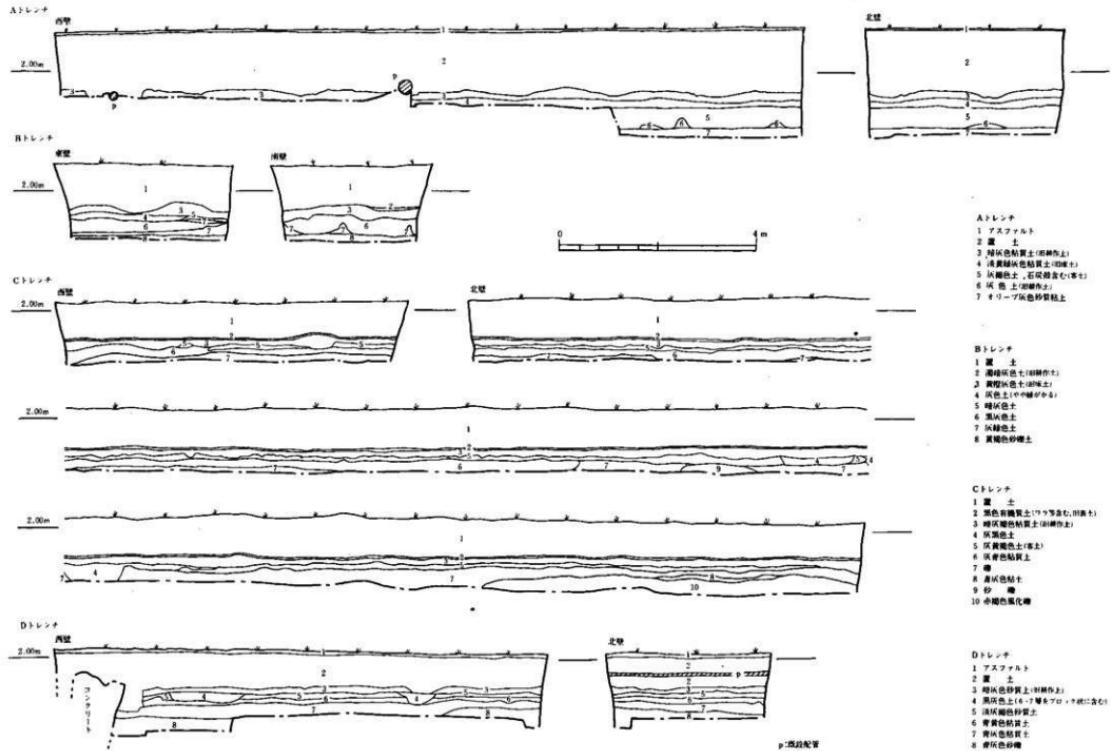


Fig. 2 土 壤 断 面 图示

## 遺 物

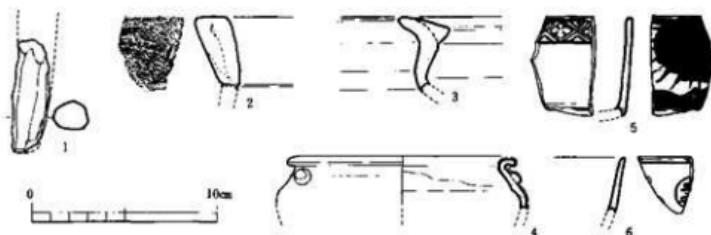


Fig. 3 出土遺物実測図

和初期の遺物を多量に含む少なくとも 2 本の溝状の土器溜めが検出された。その下位標高約 1.3m 以下が少なくとも非人為的な堆積層で、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器若干を含む厚さ約 20cm の灰青色粘質土、砂礫層と続き、東半部では赤褐色風化疊からなる岩盤が検出された。

### D トレンチ

共同溝埋設予定地のはば中央部の屈曲部分に南北に設定した 3.5m × 10m のトレンチである。現地表面標高約 2.20m。現地表下約 80cm に旧耕作土が残存する。またその下位に堆積する淡灰黄褐色砂質土上面で C トレンチ同様の土器溜めが検出された。以下、標高約 1.3m に堆積する土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器などの遺物若干が出土した青黄色粘質土、青灰色粘質土と続き、北端部では青灰色砂礫層が認められる。

### 3 遺 物 (Fig. 3, PL. 4(3))

C・D トレンチから土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器が出土した。

土師質土器には鼎、甕がある。1 は鼎脚部で磨滅、剥落が著しい。2 は肥厚する口縁部が内傾する甕で、外面ナデ、内面タテハケのうちナデ仕上げ。1、2 とも胎土不良、焼成良好。1 は淡橙褐色で、二次的な加熱を受け部分的に淡紫橙色を呈する。2 は茶灰色を呈する。

3 は陶器甕で、ほぼ直立する口縁部をもち、端部が断面三角形状に肥厚してわずかに外上方に立ち上がる。胎土は灰色～黄灰色で、赤茶色の釉を施すが、口縁端部は釉を欠き取り口禿となっている。焼成は良好。

4～6 は磁器。4 は青磁の小甕。水平に近く短く屈曲する口縁部下に半球状の突起をも

つ。胎上は灰白色で灰色の釉がかりは厚いが、口縁部内面は露胎である。5は染付小鉢。体部下位で屈曲し、そのまま直立して口縁部にいたる。外面草花文、内面上端部に菱形文様を暗青色の呉須で絵書きを行なう。6は染付壺の口縁部。外面に濃青色の呉須による一条の圓線下に丸に網目文をいれる。一部に貫入がみられる。

#### 4 小 結

今回の調査は共同溝を含む新営面積約3600m<sup>2</sup>のうち約11%にあたる約390m<sup>2</sup>についての4本のトレンチによる試掘調査であった。出土遺物にはC・Dトレンチの青灰色ないしは青黄灰色粘質土からの土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器など若干がある。また、中世から近代にかけての各時期のものが混在しており、磨滅、剥落も著しいことから周辺からの流れ込みによるものと考えられる。なお、A・B両トレンチでも同層に対応すると考えられる堆積層が検出されたが遺物は包含していないかった。

また、Cトレンチでは遺物包含層の下位に、調査区東方に近接する真締川の旧河道ないしは氾濫によってもたらされたと考えられる礫層がトレンチ内ほぼ全域にわたり検出された。このことは、カルテ倉庫東方において現在の真締川がキャンパス内に入り込むように蛇行して南流していることからも推察され、Cトレンチからその北方の駐車場およびキャンパス内を北西—南東に貫く市道南半部付近にかけての地域には、少なくとも中世以前に遡る遺構の埋存する可能性は極めて小さいものと考えられる。

また、昭和58・59年度に体育館新営に伴い実施した調査地域における遺物の埋蔵量と比較すると、包含する堆積層の厚さにはあまり差違は見られないものの、外来診療棟新営予定地における出土量は極めて少なく、かつまた中世に遡ると思われる遺物の出土量も少ない。したがって、外来診療棟新営予定地およびその北方の駐車場の地域は、遺構の埋存する可能性および遺物包含層の遺物の包蔵量いずれとも極めて小さい地域であるものと推察される。

したがって、市道以南の第一・二病棟および給食棟の存在するキャンパス中央部を除いた地域では、今後、過去の調査結果に準拠した諸開発による後世の堆積層の厚さに対応した立会調査等が至当と考えられ、これをもとにさらに詳細な同キャンパス内の埋蔵文化財の分布状況が把握されるものと考えられる。

(河 村)

## 第3章 吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査

### 1 調査の経過

昭和60年の5月に大学会館が新設されることを端緒とし、その周辺地域とくに前庭部分(Fig. 4 参照)の環境整備構想が環境整備委員会等よりもち上がり、これに伴い事務局から資料館へ当該地の埋蔵文化財有無の照会があった。

前庭部分と称する地は総面積約6000m<sup>2</sup>で、上下二段に分かれている。上段部分(約2600m<sup>2</sup>)は、昭和57年度の「大学会館新営予定地M-14・15区の試掘調査」において、弥生時代から室町時代にかけての遺構が多数遺存し、その分布密度が極めて高い地域として位置づけられている。そのため学術の上から遺構に影響のある環境整備は問題であり、資料館としては、当部分の遺跡の重要性を説明するとともに、前回の調査をもとに現地表面から遺構面までの深さを提示し、その範疇内の土地掘削で処置できる環境整備計画を要望し、事務局、環境整備委員会等もこれを了承した。ただし、下段部分については、これまで埋蔵文化財に関する公式な資料がなく、そのため埋蔵文化財有無等について即答できないことから、その回答には試掘調査の必要を要望し、以後、事務局で検討することとなった。

昭和60年の5月下旬、事務局から、試掘調査の予算が急遽ついたため調査を至急に実施したいとの要請があり、そのため資料館は年間スケジュールを一部変更して対処することになった。

調査は、昭和60年7月11日より昭和60年8月6日まで人文学部考古学研究室の協力を得て実施した。なお今回の調査は、遺物包含層・遺構の有無、遺物包含層までの深度の把握、確認を主目的とするため調査期間、経費等に制約があり、また当該地は調査後は再び現状通りに埋め戻すことから、確認した遺構の掘り込みは最少限にとどめた。

最終の調査面積は約592m<sup>2</sup>で、調査対象地の約18%を占める。



Fig. 4 調査区位置図

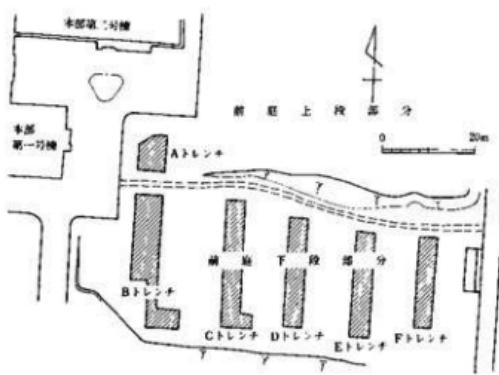


Fig. 5 トレンチ設定図

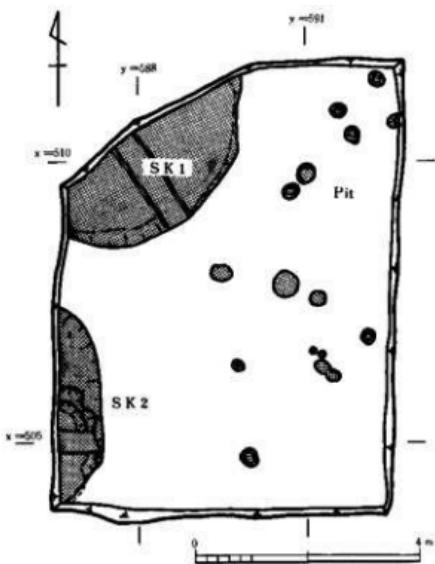


Fig. 6 A トレンチ造構配図

なお、昭和60年7月下旬には環境整備委員会の視察が行なわれ、8月7日に埋蔵文化財資料館運営委員会、8月8日に報道関係者、一般教職員等を対象とした現地説明会を開催した。

## 2 層位・遺構

トレンチは現存する道や樹木を回避した地帯に6本を設定した。以下、試掘場は西側からA・B…Fと称し、各トレンチごとに層位・遺構を説明する。なお、土層堆積状況は各トレンチ西側壁面（Fig. 7 参照）の観察結果を記する。

### (1) A トレンチ

A トレンチは調査対象地域の最も北西端に位置する。地表面下約60cmまでは大学設置造成時の埋土で、下に旧耕作土、床土が拡がる。その直下、地表面下約90cmに地山面があり、古代・中世の包含層は既に消失していることが明らかであるが、土壤、柱穴等遺構が遺存する。

#### 第1号土壤

トレンチ内北西隅に位置する。遺構範囲が調査区外に及ぶため全体の形状、規模等は明確にし

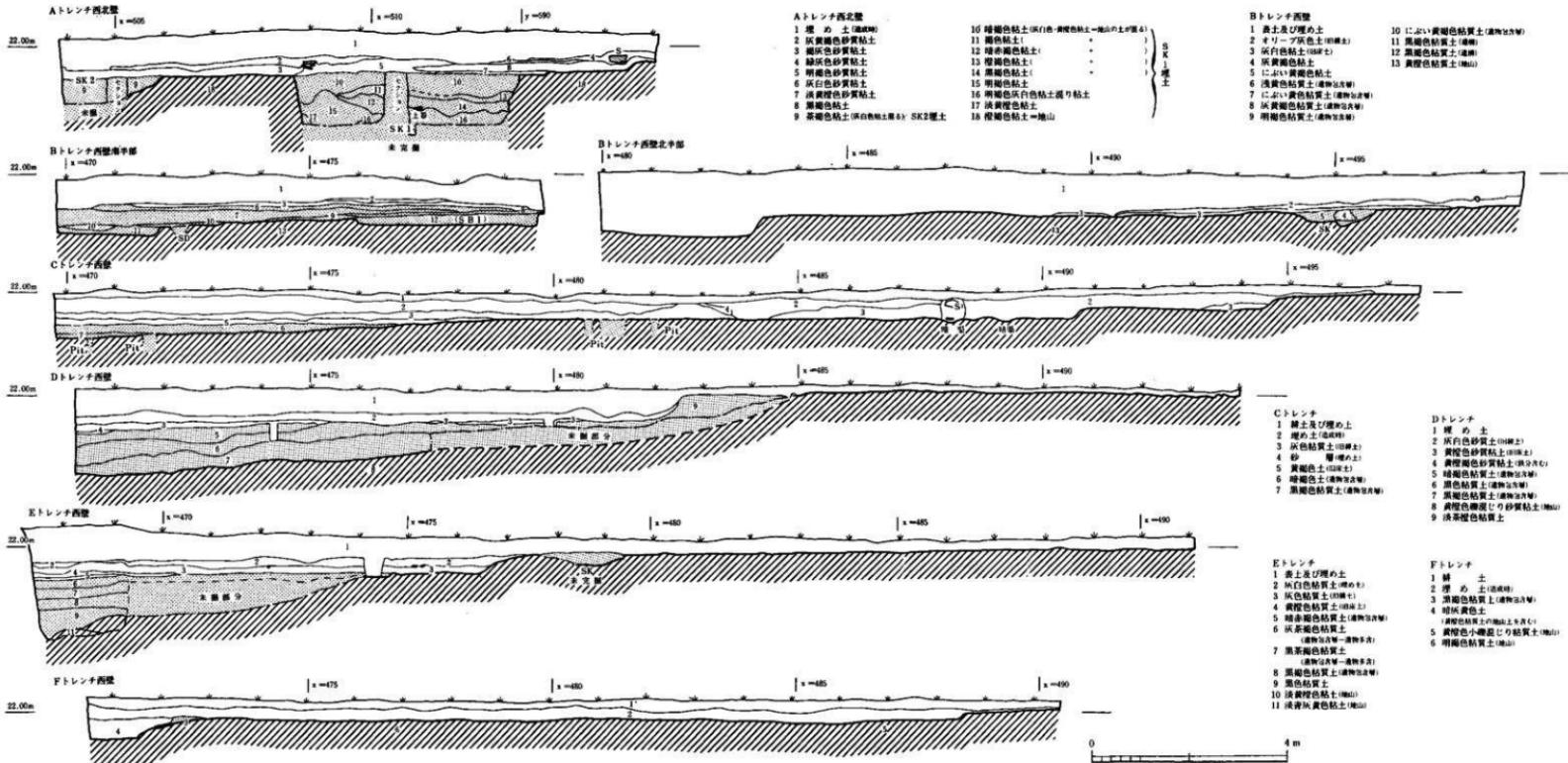


Fig. 7 土 层 断 面 图示

えないが、現時点では径約4m前後を測る平面円形の土壘と推定される。未完掘のため深さ、断面形についても不明であるが、少なくとも深さ1.2m以上あり、壁面は垂直気味に内傾し掘り下がるが、一部袋状を呈する部分もある。遺構の土層堆積は上面から約1m掘り下げた間で7層の土層が認められ、いずれの土層も地山の土が小ブロックで多数混じっており、掘削調査範囲内の部分は人為的な埋め込みによるもので自然堆積ではないと考える。なお、遺構上面より深さ約70mの地点で、弥生時代中期末～後期前半の甕二個体を検出した。本土壘の機能、用途としては貯蔵用堅穴の可能性があるが、未完掘のため断定しかね結論は将来の調査に譲る。

#### (2) Bトレンチ

調査対象地の西端、Aトレンチの南側に位置する。土層堆積状況は、 $x=490$ より北側では約50～80cmの埋め土があり、その直下に旧耕作土、床土が残る。その下は地山であり、遺物包含層は遺存しないものの遺構が若干散在する。 $x=483$ ～ $490$ の間では約80～90cmの埋め土があり、直下は地山である。また $x=483$ より南側ではさらに約30～40cm深く地山が掘り込まれている。さらに $x=480$ から南側では地表より約50～80cmの埋め土下に旧耕作土、床土があり、その下に遺物包含層が堆積する。遺物包含層の厚さは $x=481$ では約10cm程度であるが南方へ向かって漸次厚くなり、 $x=470$ では約40cmにおよぶ。

遺構は南半部に集中し、北半部では稀薄である。この要因は北半部では遺物包含層が遺存していないことから、後世の遺構面削平の度合が高いためと察し、本来の遺構分布状況を示すものではない。

#### 第1号堅穴住居跡

トレンチ中央やや南寄りの地点に位置する。東西幅は調査区外に及ぶため不明であるが南北幅は約6.0mを測る。深さは西壁際に幅40cmのサブトレンチを設定し遺構埋土を掘り下げたところ約20cmを測る。床面は平坦で、壁溝は確認できなかったが、柱穴を検出した。埋土は黒褐色粘土の単一層である。

遺物は埋土上層から甕・甕・高壺などが出土した。時期は弥生時代後期後半。

#### (3) Cトレンチ

$x=477$ より北側では遺物包含層は既に削除されており、また地山面まで間に旧耕作土の層もなく大学設置造成以後の埋め土のみの部分もある。遺構面までの深さは北端部で最も浅く、現地表面下約15～20cmで地山を検出する。なおトレンチ内北側で新しい時代の造作とみられる約20cmの段差が二箇所にあり、その段差は東南から北西にかけて並走する。

$x=477$ より南側では暗褐色土・黒褐色粘質土の二つの遺物包含層が遺存し、南へ向かって地山の下降に伴い漸次厚くなる。なお南端部において遺物包含層上面までは表面下約60~70cm、遺構面までは約90cmを測る。

遺構は中央部分から南側と北端部付近に遺存し、近年の造作とみられる段差の下段部分ではその削平のため遺構の分布は稀薄である。トレンチ内南端部東側ではD・Eトレンチでも認められる不明土壤の上端が確認できた。

### 第3号土壤

トレンチの北端部に位置する。平面は円形を呈し、長径212cm×短径208cmで、床面積約3.45m<sup>2</sup>を測る。土壤の断面形は壁面が底面から外傾ないし垂直に立ち上がる部分や、袋

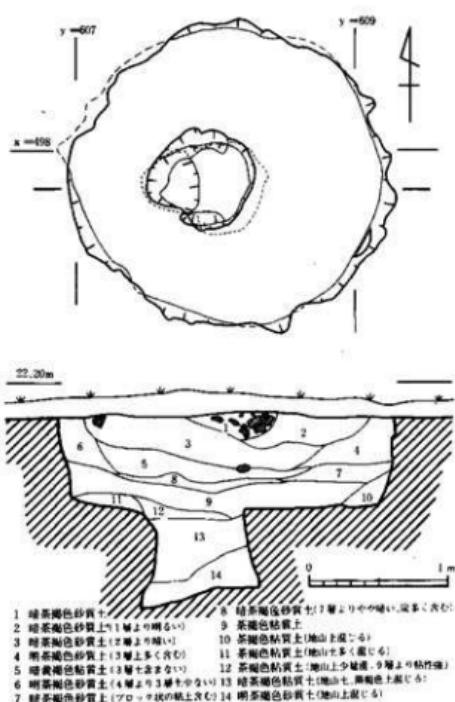


Fig. 8 第3号土壤実測図

状を呈する部分があり、一様でない。ただし本例の場合、上面から床面までの深さが平面の大きさに比べて浅いこと、また現地形の状況からも勘案して、現状において上部がかなり削除されていると考えられること、さらにまた下関市綾羅木郷台地遺跡などでは、床面積3.0m<sup>2</sup>以上のものはほとんどが袋状の断面形を呈する事実があることから、本堅穴に関してはいわゆる袋状堅穴であった蓋然性が高いと察する。床面は平坦ないしは中央に向かって内傾している。貼床の痕跡は認められなかつたが、床面中央部分に長径70cm、短径66cmで、深さが最大70cm、最小56cmを測るPitを造作している。

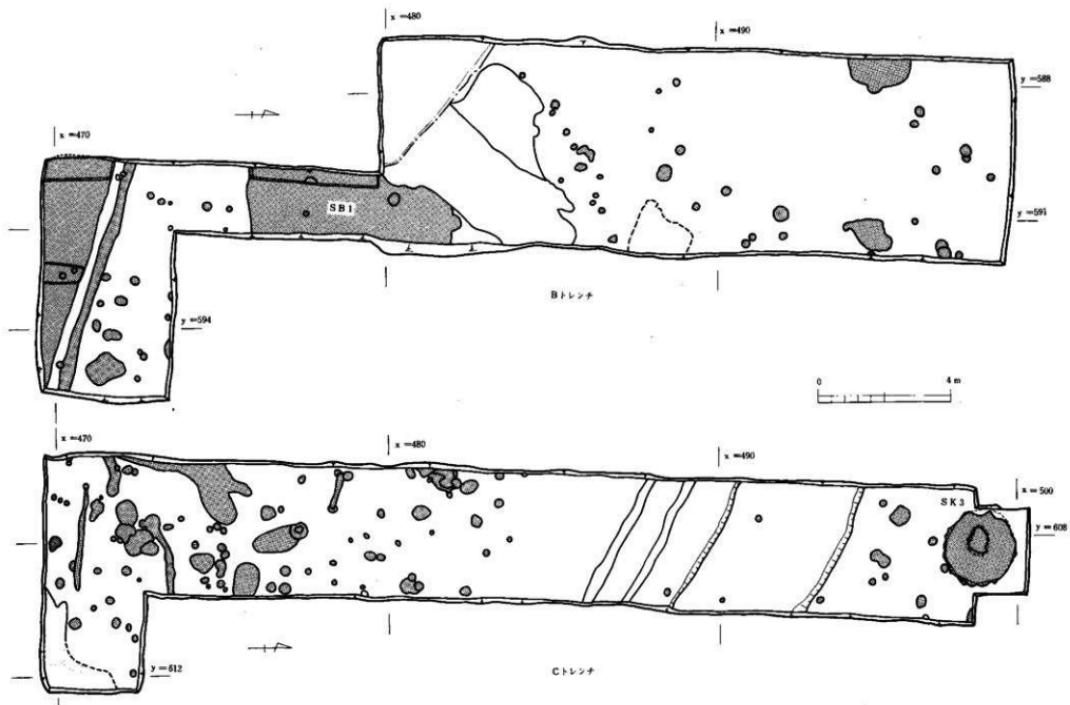


Fig. 9 B・C トレンチ造構配置図

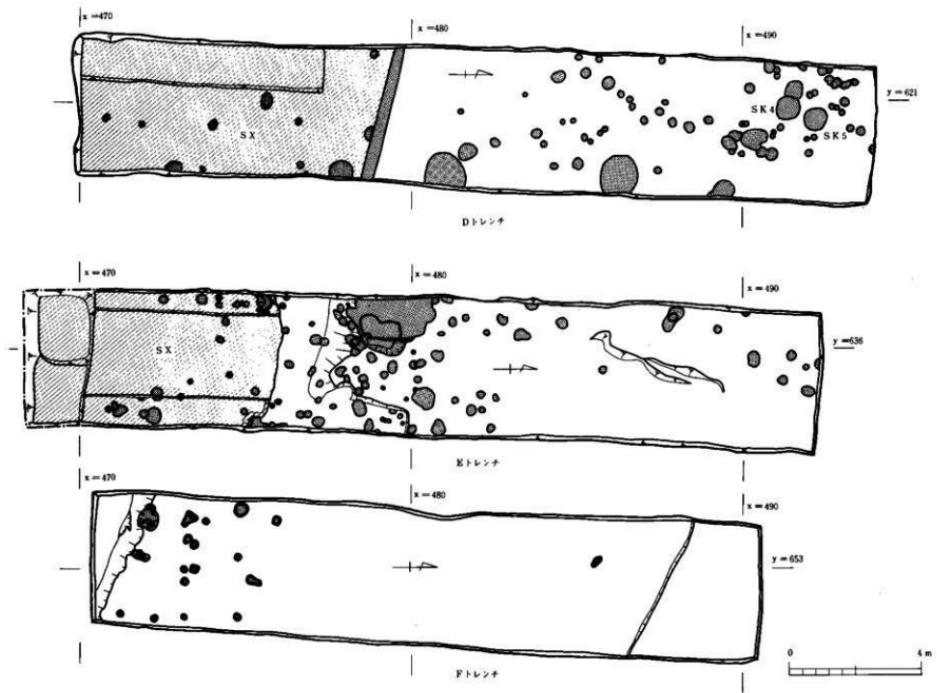


Fig. 10 D・E・F トレンチ 連携配置図

遺構内の土層堆積は、上面から床面まで12層の砂質土、粘質土に分けられる。遺物は、1層で小中型の石類と弥生時代前期末および中期初頭の土器片が充填した状況で検出され、人為的な埋込によるものと考える。また2層、3層、6層で弥生時代前期後半の土器を若干包含したが、それ以外の層では出土遺物は稀少であった。なお、8層には炭が多く混入していたが、それが原位置での焼成によるものか、二次的堆積かは不明である。床面 Pit は、埋土が砂質土、粘質土の上下2層に分かれるが、遺物は皆無である。

#### (4) Dトレンチ

調査対象地のほぼ中央部に位置するトレンチである。土層堆積は、 $x=485$ より北側では約10~20cmの表土下は直ぐに地山である。地山面はほぼ水平で、後世の削平を受けている。 $x=485$ より南側には不明土壌があり、地山面が緩やかに南に向かって傾斜していき、トレンチ南端部では深さ約1.7mにおよぶ。その間は上部に厚さ約50cmの埋め土、約20~30cmの旧耕作土、床土があり、以下遺物包含層の粘質土層が堆積する。

遺構は、 $x=485$ より北側ではすべて地山面で検出された。遺構の数は比較的多くみられるが、土壌などは近世以降のものが多い。 $x=485$ より南側では遺物包含層の一つでもある黒褐色粘質土の上面で柱穴などの遺構が確認され、遺構面が少なくとも二面以上ある可能性が推定しえる結果が得られたものの、地山面で柱穴、溝等の遺構が遺存するかについては地山までの掘削範囲が少ないため断定しかねる。

#### 第4・5号土壌

径約70~75cmの平面円形の土壌で、両者とも素焼きの大甕が出土した。第5号土壌の方では底部を打ち欠いたものが設置したままの状況で検出された。時期はいずれも近世と推定し、用途として耕作に伴う肥料だめの可能性が考えられる。

#### 不明土壌

$x=485$ より南側に広がる大きな落ち込みである。南端部では現地表面から深さ約1.8mにもおよび、さらに南に向かって下がっている。この不明土壌はC・Eトレンチでも確認され、かなり大規模なものであることが推定できる。検出確認範囲が部分的なため、現時点において性格・機能については断定しかねるもの、一推定として旧地形における谷頭先端部分とする考えがある。

#### (5) Eトレンチ

$x=478$ から北側の範囲では、厚さ約20~30cmの置土下はCトレンチ北側部分と同様にすぐに地山面であり、南側では置土の下に旧耕作土が広がる。 $x=475$ より南には不明

土壌の落ち込みがある。

遺構の分布状況は、両端部まで広い範囲で認められる。なお北東部分に空白部分があるが、この部分は大学設置造成時と思われる削平のため、既に遺構が消失したと考える。遺構は、 $x=475$ より北側ではすべて地山面で検出された。南側では不明土壌の埋土となっている包含層中において、柱穴の掘り込みが認められ、幾つかの遺構面が存在することを確認できた。

#### (6) Fトレンチ

調査対象地最東部に位置するトレンチである。地山面までの土層堆積はトレンチの範囲すべて表土および埋め土であり、遺物包含層は南端部の一部で若干遺存するのみである。北端部と南端部で大学設置造成時の造作と考える段があり、地山面までの深さは北端部で約15cm程度、南端部の最も深い所で約85cmを測る。

遺構は南端部付近に残存し、すべて地山面で検出された。中央部から北側での遺構は後世の削平のため消失したと考える。遺構の種類は柱穴であり、埋土掘削の結果、弥生時代・鎌倉時代のものがある。

(森 田)

### 3 遺 物

#### (1) 遺構出土の遺物

確認した遺構は、Fトレンチのみ完掘し、A～Eトレンチ内ではほとんどを検出しただけの段階にとどめ再び埋め戻している。そのため、遺構に伴う遺物もその全容を示すには至らないことをご了承願いたい。

##### Aトレンチ第1号土壌出土遺物 (Fig. 11, PL. 13-(1))

1、2ともに甕で、かなり風化している。1はおそらく斜上方に強く屈曲する口縁と、丸底に近い平底をもつものであろう。粘土織目での剥離が著しく、器壁にも織目がはっきり現れる。内面横方向、外面縱方向の刷毛目が認められる。2は底部を欠くがほぼ完形に復原できた。外面は縱方向の刷毛調整で頸屈曲部に指頭痕が顕著に残る。器壁が薄く、内面は摩耗のため調整不明。1、2ともに外面には煤が付着。他に中期の遺物片を若干含み、弥生時代中期末～後期前半に比定できよう。

##### Bトレンチ第1号堅穴住居跡出土遺物 (Fig. 12・13, PL. 13-(2)・17-(1))

土器 (Fig. 12) 煤、甕、高杯が出土した。他の遺構に比べ風化の激しいものが多い。特に1・4などは器表の保存状態が悪く剥離が著しい。

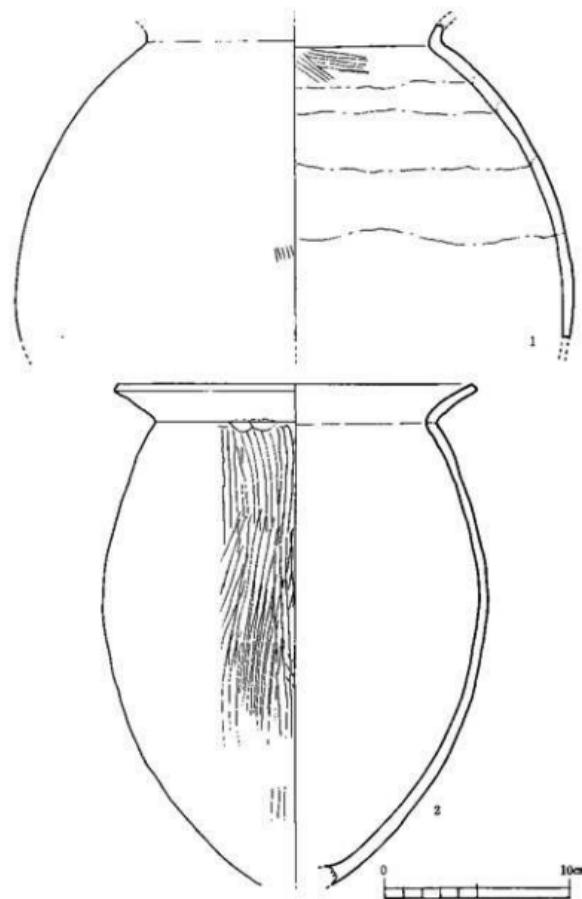


Fig. 11 Aトレンチ第1号土壌出土遺物実測図

1・2は煮頸～肩部。1は外面にわずかに斜め刷毛が観察できる。粘土織ぎ目での刺離が著しく、肩部内面は器表も剥げ落ちている。2は器壁が薄く、頸部突帯の上半と下半にそれぞれ逆向きの刻みを廻らせるが、上下は対応しない。3は壺口縁部。このタイプの複

吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査

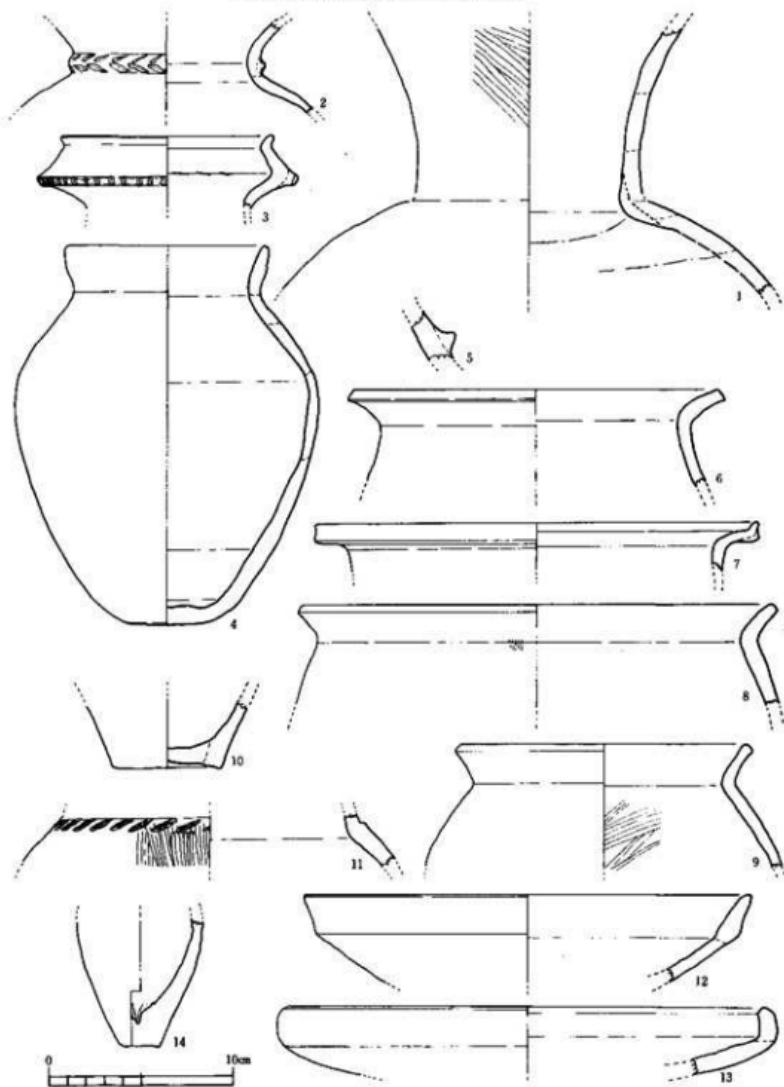


Fig. 12 Bトレンチ第1号竪穴住跡出土遺物実測図（土器）

合口縁壺にしては小ぶりである。屈曲部の外面には突帯状に粘土糰を貼り付け刻みを入れ、内面には指頭痕や爪痕が残る。全面横ナデ仕上げ。4は完形に復原できた壺で、半身を欠いた状態で出土した。口縁中位はやや膨らみ、胴部最大径付近の器壁が特に薄くなっている。

器表の剥落が著しい。5はおそらく壺肩部上位の突帯部分。壺は、他に丹塗りの破片もあるが図化できない。

6~11は壺口縁部。6はあまり張らない刷から緩やかにカーブしてやや外反する口縁部にいたり、端部にはしっかりした面を作る。7は跳ね上げ口縁をもつ。8は口径の割に口縁が短く、屈曲部はやや甘い稜をつくる。9は他に比べ堅穀で、かなり張る胸になるもの。内面は斜め刷毛。10はやや上がり気味の平底の底部。内面強いヘラナデ、外底面不整ナデ。胎土中の長石粒が器面に浮いているのが目立つ。11は肩部で、外面綫刷毛の後刷毛原体で刻みを施す。内面はヘラナデ。

12・13は高环口縁部。12は屈曲部が肥厚し、端部は面をなさない。13は盤状の环部をもつもので、立ち上がりの部分を貼り付けている。

14は、高环脚部とするには内轉しすぎており、おそらく小形の壺の体部ではないかと思われるが、内面に明確なシボリ痕がみられ疑問が残る。二次的な火熱による赤変が認められる。

#### 石器 (Fig. 13) 1点のみの出土。

やや渋った水晶（石英）の縱長剝片を素材とする二次加工のある剝片で、先端部を欠損する。正面左側縁が刃部にあたるものと思われるが、上半部のバティナは古く、使用時の剝離痕と思われる。正面側の調整剝離は裏面に比べてやや急傾斜である。裏面は上方から打撃がうまく抜けず、階段状の剝離を起こしており、素材の高まりを除去するように、やや大きな粗い加工痕が認められる。正面右側縁は不定方向からの剝離作業による剝離面によって構成されている。

以上、第1号竪穴住居跡からは、若干中期の遺物を含むが、ほぼ後期後半を中心とした遺物が出土した。石器は流れ込みの可能性がある。

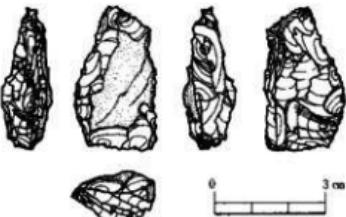


Fig. 13 Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土遺物実測図（石器）

## C トレンチ第3号土壌出土遺物 (Fig. 14・15, PL. 14-(1)・17-(2))

土器 (Fig. 14) 壺と壺のみ出土した。

1は口縁と頸との境に段を削り出す壺で、内面は横方向のミガキ、外面は横ナデ。2は1同様の段をもつ壺で、口縁端部に刷毛原体により1条の沈線を施す。3は壺頭部。注口風の内部突帯を貼り付ける小型品で、内面には指オサエによる稜が残る。内面横ナデ、外面刷毛後ヘラミガキ。4～7は壺肩部片。4は、頸との境に段を削り出し、肩にタマキガイで施文。文様は木葉文になるものと思われる。内外面ともミガキ。5は内外面ミガキ後横ナデで、無軸の羽状文をタマキガイにより施す。6の内面は刷毛後ミガキだが粗い。外面は胴にM字形突帯を貼り付け、同じくタマキガイにより沈線と有軸羽状文を施文する。7は外面刷毛後ミガキ。列点はミガキの前に施されており、列点を避けてミガキをかけるため、列点周辺のみ緩刷毛が顯著に残る。

8・9は壺口縁。8は張りのない胴から如意形の口縁へと続くもので、端部には退化した刻みが入る。内面は丁寧なナデ、外面緩刷毛後横ナデ。9は短い口縁部がほぼ直角に近く外反する。内外面とも刷毛目が顯著に残るが、それぞれ異なる原体を使っている。

10～14は底部で、10・13・14は壺、11・12は壺になるものと思われる。10は器面荒れがひどくほとんど剥落しているが、わずかに残る底部外面は二次的火熱により赤変している。11はどっしりした平底で、内面は強くナデている。12は低い上げ底で、内面は粘土雜ぎ目で剝離しており外面は太い刷毛目が残る。13・14は上げ底のもので、ともに内底面は指オサエ痕明瞭。13は14に比べ底部がややふん張る。内面ミガキ、外面緩刷毛で、煤多量に付着。14は13よりも上げ底がきつい。内面ナデ、外面緩刷毛後ナデ。

石器 (Fig. 15) 打製石斧1点のほか、石核、剥片、および用途不明石製品がある。なお、図化しなかったが、加工痕のないチャートとメノウの小円礫も出土している。

1は扁平な打製石斧で下半部を欠損する。刃部と頭部の区別が困難であるが、掘り鉗としての機能をもつものであろう。正裏両面とも自然面を大きく残しているが、正裏両面上半部では節理面での剝離痕が著しい。また、ほぼ全周縁に粗い調整加工が施されているが、左右両側縁中央部はノッチ状の剝離痕が認められる。

2は用途不明の石製品として図化したが、顯著な加工痕が認められず、単なる自然転円礫の可能性もある。器表は極めて滑らかで、中央左寄りに径約3.5cm、深さ約0.7cmの円形の凹みがある。意識的に使用したとすれば、性的シンボルの機能をもつものかもしれない。

3は大形の石核で、剥片剝離作業は裏面を除く各面で行なわれているが、正面上半部、

遺 物

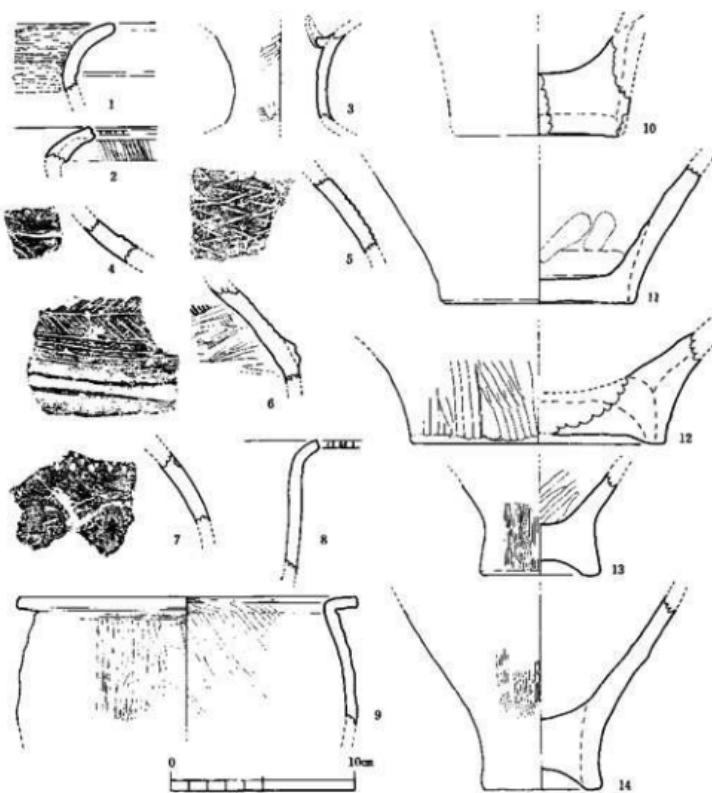


Fig. 14 Cトレンチ第3号土壠出土遺物実測図（土器）

左側面上端部および裏面に自然面を残しており、剥離作業はあまり進行していない。打面を頻繁に転位する石核で、石核正面および下面の剥離作業は主に右側面を打面とし、左側面は底面および裏面側を、上面は裏面および右側面を打面としており、全体の形状は直方体に近い。打面はいずれも複剝離面である。最大幅5~6cm前後の縦長もしくは横長の剥片を目的剥片とする。珪質凝灰岩。

4・5はおそらく3の石核を母岩とすると思われる剥片であるが、接合はしなかった。

4は横断面三角形を呈する厚手、大形の縦長剥片で、正面左半部に自然面を残す。正面左側縁はヒンジフラクチャー気味になっている。上面には複数剥離打面を残し、裏面は主要剥離面である。5は正面に自然面を残す横長剥片で、下端部には使用時のものと思われる剥落痕が認められる。6~12は剥片。6は裏面が主要剥離面であるが裏面右方向からの加熱によってネガティブバルブを除去している。7は裏面を主要剥離面とし、裏面右側縁に打面が残存する。正面上半部に自然面を残しており、下半部は右側縁を打面とする小さな剥離痕が認められる。8は自然面の残る上面を打面とし、正面側が主要剥離面である。正面右側縁下半を中心に細かな剥落痕が認められ、使用痕の可能性がある。9は裏面が主要剥離面で、剥片剥離後、自然面の残る正面下端部に打面調整を加え、正面側からの加熱によって素材の打面を除去している。10は裏面が主要剥離面で、自然面である裏面右側縁に打面が残存する。裏面左側縁は剥片剥離後、裏面を打面とする剥離面が形成される。正面上半部には右側縁方向からの槌状の剥離痕が認められる。11は不定方向からの加熱による剥離面をもつ。正裏両面中央部には縞を有する。12は寸づまりの縦長剥片。裏面側が主要剥離面で、正面上縁に打面が残る。正面左側縁下半には裏面からの加熱による幅広の加工痕が認められる。6~10は黒曜石で、6は不純物が多い。11は水晶、12は讚岐岩質安山岩。

チャート小礫は、最大長1.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.8cm、重さ1gでえんじ色。メノウ小礫は最大長2.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.9cm、重さ4gで橙色。ともに人為的な加工痕はなく自然礫と思われるが、石器原材の可能性もある。

第3号土壤の土器は弥生時代前中期～中期初頭のものが混在し、層位的な時期差を認めない。石器剥片は、すべての個体が自然面を残している。黒曜石には姫島産のものがなく、包含層から姫島産黒曜石の原石や剥片が出土しているとの対照的である。珪質凝灰岩のものは、剥片2点と石核1点が出土しており、接合はしなかったが、一次的な剥離時の剥片の大きさを示す資料として注目される。

#### 動物遺体・植物遺体

第3号土壤北半部において、床面から約10cmまでの埋土（ほぼ9層以下に対応する）を取り上げ水洗した。以下、農学部講師宇都宮宏氏による鑑定結果報告を記す。

出土した動物遺体と植物遺体は、各々一體ずつであった。

動物遺体は頭部1と翅2が各々分離して出土しているが、同一個体のものと見られた。鑑定の結果、甲虫のオオヒラタシデムシ (*Eusilpha japonica* Motschulsky) の雌である。このオオヒラタシデムシは現在各地に多数生息しており、動物の腐敗物に集まる虫である。

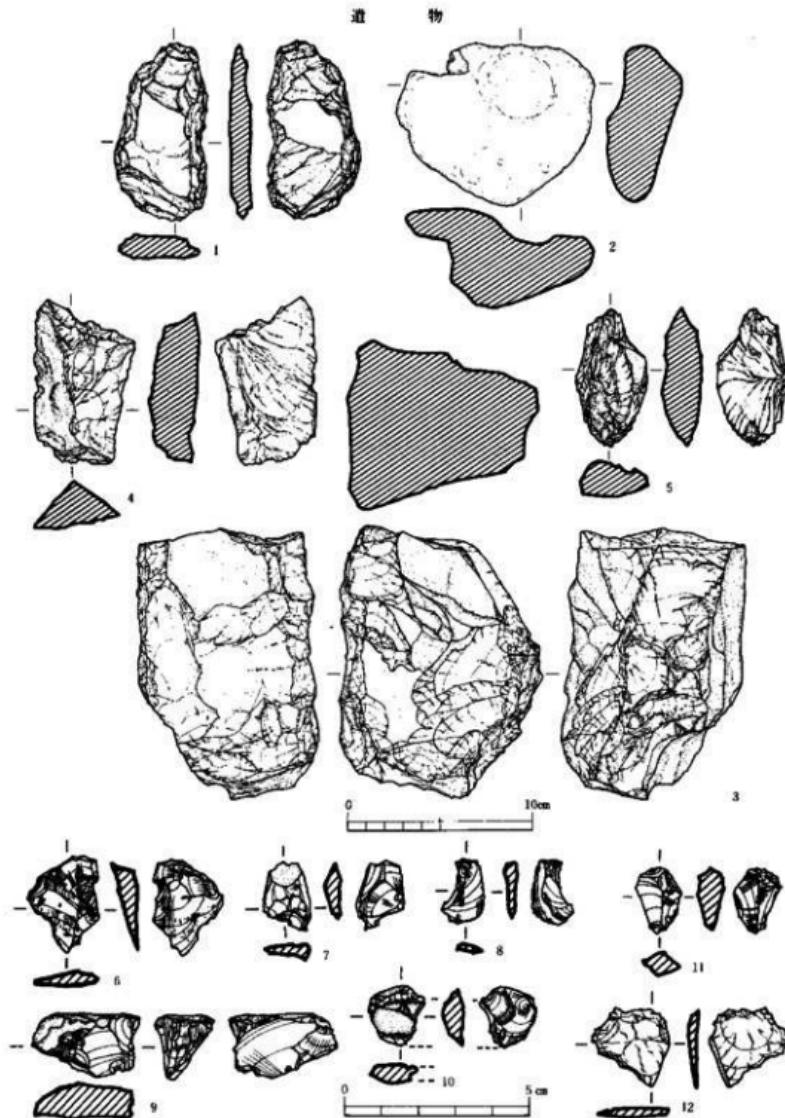


Fig. 15 C トレンチ第3号土壤出土遺物実測図（石器）

植物遺体は果実（種子）と翼が離れて出土しているが、同一のものと考えられ、鑑定の結果、イロハモミジ (*Acer palmatum* Thunb. subsp. *palmatum*) である。果実内の内容物は充実しておらず、不稔状態である。すでに鮮新世（150～1000万年前）時代の化石が出土している。

D トレンチ第4号土壤出土遺物 (Fig. 16, PL. 14-(2))

埋甕の口縁部と思われる。口縁は肥厚し、内面に段をもつ。端部は水平に作り、外面口縁下に1条の沈線を施す。胴部内面は風化により調整不明、あとは刷毛のちナデ。

D トレンチ第5号土壤出土遺物 (Fig. 17, PL. 14-(3))

1は埋甕。幅5～6cm前後の粘土帯を積み上げて成形し、器壁は7～8mm程度と薄い。内面は刷毛の後ナデを施しており、木口を使用した当具痕も残るが、刷毛と當具の前後関係は不明。外面は風化が著しく調整不明。

2～8は埋甕内検出遺物。2は須恵器甕の底部。内面見込みに沈線状の段を有する。3・4は土師器皿。3は器壁が薄く、底部外面は糸切りで板目が残る。内面中央には煤のようなコゲが付着しており、灯明皿かと思われる。4は壺になる可能性もある。5・6は焼成で、5は土師器、6は瓦質土器。ともに、底部外面と口縁端部付近に煤が付着している。5は外面に指オサエ痕が著しい。7は陶器甕の口縁部。内面に縱の筋目が残るが全体に丁寧な回転ナデ。8は染付磁器の底部。釉はやや厚めに全体にかけ、豊付部はカキ取るが、高台外面は釉が垂下しきらず、露胎のままの部分もある。

F トレンチ柱穴出土遺物 (Fig. 18, PL. 14-(4))

1は弥生土器の壺で乳頭状の底部をもつ。風化が著しいが、底部内面にわずかにクモの巣状の刷毛目が残る。器壁が非常に薄く、おそらくケズリを行なっているものと思われる。2は土師器の甕口縁部。頸部から内縫しながら立ち上がり、端部は外反する。布留式の範疇におさまるものであろう。風化のため調整不明。3は鎌倉時代の土師器皿ではほぼ完形品。外面体部下位を一旦凹ませて、上半をやや内縫気味に引き上げる。底部は回転糸切り。

(2) 包含層出土の遺物

土器 (Fig. 17・18, PL. 15・16) 繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、ミニチュア土器、土錐が出土した。

繩文土器 (Fig. 17-1～5)

1～4は器種不明の破片で、内外面に条痕をもつ。内面は、その後ナデしているが、1・2は大変丁寧で、3・4は雑である。5は粗製の深鉢口縁部で、内外面条痕を施した後内

遺 物

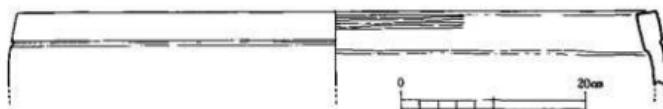


Fig. 16 Dトレンチ第4号土壤出土遺物実測図

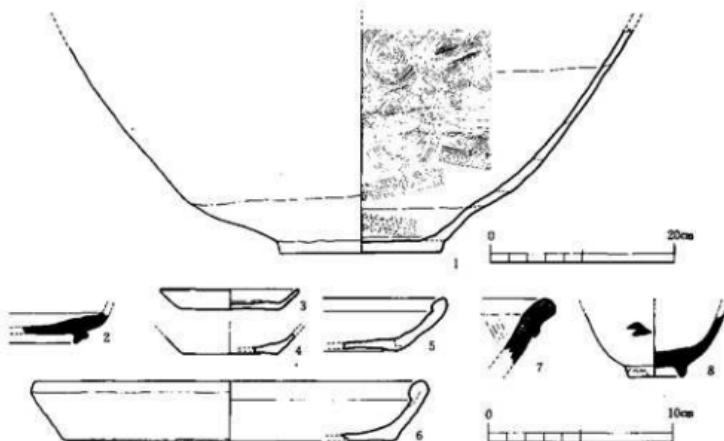


Fig. 17 Dトレンチ第5号土壤出土遺物実測図

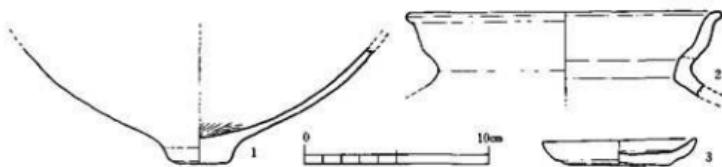


Fig. 18 Fトレンチ柱穴出土遺物実測図

面は丁寧なナデ。口縁端部には面を作り、その際に余った粘土を外面に折り曲げてつけている。1・3はDトレンチ出土、5はDトレンチ南端第6層上層出土、2はFトレンチ出土、4は不明。他に、Dトレンチより風化の著しい破片がもう1片出土している。

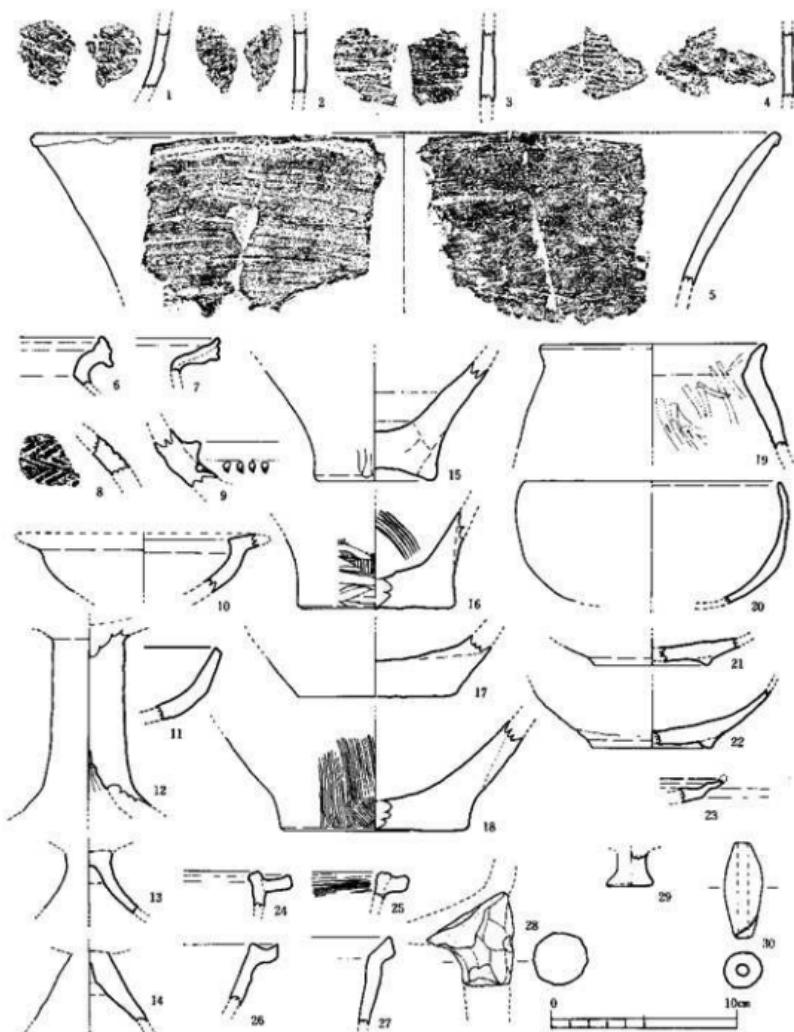


Fig. 19 包含層出土遺物実測図（縄文土器・弥生土器・土師器・瓦質土器）

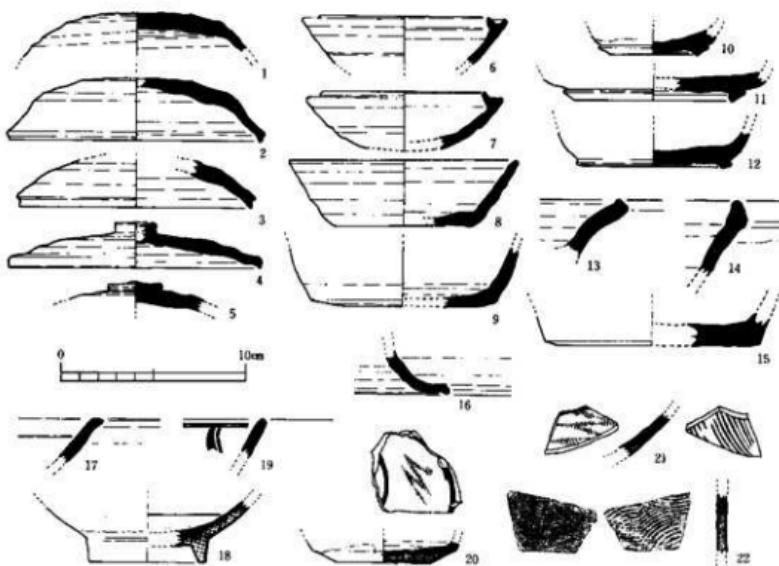


Fig. 20 包含層出土遺物実測図（頬窓器・磁器・陶器）

## 弥生土器 (Fig. 17-6~18)

6・7は壺口縁部。6は頸部が稜をもって屈曲し、口縁端部は上下に拡張しその外面に付いた凹線を巡らす。風化によりはっきりしないが、2条ないしは3条であろう。瀬戸内要素が強い。7は端部を肥厚させて上に引き上げ、外面に沈線を2条巡らせる。内外面とも丹塗りの痕跡が残る。8はタマキガイ腹縁により羽状文を施す壺肩部片。9も同じく壺肩部で、尖頂突起を貼り付ける。列点は、刺突した後工具を下にすらすが、引き抜く際に階段状の痕跡が残っており、粘土がかなり乾いてから施文したことが窺える。

10-14は高壺。10・11は壺部で、10は端部を欠損するが、上部で屈曲してほぼ水平に伸びる口縁をもつもの。11は端部に面をもち、内外面丹塗りであるが剥落が著しい。12-14は脚部で、すべて貼り付け法による接合痕を残す。12は脚上部が長く伸び内面はシボリ明晰。13・14は壺との接合部からすぐに脚が開くもので、13は内面横ナデ、上部に指オサエ痕を残す。14は内面縦ナデ、上部にシボリ痕が残る。

15~18は底部で15・16は壺、17・18は盞。15は上げ底で外面ミガキ。16~18は平底。16は内外面刷毛調整の後、外面はミガキだが粗く、刷毛が残る。17は他のものに比べ非常に堅い。18は外面に縱刷毛が顯著に残る。

6・8・12~14・17・18はFトレンチ出土、7・9~11・15・16は不明。

#### 土師器 (Fig. 17~19~23)

19は壺口縁部で、丸底になるものと思われる。内面ヘラケズリ。20は腕で、体部が大きく内彎し、口縁は内傾して終わる。21・22は高台付きの壺で、21は内黒の黒色土器の可能性がある。22は丸みのある高台を貼り付け接合痕を残すが、高台と体部の境は不明確。23は皿になる。おそらく口縁端部は丸く終わり、畿内系の「て」の字形口縁をもつものではないかと思われる。周国防跡で出土するものは、平安時代末から鎌倉時代初頭に比定されている。<sup>21)</sup> 19・21~23はFトレンチ出土、20はDトレンチ出土。

#### 瓦質土器 (Fig. 17~24~28)

24~27は鍋の口縁部。24・25は周囲に鍔を貼り付けるもので、26・27は端部を外側に屈曲させるもの。25の内面に横刷毛を認めるほかは、残存部を見るかぎり横ナデ調整。27は外面に煤付着。28は同じく鍋の脚で、鍋底に接合していた部分。一部に二次的火熱による赤変がみられる。24はDトレンチ出土、25~28は不明。

#### ミニチュア土器 (Fig. 17~29)

おそらく高杯を意識したもので、杯部を欠損する。Fトレンチ出土。

#### 土錘 (Fig. 17~30)

土師質焼成の管状土錘。径5mmほどの棒に粘土帯を巻き付け成形した後、棒を回しながら引き抜く。外面に巻き付けの接合痕、内面に棒の型が残る。Fトレンチ出土。

#### 須恵器 (Fig. 18~1~16)

1~5は蓋。1は天井の残存部外面約2/3までは回転ヘラケズリ。2は口縁端部を短く内傾させて終わる。3はおそらく撮みをもつであろう。口縁端部は貼り付ける。4は端部をほぼ垂直につまみ出す。5は擬宝珠様撮みをもつもので、天井部内面に満巻状の粘土柱巻き上げ痕が見える。還元炎焼成不十分。

6~9は壺。6は蓋受けのたちあがりが受け部端とほぼ同じ高さになる。7はたちあがり端部に面をもつ。8は底部回転ヘラ切り未調整。9は内面見込みに沈線状の段を有し、還元炎焼成を行なわない。

10~12は壺底部で内端面が接地する高台をもつ。10は高台が扁平で貼り付け痕明瞭。11

## 遺物

は高台がかなり中央に寄っている。12は高台が小さく接地面は平坦に近い。

13～15は甕。13・14は口縁部で、14は粘土巻き目が明らか。15は底部で粗いヘラナデ調整。

16は高坏脚部。歪んでおり底径を復原できないが、10cm強くらいになるかと思われる。

1はEトレンチ第7層出土、4・9・10・12・16はBトレンチ第3層出土、8・11・13はDトレンチ出土、2・5・6・7はFトレンチ出土、3・14・15は不明。

### 輸入磁器 (Fig. 18-17-21)

17・18は白磁塊。17は口縁部で、端部を外反させ水平にする。内面には1条の沈線を有し、軸がかりはやや厚い。<sup>3)</sup>横田・森田分類V-4-a類。18は底部で、直立する高台をやや粗く削り出し、内面見込みに1条の沈線を有する。軸は薄く、体部外面下半と高台部には施釉しない。

19～21は青磁。19は龍泉窯系の塊口縁部。端部は丸く納め、軸は厚い。内面に片彫りの沈線2条と飛雲文の一部が認められる。I-4-a類。20・21は同安窯系で、20は皿底部。内底に櫛描きジグザグ文とヘラによる片彫り文様を有する。外面体部下半と底部は露胎。21は塊体部で内面に櫛描きジグザグ文とヘラ描き片彫り文様、外面には櫛目。ともにI-1-b類。

18・21はFトレンチ出土、17・19・20は不明。

### 国产陶器 (Fig. 18-22)

甕の胴部。内外面にタタキの痕跡が残る。外面は後にナデ調整を施す。出土地区不明。国产磁器も青磁、染付などの破片が存在するが固化し得ない。

石器 (Fig. 19-1-8, PL. 18) 磨石、剥片に加え、黒曜石と滑石の原石が出土した。

### 磨石 (1)

全面に繊かな擦痕が残る。が、擦るだけにとどまらず敲打にも使用されている。Fトレンチ出土。

### 原石 (2-4)

2は姫島産黒曜石の原石。まったく未加工の転砾で、全面が磨滅・風化して丸くなつた自然面である。姫島の地理的条件から考えて、おそらくは海浜での水磨を受けた転砾の採集にかかるものと思われる。

3・4は滑石の原石で、ノミによる加工痕を顕著に残すもの。ノミは刃渡り約2cmほど

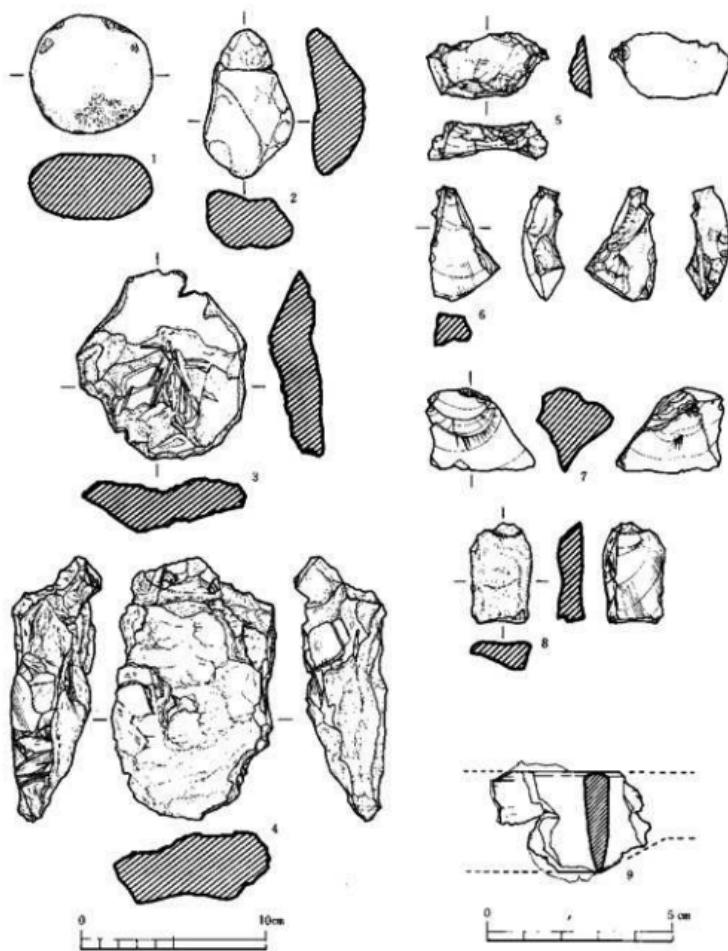


Fig. 21 包含層出土遺物実測図（石器・鐵器）

## 遺 物

のものが使われ、3では正面中央、4では左側面にその刃先痕が集中している。

2・4はDトレンチ出土、3はFトレンチ出土。なお、固化しなかったが滑石の剥片も1片ではあるが出土しており、当該地周辺で滑石加工作業が行なわれたことを裏付ける。

### 剥片（5～8）

4点とも黒曜石。5は細石核の打面再生剥片の可能性がある。先に正面右下側縁より加撃しているが良好な平坦面が得られず、もう一度右側縁より加撃しなおしている。目的剥片の幅は1cm弱と思われる。上縁には自然面が多く残る。6も下縁に平坦な自然面を残す。7・8は姫島産のもので、ともに磨滅して丸くなつた自然面を多く残している。

7はBトレンチ出土、8はDトレンチ出土、6はFトレンチ出土、5は不明。

注目すべきは原石類の出土であろう。全く未加工の、水磨を受けた自然面をもつ姫島産黒曜石の原石と、同様の自然面を大きく残す剥片の出土は、かなりの量の原石が海浜で拾われ、そのまま消費地に持ち運ばれたことを示している。滑石の原石についても、ノミの刃先痕が顕著に残り、剥片の出土とあわせ当該地周辺で加工作業が行なわれたことは明らかである。加工器具の形状を知ることのできる資料としても重要である。

### 鉄器（Fig. 19-9, PL. 18-9）

下縁に刃部を作り出す鍛造品で、左右を欠損しているが鉄刀の<sup>15</sup>間付近の可能性が高い。サビがくくれが激しくかつ小片のため、全体的な形状は不明である。Fトレンチ出土。

他に、Cトレンチより形状不明の鐵製品が出土している。わずかにはば円形の折損断面が認められる。

### その他の出土遺物

#### 鋼滓

同質のものが2点出土している。おそらく鉄滓であろうが、未分析のため鋼滓としておく。ともに軽く、金属成分の含有率はかなり低いと思われる。最大長4.9cm、最大幅2.8cm、最大厚2.0cm、重さ18gのものと、最大長3.3cm、最大幅2.1cm、最大厚1.6cm、重さ9gのものである。出土地区不明。なお、Fトレンチからも小片が出土している。

#### 磁器焼成窯壁体の一部（PL. 18-10）

高台が剥がれたと思われる円形の痕跡を有し、その高台の一部が欠損して、剥がれずに溶着している。わずかに残った高台はおそらく青磁塊のもので、緑灰色の釉がみえる。高台径は5cm弱くらいになるであろう。壁体は強い熱を受けており、ガラス状の光沢をもつ。Bトレンチ出土。

## 吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査

遺構出土の遺物については、穀物・食物種子類の検出はなかったが、貯蔵用豊穴と推定される第3号土壙出土の土器が注目されよう。弥生時代前半・中期初頭のものが一括投棄された状態で出土しており、両時期の土器様相を知る好資料である。

包含層からは、周辺地域からの流入品とみられる縄文時代後期から室町・江戸時代までのさまざまな遺物が出土しており、主体となる時期を判定しがたいが、前庭上段部分や第2学生食堂敷地内で弥生時代後期後半、古墳時代前期の住居跡が検出されていることから、生活の場はやや高位に位置することが想定され、今回出土の遺物もこれらに起因するものが多くないと考えられる。

遺物で特に注目すべきは、加工痕のある滑石と姫島産黒曜石の原石であり、石材の原产地と加工地、加工方法などを追求する上で、重要な基礎資料となる。

(河村・杉原)

Tab. 2 遺構出土土器観察表

No.	器種	II径 ＊底径 (cm)	器高 (現高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
<b>A トレンチ第1号土壙 (Fig. 11)</b>							
1	弥生土器 壺	19.2	(27.2)	にほい褐色 (7.5Y R5/4)	0.3cm程度の砂粒多含む	やや軟	上部・側部外面焼付着
2	弥生土器 壺	—	(17.0)	にほい褐色 (7.5Y R7/3)	0.3cm程度の砂粒若干	良好	側部外面焼付着
<b>B トレンチ第1号豊穴住居跡 (Fig. 12)</b>							
1	弥生土器 壺	—	(14.0)	浅黄褐色 (7.5Y R8/3)	0.3cm程度の砂粒含む	やや軟	外表面風化著しい
2	弥生土器 壺	—	(4.4)	灰白色 (2.5Y B/2)	砂粒を若干含む	やや軟	外表面風化著しい
3	弥生土器 壺	11.5	(3.9)	にほい褐色 (7.5Y R7/3)	砂粒を若干含む	良好	
4	弥生土器 壺	11.0	20.5	灰白色 (7.5Y R8/2)	砂粒を若干含む	やや軟	
5	弥生土器 壺	—	(2.6)	灰白色 (7.5Y R8/2)	0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	
6	弥生土器 壺	19.7	(5.2)	浅黃褐色 (7.5Y R8/3)	砂粒を若干含む	良好	上部・側部外面焼付着有り
7	弥生土器 壺	23.9	(2.6)	灰白色 (7.5Y R8/2)	精良	良好	
8	弥生土器 壺	25.5	(5.5)	にほい褐色 (7.5Y R8/3)	0.3cm程度の砂粒多く含む	やや軟	外表面風化著しい
9	弥生土器 壺	15.5	(6.6)	明褐色 (7.5Y R7/2)	0.4cm程度の砂粒含む	良好	上部・側部外面焼付着
10	弥生土器 壺	* 5.9	(3.7)	外 - にほい褐色 (7.5Y R7/3) 内 - にほい褐色 (5Y R7/4)	0.4cm程度の砂粒多く含む	良好	
11	弥生土器 壺	—	(2.4)	外 - にほい褐色 (7.5Y R7/3) 内 - にほい褐色 (7.5Y R7/3)	砂粒を若干含む	良好	側部外面へ土体による剥離突起
12	弥生土器 高环	24.0	(4.7)	浅黃褐色 (7.5Y R8/3)	0.4cm程度の砂粒含む	良好	
13	弥生土器 高环	25.5	(3.6)	灰白色 (2.5Y R8/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	
14	弥生土器 小壺	* 2.2	(6.9)	灰白色 (10Y R8/2)	0.2~0.5cmの砂粒含む	良好	
<b>C トレンチ第3号土壙 (Fig. 14)</b>							
1	弥生土器 壺	—	(3.7)	にほい褐色 (5Y R6/4)	砂粒を若干含む	良好	

## 遺物

No.	器種	寸径 *底径 (cm)	高さ (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
2	弥生土器 壺	—	(1.8)	褐色(7.5Y R6/6)	0.1~0.2cmの砂粒含む	良好	口唇部ハケ原体沈継有り
3	弥生土器 壺	—	(4.7)	明赤褐色(2.5Y R5/8)	砂粒を多量に含む	良好	
4	弥生土器 壺	—	(2.3)	外: にぼい赤褐色(5Y R6/3) 内: 橙色(5Y R6/6)	0.1~0.3cmの砂粒含む	良好	肩部貝殻施文有り
5	弥生土器 壺	—	(4.1)	にぼい橙色(7.5Y R7/3)	砂粒を若干含む	良好	肩部無輪羽状文有り
6	弥生土器 壺	—	(5.2)	橙色(5Y R6/6)	砂粒を若干含む	良好	肩部輪羽状文・沈継有り
7	弥生土器 壺	—	(3.9)	外: にぼい赤褐色(5Y R5/4) 内: にぼい褐色(7.5Y R7/3)	0.1~0.5cmの砂粒含む	良好	肩部刺突文有り
8	弥生土器 壺	—	(7.2)	にぼい褐色(7.5Y R6/3)	砂粒を若干含む	良好	口唇部ハケ原体沈継有り
9	弥生土器 壺	18.3	(6.9)	褐色(5Y R7/6)	砂粒を若干含む	良好	肩部外面塗付有り
10	弥生土器 壺	* 9.0	(5.5)	褐色(2.5Y R6/8)	砂粒を多量に含む	やや軟	内・外表面風化著しい
11	弥生土器 壺	* 10.2	(7.6)	にぼい褐色(7.5Y R6/3)	砂粒を多量に含む	やや軟	
12	弥生土器 壺	* 13.1	(6.0)	にぼい褐色(7.5Y R6/4)	0.3cm程度の砂粒含む	やや軟	
13	弥生土器 壺	* 6.2	(5.6)	にぼい赤褐色(5Y R5/4)	砂粒を若干含む	良好	
14	弥生土器 壺	* 6.1	(10.4)	にぼい褐色(7.5Y R6/4)	砂粒を若干含む	良好	次加熱を受けたものか

Dトレンチ第4号土壠 (Fig. 16)

土師質土器 壺	68.8	(8.0)	淡黄褐色(7.5Y R8/6)	砂粒を若干含む	良好	Dトレンチよりやや下枝に一箇の土壠
---------	------	-------	-----------------	---------	----	-------------------

Dトレンチ第5号土壠 (Fig. 17)

1	土師質土器 壺	* 17.4	(24.0)	にぼい黄褐色(10Y R7/3)	精良	良好	埋設
2	須恵器 壺	—	(1.6)	灰褐色(5Y R8/1)	精良	良好	
3	土師器 盆	7.6	1.1	にぼい黄褐色(10Y R6/4)	精良	良好	好表明部、底部内面に薄付有り
4	土師器 盆か平	* 5.1	(1.1)	灰白色(2.5Y R8/2)	精良	良好	
5	土師器 灰焰	—	2.8	にぼい褐色(7.5Y R7/4)	精良	良好	Dトレンチ内側、底部内面埋付有り
6	瓦質土器 灰焰	21.6	3.2	灰褐色(7.5Y R6/2)	精良	良好	口動内側、底部外側埋付有り
7	陶器 壺	—	(3.5)	素地・褐色(10Y R5/1) 縁・透明白(5B5/1)	精良	良好	底部内側、底部外側埋付有り
8	鉢器 壺	* 3.1	(3.4)	素地・灰褐色(10Y R5/1) 縁・透明白(5B5/1)	精良	良好	染付

Fトレンチ柱穴 (Fig. 18)

1	弥生土器	* 3.2	(6.3)	外: 淡黄褐色(7.5Y R8/3) 内: 黄灰色(7.5Y R6/1)	砂粒を若干含む	良好	
2	土師器 壺	17.0	(4.5)	にぼい褐色(7.5Y R6/3)	砂粒を若干含む	やや軟	風化著しい
3	土師器 盆	8.3	1.5	淡赤褐色(2.5Y R7/4)	砂粒を若干含む	良好	

Tab. 3 包含層出土土器観察表

No.	器種	寸径 *底径 (cm)	高さ (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
包含層 (Fig. 19)							
1	縄文土器	—	(3.2)	外: 明赤褐色(5Y R5/6) 内: 黒褐色(10Y R3/1)	砂粒を若干含む	良好	
2	縄文土器	—	(3.4)	外: にぼい褐色(7.5Y R6/3) 内: 褐褐色(7.5Y R5/1)	砂粒を若干含む	良好	
3	縄文土器	—	(4.0)	外: 褐褐色(7.5Y R4/3) 内: 黑褐色(7.5Y R3/1)	0.1~0.3cmの砂粒を含む	良好	
4	縄文土器	—	(3.8)	褐色(7.5Y R4/3)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	
5	縄文土器 茶鉢	40.4	(8.3)	外: にぼい褐色(7.5Y R7/3) 内: 黑褐色(7.5Y R3/1)	砂粒多く、金雲母を含む	良好	粗製、Dトレンチ外側 右側面部に埋在。

## 吉田構内大学公館環境整備に伴う試掘調査

No.	器種	口径 ＊底径 (cm)	器高 現存高 (cm)	色調	胎土	焼成	備考
6	弥生土器 豆	—	(2.6)	浅黃褐色(10Y R8/3)	砂粒を若干含む	良好	上部外部表面の凹部
7	弥生土器 壺	—	(2.0)	灰白色(10Y R8/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	上部外部表面の凹部
8	弥生土器 盖	—	(2.2)	にぼい褐色(5Y R6/3)	0.2cm程度の砂粒含む	良好	無軸羽状文有り
9	弥生土器 壺	—	(3.3)	灰白色(10Y R8/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	肩部斜文有り
10	弥生土器 高环	—	(3.1)	外：浅黃褐色(10Y R8/3) 内：黒褐色(10Y R3/1)	0.1~0.3cm程度の砂粒含む	良好	口付部外側丹塗り
11	弥生土器 高环	—	(3.9)	黄褐色(2.5Y 6/1)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	内外面丹塗り
12	弥生土器 高环	—	(9.3)	にぼい褐色(5Y R7/4)	砂粒を多量に含む	良好	—
13	弥生土器 高环	—	(3.5)	灰白色(2.5Y 8/1)	精良	良好	土師器か
14	弥生土器 高环	—	(3.9)	灰白色(10Y R8/2)	砂粒を若干含む	良好	土師器か
15	弥生土器 豆	* 6.6	(6.5)	にぼい褐色(5Y R7/3)	砂粒多く、黒雲母含む	良好	—
16	弥生土器 豆	* 8.4	(5.2)	にぼい褐色(5Y R7/4)	砂粒若干、黒雲母含む	良好	—
17	弥生土器 盖	* 8.6	(3.4)	暗褐色(7.5Y R7/2)	砂粒を多量に含む	良好	—
18	弥生土器 盖	* 10.1	(6.0)	褐色(5Y R6/6)	砂粒を多量に含む	良好	側部内部焼付着
19	土師器 盖	12.2	(5.7)	にぼい褐色(5Y R6/3)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	—
20	土師器 塵	13.7	(6.5)	淡褐色(5Y R8/3)	精良	良好	—
21	土師器 塚	* 6.1	(1.5)	外：明褐色(7.5Y R7/2) 内：深褐色(7.5Y R6/2)	精良	良好	黑色土器か
22	土師器 塚	* 6.2	(3.2)	灰白色(10Y R8/2)	砂粒を若干含む	良好	—
23	土師器 盖	—	(1.4)	灰白色(10Y R8/1)	精良	良好	畿内系(ての字形 口縁)
24	瓦質土器	—	(1.9)	にぼい黄褐色(10Y R7/3)	砂粒を若干含む	良好	—
25	瓦質土器	—	(1.5)	灰白色(2.5Y 8/2)	精良	良好	—
26	瓦質土器	—	(3.3)	にぼい褐色(7.5Y R6/3)	砂粒を若干含む	良好	—
27	瓦質土器	—	(4.7)	褐灰色(10Y R5/1)	砂粒を若干含む	良好	—
28	瓦質土器	—	(5.0)	にぼい黄褐色(10Y R7/2)	砂粒を若干含む	良好	裏脚部
29	手程土器 高环	* 2.5	(2.0)	浅黃褐色(7.5Y R8/3)	精良	良好	—
30	土瓶	0.9	5.2	灰白色(10Y R8/1)	精良	良好	—

包含層 (Fig. 20)

1	須恵器 盖	—	(2.4)	灰色(7.5Y 5/1)	砂粒を若干含む	良好	—
2	須恵器 盖	13.5	3.3	褐色(10Y R6/1)	砂粒を若干含む	良好	—
3	須恵器 盖	12.5	(2.5)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	—
4	須恵器 盖	13.5	2.4	灰色(N6/0)	精良	良好	—
5	須恵器 盖	—	(1.6)	灰白色(10Y R8/1)	精良	良好	天井部内部粘土堆 巻き上げ痕
6	須恵器 环	9.0	(2.6)	灰白色(10Y R7/1)	精良	良好	—
7	須恵器 环	8.8	(3.1)	灰色(5Y 5/1)	精良	良好	—
8	須恵器 环	12.3	3.6	灰白色(2.5Y 8/2)	砂粒を若干含む	良好	—
9	須恵器 环	* 10.0	(3.2)	灰色(5Y 6/1)	砂粒を若干含む	良好	—
10	須恵器 塚	* 4.7	(1.3)	灰白色(7.5Y 7/1)	砂粒を若干含む	良好	—
11	須恵器 塚	* 8.4	(1.6)	灰白色(N7/0)	精良	良好	—
12	須恵器 塚	* 7.4	(1.8)	灰色(N6/0)	砂粒を若干含む	良好	—

## 道 物

No.	器種	口径 本底径 (cm)	高さ 観音高 (cm)	色調	胎土	焼成	備考
13	須恵器 錐	—	(3.0)	外・灰色(N5/0) 内・灰色(N6/0)	精良	良好	
14	須恵器 錐	—	(4.2)	灰色(N6/0)	精良	良好	
15	須恵器 錐	*11.6	(1.3)	外・灰色(N6/0) 内・灰白色(N7/0)	精良	良好	
16	須恵器 高環	—	(2.4)	灰白色(N7/1)	精良	良好	
17	白磁 塗	—	(2.4)	素地・灰白色(7.5Y8/1) 輪・透明	精良	良好	V-4-a類
18	白磁 塗	* 6.3	(3.3)	素地・灰白色(7.5Y8/1) 輪・透明	精良	良好	見込みと次第
19	青磁 塗	—	(1.9)	素地・灰白色(5Y8/1) 輪・褐色	精良	良好	I-4-a類
20	青磁 黒	* 5.0	(1.3)	素地・灰白色(5Y8/1) 輪・褐色	精良	良好	I-1-b類
21	青磁 塗	—	(2.2)	素地・灰白色(5Y8/1) 輪・褐色	精良	良好	I-1-b類
22	陶器 錐	—	(3.1)	暗赤灰色(2.5YR3/1)	精良	良好	タキ

Tab. 4 出土石器観察表

( )は現存箇

No.	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
Bトレンチ第1号堅穴住居跡 (Fig. 13)							
1	剥片	(3.8)	2.1	1.3	(11)	石英(水晶)	二次加工痕あり
Cトレンチ第3号土塁 (Fig. 15)							
1	扁平打製石斧	(9.5)	5.0	1.2	(84)	結晶片岩	無鉋
2	用途不明石器	10.3	8.7	5.0	405	凝灰岩	女性器シンボルか
3	石核	14.5	10.7	9.5	1951	珪質凝灰岩	
4	剥片	8.3	5.3	2.4	118	珪質凝灰岩	
5	剥片	3.9	7.4	2.1	65	珪質凝灰岩	
6	剥片	2.6	1.8	0.5	1	黑曜石	
7	剥片	1.7	1.1	0.4	0.5	黑曜石	
8	剥片	1.8	1.3	0.5	1	黑曜石	
9	剥片	2.8	1.7	1.5	6	黑曜石	
10	剥片	(1.5)	1.6	(0.6)	(1)	黑曜石	
11	剥片	1.8	1.2	0.7	1	石英(水晶)	
12	剥片	2.1	2.1	0.3	1	畫峠岩質安山岩	
包含層 (Fig. 21)							
1	磨石	6.4	6.7	3.5	222	結晶質凝灰岩	
2	原石	8.0	4.8	3.0	115	輕島產黑曜石	加工面なし
3	原石	14.2	8.4	3.5	580	滑石	ノミ痕顯著
4	原石	10.2	9.1	2.5	266	滑石	ノミ痕顯著
5	剥片	3.2	1.7	0.6	4	黑曜石	
6	剥片	3.1	1.8	0.8	5	黑曜石	
7	剥片	2.3	2.8	2.0	10	輕島產黑曜石	
8	剥片	2.7	1.6	0.7	5	輕島產黑曜石	

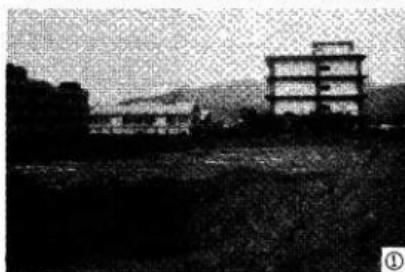
## 4 小 結

## (1) 検出遺構について

検出した主な遺構には、堅穴住居跡、貯蔵用堅穴、土壙、溝、柱穴などがある。時期は弥生時代から近世まで各時期にわたる。

まず、Bトレンチでは弥生時代終末の時期と推定する堅穴住居跡の一部を確認した。<sup>6)</sup>この前庭部分周辺地域での既往調査でも堅穴住居跡の検出が多く、第2学生食堂敷地内や前庭上段部分で既に弥生時代から古墳時代にかけてのもの10棟近くが確認されており、<sup>7)</sup>当時この地一帯で大きな集落が形成されていたことを裏づける。

Cトレンチ北端では弥生時代前期末から中期初頭と推定する貯蔵用堅穴を検出した。吉田遺跡において、弥生時代の貯蔵施設の存在が明確になったのは、今回の特筆すべき成果である。また、当地区周辺に弥生時代前期から中期にかけての集落跡が存在することが推



&lt;現第2食堂敷地の調査(昭和46年11月)&gt; 全景



溝状遺構(後方の建物は吉田寮)



大形土壙



&lt; M-13区の調査(昭和46年6月)&gt;

Fig. 22 昭和46年時における周辺地域の調査(昭和46年4月、11月 菅田撮影)

## 小 結

察されるとともに、平川地域における貯蔵用堅穴の初例として貴重な資料である。さらに今回の調査結果から、吉田遺跡調査団が昭和46年4月・11月に本調査対象地の周辺で発掘調査を実施し、大形の円形の土壙を数基検出しているが (Fig. 22-③④参照)、それらの中にも当土壙同様に貯蔵用の機能をもったものが含まれていた可能性も考えられる。なおAトレンチでもCトレンチのものよりさらに一回り大きい弥生時代中期末から後期の時期かと推定する円形土壙が検出されているが、貯蔵用堅穴かどうかについては未完掘のため今後の調査を待つ結論づけたい。

### (2) 出土遺物について

出土遺物は、縄文時代から近世までの土器・石製品など多種におよぶ。その中で特筆すべきものとしてはまず縄文土器がある。これまで吉田遺跡の中では教育学部周辺で出土している事例があるが、この小地区周辺では初例である。弥生時代前期の遺物が出土していることをも勘案すると、吉田遺跡の中でも比較的早い段階から居住域として利用されていた場所と推察されるとともに、また後世の遺物の出土状況から、この地が長期にわたって利用されていたことが看取される。

また石器研究に関して、滑石と黒曜石の原石および一部加工品の出土が注目される。まず滑石は、加工痕のある原石が数個出土したが、昭和54年に本調査地近辺の本部第二号棟敷地内において、その新宮に伴う発掘調査により多数の滑石製模造品の製品が出土している (Fig. 23参照) ことを含め勘案すると、吉田遺跡ではすべての滑石製模造品が製品として搬入されたのではなく、

未製品の段階で集落内に持ち込み、その製作を行なったことを推定させる資料である。また黒曜石は、加工面が全くない自然石の出土があり、原産地から集落への搬出時における原材の大きさ、加工度合を考える上で貴重なものである。

なお、12月に樹木移植に伴う立会調査を実施した際、



Fig. 23 L-14[出土の滑石製模造品

不明土壌内の上位包含層から墨書き土器が出土した（本書P65参照）。墨書き土器は周防においては希有な遺物で、本例は奈良時代末から平安時代初め頃のものと推定する。吉田遺跡の古代・中世に関して、官衙や荘所あるいはそれに準じる機能をもつ集落の存在を考えられるとする説があるが、この推論を傍証する一資料として注目され、さらに今後の調査に期待するところである。<sup>10)</sup>

### (3) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

調査対象地域は、北側に広がる前庭上段部分との間に大きな段差があることから、既に古い時代の遺構は削平され、消失している蓋然性が高いとの推測も一部にあったが、今回の試掘調査の結果、Eトレンチ内北東端からFトレンチ方向の東域にかけて遺構が消失している部分も確認したものの、南西域においては広範囲に遺構が遺存していることがわかった。遺構の遺存状況は、大学移転等の工事に際して、かなり削平を受けているために、あまり良好とは言えない。しかし、堅穴住居跡や貯蔵穴など集落の存在を示す顯著な遺構が確認されたことは、第2学生食堂敷地内や前庭上段部分の既往調査結果を合わせ勘案すると、この丘陵が吉田遺跡として周知されている範囲の中でも、教育学部西側に広がる保存地区周辺と並んで、重要な位置を占める地域であることは明らかである。

今後、この地をどのように環境整備するかは、環境整備委員会や大学事務局等で進められるが、最後に、Fig. 25で現地表面から遺物包含層上面（包含層が既に消失している部分は遺構面）までの深度を示した。環境整備の計画を立てるにあたっては、このデータをもとにできる限り、遺構・包含層に影響がないよう十分な配慮がなされることを望む。なお、止むを得ず提示した深度以上の土地掘削を必要とするときは、改めて埋蔵文化財の調査が必要である。

（森田）

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新設予定地M-14・15区の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年）。
- 2) 防府市教育委員会「周防国府跡・周防国分寺昭和56年度発掘調査報告」（『防府市文化財調査年報』Ⅰ、1984年）。
- 3) 横田賢次郎・森田勉「大字府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1978年）。
- 4) 1) に同じ。
- 5) 山口大学吉田遺跡調査團「山口大学構内第1地区E区発掘調査概報」（孔版、1971年）。
- 6) 5) に同じ。
- 7) 1) に同じ。
- 8) 山口大学吉田遺跡調査團「山口大学構内第1地区D区発掘調査概報」（孔版、1971年）。
- 9) 5) に同じ。
- 10) 森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相—吉田遺跡をめぐる諸問題—」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。

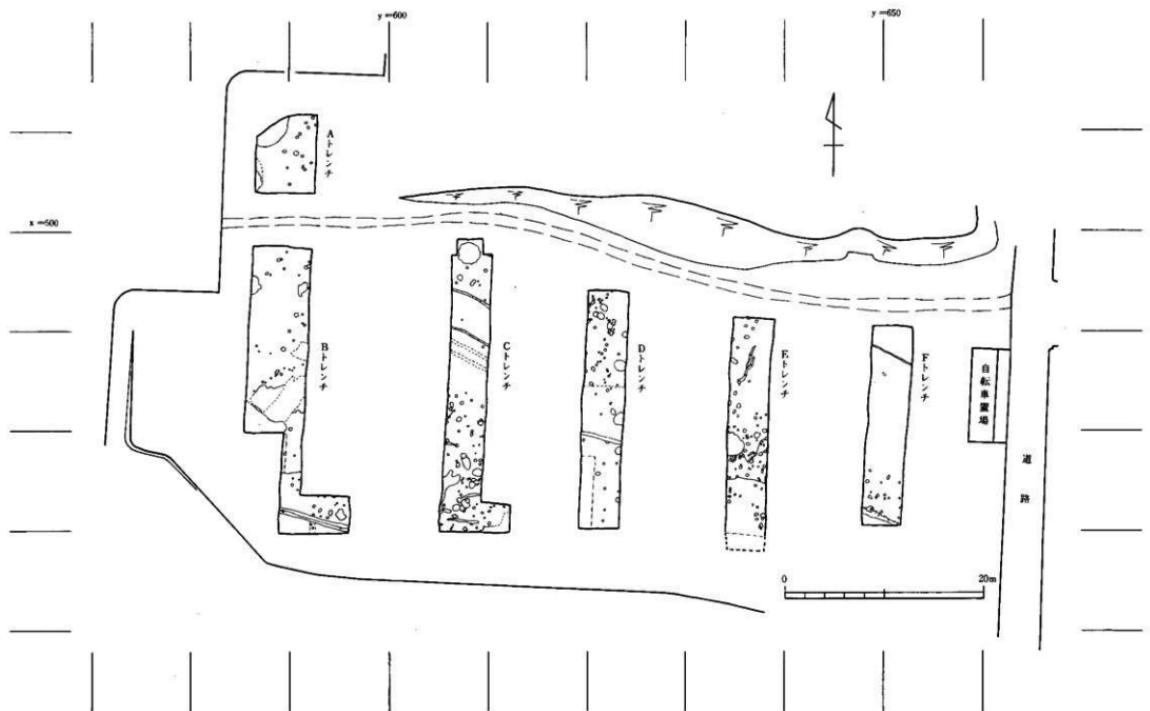
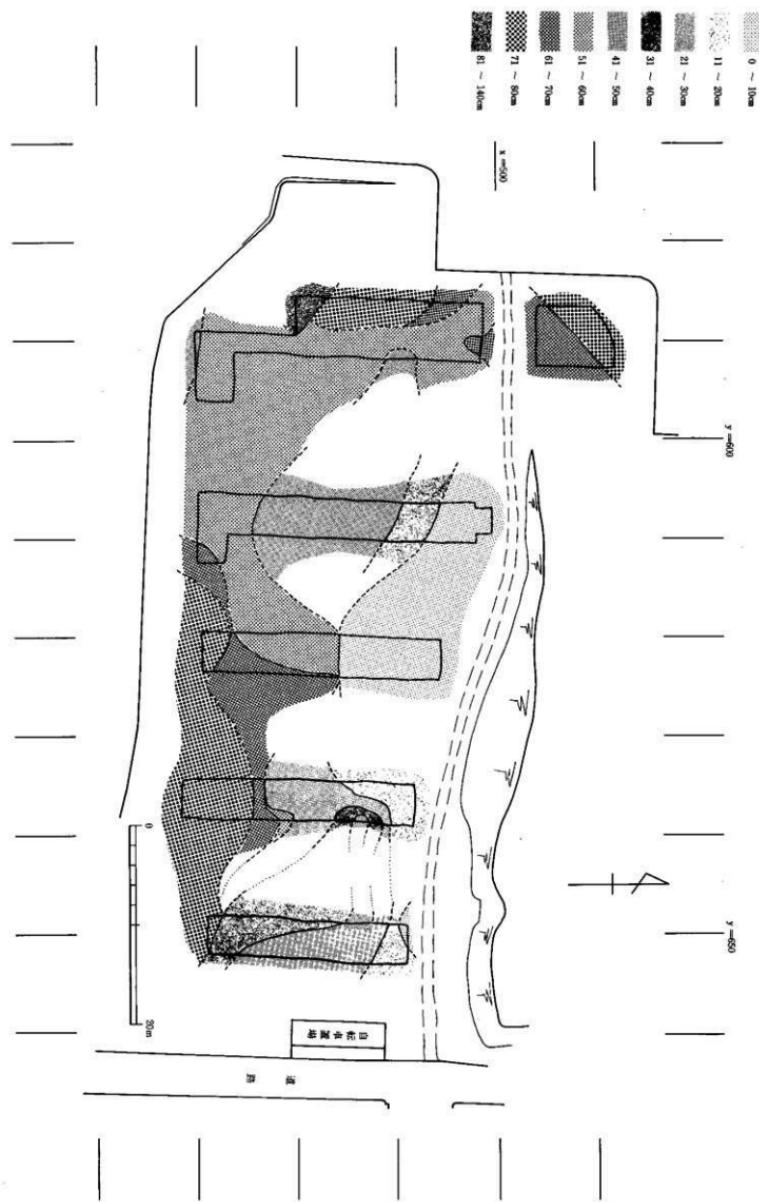


Fig. 24 通 構 分 布 図

Fig. 25 運動公園上層ないしは運動場までの深さ



## 第4章 小串構内医学部基礎研究棟新営に伴う試掘調査

### 1 調査の経過

医学部キャンパス南東部では、昭和58年度の図書館新営に伴う立会調査が行なわれているに過ぎず、その基礎資料は不十分であった。今年度に至って図書館北方の地域に基礎研究棟新営が計画されたため、埋蔵文化財資料館は、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施した。

新営計画は、旧臨床研究棟と旧図書館にまたがる地域に約1300m<sup>2</sup>が予定されていたが、既設の建物、庭園をはじめ配管が密に埋設されているため、それらを回避し、旧図書館と園池間に3m×3.5mのトレンチを設定して調査を実施した。調査期間は昭和60年7月15日から7月17日までである。

なお、腐蝕土および構内造成時などの置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

### 2 墓位

現地表面の標高は約1.70mで、約140~150cmの厚さをもつ腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土下位に旧耕作土が残存する。旧耕作土下には厚さ約40cmの赤褐色粘質土の客土が認められる。この客土は同キャンパスでは検出しておらず、かつまた比較的硬質であることから、未調査地域であるキャンパス中央部付近に埋存していると思われる低丘陵の削平による置土と考えられる。その下位、標高約-0.20mで二次堆積層である青黄灰色粘質土、さらに暗青灰色粘質土が堆積しているが、地山は確認していない。



Fig. 26 調査区位置図

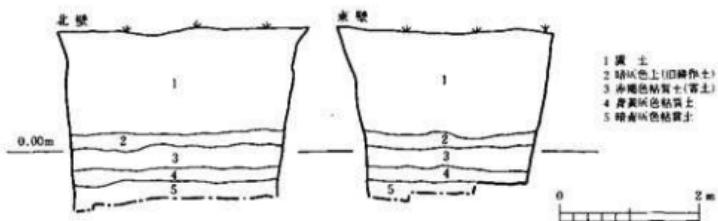


Fig. 27 土層断面図

なお青黄灰色粘質土には、周辺からの流れ込みによるものと推察される近世の陶器片若干を包含していたが、他に顕著な遺構は検出されなかった。

### 3 小 結

基礎第二研究棟の新嘗は既設の支障構造物の撤去跡地に計画されていることから、今回調査面積は現状変更を伴う約1300m<sup>2</sup>のうち空閑地に設定したわずか約10m<sup>2</sup>のトレンチであった。出土遺物も近世の陶器片若干が出土したのみで、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

しかし、同キャンパス各地域における調査で出土した遺物は時期、包含する土層の内容および堆積状況から、周辺地域からの流入品と考えることが最も妥当であるが、その出土量および残存状況はキャンパス中央部に近接するほど良好な状況にある。したがって臨床講義棟、図書館および基礎第二研究棟を含むキャンパス南部地域には埋蔵文化財が埋存する可能性は薄く、ボーリング・アーケタおよび予想される旧地形等から、後世に大規模な地形改変が行なわれていなければ、キャンパス中央部の高所にこれらをもたらした遺構が残存する可能性が高い、その意味からも今後はキャンパスを東西に貫く市道以西の地域ではキャンパス中央部を中心とした地域を重点的に調査する必要性があろう。

(河 村)

## 第5章 小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査

### 1 調査の経過

調査地域はキャンパス北東端部に位置する。周辺地域では昭和58年度に実施した体育館新設に伴う試掘調査の際、旧石器時代のナイフ形石器、削器、細石核、剥片および鎌倉時代後半から室町時代にかけての土師器、瓦質土器が包含層から出土しており、体育館、学生会館およびテニスコートを含む地域が遺物包含地として周知されるに至った。

しかし、同キャンパスを東西に二分する市道以東の地域では、本稿で報告する看護婦宿舎を含む職員宿舎および野球場の地域での調査が行なわれていなかったため、埋蔵文化財の分布状況は容易に把握できない状況であった。

今年度に至って、看護婦宿舎改修の工事計画が具体化したのに伴い、埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、関係部局と協議し、試掘調査を実施することとなった。

工事内容は宿舎内の模様替えを主体とするものであるが、宿舎内の北端中央部では昭和58年度の調査で検出した包含層の上面にまで達する、現地表から約2.3mの掘削を伴う工事が計画された。これに伴い、工事によって埋蔵文化財へ影響が及ぶ恐れのあることが十分考えられ、また、職員宿舎地域で事前に埋蔵文化財の有無および土層の堆積状況を把握し、予想される今後の開発工事に対して埋蔵文化財に関する具体的な資料を得る必要があることなどから以下に述べる二箇所の地点で12月9・10日の二日間試掘調査を実施した。

現地表から約2.3mの掘削を要する約4×3mの洗面所が新設される地点（第一地点）では、掘削深度に加え、激しい湧水をみる同キャンパスにおける過去の調査から表土除去



Fig. 28 調査区位図

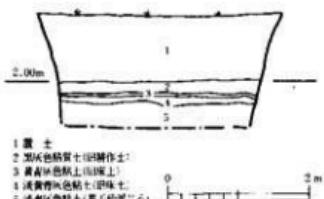


Fig. 29 上層断面図



Fig. 30 出土遺物実測図

後の人力による掘削には限界があり、かつ、この部分に既設の建物が存在しておらず、すでに擾乱を受けている可能性もあることなどから、土層の堆積状況および、昭和58年度の調査で検出した遺物包含層の有無等の把握を主眼として、機械を使用した分層発掘を行なった。

また、同時に看護婦宿舎東側の砂場約  $4.5 \times 3$  m の地点（第二地点）では、機械を使用した表土除去のち、人力による分層発掘を実施した。

## 2 層位

第一地点では上層から擾乱土、旧耕作土および旧床土の順に堆積が見られる。旧床土の下位にあたる現地表下約 1.7 m で58年度の調査の際、旧石器時代および鎌倉時代後半から室町時代の遺物を包含していた厚さ約40cmの青灰色粘土層が検出されたが、当地点では遺物は出土しなかった。その直下は工事による掘削深度である現地表下約 2.3 m まで土層の堆積状況を観察したが、地山は検出されず、枝木、木葉などの多数の植物遺体を含む厚さ約20cmの黒褐色粘土層が堆積している。

第二地点では現地表下に厚さ約95cmの構内造成時等の擾乱土が堆積しており、その下位に旧耕作土および旧床土が残存している。旧床土は2層認められ、その直下に第一地点で検出された若干砂混じりの青灰色粘土層が現地表下約 1.2 m、標高約 1.7 m 付近に堆積している。湧水が激しく厚さ約40cmまでしか掘り下げられなかったが、青灰色粘土層からは近世の陶器若干が出土した。

### 3 遺物 (Fig. 30, PL. 20-(4))

1～3は陶器。1は茶入で、短く立ち上がる口縁部をもつ。器肉は薄い。口縁部内外面に赤黒色の釉を施すが、蓋を有するものと思われ、口唇部は口禿となっている。素地は淡赤灰色を呈し、緻密である。2は小型の壺の口縁部で橢円形に近く肥厚する。口縁部内外

## 小 結

Tab. 5 出土遺物観察表

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調		胎土	焼成	備考
				素地	釉			
1	陶器・茶入	—	(1.5)	暗赤灰色(7.5R4/1)	赤黒色(2.5Y R2/1)	精良	良好	
2	磁器・壺	—	(1.7)	灰白色(2.5Y 8/1)	浅黄色(7.5Y 7/3)	精良	良好	
3	陶器・鉢	—	(2.4)	赤灰色(2.5Y R6/1)	暗赤褐色(2.5Y R3/3)	精良	良好	皿か
4	磁器・塊	*7.5	(2.3)	灰白色(2.5Y 8/2)	明緑灰色(5G Y 8/1) 染付-青灰色(5B 6/1)	精良	良好	

面に透明な淡灰緑色の釉を施すが、1と同様、蓋を有するものと思われ、口唇部は口禿となっている。素地は灰白色。3は鉢ないしは皿の底部。茶色の釉は内面および体部上半の一部に施しており、底部付近にまでは及んでいない。素地は淡赤灰色を呈し、緻密である。4は磁器染付。塊の口縁部で器内は薄い。外面は鮮青色の呉須で口縁部下に一条の團線と草花文を描きする。内面は方両連続帯が巡る。

1~4とも19世紀代のものと考えられる。

## 4 小 結

今回の調査によって職員宿舎南西部の地下の状態がおおまかではあるが把握された。  
 すなわち、昭和58年度の調査で検出された旧石器時代および鎌倉時代後半から室町時代の遺物を包含する淡青灰色粘土層が、キャンバス北東端部にあたる今回の調査地域付近にも分布しており、両地域とも検出面の標高は約1.6~1.7m前後であった。したがって、過去の調査結果を総合すると、小串構内では現在まで未調査地域である第一・二病棟と給食棟付近の地域、野球場の地域および職員宿舎北半部の地域の三地域を除いたほぼ全域で淡青灰色粘土層が検出されることになる。しかも、同層がグライ化した堆積層で、その包含する遺物が旧石器時代から江戸時代末までかなりの時期幅をもっており、かつまた、量的にも多くはないことなどから、低湿地に堆積する二次的な自然堆積層であるものと考えられる。

しかし、キャンバス内での遺物の出土は、大学占地直前の客土である旧耕作土および旧床土以外の堆積層では同層に限られていることから、淡青灰色粘土層以下におよぶ掘削を行なう開発諸工事に対しては、遺物の包含状況を把握する必要があるものと考えられる。

さらに、職員宿舎北方に隣接して北東から南西に延びる低丘陵上には、4基検出された

### 小串構内医学部看護師宿舎改修に伴う試掘調査

箱式石棺のうちの 1 基から 1 体分の人骨とともに鉄剣 1 本、鉄鏃 2 本が出土した尾崎古墳<sup>3)</sup>が所在するのをはじめとして、同古墳の奥部には地下式横穴が存在したといわれる小串古墳<sup>4)</sup>などの古墳時代の遺跡が存在する。また、昭和58年度の調査でも古墳時代後期の須恵器が出土しており、今後、野球場および職員宿舎北半部の地域では、この低丘陵裾部のひろがりとともに淡青灰色粘土層の分布状況を把握することによって、同地域における遺構埋存の有無を確認する必要性があろう。

(河 村)

#### 〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部体育館新館に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部体育館新館に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部基幹整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1985年)。
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部臨床講義棟・病理解剖棟新館に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1985年)。
- 3) 宇部市教育委員会『宇部の遺跡』(1968年)。
- 4) 3) と同じ。

## 第6章 昭和60年度山口大学構内の立会調査

### 第1節 吉田構内の立会調査

#### 1 経済学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 経済学部構内 K-21, L-20区

調査期間 昭和60年7月12日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約5m<sup>2</sup>

調査結果 経済学部構内西半部では昭和55年度に経済学部E棟(大講義棟)新営に伴う試掘調査、昭和59年度に立会調査を実施している。その結果、少なくとも現地表下約70cmまでは置土(擾乱土)の範囲内であり、かつE棟以南はその規模は不明であるが狭い河川が検出され、教育学部美術科・技術科実験室複数棟方向に走っていることが確認されている。しかし、東半部では今日まで調査が行なわれておらず、地下の状況は不明であった。今回の調査はその東半部を含むD棟周辺地域5地点での樹木移植に伴うものである。

工事による掘削深度である現地表下約60cmまでは擾乱土であったが、第1・第5地点で深掘りを行なった結果、第1地点では現地表下約80cmで黒褐色粘質土が確認され、遺構ないしは遺物包含層の存在を予想させた。また、第5地点では現地表下約70cmで黄褐色粘質土の地山を検出したが、昭和53年度に実施した人文学部校舎新営に伴う試掘調査でこの地山の大規模な削平が確認されており、当構内も既に削平されている可能性が高い。なお、当構内は人文学部構内に比べ段階状にかなり低くなってしまっており、かつ当該地域の削平状況が不明なため、遺構が埋存しているかどうかは今後の調査によって明らかにする必要がある。

(河 村)



Fig. 31 調査区位置図

## 2 農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 R-16~19区

調査期間 昭和60年11月7日、昭和61年2月26日、4月23・24日

調査方法 工事施工時における立会・試掘調査

調査面積 約30m<sup>2</sup>

調査経過 大学キャンパス東部の飼料園、果樹園および墓野寮となっている地域は、キャンパス中央部および西部に比べて約5m近く高所に位置し、円筒埴輪が採集されているほか、吉田遺跡調査団によって古墳時代以降の中世を中心とした集落遺構の埋存が報告されている。

今回の工事は、昭和49年に北側の飼料園東端部で整備された素掘りの排水溝が、埋没し排水不良となっているため、再掘削し修復するものである。また、工事規模は、総延長距離約120mの既存の排水溝の溝底を約50cm下げるとともに、溝幅を約70cm拡幅するものであるが、吉田遺跡調査団による具体的な埋蔵文化財の調査資料、および当時の工事内容を示す資料がなく、工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがあることが考えられたため、埋蔵文化財資料館運営委員会および関連部局との協議の結果、立会調査を実施した。

調査は、約20m間隔に約1.7m×3mのトレーニング6本を設定して工事予定地内の埋蔵文化財の有無、および土層の堆積状況を観察した。

その結果、中央部では顕著な遺構、遺物包含層は認められなかったが、北端部で中世のものと思われる遺物包含層、および南端部において古墳時代・中世の遺物包含層、河川跡を検出した。

これを受けて、関係部局と協議を行なった結果、工事計画・規模の変更は困難であるとの結論に達し、後日、改めて記録保存の調査を実施することとした。



Fig. 32 調査区位置図

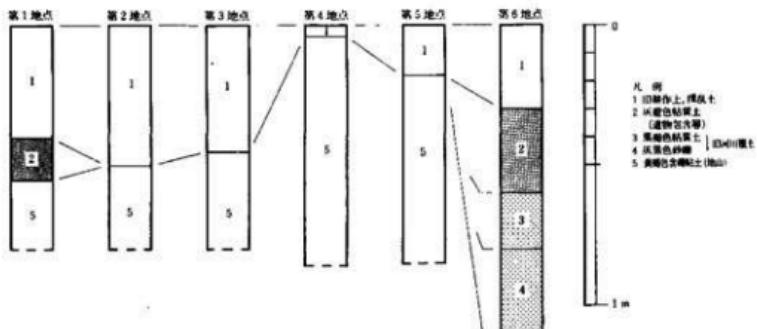


Fig. 33 土層断面基本柱状図

## 調査結果

## 層位

中央部よりやや南側の第4地点では地山が最も高い地点で検出され、厚さわずか約4cmの耕作土直下が黄褐色疊混じり粘土の地山となっている。第1地点、第6地点では厚さ約40cmの旧耕作土および攪乱土、下位に中世の遺物包含層と考えられる灰橙色粘質土が約10~20cm堆積しており、各地点での地山にいたる堆積層および地山の標高差を考えあわせると、第4地点付近が東から西へ延びる丘陵の鞍部にあたるものと推察された。

## 遺構

南端部を中心に土壤、河川跡を検出した。

土壤は工事地域の南端部から約28m付近の現地表下約30cmで検出されたが、断面観察時に確認したものでその形状、規模は不明である。深さは検出面から約20cmであるが、灰色土の覆土から堆して近世以降のものであろう。

河川跡はこの土壤のすぐ南側で検出した。南東から北西に流路をもつもので、最南端部では地山の立ち上がりを確認しており、上面の幅は約2.4m以上の規模をもつ。工事規模とのかねあいから、深さは約50cmまでしか観察していないが、上層から須恵器、土師器を含む厚さ約15~20cmの黒褐色粘質土、厚さ約30~35cmの灰黑色砂礫が堆積する。なお、両層とも植物遺体を含んでいた。

## 遺物 (Fig. 34, PL. 21)

河川跡から須恵器、土師器、輸入陶磁器、繩口および石皿、石核、鉄滓が出土した。

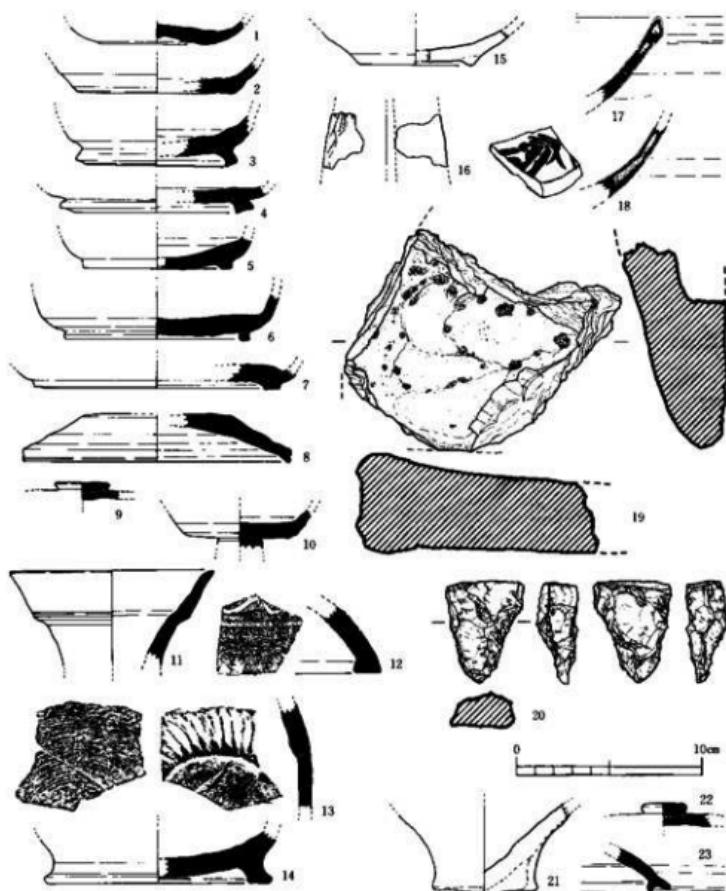


Fig. 34 出土遺物実測図

須恵器（1～14） 环、高环、翫、器台、横盆、壺がある。环身はいずれも底部の破片で高台をもたないもの（1・2）と高台をもつもの（3～7）とがある。1は底部と体部の境が不明瞭でやや上げ底ぎみ。回転翫切り放しのまま放置する。2は静止翫切り放しを行

なう。後者は底体部の境より内側に高台を貼付するもので、外方へ開き高台内側端を接地面とするもの（3・4）と直立するやや扁平な高台を有するもの（5～7）とがある。5は底部外面を回転範切り放しした後、範によるナデツケを行なう。坏蓋は平坦な天井部からゆるやかに下降して、屈曲することなく断面鳥嘴状の口縁部にいたるもの（8）があり9に近いやや扁平なボタン状の撮みを有するものであろう。8は天井部内外面ナデ、体部、口縁部は横ナデ。高坏（10）は口径の小さい屈曲して立ち上がる杯部をもつものであろう。腹（11）はあまり屈曲せず、外上方へ開く口縁部外面に範による一条の沈線がめぐる。内外面とも横ナデ。12は器台脚部で外面範による沈線、波状文を施文する。13は横盆の体部で粘土円板貼付痕が明瞭に残る。壺（14）は外方へ開くやや低い高台をもつ。高台端部はヨコナデによりわずかにくぼむ。底部内外面ナデ、他は横ナデ。

土師器（15） 壇の底部で断面三角形の高台を貼付する。器表の磨滅、剥落が著しい。

輪口（16） 外面の一部が赤橙色に熟変しており、亀裂を生じている。浮の付着は見られない。なお、他に鉄滓の出上がある。

輸入陶磁器（17・18） 17は白磁壺で口縁部は玉縁状になるが、ほとんど肥厚しない。<sup>2)</sup>軸がかりはうすく、体部下半へは施釉していない。横田・森田の白磁Ⅳ類。18は龍泉系の青磁壺で内面に片影り草花文を施文するが、極めて不鮮明である。内外面に薄く施釉する。13C前半か。

石皿（19） 転石利用の石皿で上面のみを使用面とし、他は自然面を残す。使用面に顯著なくぼみは見られない。珪化石英斑岩製。

石核（20） 左右両側縁を打面とする両設打面を有する横長剥片石核で、打面を転位しながら急傾斜な剥片剥離作業を行なう。上面は欠損する。譲岐岩質安山岩製。

#### 表探資料

農学部実験水田A-2より弥生土器、須恵器を採取した。21は弥生土器壺の底部で、内面はやや内くぼみとなる。22・23は須恵器坏蓋。23は口縁端部内面にかえりをもつもので、内面横ナデ、外面ナデ仕上げ。外面に自然軸が付着する。

#### 小結

今回の調査で検出した遺構には土壤、河川跡がある。なかでも、河川跡は深さは確認していないが、幅約2.5m前後で南東-北西に流路をもつ。出土遺物には須恵器、土師器、輸入陶磁器、輪口、石皿等があるが、主体を占めるのは須恵器で平安時代の初めのころのものが多く、やや遅いものを含む。また、白磁壺は横田・森田分類の白磁Ⅳ類に相当する

Tab. 6 出土遺物観察表

土 器							
No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
河川跡							
1	須恵器 环	* 6.3	( 1.2)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	
2	須恵器 环	* 8.0	( 2.0)	灰白色(7.5YR8/1)	0.1cm以下の砂粒含む	良好	
3	須恵器 瓢	* 7.7	( 2.7)	灰白色(N8/0)	精良	良好	
4	須恵器 瓢	* 8.7	( 1.4)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	
5	須恵器 瓢	* 7.0	( 1.8)	灰白色(N6/0)	砂粒を若干含む	良好	
6	須恵器 瓢	* 9.0	( 2.6)	灰白色(N6/0)	0.3cm程度の砂粒含む	良好	
7	須恵器 瓢	* 11.6	( 1.3)	灰白色(N8/0)	砂粒を若干含む	良好	
8	須恵器 瓢	14.4	( 2.6)	灰白色(N7/0)	砂粒を若干含む	良好	
9	須恵器 盖	—	( 0.9)	外-灰褐色(2.5G Y7/1) 内-灰白色(7.5YR8/1)	砂粒を若干含む	良好	
10	須恵器 高环	—	( 2.0)	外-灰白色(N8/2) 内-灰白色(N8/1)	精良	良好	
11	須恵器 越	11.0	( 5.1)	灰白色(N7/1)	精良	良好	口縁部外側下端に 一系の北線
12	須恵器 番台	—	( 3.5)	外-灰白色(N7/1) 内-灰白色(N8/1)	砂粒を若干含む	良好	脚部外側に沈線、 波状文
13	須恵器 横穴	—	( 5.7)	灰白色(N8/1)	精良	良好	粘土円盤貼付痕有 り
14	須恵器 瓢	* 10.0	( 2.9)	外-灰白色(7.5YR8/2) 内-赤褐色(7.5YR5/3)	0.1cm程度の砂粒含む	良好	還元炎焼成なし
15	土師器 瓢	* 6.2	( 2.0)	灰白色(10YR8/2)	砂粒を若干含む	良好	
16	輪口	—	( 2.8)	外-灰白色(7.5Y5/1) 内-浅黄褐色(7.5YR8/3)	砂粒を若干含む	良好	外面は二次加熱に による変色
17	白磁 瓢	—	( 4.7)	素地-白色(N8/0) 釉-明緑色(7.5GY8/1)	精良	良好	N類
18	青磁 瓢	—	( 3.3)	素地-白色(N8/0) 釉-明緑色(5G7/1)	精良	良好	
A-2 の実験水田表							
21	弥生土器 瓢	* 5.6	( 4.7)	外-深赤褐色(2.5YR7/4) 内-灰白色(7.5YR8/1)	砂粒を若干含む	良好	風化が著しい
22	須恵器 盖	—	( 1.2)	灰白色(N7/1)	砂粒を若干含む	良好	
23	須恵器 盖	—	( 2.4)	外-灰白色(N8/1) 内-灰白色(N8/2)	砂粒を若干含む	良好	外面自然剥付着
石 器							
( )は現存値							
No.	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最厚 (cm)	重量 (g)	石	質
河川跡							
19	石皿	(11.7)	(13.0)	5.3	(853)	珪化石英斑岩	
20	石棒	5.4	4.1	1.9	41	滑岐粒質安山岩	

#### 吉田構内の立会調査

ものと思われ、13C前半に比定される。土師器はこれよりやや遅るものであるが、全体的に、平安時代はじめから鎌倉時代はじめにかけて機能していた河川であると考えられる。

家畜病院正門付近で昭和61年度に山口市教育委員会が実施した立会調査では、幅約5mの規模をもつ同時期の河川跡が検出されており、本河川と同一のものである可能性が高い。また、今回検出した河川は、北側の飼料園、果樹園を含む地域と南側の飼料園を含む地域を分断するように南東～北西に流路をもつことから、両地域に平安～鎌倉時代にかけて別個の集落が存在していることを予想させる。また、轍口、鉄滓の出土は、これらの集落内で鉄生産に伴う鍛冶が行なわれていたことを示し、今後の調査で工房跡が検出される可能性を孕んでいる。

よって、文化財保護の観点から今回の調査地域を含む飼料園では、少なくとも現地表下約30～40cmで遺物包含層あるいは遺構面に達することから、今後の諸開発に対しては慎重な対応がなされねばならない。

(河 村)

#### (注)

1) 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」(『学園だより』第6号、1970年)。

吉田寛「吉田遺跡採集の円筒埴輪について」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。

2) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1978年)。

### 3 農学部附属農場農道改修に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 V-15・16区

調査期間 昭和60年11月26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約 325m<sup>2</sup>

調査結果 工事内容は吉田構内の東端部、東門の北方にあたる農作業用機械の搬出入道路を削平し、側溝をはさんで東側にある三角形の地域にその切土を盛るものである。

道路面の調査前の状況は、南端部付近が最も高く、北に向かうにつれて低くなっていることから、工事による切土の最高深度は南端部付近の約60cmで、最も低い北端部では切土は行なわないものであった。したがって調査は、この道路部分が周辺地域の造成の際盛土を行なっている可能性が高いところから立会調査とし、切土が行なわれる幅約5m、長さ約65mにわたる地域で実施した。その際まず南端部付近から立会調査を実施し、工事掘削深度内における埋蔵文化財の有無を確認するとともに土層の堆積状況を観察した。

その結果、現地表下約60cmまで腐蝕土および構内造成時等の置土（擾乱土）であった。この所見をもとに切土の浅い北の延長部分は工事内容から埋蔵文化財が確認される可能性が低いことから2ヶ所において立会調査を行なった。各地点とも地下の状況は南端部付近

と差異はなく、現地表下約60cmまでの掘削については埋蔵文化財に影響はないものと判断された。しかし、農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査で述べたように今回の調査地域の西方の実験水田で弥生土器、須恵器が表採されており、周辺に遺構ないしは遺物包含層の存在が予想され、以後、今回の掘削深度を越える工事に際しては慎重な対応が必要とされよう。

(河 村)



Fig. 35 調査区位置図

## 4 教育学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 教育学部構内 1・J-19・20区

調査期間 昭和60年12月3日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約430m<sup>2</sup>

調査結果 教育学部研究実習棟と第一学生食堂間に樹木移植等の環境整備が計画された。当該地域は弥生時代中期後半～古墳時代前期の竪穴住居21棟が検出されている「遺跡保存地区」のすぐ東に位置しており、「遺跡保存地区」で現地表面下約40～50cmでこれらの遺構面に達することから、植栽工事による埋蔵文化財への影響が十分に考えられた。植栽は合計11本行なわれたが、研究実習棟新宮の際の余掘部分および当該地域への既設配管の掘削地域と重複する部分が多く、工事内容、規模等を勘案し、第一学生食堂北側の、植栽予定地のほぼ中央部分2ヵ所を中心に立会調査を実施した。なお、調査時に現地表下約60cmの工事掘削基底面以内で埋蔵文化財が発見された場合、埋蔵文化財に影響が及ばない範囲内での植樹を行なうことで関係部局の了承が得られた。

その結果、11地点とも基本的には工事掘削基底面以内は置土（搅乱土）で、顕著な遺構および遺物包含層は確認できなかった。しかし、植栽予定地中央部の2ヵ所で深掘りを行なった結果、「遺跡保存地区」での遺構面と同一の黄褐色粘質土が置土直下の現地表下約80cmで検出された。なお、本工事地域と「遺跡保存地区」との現地表面の標高差はわずかであり、昭和56年度に調査を実施した美術科・技術科実験実習棟新宮地でも現地表下約40cmで遺構面が検出される。したがって、この地山面の下降は後世の削平によるものではなく、旧地形の下降を意味しているものと思われ、同地域における遺構の埋存を予想させる。

(河 村)

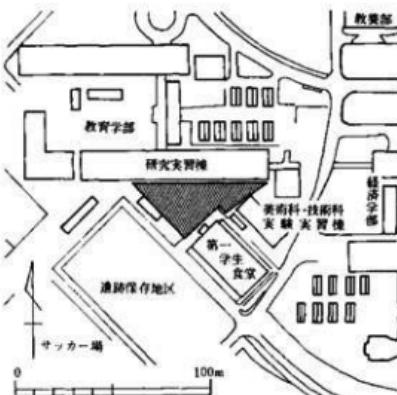


Fig. 36 調査区位置図

### 5 中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査

調査地区 本部構内 O・P-16区  
 調査期間 昭和60年12月13日  
 調査方法 工事施工時における立会調査  
 調査面積 約2.5m<sup>2</sup>  
 調査結果 調査地区はキャンパスの中央部のやや東寄りの地域に位置する。工事はボイラー棟南東隅において、焼却場への通行の際の車止を目的とした高さ約40cmの縁石を新設するものである。

周辺では今回の立会調査地区より一段高い北東約70mに位置する第二学生食堂敷地内で古墳時代前期の堅穴住居跡6棟が検出されており、また、すぐ北側の畠地でも8~9世紀代の須恵器、土師器が採集されていることから、工事規模を勘案して立会調査を実施したものである。

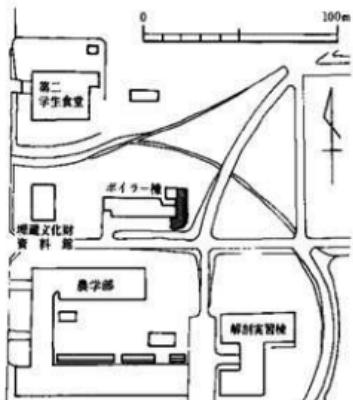


Fig. 37 調査区位置図

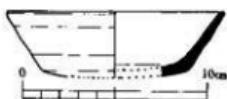


Fig. 38 出土遺物実測図

現状変更を伴う土地の掘削は弧状に巡る幅約50cm、長さ約5mの範囲で深さ約50cm削平するものであった。

調査の結果、現地表下約30cmまでは構内造成時等による近年の置土であったが、その直下には少なくとも厚さ約20cmの灰黒色砂疊土が堆積しており、須恵器のほかが出土した。

#### 遺物 (Fig. 38, PL. 22-(1))

壺は高台の付かないもので、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は尖りきみに終る。復原口径11.8cm、器高3.5cmで、口径に比べ器高が低い。内面は丁寧な回転ナデの痕跡が残るが、外面は磨滅・剥落のため調整不明。灰白色を呈し、焼成は軟質。胎土は微砂粒を含む程度で良好。

9世紀後半のものであろう。(河村)

## 6 大学会館環境整備に伴う立会調査

調査地区 大学会館前庭下段部分 L・M-15区

調査期間 昭和60年12月23日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約 9 m<sup>2</sup>

調査結果 今回の環境整備は大学会館前庭下段部分に樹木（メタセコイア）4本を医学部より移植するものである。植樹地点は昭和60年6月～7月にかけ大学会館環境整備に伴う試掘調査（第3章参照）を実施した部分であり、当植樹地点を決めるにあたっては試掘調査結果を踏まえて、提示された景観上の計画を考慮にいれながら、できるかぎり遺構を中心とした埋蔵文化財に影響が少ない部分に設定することで合意が得られた。

植樹に伴う掘削は現地表下約70cm前後であった。試掘調査の結果、東に向うにつれて後世の削平が著しく、遺構の分布密度が希薄になること、また、C～Fトレンチの南端部付近を中心として地山が南に落ち込み、小規模な谷となっていることなどからC～Fトレンチ南端部付近への移植が妥当であろうとの結論に達した。しかし、C～E各トレンチにはこの落ち込み部分に遺物包含層が堆積し、とりわけ、Dトレンチでは厚さ約1mにも達することから、掘削による遺物包含層への影響が考えられたため立会調査を実施した。

その結果、弥生～鎌倉時代にかけての多量の遺物が出土した。特に、本学で二例目の墨書き器が出土し、大学会館新館に伴う調査で出土した石製錦帯、綠釉陶器、畿内系瓦器、木簡などと共に農村集落とは異なる国家機構と連結した機関・施設の存在を予想させる。

(河村・森田)

遺物 (Fig. 40, PL. 22-(2))

弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓が出土した。なお、須恵器には墨書きを持つものがある。

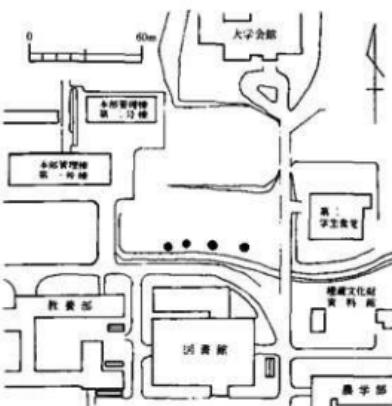


Fig. 39 調査区位置図

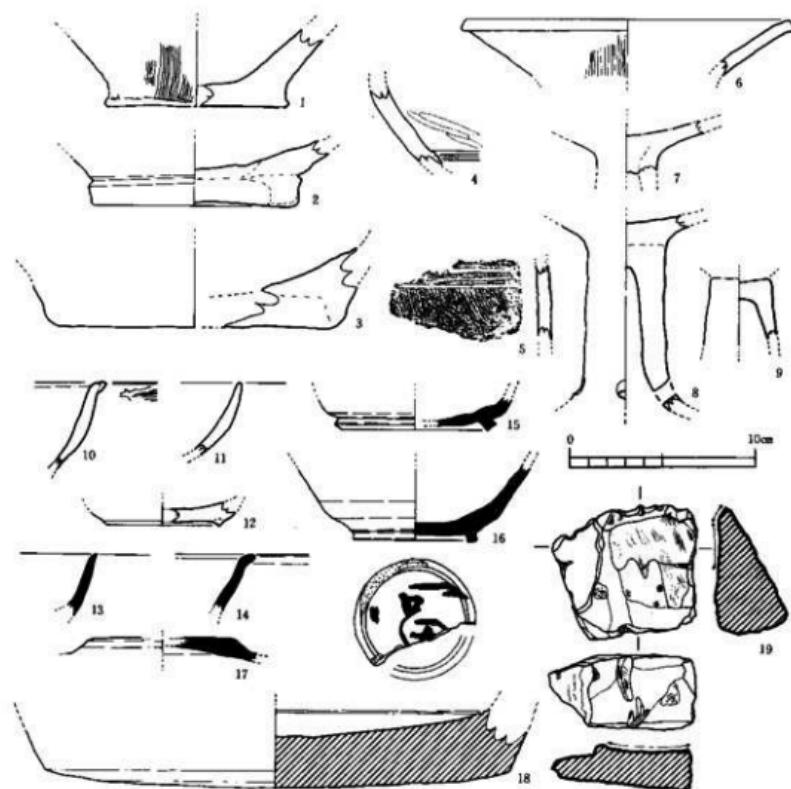


Fig. 40 出土遺物実測図

弥生土器（1～9） 今回出土遺物の中で最も量が多い。1は壺の底部。刷毛の始点が顕著に残る。2・3は壺の底部で、2は体部と底部との境にヘラによる太い沈線状の段をもつもの、3は大形で内面にわずかに刷毛目を残す。いずれも、円板状の粘土を貼り付けたどっしりした平底を成形する。4は壺肩部で、削り出しによる突帯状の段を有し、その上に少なくとも2条の沈線を施す。5は壺肩部で、縦方向の刷毛調整の後少なくとも4本の沈線を施す。6～9は高壺。6は口縁端部に平らな面を作っており、壺の可能性もある。

## 古田構内の立会調査

Tab. 7 出土遺物観察表

土 器						
No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色 調	胎 七	焼成
1	弥生土器 盆	* 9.8	(4.2)	淡黃色(2.5Y R8/3)	0.3cm程度の砂粒含む	良好
2	弥生土器 盆	* 10.8	(3.6)	灰黃褐色(10Y R6/2)	0.3cm程度の砂粒含む	良好
3	弥生土器 盆	* 14.4	(4.3)	にぼい黃褐色(10Y R6/4)	0.4cm程度の砂粒を多く含む	やや軟化が著しい
4	弥生土器 盆	—	(4.2)	外・にぼい褐色(5Y R5/3) 内・灰褐色(5Y R6/2)	砂粒を若干含む	良好
5	弥生土器 壺	—	(4.1)	外・灰褐色(7.5Y R6/2) 内・明灰褐色(7.5Y R7/2)	0.3cm程度の砂粒を多く含む	良好
6	弥生土器 高環	17.4	(3.0)	外・にぼい褐色(7.5Y R7/4) 内・灰白色(7.5Y R8/2)	0.1cm程度の砂粒含む	良好
7	弥生土器 高环	—	(3.0)	浅黃褐色(7.5Y R8/3)	砂粒を多量に含む	良好
8	弥生土器 高环	—	(10.5)	浅黃褐色(7.5Y R8/4)	0.3cm程度の砂粒含む	良好
9	弥生土器 高环	—	(3.6)	灰白色(10Y R8/1)	砂粒若干含む	良好
10	土師器 壺	—	(4.6)	外・灰白色(10Y R7/1) 内・褐灰色(10Y R4/1)	砂粒を若干含む	良好
11	土師器 壺	—	(3.9)	外・灰白色(10Y R8/2) 内・棕色(2.5Y R7/6)	精 良	良好
12	須恵器 壺	* 6.0	(1.2)	外・灰白色(7.5Y R8/2) 内・浅黃褐色(7.5Y R8/3)	精 良	良好
13	須恵器 壺	—	(3.5)	灰白色(2.5Y 8/2)	砂粒を若干含む	良好
14	須恵器 壺	—	(3.1)	灰白色(5Y 7/1)	砂粒を若干含む	良好
15	須恵器 壺	* 7.8	(1.8)	外・灰白色(2.5Y 8/1) 内・灰白色(2.5Y 8/2)	砂粒を若干含む	良好
16	須恵器 壺	* 6.6	(4.2)	灰色(7.5Y 6/1)	砂粒を若干含む	やや軟化
17	須恵器 盆	—	(1.2)	灰白色(N7/1)	砂粒を若干含む	良好

石 器						
No.	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質
18	石錐	—	—	3.0	(1132)	滑石片岩
19	砾石	(6.8)	7.6	4.0	(224)	結晶凝灰岩

( ) は現存値

7は円板充填法による壺と脚の接合部。充填円板の下面に指痕が残る。8・9は貼り付け法により壺と脚を接合するもので、8は脚の周囲を四分割した位置にそれぞれ透かし孔をもつが、四方のうち三方に穿孔するにとどまる。9は内面上部に爪痕が残る。

上師器(10~12) 10は塊か鉢になるものと思われる。内面は黒色で刷毛の後力強くナデられ器面が密になるが、口縁は外面に折り返して乱雑にナデつけ、その下に横刷毛が残る。11は壺または高環の口縁部でナデ仕上げ。12は断面三角形の小さな高台をもつ壺。

須恵器（13～17） 13・14は壇口縁部。13は焼成良好だが炭素の吸着が見られない。14は端部がややきつく外反し、胎土が粗いのが特徴。15・16は壇底部。15は底部回転ヘラ切りの後内側の接合する高台を付すもので、13同様炭素を吸着しない。接合点はないが13と同一個体と思われる。16はほぼ直立するやや小形の高台をもつもので、外底に「富」の墨書を有する。墨書は一部高台にもかかっている。底部は回転ヘラ切り後ナデ、高台の貼り付けはやや粗雑。内底は見込み部分のみ色調が暗く、重ね焼きのためかと思われる。14と同一個体であろう。17は蓋で撮みを欠損する。天井部外面は回転ヘラ切り後粗いナデ。

石鍋（18） 器壁の厚い大型品。破損のしかたからみて平面形態が梢円形の可能性があり、長径と思われる部分で測囲したが、もし正円形ならば底径35cmほどにも大きくなる。器表・器肉とも無数の小さな孔があいており、鍋としての機能を果たし得るかどうか疑問であるが、内外面ともよく研磨し、内底見込みに沈線状の段を有し、外面全体に煤の付着するところから、石鍋と判断した。滑石片岩製。

砥石（19） ほぼ三角柱状。主研砥面は一面で、その裏面は未使用だが、他の3面には鋭利な刃先痕が残る。研砥により厚さを減じた部分で折損したものと思われる。原材は砂粒が粗く、荒砥用であろう。結晶凝灰岩製。

鉄滓（PL. 22-（2）20） 最大長4.5cm、最大幅3.9cm、最大厚2.8cm、重さ35g。体積の割に軽く、鉄分の残存率はかなり低くなっているものと思われる。

以上、包含層出土のため遺物にはかなりの時期幅がある。弥生土器のうち壺・壺は前期の特徴を有し、高环は後期のものと思われる。土師器も古墳時代のものから12Cに下るものまで幅広い。須恵器はほぼ余良時代末～平安時代初のもので、特に墨書のあるものは誠字唇の存在を裏付け、官僚機構の一端を担う施設が近隣に所在したという可能性を一層高めるものとなった。

（杉 原）

〔注〕

- 1) 人文学部八木充教授に見ていただいたところ、「富」（「富」の異体字）にまちがいないとのこと。さらに、かなりの達筆で、筆跡・字形に地方性を感じられないところから、おそらくは中央官僚・貴族の手になるものであろう、との興味深い御教示を得た。
- 2) 蒜甕が厚く、多孔質であるなど、かなり異型のものであるが、同様の特徴をもつものが熊本県上益城郡大分町大矢野原北猪見で採集されている。ただし、内面の仕上げ研磨が施されていないという相違がある。  
福田正文・坂田和弘・島津義昭「大矢野原の石鍋」（『肥後考古』第4号、1983年）。
- 3) 森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相—吉田遺跡をめぐる諸問題—」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1985年）。

## 7 交通標識設置に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 N-14, O-18, J-20区

調査期間 昭和60年12月23日

調査方法 工事施工事における立会調査

調査面積 約 3 m<sup>2</sup>

調査結果 工事は車両通行規制区域を表示するための交通標識を吉田構内 7ヶ所に設置するものである。しかし、工事による掘削深度は約30~60cmと比較的浅いため、工事地域周辺で同様の掘削規模範囲内で埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのある地域と工事地域周辺の地下の状況が不明瞭な地域を選定して立会調査を実施した。調査地域は第2学生食堂周辺地域（第1地点）、理学部R1棟周辺地域（第2地点）、および「遺跡保存地区」周辺地域（第3地点）の計3ヶ所である。

第1地点は深さ約50cmの掘削であった。現地表下約45cmまでは腐蝕土および構内造成時の置土（擾乱土）の堆積がみられたが、それ以下は、赤橙褐色土の山土が観察された。第2学生食堂北方の崖面での土層堆積状況を観察すると、地表下約30cmでこの山土が認められ、下位は岩盤となっている。また、当該地域はこの北方地域と比べ約2m低くなっていることから、北から延びる低丘陵が段階状に削平・造成されていることが看取され、埋蔵文化財遺存の可能性は極めて低い。

第2地点では現地表下約60cmまでの掘削を行うものである。約50cm掘り下げた段階で灰黄褐色粘質土の堆積が見られたが、遺物は包含していなかった。

第3地点では工事基底面である現地表下約35cmまで遺構・遺物の有無を観察したが、周辺地域における過去の調査結果から遺物包含層ないし遺構はさらに下位に埋存しているものと推察される。

（河 村）



Fig. 41 調査区位置図

## 8 農学部解剖実習棟周辺（第1地点）および附属家畜病院（第2地点） 環境整備に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 P・Q-17・18区, S・T-19区

調査期間 昭和61年2月10日（第1地点）、24日（第2地点）

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約16m<sup>2</sup>（第1地点）、270m<sup>2</sup>（第2地点）

調査結果 第1地点周辺地域は道路を隔てた東側の飼料園に比べ現地表が約5m近く低くなっている。昭和54年度に本地域の南側で実施した農学部動物舎新営に伴う試掘調査で厚さ約60～110cmの置土（擾乱土）直下が黄褐色疊混じり粘質土の地山で、遺物包含層、遺構は検出されなかった。また、本節で述べた農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査における地山面との標高差から推しても、東側からのびる丘陵がこの地域付近で階段状にカットされていることが看取される。第1地点での工事内容は解剖実習棟南東の空閑地にコンクリート舗装、U字溝、污水樹、犬舎育舎および鉄製フェンス等の各種施設を新営するものであったが、以上の所見により立会調査にとどめた。

その結果、工事地域全域について現地表下厚さ約15～20cmの擾乱土直下に黄褐色疊混じり粘質土の地山が検出されたが遺物包含層、遺構は認められず、当該地域では過去に埋蔵文化財が遺存していたとしても、やはり既に消失している可能性が高い。

第2地点は、家畜病院と果樹園間の現地表を約10cm掘削し、アスファルト舗装をするものである。その結果、約5～7cmの掘削で赤黄褐色粘質土の地山が検出されたが顕著な遺物包含層、遺構は認められず、当該地域が北側の果樹園に比べ約1.5m低くなっていることから、家畜病院周辺は多少なりとも削平を受けているものと考えられる。



Fig. 42 調査区位置図

(河 村)

## 9 理学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 理学部構内 N-20・21区  
 調査期間 昭和61年2月10日  
 調査方法 工事施工時における立会調査  
 調査面積 約4m<sup>2</sup>

調査結果 人文学部および理学部大学院棟間に環境整備の一環として、藤棚の新営が計画された。調査は、藤棚支柱基礎部分を中心に土層の堆積状況、遺構、遺物包含層の有無を観察したが、工事基底面である現地表下約80~100cmまでは擾乱土であった。

周辺地域では、昭和53年度に人文学部校舎新営に伴い試掘調査、昭和58年度に理学部大学院校舎新営および付随工事に際して立会調査が実施されている。前者では、新営予定地内に設定した3本のトレッチによる調査が行なわれた。その結果、腐蝕土および構内造成時等の置土（擾乱土）下位に旧耕作土が認められ、その直下が黄橙（褐）色粘質土の地山であった。地山は、最も浅い箇所では現地表下約100cmで検出されたが、近世の柱穴若干が認められたにすぎなかった。後者でも遺構は検出されなかつたが、土層の堆積状態、地山の検出される深度には差異がみられず、当該地域周辺が本学移転前の水田造成の際、すでに大規模な削平を受けていることが推察される。また、東に向かうにつれて、この旧耕作土をも削平する構内造成が行なわれ、道路を隔てた東側の飼料園に比べ約5m近く階段状に低くなっていることから、現在飼料園となっている古墳時代から中世にかけての柱穴・土壙等が検出された丘陵は、少なくとも人文学部構内および理学部構内東・南部で大きく削平され、これらの地域では遺構の埋存する可能性は極めて低いものと考えられる。

(河 村)



Fig. 43 調査区位置図

## 第2節 小串構内の立会調査

### 1 医学部看護婦宿舎改修に伴う立会調査

調査地区 医学部構内 看護婦宿舎地域

調査期間 昭和60年12月3日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約20m<sup>2</sup>

調査結果 工事は第5章で述べた看護婦宿舎改修に付随するもので、その内容は看護婦宿舎の北側を中心とした地域に、東西にガス管、給排水管および排水樹を新規に埋設するものである。

工事による掘削深度は現地表面から前二者は約60cm、後者は約80cmであり、昭和58年度に実施した体育館新営に伴う試掘調査で検出された遺物包含層には達しない工事掘削規模である。しかし、同宿舎の所在するキャンパス北東端部ではこれまで埋蔵文化財に関する調査が全く行なわれておらず、その地下の状況および上記の遺物包含層の分布範囲が不明のままであった。このため、工事内容、規模等を勘案し、試掘調査に先だって事前に立会調査を実施したものである。

調査の結果、現地表面から約80cm掘削した段階でも、構内造成等による近年の置土（擾乱土）の堆積が認められたにとどまり、遺物包含層は検出されなかった。

したがって、当該地域における地下の状況は後日予定されている同宿舎建物部分の改修時に観察することとした。

（河 村）

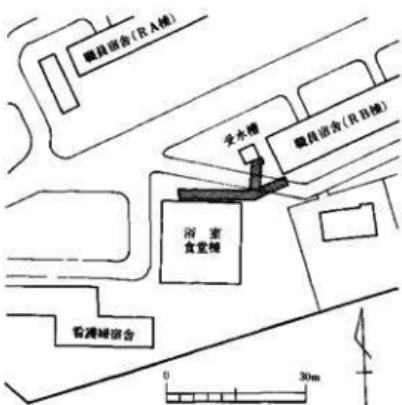


Fig. 44 調査区位置図

## 2 医学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 医学部構内 職員宿舎北・東地域

調査期間 昭和60年1月14日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約40m<sup>2</sup>

調査結果 工事内容は職員宿舎の南東端部および北縁部に沿ってスギ、クス、カイズカイブキ等54本を植樹するものであった。植樹に伴う掘削深度は現地表から約50~70cmで、前者では二箇所、後者では四箇所を選定して地下の状況を観察した。

南東端部では、約60cm掘り下げたが、職員宿舎造成時の化粧土である真砂土の堆積が見られたにとどまった。

北縁部では、現地表から東半部で約50cm、西半部で約60~70cmの掘削を行なった。東半部では南東端部同様、工事基底面まで真砂土の堆積が見られ、顕著な遺構、遺物は認められなかった。また、西半部では現地表から約30~50cmまで真砂土の堆積が見られ、その下位に近~現代の土器を含む暗青灰色粘質土が堆積する。職員宿舎北側では、幅約1.8mの道路を隔てて幅約1.5mの小河川が東から西に向かって流れしており、暗青灰色粘質土は改修以前のこの小河川の埋積土である可能性がある。

いずれにしても、現地表下70cm前後の掘削では擾乱土ないしは新しい時期の堆積土が検出されるのみで、顕著な埋蔵文化財は認められず、地下の状況を把握するまではいたらなかった。

(河 村)



Fig. 45 調査区位置図

### 第3節 常盤構内の立会調査

#### 1 工学部尾山宿舎擁壁取設等に伴う立会調査

調査地区 工学部構内 尾山宿舎

調査期間 昭和60年10月18日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約65m<sup>2</sup>

調査結果 尾山宿舎は工学部キャンパス正門の南西約300mに位置する工学部職員合同宿舎である。昭和59年度、北東端での排水管布設に伴う立会調査の際、宿舎敷地より約2m高い北側の畠地の遺物包含層から中世の土師器を採取しており、同宿舎内での後世の削平状況から推して南半部に遺物包含層ないしは遺構の埋存する可能性が推察された。

今回の調査はその南端部、民有地との境界の崖面での擁壁削溝および鉄製フェンスの改修および新設に伴うものである。

東半部では、宿舎敷地の現地表下約30~40cmの擾乱土直下が岩盤となっており、地山が大きく削平を受けていた。しかし、西半部では約240cmまで擾乱土の堆積が見られ、この部分での地山の大きな削平は認められなかった。

したがって、同宿舎敷地の造成工事前の地形は南西部が谷になっていたことを考えあわせると、今後はこの南西部を中心とした地域での調査が必要となろう。 (河 村)

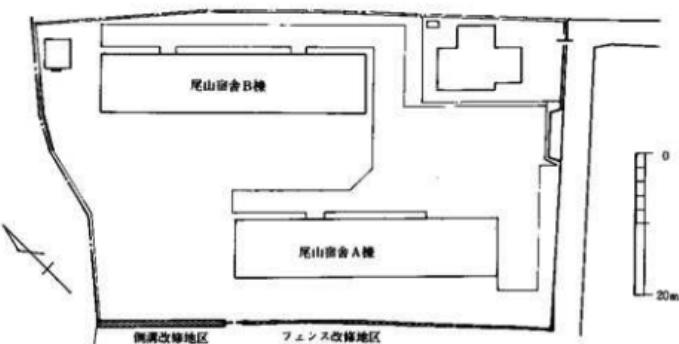


Fig. 46 調査区位図

## 2 工学部受水槽総改修に伴う立会調査

調査地区 工学部構内

調査期間 昭和61年1月27日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1.5m<sup>2</sup>

調査結果 調査地区は工学部キャンパスの北端部中央にあたる。同キャンパスでは昭和58年度に校舎および図書館増築にともない二地点で試掘調査が行なわれているが、両地点とも構内造成等による後世の削平が著しく、南半部では過去に遺構、遺物包含層が存在していたとしてもすでに消滅してしまっている可能性が高いものと判断された。

しかし、北半部、とりわけ北端中央部付近では、北および北西に向かって開く小規模な谷が存在しており、現在の野球場の大部分はこの谷を埋積したものであるという。したがって、今回の調査地域付近はその谷の貫入する小丘陵の頂部あるいは基部ないしは谷頭付近にあたるものと推察された。

調査は、新設される受水槽タンク約60m<sup>2</sup>の基礎部分のうち三箇所について、工事基底面である現地表下約60cmまで土層の堆積状況を観察した。その結果、約10~15cmの腐触土の下位に淡灰色の旧耕土混じりの置土（機乱土）が約25~50cm堆積しており、その直下が明橙色土の地山となっていた。また、

遺物も近代以降の土器が若干出土

したのみで、近世以前に遭るもの  
は認められなかった。

したがって、この地点は谷頭部分にあたるものではなく、丘陵にあたる旧地形の上層がすでに多少なりとも削平されている可能性が高いものと考えられる。

(河 村)

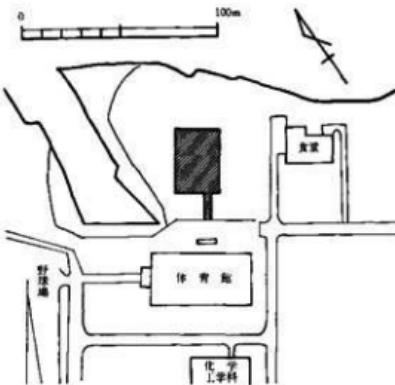


Fig. 47 調査区位置図

## 第4節 龜山構内の立会調査

### 1 教育学部附属山口小学校散水栓改修に伴う立会調査

調査地区 教育学部附属山口小学校構内

調査期間 昭和60年9月5日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1m<sup>2</sup>

調査結果 調査地区は小学校敷地の東端部付近、低学年棟の所在する地域である。

昭和58年度の調査で、同校敷地の西半部にあたる運動場から弥生時代終末～古墳時代初期の溝状遺構および古墳時代中期の竪をもつ堅穴住居跡が検出され、新たに「白石遺跡」として周知されるにいたった。しかし、小学校の校舎棟が存在する東半部は、この運動場から階段状に約1.8m高所に位置しており、遺跡の分布範囲や旧地形の把握が急務であったため、工事規模に応じて立会調査を実施した。

工事地点は二箇所で、いずれも現地表下約40cmまでを掘削するものであったが、両地点とも造成時等の置土（擾乱土）の堆積が見られたのみで、遺物包含層、遺構は検出されなかった。

したがって、ほぼ平坦に造成されている小学校建物敷地部分の東側は、北および西側に

所在する丘陵の張出し部分が、近年の改変を受けている地域にあたるものと考えられ、すでに地山が多少なりとも削平を受けているものと推察されるが、即断はできず、今後の調査による資料の蓄積が望まれる。

(河 村)



Fig. 48 調査区位置図

## 亀山構内の立会調査

### 2 教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査

調査地区 教育学部附属山口中学校構内

調査期間 昭和60年9月25日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約2m<sup>2</sup>

調査結果 本学での施設整備の進展に加え、あいつぐ開発によって吉田地区以外の各地区周辺でも新たな遺跡が周知されるにおよび、本学では昭和58年度以降各地区における埋蔵文化財の包蔵有無確認調査を実施している。附属山口中学校における試掘調査によって検出された鳥形木製品の出土した弥生時代終末～古墳時代初頭の溝状遺構および古墳時代中期の窪をもつ竪穴住居跡はその好例といえ、当中学校は最短距離にして南方約200mに位置し、付近には弥生時代終末～古墳時代初頭の茶臼山石棺群が所在する。

工事はバレーボールコート支柱基礎部分2ヵ所を約80cm掘削するものであったが、掘削範囲内は黄褐色粘質土、青灰色粘質土の地山がブロック状に混入した搅乱土が認められた。当地区における調査資料が欠如しているため即断はできないが、同構内ないしは周辺に比較的安定した地山をもつ地域と、谷ないしは河川などのやや湿润化した地域が埋存しているものと推察され、今後の調査で遺物包含層、遺構が検出される可能性がある。（河村）

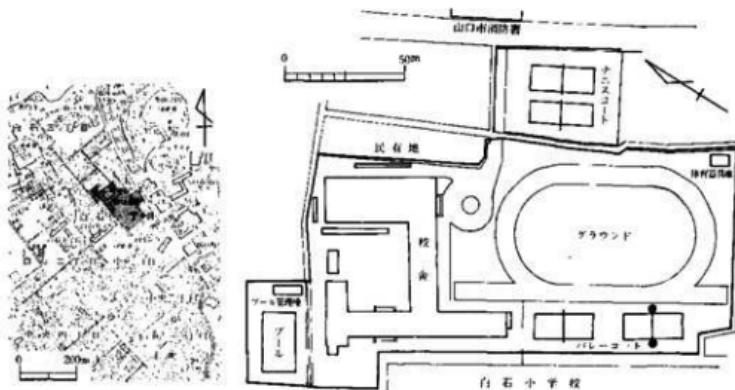


Fig. 49 調査区位置図

## 3 教育学部附属幼稚園環境整備に伴う立会調査

調査地区 教育学部附属幼稚園構内  
 調査期間 昭和60年3月4日  
 調査方法 工事施工時における立会調査  
 調査面積 約1m<sup>2</sup>

調査結果 教育学部附属山口小学校・幼稚園構内では、昭和58年度に試掘調査が実施され、鳥形木製品の出土した弥生時代終末～古墳時代初頭の溝状遺構や、5世紀前半に遡る可能性のある竈をもつ竪穴住居跡が検出された。これらの各遺構は、小学校校舎棟の存在する平坦面より約1.5m低い運動場部分で検出されたもので、同構内の西部に位置する。また、各トレンチの所見から、旧地形は北から南へ、また、東から西へ下降していることが推察され、同構内の東部にあたる小学校舎および幼稚園舎敷地部分における埋蔵文化財の有無確認の調査が必要とされた。

本年度にいたって、同構内の北東端部にあたる幼稚園舎敷地部分で樹木の移植が計画された。当該地域周辺では、過去に調査は全く行なわれていないため工事内容をふまえて立会調査を実施した。

工事による掘削は現地表下約80cmまでであったが、腐蝕土および構内造成地等の置土（擾乱土）の堆積が見られたのみで、顕著な遺構、遺物は確認できなかった。

ただし、植栽地域は旧山口大学宿舎棟の存在地域であったため擾乱が著しく、この擾乱土の厚さが、幼稚園舎敷地部分全面での今後の諸工事にたいして、埋蔵文化財に影響のない表土の厚さを代表するものではない。

(河 村)



Fig. 50 調査区位置図

## 第5節 光構内の立会調査

### 教育学部附属光中学校外灯改修に伴う立会調査

調査地区 教育学部附属光中学校構内

調査期間 昭和60年11月15日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約 1 m<sup>2</sup>

調査結果 教育学部附属光小・中学校構内は「御手洗遺跡」として周知されており、特に、今回の工事地域に近い中学校体育館敷地部分では縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器等が遺物包含層から出土している。

工事内容は外灯改修に伴いキャンバス北東部の2ヵ所について、体育館北側部分では幅約30cm、長さ約10m、グラウンド北縁中央部分では同じく幅約30cm、長さ約16mの範囲を現地表面から約50cm掘削して配管を埋設するものである。調査は前者に幅約0.3m、長さ約0.8m、後者に幅約0.3m、長さ約1.5mの手掘りによるトレンチを設定して行なった。

その結果、両トレンチとも遺物包含層、地山は検出されず、工事掘削深度内は擾乱土の堆積であった。しかし、前者では現地表下約10cmに堆積する暗褐色土から中世の土師器一点が出土した。

(河 村)

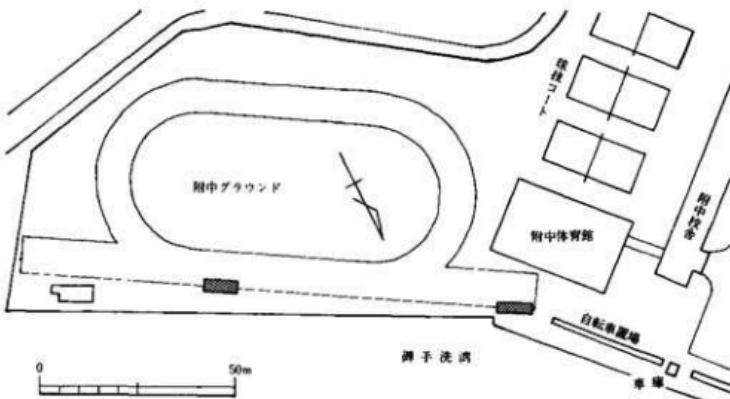


Fig. 51 調査区位置図

# 山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

河 村 吉 行

## 1 調査の経過

「遺跡保存地区」は吉田キャンパス南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置し、約2000m<sup>2</sup>の地域がその指定地となっている。

本学が統合移転を開始した昭和41年、造成工事中に弥生土器、土師器、須恵器などの遺物の出土をみたことが契機となって本学での埋蔵文化財の調査・研究が開始された。当初、主として実施された遺跡の範囲確認調査の結果、本学内ほぼ全域に集落遺跡が分布していることが確認され、山口大学構内吉田遺跡として周知されるに至った。

しかし、統合移転工事計画の遂行に伴い埋蔵文化財の保護の重要性が指摘されるに及んで、昭和42年に学長を團長に、小野忠熙氏を中心とした学内外の関連分野の専門家によって吉田遺跡調査団が学内組織として発足した。吉田遺跡調査団は大学構内をI~Vの5地区に区分し、各地区において、さらに詳細な試掘調査によって遺構のひろがりと遺跡の性格の把握に努めるとともに、工事計画に従って順次発掘調査を実施した。<sup>11)</sup>

そのうち第Ⅲ地区は、キャンバス南部の現在はグラウンドおよび野球場となっている南北約200m、東西約500mの区域にあたるが、「遺跡保存地区」はその第Ⅲ地区の北区に包括される地域である。

統合移転に伴う諸工事が進むなか、昭和41年7月、第Ⅲ地区に近接する第一学生食堂の新営工事中に弥生時代中期の土器が出土した。これを受け、グラウンド造成範囲が明らかになった昭和42年1月から2月にかけて、遺構・遺物包含層の埋存状況とその密度および分布範囲確認のため試掘調査を実施した。その結果、



Fig. 53 調査区位置図

削平により平坦化されるラグビー場およびサッカー場の地域で、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とした竪穴住居跡、縄文時代に遡る可能性のある河川跡などが検出された。この試掘調査に基づいて関係部局と協議した結果、削平が遺構面にまで及ぶ南門付近の地域約1100m<sup>2</sup>（南区）、および第一学生食堂とその南側の地域約4500m<sup>2</sup>（北区）において、昭和42年3月から発掘調査を実施することとなった。

このうち北区では、弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡が多数検出された。なかでも北区の北半部では、弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡が県内でも有数の分布を示していることが明らかとなった。住居形式・構造の変遷、集落形態・範囲の変遷が時代を追って学習できる、学術・研究上良好な遺構分布地域であることから、約2000m<sup>2</sup>が「遺跡保存地区」として現状保存された。

しかしその後、調査団が統合移転諸工事への対応に忙殺され、この地区的調査は数棟の住居跡について行なわれたにすぎず、全域の調査は容易には実施できない状況であった。

当埋蔵文化財資料館は昭和53年に学内共同利用施設として設立され、学内の調査を行なってきた。昭和56年度に「遺跡保存地区」のすぐ北側で教育学部校舎増築に伴い発掘調査を実施したところ、弥生時代中期後半～古墳時代前期の竪穴住居跡4棟が検出され、各住居が「遺跡保存地区」と一連の集落を構成していることが確認された。これを受け埋蔵文化財資料館運営委員会は、この4棟を含めて「遺跡保存地区」集落として完結させ、一括保存することが望ましいとの結論に達し、関係部局に上申したが、教育学部の将来構想、上記建物の機能および建築施工上の問題等から、その設計変更は困難であるとの結論に至った。その反面、「遺跡保存地区」の重要性が再認識され、構内他地域および周辺地域の同時期集落との比較・検討、資料の蓄積を進めることによって、その後の調査のモデルとなるのが確実なこと、また大学構内に存在する一大集落遺跡としての整備を必要とするなどから、昭和57年度以降3ヵ年にわたり発掘調査を実施することとなった。

## 2 調査の概要

調査は昭和57年度から3ヵ年計画で実施する予定であったが、昭和58年度および60年度は大学構内の施設整備に伴う緊急調査への対応が優先したため、調査は57年度（第1次調査）、59年度（第2次調査）、60年度（第3次調査）、61年度（第4次調査）の計4ヵ年にわたることとなった。

現在資料整理中であるが、保存地区における4年次の調査の概要を以下に記することに

## 調査の概要

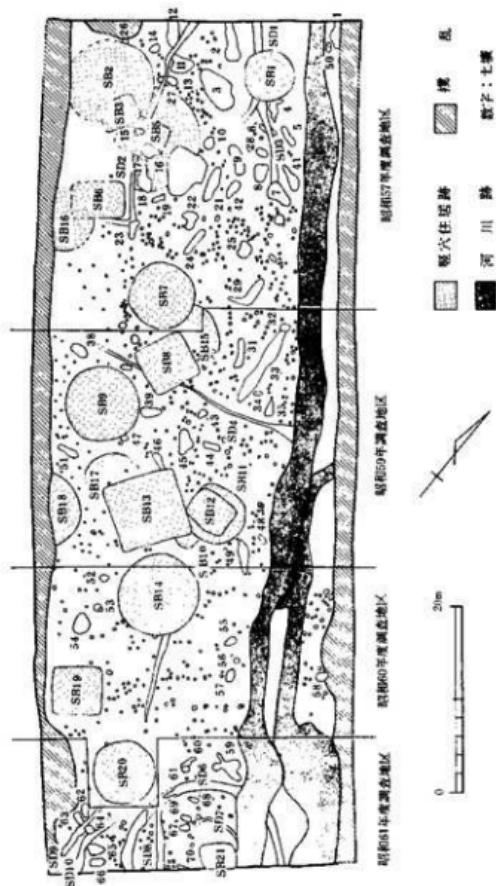


Fig.54 遺跡保存地区遺構配置図

する。

検出した竪穴住居は弥生時代中期前半から古墳時代にかけての21棟で、弥生時代中期後半を主体とする。保存地区では中期前半～中頃、中期後半、後期前半、後期終末、古墳時代前期の、少なくとも五時期の竪穴住居跡が営まれていたことになる。中期後半の竪穴住居には床面積10m<sup>2</sup>強のもの、30m<sup>2</sup>前後のもののほかに、60m<sup>2</sup>を超えるものの三種があるが、概して大形のものが多い。

61年度に調査した保存地区南端部では、径18mの弧状に巡る溝の内部で、方形に近い平面形態をもつ中期後半の住居跡を検出した。環濠をもつ住居群の一部と考えられ、環濠から九州系の須玖Ⅱ式の壺と周防を中心出土する口縁部を下垂させる壺と共に伴しており興味深い。59年度に調査した古墳時代前期の住居跡のなかには、火災に遭い住居の桁材および垂木がそのまま焼け落ちた状態で検出されたものがあり、住居の上屋を想定する上で貴重な資料となった。また全年度において調査区東部を南から北へ貫流する古墳時代後期以降の河川跡を検出したが、この時期の住居は検出されておらず、周辺での今後の調査が期待される。

先に述べたように保存地区では計4次の調査を実施したが、今回は資料整理の完了した昭和57年度の調査成果を報告することにする。

### 3 昭和57年度の調査

#### 〔1〕 遺構・遺物

##### 第1号竪穴住居跡 (Fig. 55, PL. 26-(1))

調査区北端部で検出した弥生時代中期後半の住居跡で、中央部南寄りを南北に第1号溝によって切られている。第4号土壤との切り合い関係は不明である。平面形態は円形で上面径540cm、床面積19.0m<sup>2</sup>の規模をもつ。壁高は検出面から26cmである。主柱穴は6本で、西側3本は周壁に近接して配置されている。床面中央部には径約95cm、深さ17cmの円形の炉跡が造出される。壁溝は認められない。床面標高は約19.00mである。

##### 出土遺物 (Fig. 57-1, PL. 28(3)-1)

##### 甕形土器

やや大きく開く口縁部は肥厚し、端部内面は跳ね上げ状を呈する。内外面とも横ナデ仕上げ。

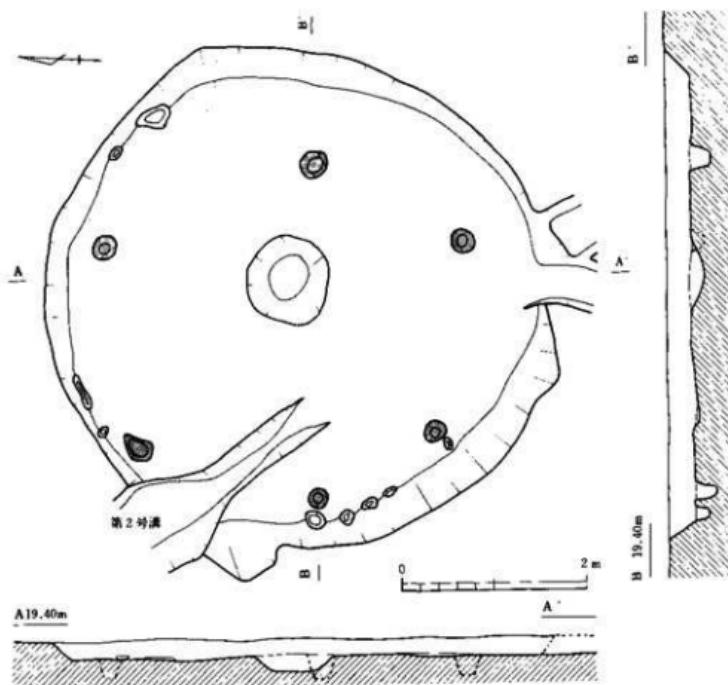


Fig. 55 第1号竪穴住居跡実測図

## 第2号竪穴住居跡 (Fig. 56, PL. 26-(2))

調査区の南西端で検出された弥生時代中期後半の住居跡で、第4号竪穴住居跡を切り、第3号竪穴住居跡、第26号土壙および第2号溝に切られている。平面形態は円形になるものと思われ、上面径推定約 880cm、床面積推定53.8m<sup>2</sup>の規模をもつ比較的大形の竪穴住居跡である。主柱穴は3本認められ、6～7本前後の主柱を有するものと推定される。また、周壁に沿って幅約25cm、床面からの深さ約6cmの壁溝が巡っている。第3号住居跡と切り合う付近には長さ86cm、幅約88cm、床面からの高さ約8cmの方形に近い階段状の張り出しが認められ、出入口としての機能をもつものかもしれない。床面標高は約18.75m。

なお、床面中央部付近には径約 104cm × 88+α cm、床面からの深さ26cmの炭化物の充填した方形に近い炉跡が造出されている。

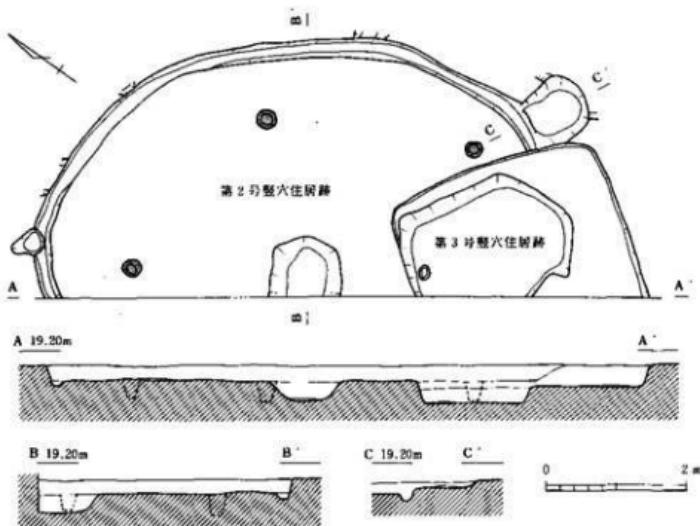


Fig. 56 第2・3号窯穴住跡実測図

出土遺物 (Fig. 57-2~13, PL. 28(3)-2~10・PL. 39-11~13)

#### 壺形土器 (2・3)

2はいわゆる錐先状口縁をもつもので、拡張部は下垂する。現資料には浮文等はみられない。内外面とも横ナデによる調整を施すが、拡張部下面はナデ切れておらず、綴刷毛目が残る。3は断面三角形の退化した低い2条の貼り付け突帯をもつ頸部で、内外面とも磨滅・剥落のため調整不明。

#### 壺形土器 (4~10)

4は口縁端部内面が跳ね上げ状になるもので、頸部外面への強い横ナデにより口縁端部はやや肥厚気味になる。口唇部はほぼ平坦。5・6は直線に近く「く」の字に外反するもので、5は内面頸部以下ナデ、他は横ナデ。6は口縁部内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。7~10は底部で、7・8・10は底径が小さく薄手である。9はやや上げ底がきつい。7・9・10は内、外底面ナデ、側面横ナデ仕上げであるが、8は胴部との境付近外面に綴刷毛目が施される。

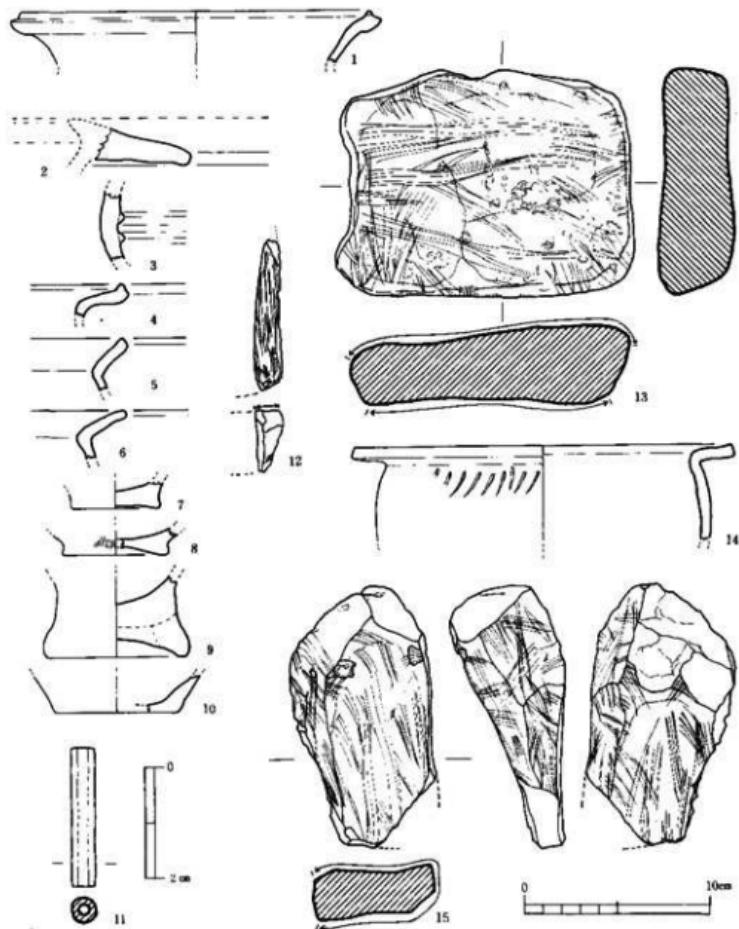


Fig. 57 第1・2・4・7号堅穴住居跡出土遺物実測図

管玉 (11)

両面穿孔で完形。やや風化が認められる。碧玉製。長さ 2.3cm、外径 4mm、内径は上端部 1.7mm、下端部 2.0mm、重量 0.40g。

砥石 (12)

欠損品。仕上げ砥と考えられるもので、現資料では正面のみに研砥面が認められ、右側面は素材のまま放置している。チャート製。重量29g。

台石 (13)

扁平な転運素材の作業台と考えられ、正裏両面に敲打による潰痕および粗い擦痕を残すが、正面左端部付近は積極的な擦過により窪み気味となる。珪化流紋岩製。重量1401g。

第3号竪穴住居跡 (Fig. 56, PL. 26-(2))

調査区北西端部で検出され、第2号住居跡を切っている。平面形態は方形ないしは長方形と考えられ、北辺 310cm、東辺 232cm以上の規模をもち、検出面からの深さは30cmである。床面に柱穴1個を検出したが、主柱穴数は不明である。壁溝は巡っておらず、炉跡ないし竈は検出していない。なお、床面東・北部にはベッド状の高まりが認められた。遺物は土師器破片若干が出土したのみで、明瞭な時期比定は困難であるが、保存地区での住居・土塙の分布状況から推して、古墳時代中期以降の住居は検出されていないことから、弥生時代後期～古墳時代前期に属する蓋然性が高い。

第4号竪穴住居跡 (Fig. 58, PL. 26-(2))

調査区北西部で検出された住居跡で、第2号住居跡、第20号土塙、第2号溝によって切られている。後世の削平により西半部は消失し、東半部において壁溝のみが残存する。平面形態は円形で、径約8m、床面積推定約50m<sup>2</sup>の規模をもつものと考えられる。主柱は3本検出したが、柱穴配置からみて8本柱の構造になるものと思われる。壁溝は幅30～45cm、深さ8～12cmで、炉跡は認められなかった。第2号住居跡との切り合い関係および出土遺物から、弥生時代中期前半～中頃のものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 57-14, PL. 28(3)-14)

壺形土器

水平に近く強く折れ曲がる長めの口縁部をもち、頸部下位外面にはヘラによる「ノ」の字状の刺突文が巡る。口縁部内外面、頸部外面横ナテ、他はナテ仕上げ。

第5・6号竪穴住居跡 (Fig. 58・59, PL. 26-(2))

第5号住居跡は調査区北西部、第4号住居跡の内部で検出され、壁溝の存在状況によつて住居跡として取り扱った。北東隅の壁溝のみが残存しており規模は不明。第2号溝、第16号土塙との重複関係が認められるが、切り合ひは不明。平面形態は方形ないしは長方形になろう。壁溝は幅30～50cm、深さは床面から約10cmで、炉跡ないし竈は未検出。

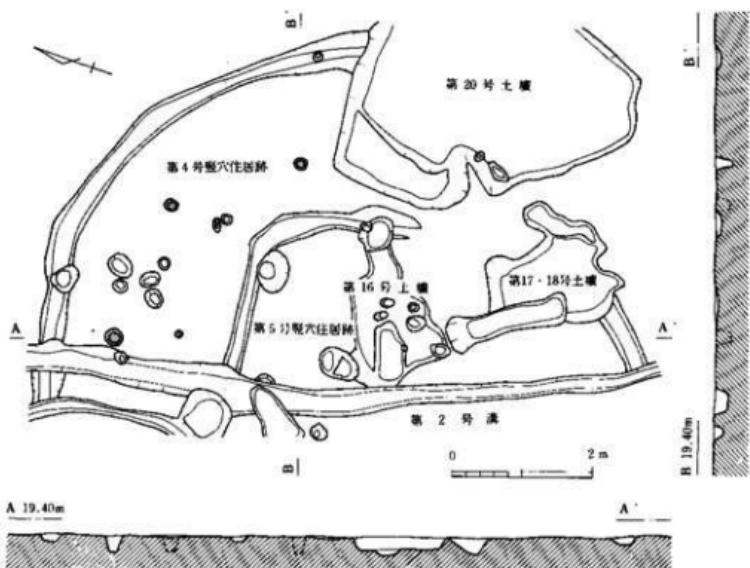


Fig. 58 第4・5号堅穴住居跡実測図

第6号住居跡は平面形態方形ないしは長方形と考えられるもので、第2号溝を切っている。東辺約3.8mの規模をもち、壁溝は認められない。床面標高は約18.90m。

5号・6号住居とも土師器若干が出土したのみで時期比定は困難であるが、他の遺構との切り合い関係から6号住居の方が新しい。方形系統の住居跡は56年度の教育学部校舎増築に伴う調査で後期後半のものが、また、「遺跡保存地区」および昭和58年度に実施したラグビー場フェンス改修に伴う調査で古墳時代前期のものが検出されており、5号・6号とも弥生時代後期後半～古墳時代前期の比較的近接した時期の住居跡であろう。

#### 第7号堅穴住居跡 (Fig. 60, PL. 26-(3))

調査区南西端部で検出した平面形態円形の住居跡で、壁溝のみが検出され周壁の立ち上がりは後世の削平により消失している。主柱は6本で比較的壁溝に近接して配置されている。床面積は34.8m<sup>2</sup>。壁溝は幅35～40cmで床面全周を巡っていたものと思われる。ほぼ円形に近い炉跡は床面西部に偏在し、上面径92cm×78cm、床面からの深さは約22cmである。出土遺物には弥生土器片若干があるが、平面形態が円形であることおよび保存地区での円

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

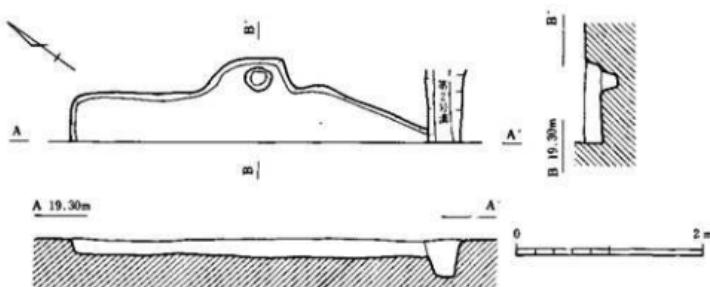


Fig. 59 第6号竪穴住居跡実測図

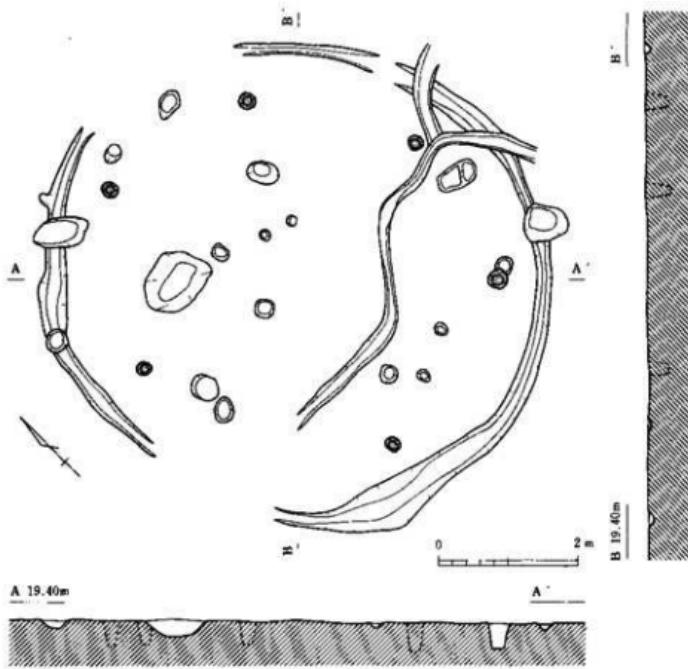


Fig. 60 第7号竪穴住居跡実測図

形住居の時期、分布状況から弥生時代中期のものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 57-15, PL. 39-15)

#### 砥石

正・裏・右側面を研砥面とする転擗素材の砥石で、正裏両面の使用頻度は高い。重量 612g。珪長岩 (フェルサイト) 製。

#### 土壙

33基検出した。北半部で分布頻度が高いが、土壙相互の切り合いは少なく、わずかに第13号土壙と第17号土壙、第17号土壙と第18号土壙が切り合う程度である。平面形態は不整形のものが大半を占め、長楕円形のものが混在する。後世の削平により残存状態はあまりよくないが、検出面での規模は長軸80cmと比較的小形の第28号土壙から長軸 565cmの第20号土壙まで様々であり、長軸 180~230cmおよび 300~350cm前後のものが多い。

また、各土壙からの出土遺物にも多寡があるが、おおむね竪穴住居と併行する弥生時代中期前半から古墳時代前期のものが多い。

第1号土壙 (Fig. 61)

調査区北端部、第1号住居跡の北に近接して営まれた不整形な土壙である。長軸 282cm 以上、短軸68cm以上、検出面からの深さ26cmの規模をもつ。底面は平坦で、東端部はテラス状の平坦面を有する。

出土遺物 (Fig. 62-16~18, PL. 28(3)-16~PL. 29-18)

#### 鉢形土器 (16)

小形で、張りの少ない胴部に短く緩やかに外反する口縁部をもち、端部は尖り気味に終わる。外面、胴部内面は磨滅・剥落のため調整不明、口縁部内面は細かい刷毛目仕上げ。

#### 壺形土器 (17・18)

17は「く」の字に短く外反する口縁部をもち、口縁端部はわずかに外反する。外面は口縁部下半にまでおよぶ右上がりのタタキがみられ、胴部内面は刷毛目仕上げ。18はほぼ丸底の底部で、底部内面はナデ仕上げを行なう。

遺物の出土量が極めて少なく、また器形を知りうるもののが鉢形土器に限られるため詳細な時期比定はできないが、壺は丸底の底部のものと、短く外反する口縁部をもち胴部外面に右上がりのタタキを有するものとが共存している。県内におけるタタキ目技法は畿内庄内式土器の影響をもって成立したと考えられていることから、これらの土器は庄内併行期、弥生後期終末~古墳時代初頭に位置づけることができよう。

山口大学古田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

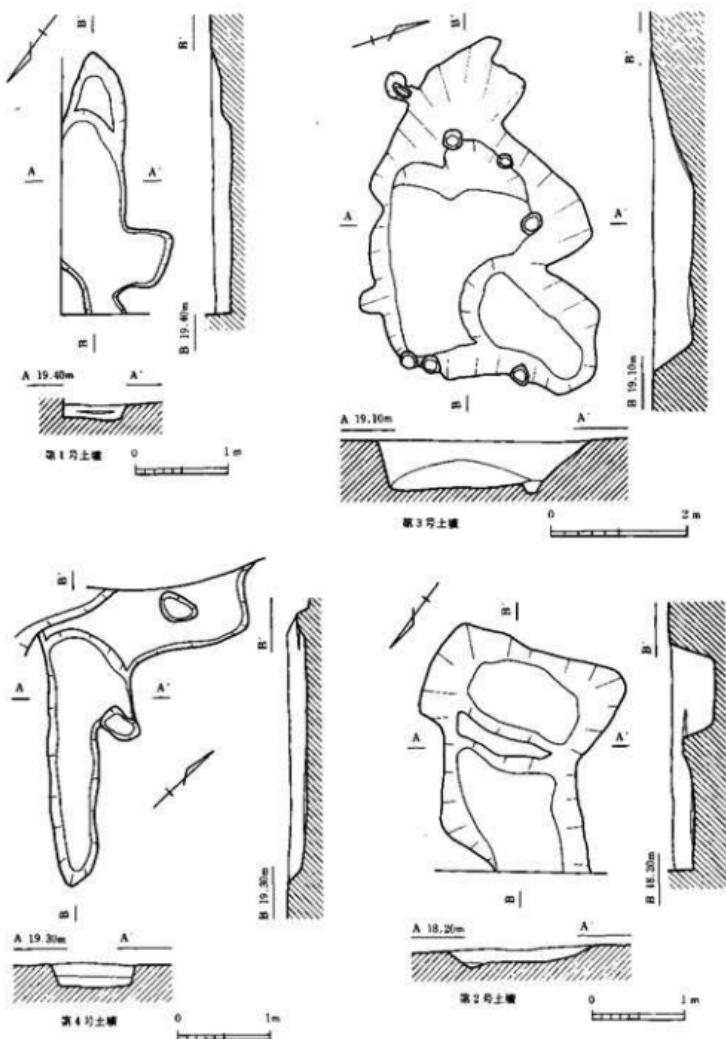


Fig. 61 第1～4号土壤実測図

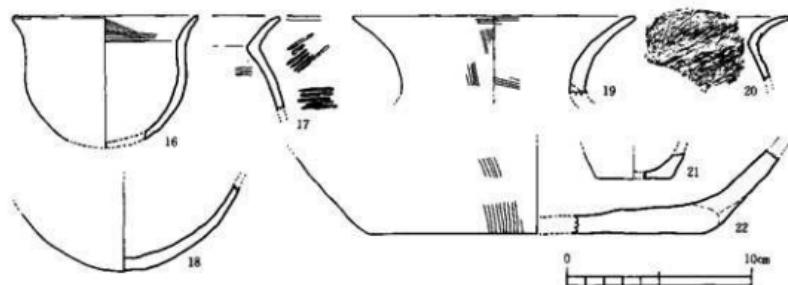


Fig. 62 第1・2号土壤出土遺物実測図

### 第2号土壤 (Fig. 61)

調査区北端部、第1号住居跡の西に近接して検出された平面形態長楕円形の土壤である。2基の土壤の重複の可能性があるが、切り合いが不明瞭であるため一括して取り扱った。長軸 248cm以上、短軸は東側部分 216cm、西側部分 174cmの規模をもち、検出面からの深さはそれぞれ48cm、19cmである。

#### 出土遺物 (Fig. 62-19~22, PL. 29-19~22)

##### 甕形土器 (19~21)

19は大きく外反する長い口縁部をもち、口縁端部はやや尖り気味に終わる。内外面とも刷毛目のち横ナデ仕上げ。20は短く外彎しながら「く」の字に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は尖る。外面は右上がりのタタキが口縁部下半まで施される。

##### 壺形土器 (22)

大形の壺の底部で平底。内面と外底面はナデ、他は継刷毛目仕上げ。

以上の土器は平底の壺の底部を含むことから、庄内併行期でも1号土壤よりは古い時期のものと考えられる。

### 第3号土壤 (Fig. 61)

調査区の北部、第1号住居跡の南、第2号土壤の東に近接して営まれた平面形態不整形の土壤である。長軸 471cm、短軸 312cmの規模をもち、遺跡保存地区では比較的大形の部類に入る。西壁は東へ緩やかに下降しており、最深部の東側で検出面からの深さ54cmを測る。出土遺物は弥生土器壺、甕、砥石など多量で、床面からわずかに浮いた状態で出土している。弥生時代後期前半。

出土遺物 (Fig. 63~67, PL. 29~23~PL. 32~89・PL. 39~90)

壺形土器 (23・24・32)

23は大きく開く口縁部をもち、わずかに肥厚する端部外面に1条の凹線風の沈線が巡る。頸部外面には幅広の低い粘土帯を貼付後、凹線を巡らし突帯状に仕上げている。外面とも風化のため調整不明。24は複合口縁となるもので、頸部から短く「く」の字に外反し、さらに内上方へ短く直線的に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部の器壁は薄く、端部は平坦。胴部の張りは強い。口縁部、頸部外面横ナデ、胴部内面粗いナデ、外面風化のため調整不明。

壺形土器 (25~31・33~89)

口縁部が内面に稜をもたず短く外反するもの (25~29・31・35・64・67・68) や逆「L」字状に強く外反するもの (61・62) もあるが、主体を占めるのは「く」の字状に外反するものである。短く緩やかに外反するものには、端部外面に1~2条の凹線風の沈線が巡るもの (25~27・35) がある。概して器壁が厚く、31を見る限り長胴で胴部最大径は中位より上にあり口径を上回る。

25は口縁端部が肥厚し、内外面横ナデ仕上げ。26は胴部の張りが強く口縁部は外縁気味に外反する。口縁部、頸部外面横ナデ、胴部外面ナデ仕上げ。35は口縁端部を内上方へ拡張し、端部外面に2条の凹線風の沈線が巡る。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ヘラ削りを行なうが、外面は風化のため調整不明。31は胴部と同じ壁厚で口縁部にいたる。口縁部、頸部外面横ナデ、胴部外面粗い継縫毛目、内面粗いナデ仕上げを行なう。28・29は口縁部が直線的に外反する。いずれも口縁部内外面横ナデ。胴部は28は内面ナデ、外面風化のため調整不明。29は内外面風化のため調整不明。56・57は口縁端部が肥厚する。いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部外面ナデ仕上げ。64・67は端部外面に粗い横ナデが施されており、口縁部内外面横ナデ、胴部外面ナデ仕上げ。68は胴部最大径が口径に近く、口縁端部はやや丸みをおびる。

逆「L」字状に外反するものは口縁部が直線的に強く屈曲し、頸部内面に明瞭な稜をもたず屈曲し口縁端部がほぼ平坦なもの (61・62) と、短く屈曲し肥厚する口縁端部外面が窪むもの (48) とがある。61は口縁部、頸部外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため調整不明。62は内外面とも横ナデで、口縁部内面は強い横ナデによりやや窪み気味となる。いずれも中期的様相をおびる。48は口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、外面風化のため調整不明。

口縁部が「く」の字に外反するものは、直線的に開くもの（37・47・49・58・60・65・66・69～74）が主体を占め、内彎気味に開くもの（30・59）、外彎気味に開くもの（75）もある。

37は張りの弱い胸部に強く屈曲する口縁部をもち、口縁端部は横ナデにより窪む。口縁部内外面横ナデ、胸部内面ナデ、外面風化のため不明。頸部外面はヘラによる押圧を加えている。38は口縁部がわずかに外彎気味に開き、やや肥厚する端部外面は横ナデにより窪む。口縁部内外面横ナデ、胸部内面ナデ、外面風化のため不明。39・50・51は胸部の張りがほとんどなく長胸で、口縁部の屈曲度が弱い。39は口縁部外面が窪み、50・51は平坦。いずれも口縁部内外面横ナデ、胸部内外面ナデ仕上げ。40～42・45は口縁部が肥厚して外反するもので、口縁端部外面が横ナデにより窪む。いずれも口縁部内外面横ナデで胸部外面ナデ仕上げを行なうが、41・42は粗い。胸部内面は40がヘラ削り、41がヘラ削りののちナデ、42がナデ仕上げを行なう。43・53は口縁部の屈曲がやや強く、43は内彎気味に外反し、頸部外面はヘラによる押圧を加えている。口縁部内外面横ナデ、胸部内外面ナデ仕上げ。53は口縁部内外面、胸部内面横ナデ、胸部外面ナデ仕上げ。44は口縁部が肥厚し、内外面とも横ナデ調整を行なう。46・47は器壁が薄く、46は口縁端部外面が横ナデにより窪む。47は口縁部が強く屈曲し、端部は跳ね上げ口縁となる。いずれも口縁部内外面横ナデ、胸部内外面ナデ仕上げ。52・72・73は薄手で、いずれも口縁部内外面横ナデ、胸部内外面ナデ仕上げを行なうが、72は口縁部内面横刷毛目ののち横ナデを行なう。53・54は頸部にしまりがなく、外彎気味に緩やかに外反する。54は口縁部内外面横ナデ、胸部内面ナデ、外面風化のため不明。55は口縁部内外面横ナデ、胸部内外面ナデ仕上げ。60は口縁端部付近で内彎して開くもので、口縁部内外面横ナデ、胸部内外面風化のため不明。65・66は小形品と思われ、口縁部を短く折り曲げる。65は口縁部内外面横ナデ、胸部内面ナデ、外面風化のため不明。66は口縁部内外面横ナデ、胸部外面継刷毛目仕上げ。69は口縁部外面継刷毛目ののち横ナデ、内面横ナデ、胸部外面刷毛目ののちナデ、内面はナデで仕上げる。74はやや張りの強い胸部にやや厚手の口縁部をもち、端部は尖り気味に終わる。外面は粗い継刷毛目仕上げを行なうが、口縁部、頸部はさらに横ナデを行なう。口縁部内面は横ナデ、胸部内面風化のため不明。

30・59は口縁部が内彎気味に「く」の字に外反するものである。30は粘土貼付により口縁端部を肥厚させ、外面にヘラによる凹線風の沈線が巡る。外面、口縁部内面横ナデ、胸部内面ナデ仕上げ。59は口縁部内外面横ナデ、胸部外面継刷毛目、内面ヘラ削りを行なう。

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

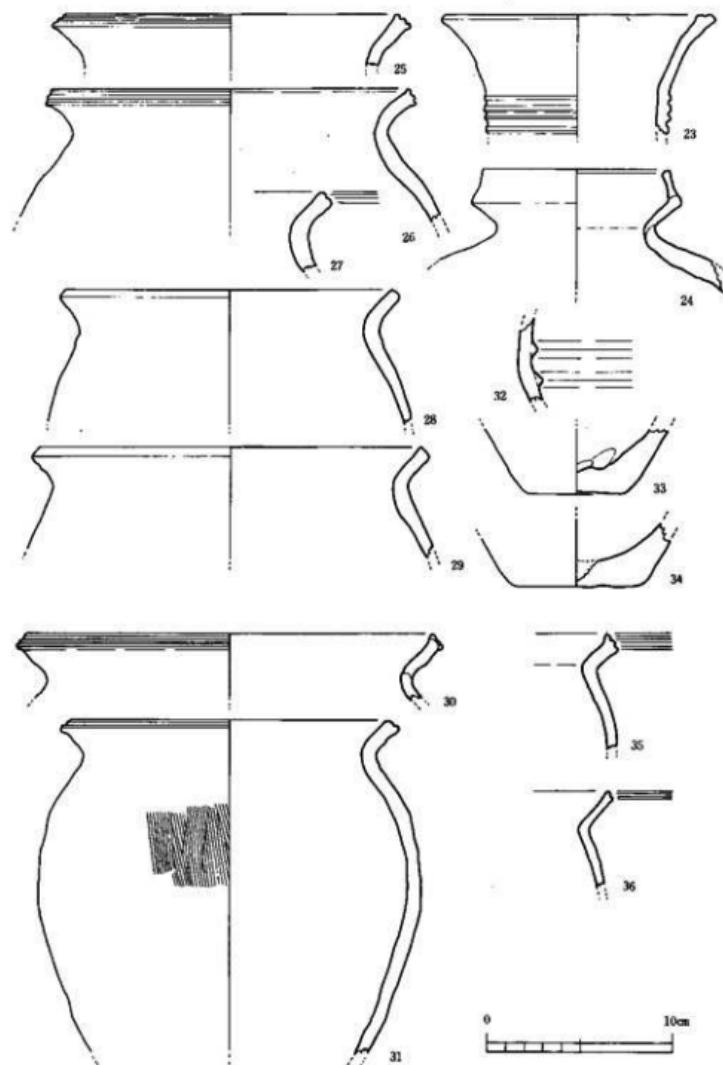


Fig. 63 第3号土塁出土遺物実測図(1)

昭和57年度の調査

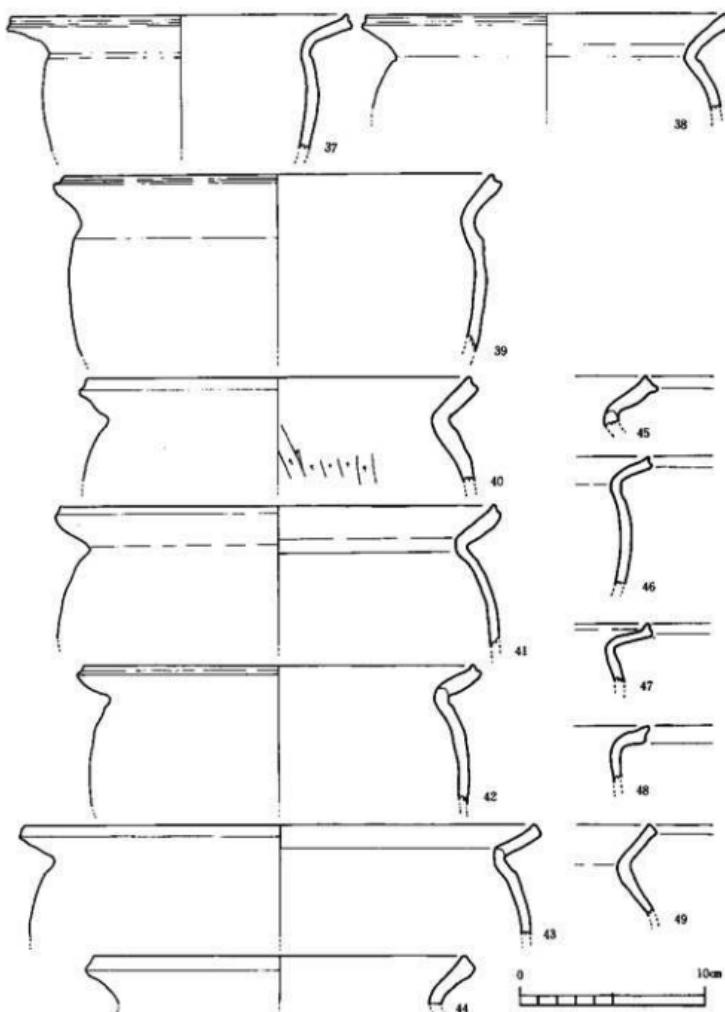


Fig. 64 第3号土壙出土遺物実測図(2)

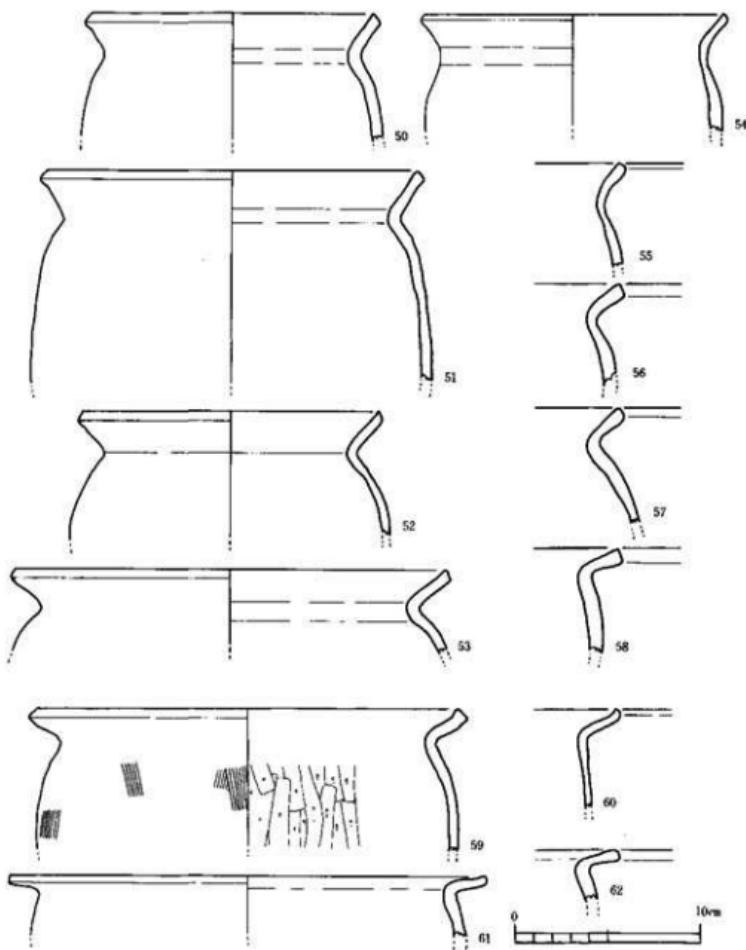


Fig. 65 第3号土壙出土遺物実測図（3）

昭和57年度の調査

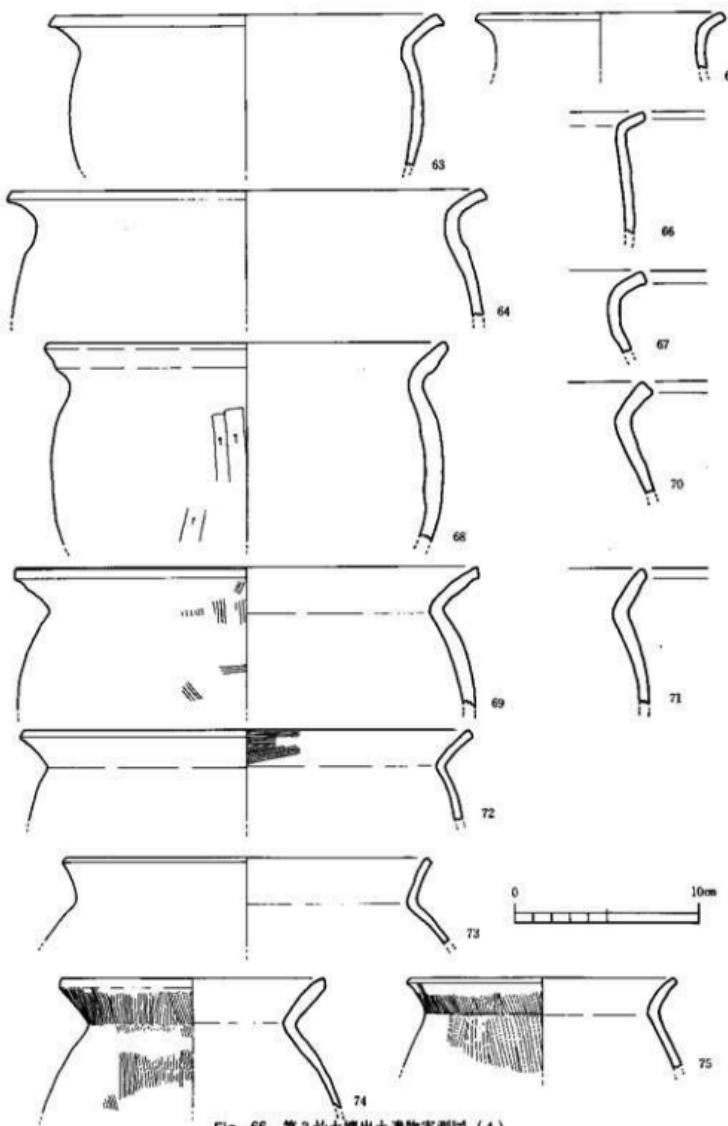


Fig. 66 第3号土壤出土遺物実図 (4)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

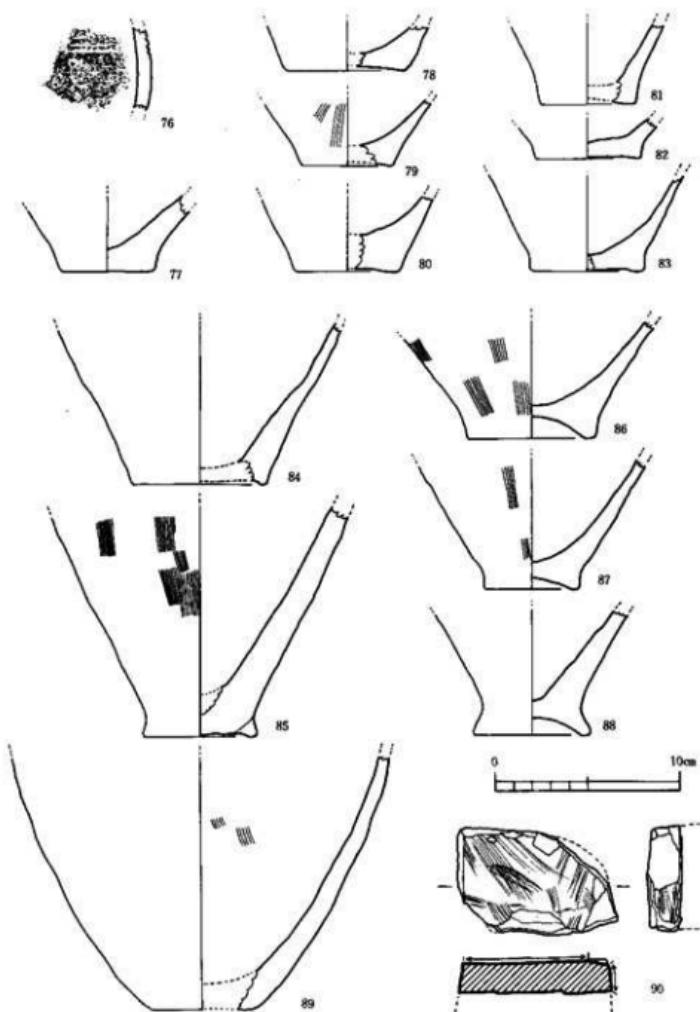


Fig. 67 第3号土壤出土物実測図（5）

75は口縁部が外彎気味に短く開き、端部は平坦である。外面縦刷毛目仕上げを行なうが、口縁部外面は横ナデを加えている。また、胴部と口縁部とで刷毛目原体を使い分けており、精粗の差がみられる。口縁部内面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。76は外面に3条のヘラ描き沈線が巡り、外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。混入品であろう。

33・34・77~89は底部で、壺と甕の区別がつきにくいが大半は甕の底部であろう。いずれも底径が小さく、平底ないしは平底に近いもの（33・34・77~85）、上げ底のもの（86~88）、不安定な平底のもの（89）がある。風化が著しく、各個体のすべての調整は知りえないが、外面はナデ仕上げのもの（77~84）、縦刷毛目仕上げのもの（79・85~87）がある。また、内面はナデ仕上げのものが多い（77~86）が、89は内面下半ナデ、上半縦刷毛目の痕跡が残る。

#### 砥石（90）

正面および右側面を研砥面とする砥石で、仕上げ砥と考えられる。上下端、左側面は未使用面が残る。正面右側面上半を中心欠損が著しい。流紋岩製。重量137g。

#### 第4号土壤（Fig. 61, PL. 26-(4)）

調査区北端部で検出された平面形態不整形の土壤である。北半部を第1号住居跡によつて失っているが、その切り合ひ関係は不明である。長軸方向は北~南で長軸320cm以上、短軸90cm、検出面からの深さは21cmの規模をもつが、残存状態は良好とはいえない。底面よりやや上位で、弥生土器壺、甕が出土し、これらの出土遺物から第1号住居跡と近接した弥生時代中期後半のものと考えられる。

#### 出土遺物（Fig. 68, PL. 32~91~104）

##### 壺形土器（91~94）

91は大きく外彎しながら開く口縁部をもち、口縁端部が跳ね上げ状になる。口縁部外面刷毛目のち横ナデ、端部内外面横ナデ仕上げ。92は口縁部内面にやや扁平な断面三角形の1条の貼付突帯が巡る。93・94は胴上半部の破片で、93は少なくとも2条のヘラ描き沈線が巡る。92・93とも内外面磨滅・剥落のため調整不明。94は貝殻腹縁による4条の沈线下に無軸の羽状文を施す。内外面ヘラミガキで仕上げる。

##### 甕形土器（95~104）

95~100は口縁部~胴上半部の破片で、「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部が跳ね上げ状になるものである。口縁部が内彎気味に開くもの（95・96）と直線的に開くもの（97~100）とがあり、水平に近く折れ曲がるもの（96~98）もある。口縁端部外面が横

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

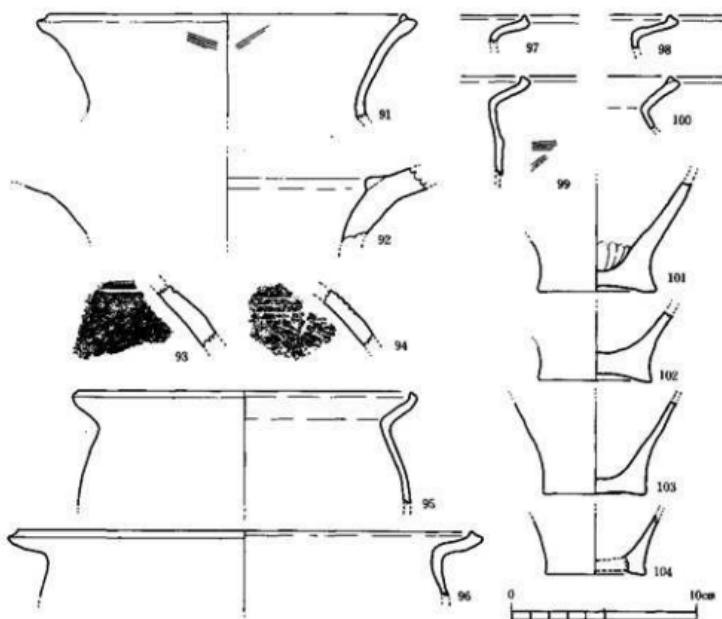


Fig. 68 第4号土壤出土遺物実測図

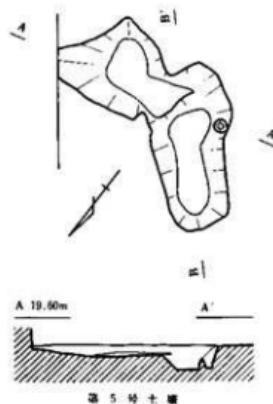
ナデによりやや窪むものが多い。いずれも口縁部内外面横ナデで、95・96は磨滅・剥落のため肩部の調整は不明であるが、99は肩部外面刷毛目、内面ナデ仕上げ。

101～104は底部。接地面がやや裾広がりになるもの（101・102）はやや上げ底気味で、側面が垂直に下降するもの（103・104）は小さな平底に近い。外底面および内面はナデで、101は内面に指圧整形痕が残る。外面は、横ナデが観察される104を除いて、いずれも磨滅・剥落が著しく調整は不明。

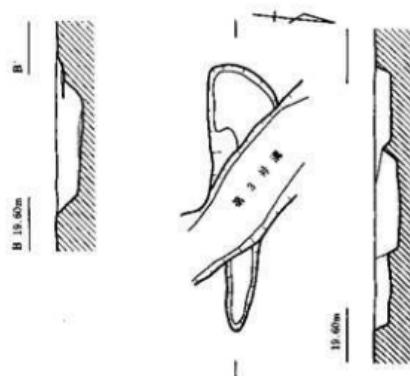
第5号土壤 (Fig. 69, PL. 27-(1))

調査区北部、第4号土壤の東に近接して営まれた平面形態三日月形の土壤である。2基の土壤の重複の可能性があるが切り合い関係が不明瞭で、一括して取り扱った。長軸方向は北西-南東で、長軸236cm、短軸90cmの規模をもつ。東半部はテラス状の平坦面を有しており、最深部の西半部で検出面からの深さは26cmである。出土遺物には弥生土器壺、甕がある。弥生時代後期後半。

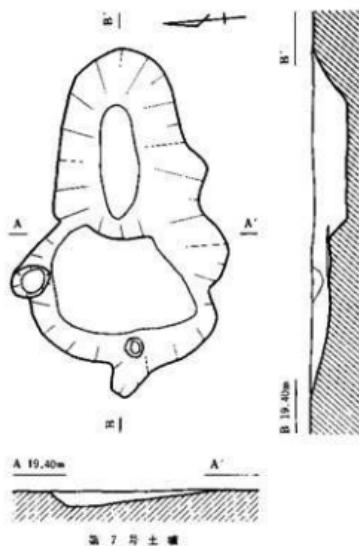
昭和57年度の調査



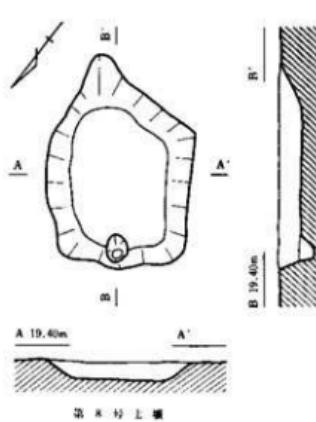
第 5 号 土 壤



第 6 号 土 壤



第 7 号 土 壤



第 8 号 土 壤

Fig. 69 第 5 ~ 8 号土壤実測図

出土遺物 (Fig. 70-105・106, PL. 32-105・106)

壺形土器 (105)

内傾する筒状の頸部をもち、口縁部はそのまま緩やかに短く外反する。内外面とも磨滅・剥落が著しく調整不明。

壺形土器 (106)

「く」の字に外彎しながら開く口縁部をもち、端部は尖る。口縁部内外面横ナデ、内面細かい横刷毛目仕上げで、頸部内面はナデている。外面は磨滅・剥落のため調整不明。

第6号土壙 (Fig. 69)

調査区北部、第1号住居跡の南、第5号土壙の西に近接して営まれた土壙で、第3号溝との切り合い関係は不明である。平面形態は長楕円形で、長軸284cm、短軸約75cmの規模をもち、底面はほぼ平坦である。長軸方向は東-西。遺存状態が悪く、検出面からの深さは15cmを残すのみである。出土遺物には弥生土器壺、甕がある。弥生時代中期。

出土遺物 (Fig. 70-107・108, PL. 32-107・PL. 33-108)

壺形土器 (107)

張りの強いソロバン形の胴部をもつ長頸壺で、胴部最大径の部位に扁平な断面三角形の突帯を1条貼付する。内外面とも磨滅・剥落のため調整不明。

壺形土器 (108)

上げ底気味の底部で、側面は横ナデ、他はナデ仕上げ。

第7号土壙 (Fig. 69)

調査区中央部の東隅、第6号土壙の南東で検出された平面形態長楕円形の土壙である。第3号溝との切り合い関係は不明。長軸方向は東-西で、長軸378cm、短軸190cmの規模をもつ。西半部にテラス状の平坦面をもち、最深部の東半部で検出面からの深さ39cmを測る。出土遺物は西半部の平坦面に貼り付いた状態で出土しており、弥生土器壺、甕、高杯等がある。弥生時代中期前半。

出土遺物 (Fig. 70-109-114, PL. 33-109-114)

壺形土器 (109)

いわゆる鋤先状の口縁部をもつもので、端部には粘土帯を貼付して斜上下に拡張させるが未発達である。拡張部外面には少なくとも2個を単位とした円形浮文が巡る。拡張部付近内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。他の土器に比べ胎土が良い。

甕形土器 (110-113)

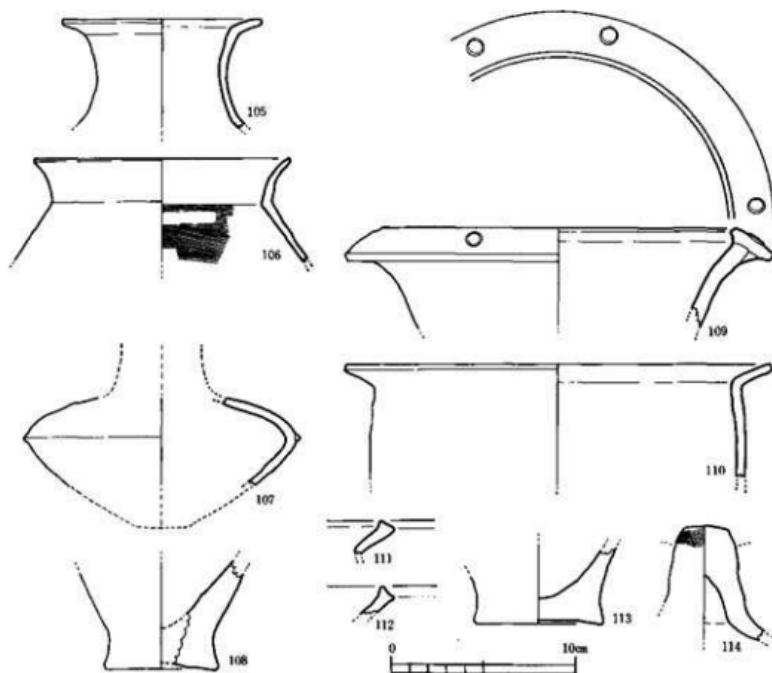


Fig. 70 第5～7号土壌出土遺物実測図

110は逆「L」字状に近く強く屈曲する口縁部をもち、胴部は張らない。111・112は跳ね上げ口縁をもつものである。いずれも口縁部内外面横ナデ、111は胴部磨滅・剥落のため調整不明。113は底部で、わずかに上げ底気味。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。高環形土器（114）

短脚の高環で、脚部中位付近で屈曲し外方へ開く。環部に挿入された部位に綵刷毛目が残存しており、外面は刷毛目仕上げと思われる。内面は粗くナデている。

#### 第8号土壌 (Fig. 69, PL. 27-(2))

調査区中央部東隅、第7号土壌の西に近接して営まれた土壌である。西壁に接して柱穴との切り合いがみられる。平面形態は五角形状を呈し、長軸232cm、短軸158cm、検出面から深さ21cmの規模をもつ。遺物は少なく、底面からやや浮いた状態で弥生土器壺、

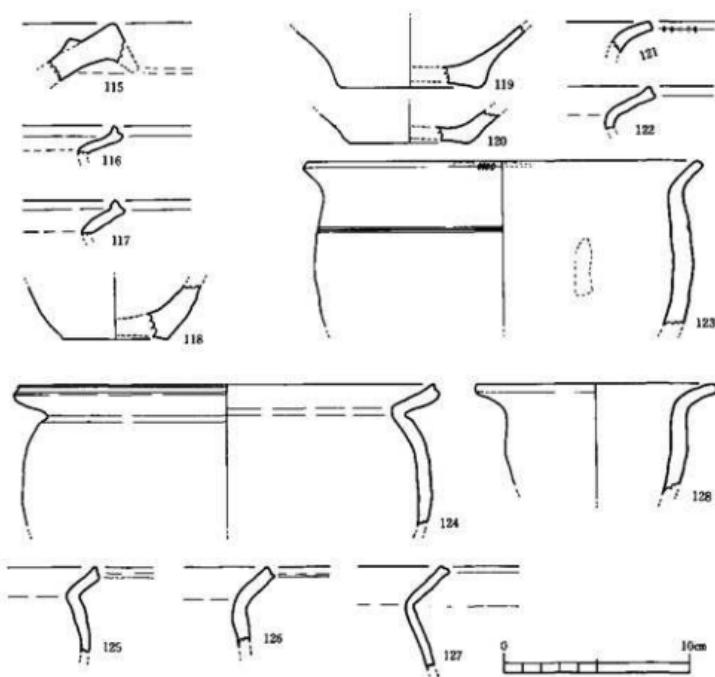


Fig. 71 第8-10-12号土壤出土遺物実測図

壺が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 71-115~118, PL. 33-115~118)

壺形土器 (115・118)

115は屈曲して斜めに下垂する口縁部で、下垂度は小さいものと考えられる。内面には断面三角形の扁平な貼付突帯が弧状に巡るが小破片のためその展開は不明である。口唇部外面への施文は現資料ではみられない。内外面とも横ナデ仕上げ。

壺形土器 (116・117)

いわゆる跳ね上げ口縁をもつもので、内外面とも横ナデ仕上げ。

第9号土壤 (Fig. 72, PL. 27-(3))

調査区中央部、第8号土壤の西に近接して営まれた土壤である。平面形態は長椭円形で、

昭和57年度の調査

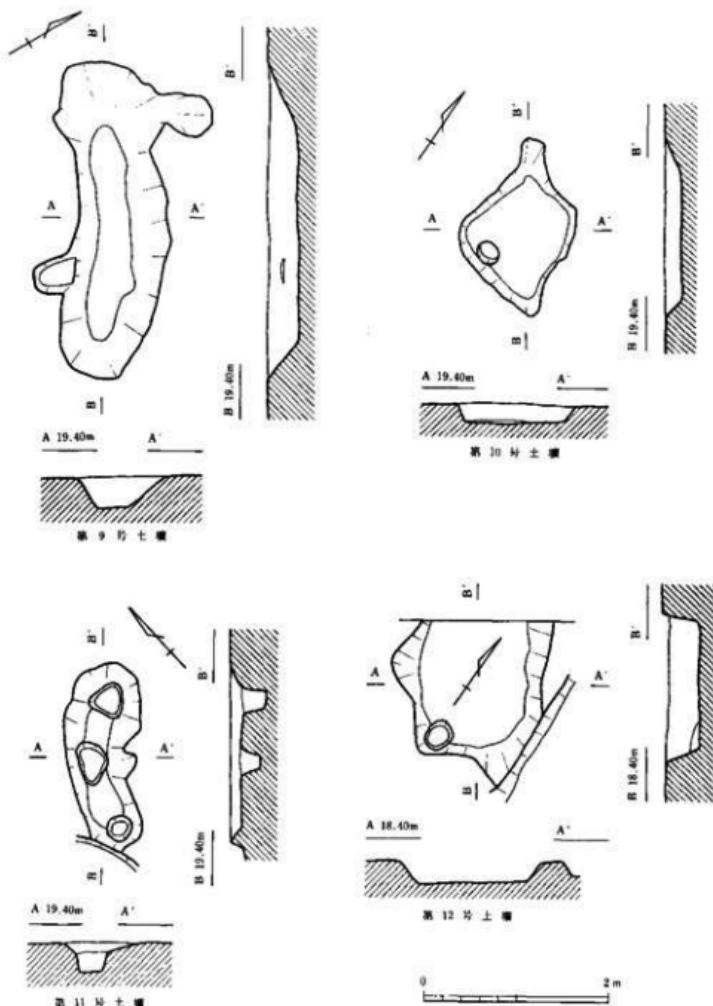


Fig. 72 第9～12号土壤実測図

長軸方向は北西—南東。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで長軸340cm、短軸194cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは33cm。出土遺物には弥生土器壺、甕があり、ほぼ底面に貼り付いた状態で出土した。弥生時代後期前半。

出土遺物 (Fig. 73・74, PL. 33-129～PL. 34-147)

壺形土器 (Fig. 73-129・130)

口縁部を短く上下に拡張するもので、130は口縁部外面に円形浮文を貼付する。129・130とも内外面横ナデ仕上げ。

甕形土器 (Fig. 73-131～Fig. 74-147)

131～144は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、口縁端部外面にヘラによる凹線風の沈線が巡るもの（131～137）、端部が平坦に近いもの（138～141）、跳ね上げ口縁となるもの（142～144）がある。端部外面が窪むものなかには胴部の張りがほとんどないものの（135・137）がある。口縁端部が平坦に近いものは口縁部が直線的に開き、小形品が含まれている。跳ね上げ口縁となるものは、口縁部が内脛しながら開くもの（142）と、直線的に開くもの（143・144）とがあり、144は142・143に比べ器壁が厚く、口縁部が短く外反する。調整は、口縁部内外面横ナデで、胴部外面はナデ仕上げのもの（132～137・139～141）と刷毛目仕上げのもの（142・144）とがあり、134・135・137・140のナデは粗い。胴部内面はナデるもの（132～134・137・138・140・141・144）が多く、刷毛目仕上げのもの（136）やヘラ削りのもの（142）もある。

145～147は底部で、ほぼ平底のもの（145・146）とやや上げ底気味のもの（147）とがある。いずれも底部側面付近横ナデで、他はナデ仕上げ。147は粗くナデられている。

第10号土壤 (Fig. 72)

調査区のはば中央部、第9号土壤と第4号住居跡間に営まれた土壤である。平面形態は不整方形を呈し、長軸192cm、短軸128cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、南壁付近で柱穴と切り合っている。検出面からの深さは17cmで遺存状態は悪い。底面からやや上位で弥生土器壺、甕が出土した。弥生時代前期末と中期前半のものが混在する。

出土遺物 (Fig. 71-119～123, PL. 33-119～123)

壺形土器 (119・120)

底部の破片。119はわずかに上げ底で、内面、外底面ナデ、側面横ナデ仕上げ。胴部外面磨減・剥落のため調整不明。120は底部とほほ同じ器壁厚で胴部にいたる。内面ナデ、外側調整不明。

昭和57年度の調査

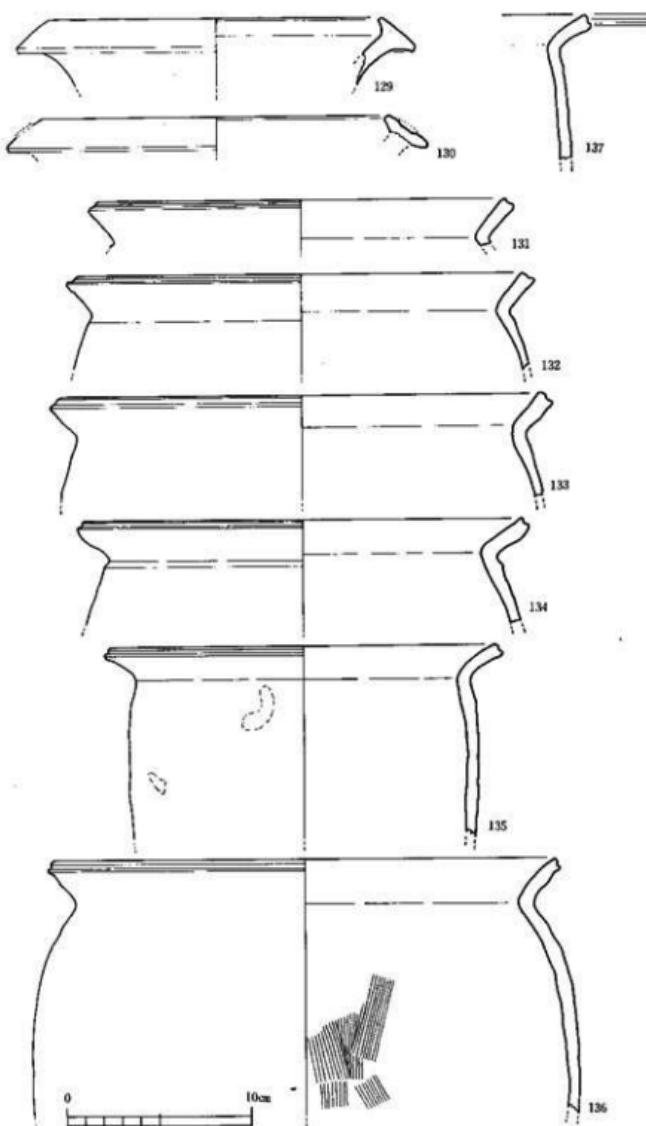


Fig. 73 第9号土壤出土遺物実測図(1)

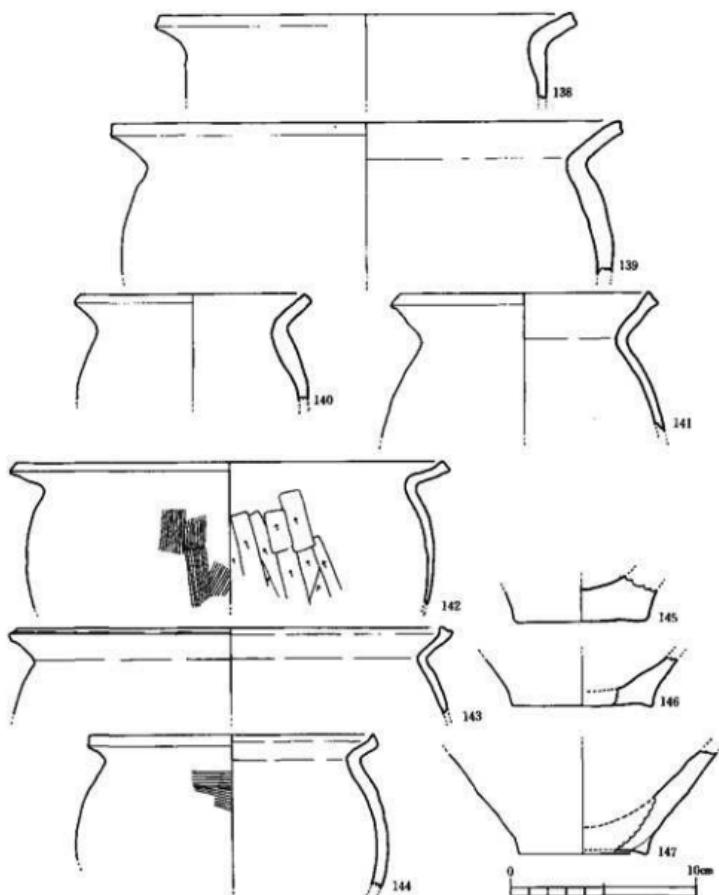


Fig. 74 第9号土壤出土遺物実測図(2)

壺形土器 (Fig. 121~123)

121・123は如意形に短く外反する口縁部をもち、壺部外面にヘラによる刻目を施す。123は頸部下位に2条のヘラ描き沈線が巡り、胴部の張りは小さい。口縁部内外面および胴部内面に丹の痕跡が残る。121は内外面横ナデ、123は口縁部内外面横ナデ、胴部内面

ナデ、外面磨滅・剥落のため調整不明。122は直線に近く「く」の字状に屈曲する口縁部で内外面横ナデ仕上げ。

#### 第11号土壙 (Fig. 72)

調査区北西部、第3号土壙のすぐ東で検出された平面形態不整梢円形の土壙で、第2号溝によって南端部を切られている。底面での3個の柱穴との切り合いがみられるが、前後関係は不明である。長軸方向は北東—南西で、長軸189cm以上、短軸75cmの規模をもつが、遺存状態が悪く、検出面からの深さは11~12cmを残すにすぎない。土壙内から弥生土器若干が底面よりやや上位で出土したが、第2号溝との切り合い関係から下限は弥生時代中期と考えられる。

#### 第12号土壙 (Fig. 72)

調査区北西端部付近、第11号土壙のすぐ西側で検出された土壙で、西への延長部分は調査区外にあたるため完掘していない。また、第2号溝によって東端部を切られているため、平面形態は判然としないが長梢円形に近くなるものと考えられる。長軸方向は北西—南東で、長軸148cm以上、短軸145cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは37cmである。出土遺物には弥生土器壺がある。弥生時代後期前半。

#### 出土遺物 (Fig. 71~124~128, PL. 33~124~128)

##### 壺形土器

口縁部が「く」の字に外反し、内面に稜線を画して屈曲するもの（124・125・127）と、緩やかに外反するもの（126・128）がある。前者は張りのある胸部にやや強く屈曲する短い口縁部をもち横ナデにより口縁端部外面が窪むもの（124・125）と、直線的に開くやや長めの口縁部をもつもの（127）がある。128は小形の壺。124~128とも口縁部内外面横ナデ、124・128は胸部内外面ナデ、126は胸部内面ナデ仕上げ。125・127は胸部内外面とも磨滅・剥落のため調整不明。

#### 第13号土壙 (Fig. 75)

調査区北西部、第11号土壙の南に近接して営まれた土壙で、そのほぼ中央部を第2号溝、第27号土壙によって切られている。平面形態は不整形な長梢円形に近く、長軸方向は北東—南西である。長軸192cm以上、短軸84cmの規模をもつが、遺存状態が悪く、検出面からの深さは最深部で10cmを残すにすぎない。土壙内からは、底面からわずかに上位で弥生土器壺、壺が出土した。弥生時代中期後半。

#### 出土遺物 (Fig. 76, PL. 34~148~155)

### 壺形土器（148～150）

148は口縁部が屈曲して下垂するもので、器壁が薄く、比較的きゃしゃなつくりである。下垂した口縁部外面には施文はみられない。149は大きく直線的に開く口縁部をもち、端部がカマボコ状に肥厚する、類をみないものである。148・149とも口縁部内外面に丁寧な横ナデを行なうが、口縁部下半は磨滅・剥落のため調整不明。150は断面「M」字状の突帯を貼付する胴部の破片。内外面とも磨滅・剥落のため調整不明。

### 壺形土器（151～155）

いずれも「く」の字に屈曲する口縁部をもつもので、胴部の張りが小さく胴部最大径は口径を上回らない。151・153は直線的に開く比較的長めの口縁部をもち、口縁部内面の横ナデが強い。152は151・153に比べ口縁部の屈曲度が強い。154は直線的に開く口縁部をもち、肥厚する口縁端部を跳ね上げるものである。器壁は薄い。口縁端部外面にはヘラによる凹線風の沈線が巡る。151～154とも口縁部内外面横ナデ仕上げで、151・152は胴部内外面ナデ仕上げ。153・155は内面のナデしか観察できない。154は胴部内外面とも磨滅・剥落のため調整不明。

### 第14号土壙（Fig. 75）

調査区北西端部付近、第2号住居跡の北に近接して営まれた土壙である。東壁付近で柱穴との切りあいが見られるが先後関係は不明である。平面形態は梢円形に近い形状を呈し、長軸方向は北一南。長軸148cm、短軸94cmの規模をもつが、遺存状態は極めて悪く、検出面からの深さはわずか9cmを測るにすぎない。底面からやや上位で弥生土器壺の底部等が出土したが、量は極めて少ない。弥生時代中期。

### 出土遺物（Fig. 77-156, PL. 34-156）

#### 壺形土器

わずかに上げ底気味の底部から胴部は直線的に立ち上がる。内外面とも磨滅・剥落のため調整不明。

### 第15号土壙（Fig. 75）

調査区北西部付近、第2・3号住居跡のすぐ東で検出された平面形態不整梢円形の土壙で、中央部を第2号溝によって切られている。遺跡保存地区の土壙のうちでは小形の部類に属する。長軸方向は北東-南西で、長軸130cm、短軸46cm、検出面からの深さ18cmの規模をもつ。出土遺物は極めて少なく、壺形土器が底面からやや上位で出土した。弥生時代終末-古墳時代初頭。

昭和57年度の調査

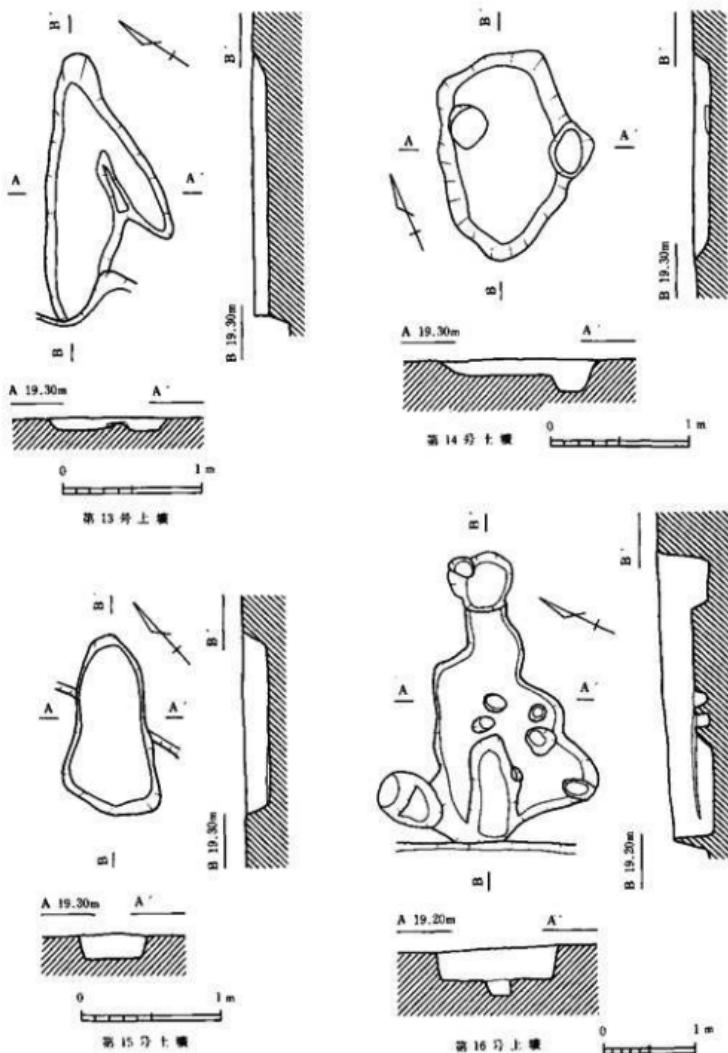


Fig. 75 第13~16号土壤実測図

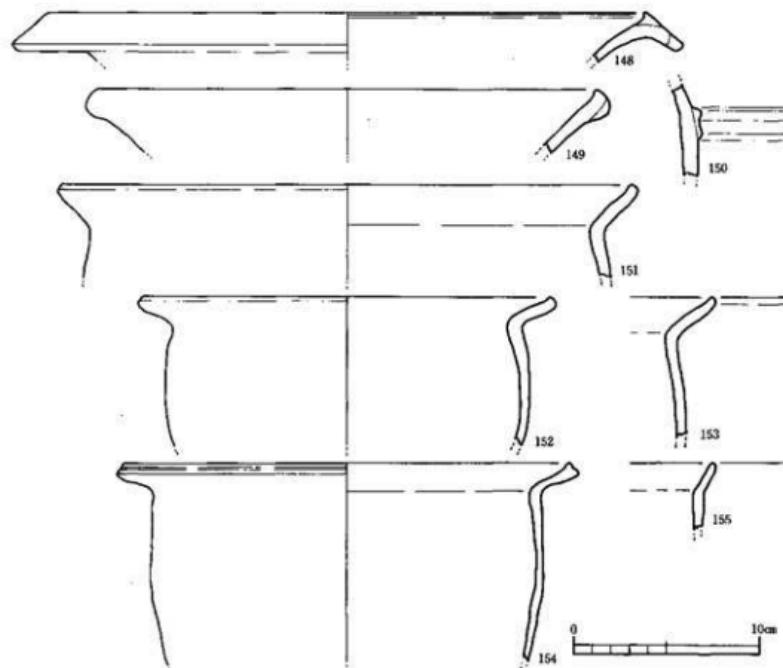


Fig. 76 第13号土壙出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 77-157, PL. 34-157)

#### 壺形土器

張りの強い胴部に外脛しながら開く口縁部をもち、口縁端部は尖り気味に終わる。胴部外面には平行タタキを施す。口縁部内外面横ナデ、内面ナデ仕上げ。

#### 第16号土壙 (Fig. 75)

調査区中央部の西寄り、第2・3号住居跡、第15号土壙のすぐ東に近接して営まれた土壙である。第5号住居跡によって東端部をわずかに切られている。北半部のテラス状の平坦面には、切り合い関係不明の柱穴多数が検出された。長軸方向は北東-南西で、長軸206cm以上、短軸88cm、最も深い西端部で検出面からの深さ32cmの規模をもつ。土壙内からは弥生土器壺、高杯が底面よりやや上位で出土した。弥生時代中期。

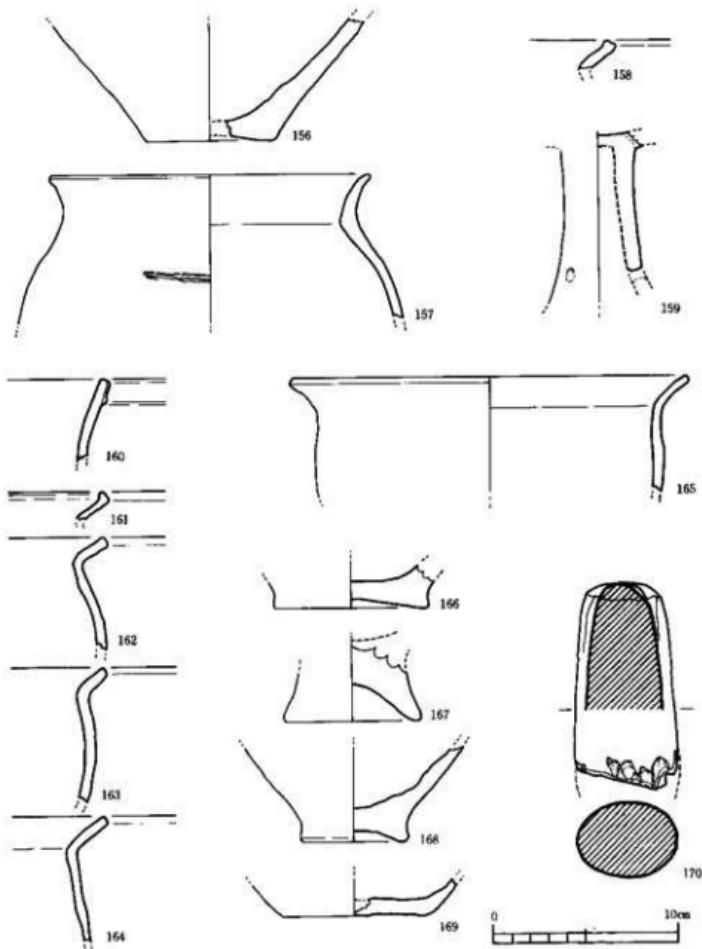


Fig. 77 第14~17号土壤出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 77-158・159, PL. 34-158・159)

壺形土器 (158)

跳ね上げ口縁になるもので、内外面とも横ナデ仕上げ。

高环形土器 (159)

环部に脚柱を挿入する長脚の高环脚部で、三方に円形透かしをもつ。シボリ痕は不明瞭で、环部と脚部の接合部付近の外面は横ナデで、他はナデ仕上げ。

第17号土壤 (Fig. 78, PL. 27-(4))

調査区中央部西寄りのトレンチ西壁付近で、第16号土壤の南に近接して検出された土壤で、第18号土壤を切っている。平面形態長楕円形、長軸方向北西-南東で、長軸224cm、短軸50cmの規模をもつ。底面は平坦に近く、検出面からの深さは34cm。出土遺物には弥生土器壺、甕、鉢、および石斧があり、底面からやや上位で出土した。弥生時代中期前半。

出土遺物 (Fig. 77-160-170, PL. 35-160-169・PL. 39-170)

壺形土器 (160・166)

160は長頸壺の口縁部で、端部外面に断面長方形の突帯を貼付し、強い横ナデにより突帯中央部が窪む。壺と思われる166はわずかに上げ底で、側面横ナデ、他はナデ仕上げ。

壺形土器 (161-165・167・168)

跳ね上げ口縁をもつもの (161) と、「く」の字状に外反する口縁部をもつもの (162-165) とがある。後者には内面に稜をもたず短く外反するもの (162・163)、張りのほとんどない胴部をもち直線的に外反するもの (164・165) とがある。いずれも口縁部内外面とも横ナデで、162・163・165は胴部内外面ナデ、164は胴部外面ナデ仕上げを行なう。167・168は底部。167は上げ底で器壁が厚く、裾部が外方へ大きく開く。168は窪み底で、外底面および外面に黒斑がみられる。いずれも側面、接地面横ナデ、外面、外底面および内面ナデ仕上げで、168は調整が粗い。

鉢形土器 (169)

ほぼ平底の底部で、内面、外底面ナデ仕上げ、側面は磨滅・剥落のため調整不明。

石斧 (170)

刃部および頭部の一部を欠損した大型蛤刃石斧で、断面形は楕円形。珪化ディサイト製で現存長11.2cm、最大幅5.6cm、最大厚4.2cm、頭部幅4.1cm、頭部厚2.8cm。重量412g。

第18号土壤 (Fig. 78, PL. 27-(4))

調査区中央部西寄りのトレンチ西壁付近、第16号土壤の南に近接して検出された土壤

昭和57年度の調査

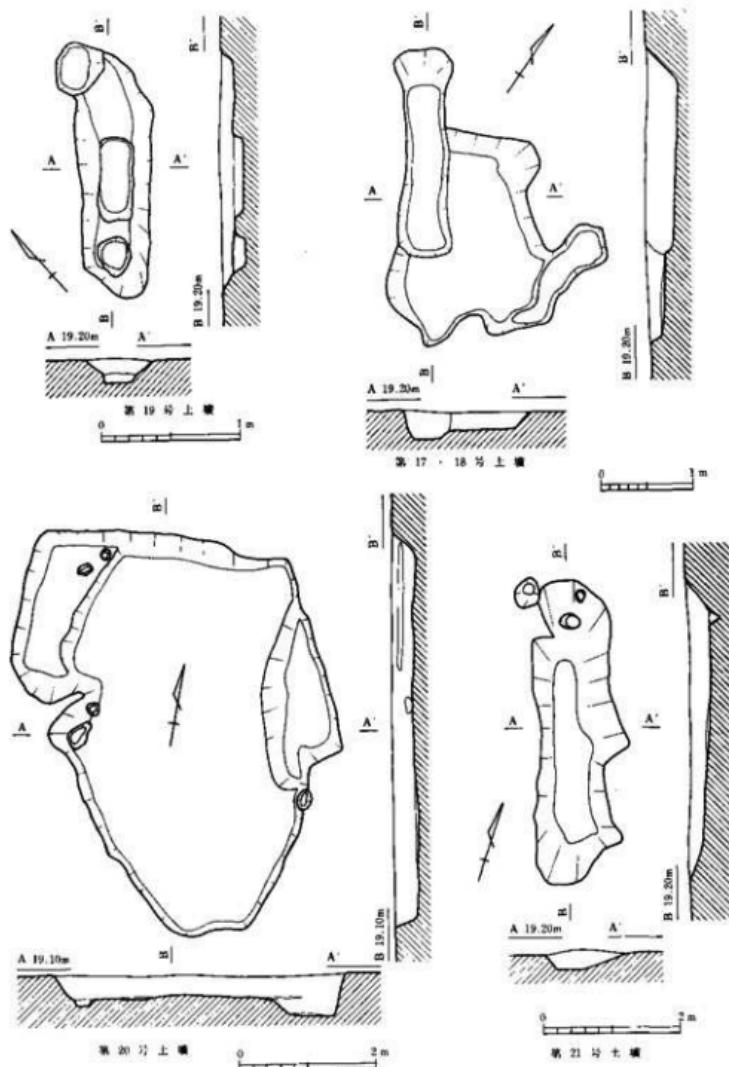


Fig. 78 第17~21号土壤実測図

で、第17号土壙によって切られている。平面形態は不整形な方形で、東端部にテラス状の平坦面をもつ。長軸234cm、短軸156cmの規模をもち、最も深い南端部で検出面からの深さ20cmを測る。遺物は東端部の平坦面を中心に、底面よりやや上位で弥生土器壺、甕、鉢、高杯が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 79-171-175, PL. 35-171-175)

壺形土器 (171)

ソロバン状の胴部をもち、胴部最大径付近に断面三角形の突帯を1条貼付する。長頸壺の可能性がある。磨滅・剥落のため調整不明。

甕形土器 (172・173)

「く」の字に外反する口縁部をもち、端部が跳ね上げとなるものである。172は口縁部が内彎しながら外反し、胴部の張りは弱い。172・173とも口縁部内外面横ナデ、胴部外面横刷毛目、内面ナデ仕上げを行なう。

鉢形土器 (174)

平底の鉢の底部と考えられるもので、器壁は薄い。内面ナデ仕上げ、外面調整不明。

高杯形土器 (175)

わずかに斜めに下垂する鋸先状口縁をもつ小形の高杯で、杯部は内彎して開き、口縁部内側の張り出しが強い。口縁部内外面横ナデ、杯部内面ナデ、外面磨滅・剥落のため調整不明。

第19号土壙 (Fig. 78)

調査区西壁付近、第17・18号土壙のすぐ東で検出した平面形態長梢円形の土壙である。北端部、南端部で柱穴との切り合いがあるが先後関係は不明である。長軸方向は北東一南北で、長軸156cm、短軸76cmの規模をもつ。底面中央部には長方形に近い掘り込みをもち、検出面からの深さは25cmである。出土遺物は皆無であった。

第20号土壙 (Fig. 78)

調査区中央部、第19号土壙の北に近接して営まれた平面形態不整五角形の土壙で、第4号住居跡の壁溝を切っている。平面形態から2基の土壙の重複の可能性があるが、切り合の関係が不明なため一括して取り扱った。長軸432cm、短軸320cmで、保存地区で検出された土壙中でも最大の規模をもつ。西端部には幅約45cmのテラス状の平坦面を有する。底面は中央部付近がやや高く、検出面からの深さは最浅部で18cm、最深部で45cmを測る。遺物は極めて少なく、底面から約20cm上位で弥生土器若干が出土した。

昭和57年度の調査

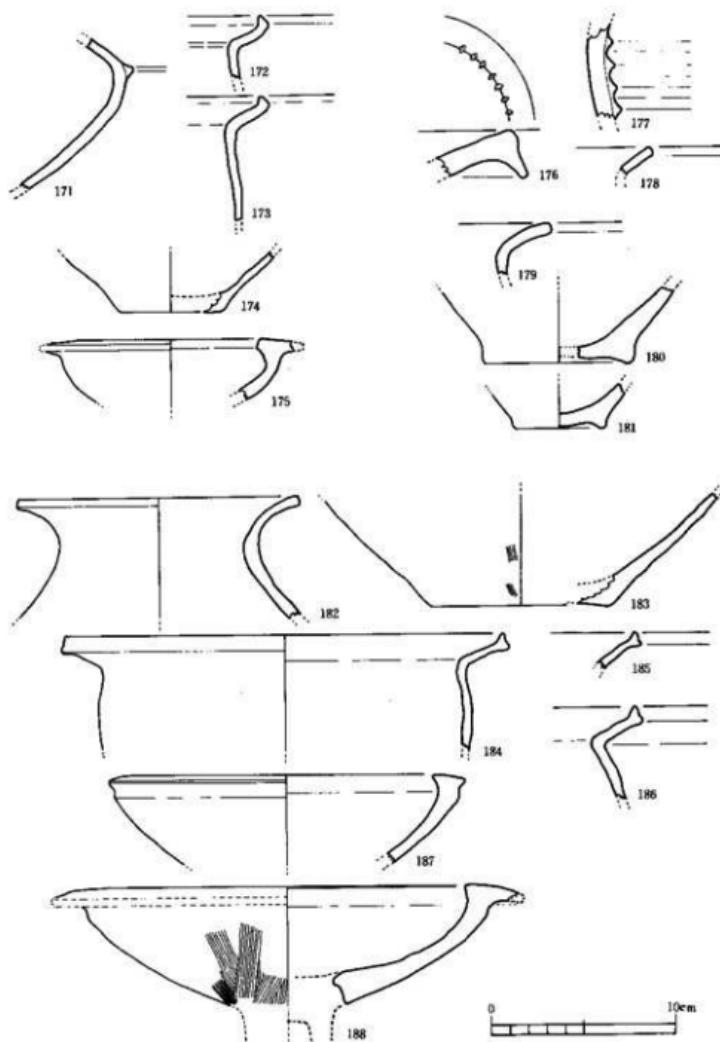


Fig. 79 第18・21~23号土壤出土遺物実測図

第21号土壙 (Fig. 78)

調査区中央部、第20号土壙のすぐ東で検出された平面形態長楕円形の土壙である。北端部での柱穴との切り合い関係は判然としない。長軸方向は北—南で、長軸328cm、短軸88cmの規模をもつ。底面は南から北へ下降しており、検出面からの深さは最浅部で16cm、最深部で25cmを測る。壁面の立ち上がりは緩やかである。遺物は土壙検出面付近で弥生土器壺、壺が若干出土したにとどまった。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 79-176~178, PL. 35-176~178)

壺形土器 (176・177)

176は下垂する口縁部をもつもので、端部は先細りとなる。口縁部外面の平坦面に施文は見られないが、内面との接線上にヘラによる刻目を施す。磨滅・剥落のため調整不明。177は壺部の破片で、外面に断面三角形の少なくとも4条の貼付突帯が巡る。外面横ナデ仕上げ、内面磨滅・剥落のため調整不明。

壺形土器 (178)

直線的に短く聞く口縁部の破片で、内外面とも横ナデ調整を行なう。

第22号土壙 (Fig. 80)

調査区中央部、第20および21号土壙の南で検出された「L」字形の土壙で、平面形態および検出面から底面までの深さなどから、平面形態長楕円形の2基の土壙の重複の可能性があるが、切り合い関係が不明なため一括して取り扱った。南北方向長軸202cm、短軸56cm、北東—南西方向長軸258cm、短軸58cmの規模をもち、検出面からの深さは西端部で16cm、南端部で21cm。北端部の底面は、西・南半部に比べ一段低くなっていることから、検出面からの深さ30cmである。出土遺物には弥生土器壺がある。弥生時代後期。

出土遺物 (Fig. 79-179~181, PL. 35-179~181)

壺形土器

179は外彎しながら聞く口縁部で、内外面とも磨滅・剥落のため調整不明。180・181は凹み底の底部で、181は鉢になるかもしれない。いずれも接地点付近内外面横ナデで、180は外面、外底面ナデ、内面磨滅・剥落のため調整不明。181は内面、外底面ナデ、外面磨滅・剥落のため調整不明。

第23号土壙 (Fig. 80)

調査区南西隅、第6号住居跡のすぐ東で検出された土壙である。第2号溝が比較的平坦な溝底をもつものに対し、この部分で一段底面が低くなっていることから、土壙として取り

扱った。第2号溝と切り合っているが、その先後関係は不明である。平面形態は長椭円形に近くなるものと思われ、長軸方向は北西—南東である。長軸220cm以上、短軸82cmの規模をもち、底面は平坦に近く、検出面からの深さは18cmである。出土遺物には弥生土器壺、壺、高坏がある。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 79-182~188, PL. 35-182~PL. 36-188)

#### 壺形土器 (182・183)

182は外彎しながら大きく開く口縁部で、胸部内面ナデ仕上げ、他は風化のため調整不明。183はほぼ平底の底部で器壁が薄い。外面に継刷毛目の痕跡が残る。接地点付近外面横ナデ、外底面ナデ、内面風化のため調整不明。

#### 壺形土器 (184~186)

口縁部内面に粘土を貼付し、顯著な跳ね上げ口縁とするものである。直線的に開く口縁部の屈曲度は強い。184~186とも口縁部内外面横ナデで端部は強い横ナデで窪む。胸部内面ナデ仕上げ、外面風化のため調整不明。

#### 高坏形土器 (187・188)

187は口縁端部が肥厚し平坦面を有するもので、口縁端部の外側への張り出しあはみられない。口縁端部内外面横ナデ、他は風化のため調整不明。188は鋤先状口縁を有する高坏で、坏部は浅く口縁端部の内面への張り出しあは弱い。端部平坦面は斜めに下垂する。口縁端部内外面横ナデ、坏部外面継刷毛目、内面ナデ仕上げ。

#### 第24号土壙 (Fig. 80)

調査区中央部の南寄り、第7号住居跡の北で検出された土壙である。平面形態は長椭円形に近く、壁面の立ち上がりは比較的急である。南北両端部で柱穴状の遺構と切り合っているが、先後関係は明らかでない。長軸方向は北—南で、長軸348cm、短軸68cmの規模をもつ。底面は平坦に近く、検出面からの深さは25cmである。出土遺物には弥生土器壺がある。弥生時代中期。

出土遺物 (Fig. 81-189, PL. 36-189)

#### 壺形土器

大きく朝顔形に開く口縁部をもつと思われる壺の頸部。外面には少なくとも3条の断面三角形の扁平な貼付突帯が巡る。外面突帯部分横ナデ、他はナデ。

#### 第25号土壙 (Fig. 80)

調査区の南東部、第24号土壙の北東で検出された方形状の不整形な土壙である。西・北

昭和57年度山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査

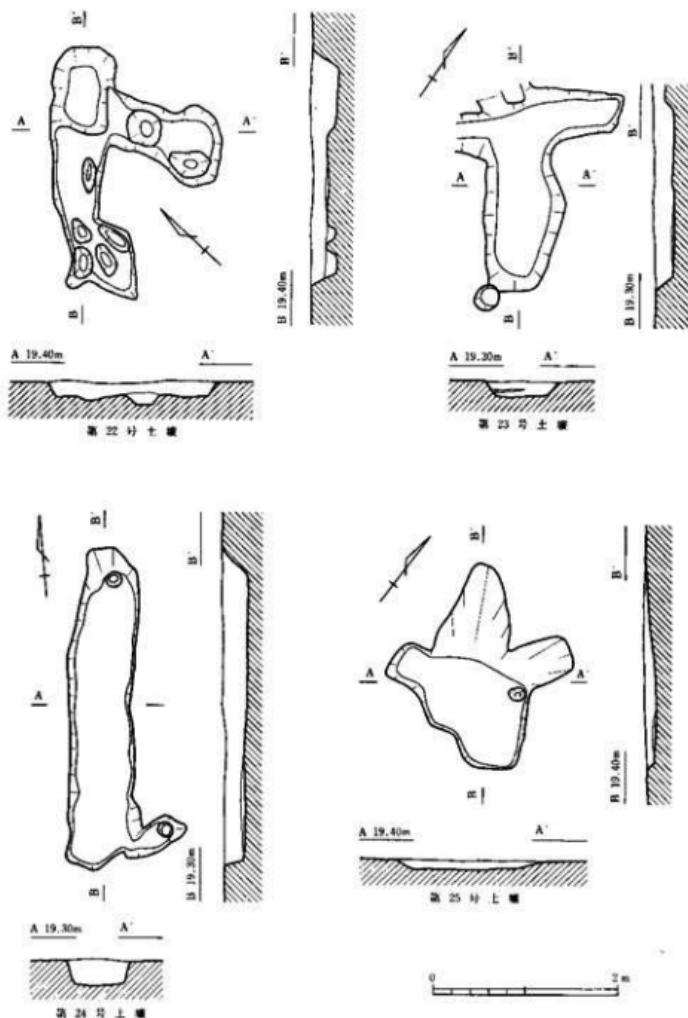


Fig. 80 第22~25号土壤実測図

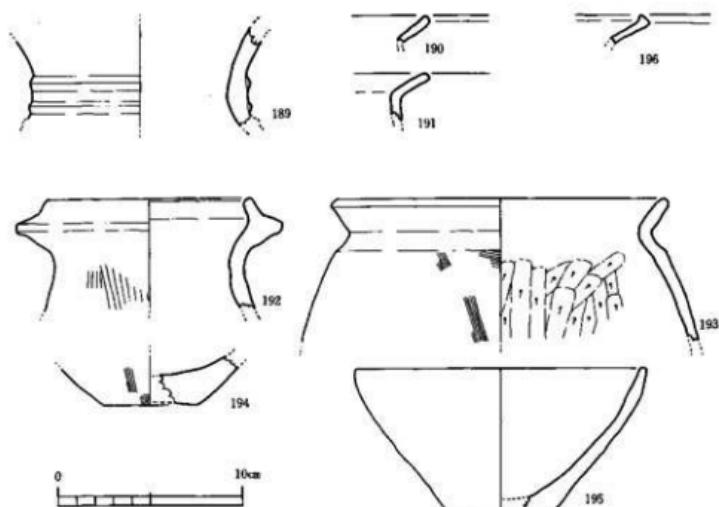


Fig. 81 第24~26・41号土壙出土遺物実測図

両壁面は検出面から緩やかに下降しており、南半部で最終的な底面に達する。長軸220cm、短軸210cm、検出面からの深さは最深部で15cmの規模である。遺物は弥生土器壺等若干が出土したのみである。弥生時代中期。

#### 出土遺物 (Fig. 81-190・191, PL. 36-190・191)

##### 壺形土器

190・191とも直線的に「く」の字に外反する短い口縁部をもつもので、191は胴部の張りは弱い。いずれも内外面横ナデ仕上げ。

#### 第26号土壙 (Fig. 82)

調査区北西隅で検出された土壙である。第2号住居跡との切り合い関係は不明。西への延長部分を後世の削平により失っており、平面形態は明らかでない。長軸方向は北西-南東で、長軸114cm以上、短軸34cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは11cmである。出土遺物は少なく、底面からやや上位で弥生土器壺、壺、鉢が出土した。弥生時代後期前半。

#### 出土遺物 (Fig. 81-192~195, PL. 36-192~195)

壺形土器（192）

小形のいわゆる複合口縁壺である。内傾する短い頸部をもち、口縁部の開きは小さい。内上方へ斜めに突出する拡張部は未発達で、口縁端部よりやや下位に貼付される。口縁部内外面横ナデ、頸部外面粗い綴刷毛目、内面ナデ仕上げ。

壺形土器（193・194）

193は張りの強い胴部をもち、口縁部は短く「く」の字に外反する。頸部外面には強い横ナデが施される。口縁部内外面横ナデ、胴部外面刷毛目、内面強いナデ仕上げ。194は底部で、壺かもしれない。外面綴刷毛目、外底面および内面はナデ仕上げ。

鉢形土器（195）

平底の底部から胴部が直線的に立ち上がり、口縁端部付近で内彎する。口縁端部は丸く終る。口縁部内外面横ナデ、胴部外面、および外底部はナデ仕上げ。

第27号土壙（Fig. 82）

調査区北西部、第2号住居跡の北東に近接して営まれた土壙で、第13号土壙を切り、第2号溝によって切られている。平面形態は中央部のくびれた双円形を呈する。長軸方向は北西—南東で、長軸123cm、短軸40cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さは38cmである。遺物は弥生土器数点が底面からやや上位で出土したが、器形・時期を窺い知るものはない。

第28号土壙

調査区中央部東寄りで検出された小規模な土壙で、第8号土壙の北に近接して位置する。他の遺構との切り合い関係はないが、後世の削平により遺存状態は悪い。平面形態は楕円形に近く、長軸80cm、短軸55cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは13cmである。遺物は底面に貼り付いた状態で弥生土器数点が出土したが、器形・時期を窺い知るものはない。

第29号土壙（Fig. 82, PL. 28-(1)）

調査区南東部、第7号住居跡の北東で検出された土壙である。平面形態、検出面より底面までの深さなどから2基の土壙の重複が考えられるが、切り合い関係が不明なため一括して取り扱った。底面はいずれも平坦に近く、南北方向に長軸をもつものは長軸352cm、短軸85cm、検出面からの深さ28cmで、北東—南西に長軸をもつものは長軸328cm、短軸36cm、検出面からの深さ48cmの規模をもつ。出土遺物には土師器があるが、その量は極めて少ない。古墳時代前期に属するものであろう。

昭和57年度の調査

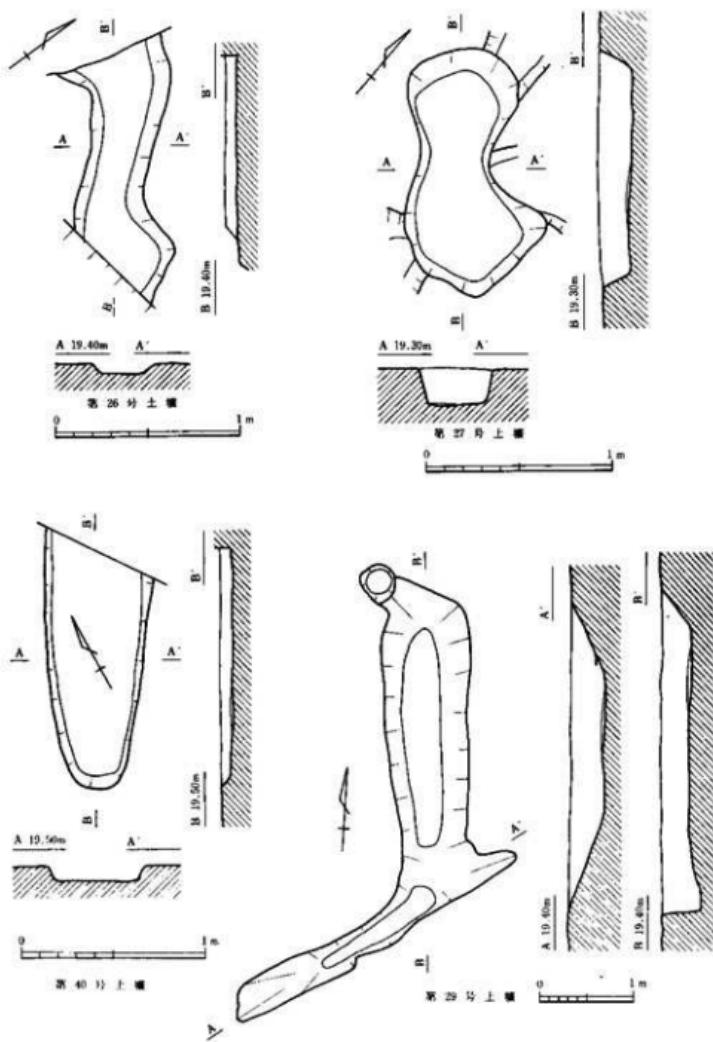


Fig. 82 第26-27-29-40号土壤実測図

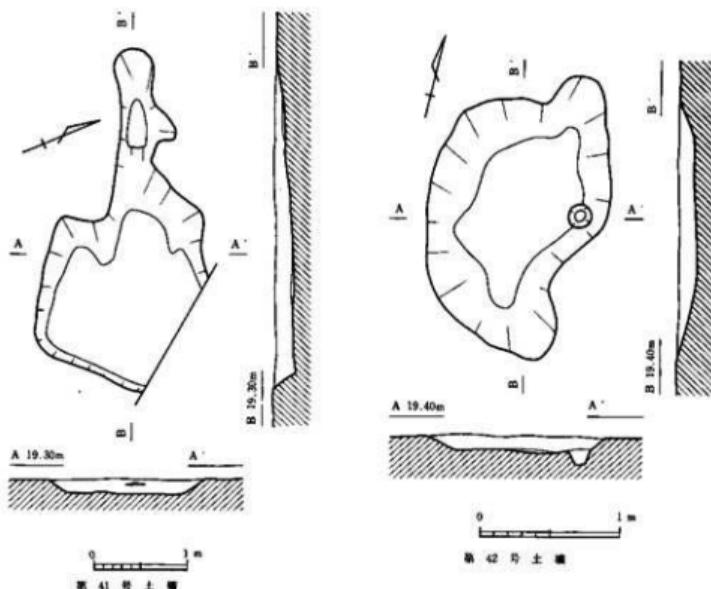


Fig. 83 第41・42号土壤実測図

## 第40号土壤 (Fig. 82)

調査区北西部、第1号住居跡の東で検出された土壤で、北東への延長部分は一部調査区外にあたるため完掘していないが、溝の可能性がある。平面形態は長楕円形に近い形状のものと考えられ、長軸114cm以上、短軸52cm、底面は平坦で検出面からの深さ14cmを測る。出土遺物には弥生土器若干がある。

## 第41号土壤 (Fig. 83)

調査区中央部東端、第17号土壤の北に近接して営まれた不整形な土壤である。長軸362cm、短軸170cmの規模をもつ。遺存状態は悪く、検出面からの深さは西半部で検出されたテラス状の平坦面までが10cm、西半部に比べ一段低くなっている東半部で16cmを残すにすぎない。遺物は弥生土器甕など若干が出土した。弥生時代中期後半。

## 出土遺物 (Fig. 81-196, PL. 36-196)

### 壺形土器

直線的に開く口縁部をもち、端部を跳ね上げるものである。内外面とも横ナデ仕上げ。

#### 第42号土壤 (Fig. 83, PL. 28-(2))

調査区中央部、第9号土壤の南で検出された橢円形に近い不整形な土壤である。長軸方向は北一南で長軸182cm、短軸128cmの規模をもつ。遺存状態は悪く、検出面からの深さ15cmを残すのみである。出土遺物はない。

#### 第50号土壤 (Fig. 83)

調査区北隅、第1号住居跡の北に近接して営まれた小規模な土壤である。北端部で柱穴と切り合っているが、その前後関係は不明である。平面形態は三日月状を呈し、東西輪121cm、南北輪70cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さ11cmを残すのみで遺存状態は悪い。土壤内からの出土遺物はない。

### 第1号溝

調査区北部を弧状に北西一南に貫く溝で第1号住居跡、第3号溝を切っている。南への延長部分は後世の削平により失われている。調査区北壁付近で上面幅86cm、溝底幅44cm、深さ約35cmであるが、第3号溝と切り合う付近で溝幅を減じ上面幅約50cm、溝底幅約32cmとなる。出土遺物には土師器壺がある。4C後半。

#### 出土遺物 (Fig. 84-197・198, PL. 36-197・198)

### 壺形土器

197は短い頸部をもついわゆる複合口縁の壺で、上段部は短く内傾する。外面および口縁部内面横ナデ、内面頸部以下ナデ仕上げ。198は外面に右上がりのタタキをもつ壺で内面は刷毛目仕上げ。<sup>31</sup>

197は下関市伊倉遺跡のB区の土壤出土のものに酷似し、同遺跡では右上がりのタタキをもつ壺の底部と共に伴している。山本一朗氏の述べるように同遺跡のB地区土壤の一括資料、特に複合口縁壺は、纏向4式相当期のものであり、布留式の古段階に位置づけられるものである。<sup>32</sup>

### 第2号溝

調査区東半部を北一南に貫く溝で、第6号住居跡の東付近までは比較的蛇行が少ないが、第23号土壤と切り合う付近で直角に近く東へ流路を変えており、土壤、住居跡との切りあいが多い。溝上面幅および溝底幅は北部でそれぞれ約55cm、約30cmであるが、6号住居跡東付近では上面幅約25cm、溝底幅約15cmと南に向かうにつれて溝幅を減じている。溝深は

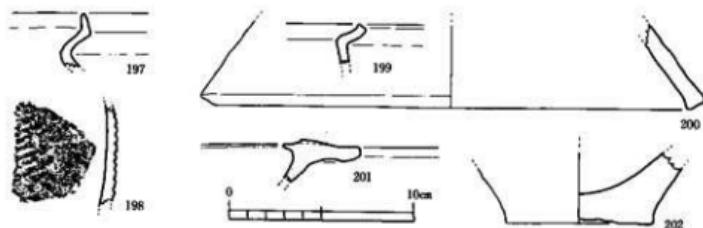


Fig. 84 第1～3号溝出土遺物実測図

20～26cmで溝底は北部が低い。出土遺物には弥生土器壺、高坏がある。弥生時代中期。

出土遺物 (Fig. 84-199・200, PL. 36-199・200)

#### 壺形土器 (199)

「く」の字状に短く外反する壺の口縁部で、口縁部内面を跳ね上げている。内面頸部以下は磨滅・剥落のため調整不明であるが、他は横ナデ仕上げ。

#### 高坏形土器 (200)

脚部の破片。脚端部付近内外面は横ナデ仕上げであるが、破片上半内外面は磨滅・剥落のため調整不明。

#### 第3号溝

調査区北東部を北西一南東に貫く溝で、第1号溝によって切られている。後世の削平により長さ約9mを検出したにとどまった。溝上面幅および溝底幅は、第6号土壤付近でそれぞれ約90cm、約50cm、第7号土壤付近でそれぞれ約80cm、約40cmで、上面幅はほぼ一定している。溝深は約20～30cm。出土遺物には弥生土器壺がある。弥生時代中期中葉。

出土遺物 (Fig. 84-201・202, PL. 36-201・202)

#### 壺形土器

201は鋤先状口縁をもつもので、扁平な円形浮文を貼付した口縁部外面はほぼ水平に近い。内外面とも横ナデ仕上げ。202は底部で内面、外底面ナデ、底部側面横ナデ仕上げ。他は磨滅・剥落のため調整不明。

#### その他の遺構

調査区ほぼ全面で多数の柱穴が検出された。竪穴住居跡の主柱穴も含まれていると思われるが、遺構上面の削平が著しく、柱穴配置による遺構の復原は困難であった。以下、出土遺物について述べる。

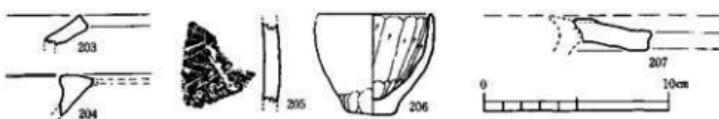


Fig. 85 柱穴出土遺物実測図

## 出土遺物 (Fig. 85, PL. 36-203~PL. 37-207)

203は短く外反する壺形土器の口縁部で、内外面とも横ナデ仕上げ。柱穴101出土。204は高壺形土器の口縁部と思われ、口縁端部が肥厚し鋤先状の口縁となるが、端部の外側への張り出しが弱く未発達である。内外面とも横ナデ仕上げ。柱穴134出土。205は外面にヘラによる羽状文を施す壺形土器の胴部。内外面とも磨滅・剥落著しく調整不明。柱穴190出土。206は手捏ねの鉢形土器で、口縁部および胴部の一部を欠損する。内輪しながら立ち上がる胴部は中位附近で直立し、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖りぎみに終る。内外面ともナデ仕上げで、内面および底部側面には連続する指圧痕が認められる。柱穴239出土。207は鋤先状口縁をもつ壺形土器で、口縁端部の斜外方への張り出しが強い。外面の平坦面には扁平な円形浮文を貼付する。内外面とも横ナデ仕上げで、特に口唇部外面は強くナデられ窪む。柱穴359出土。

## その他の出土遺物

## 1) トレンチ出土の遺物 (Fig. 86, PL. 37-208~PL. 38-233・PL. 39-234~236)

昭和42年調査時に設定したトレンチからの出土遺物であるが、包含層出土のものか遺構出土のものか判然としないため、以下、器種ごとに取り扱う。弥生時代中～後期のものがあるが中期のものが多い。

## 壺形土器 (208~213)

208は直線的に「く」の字に外反する口縁部の破片で、端部は平坦。頸部外面に扁平な断面三角形の突帯が巡り、ヘラによる刻目を施す。209は長頸壺の口縁部と思われるもので、外面には口縁端部よりやや下位に断面三角形の貼付突帯が1条巡る。210・211は鋤先状の口縁部をもつもので、210は端部内面の内側への張り出しが強い。211は口縁部外面の広い平坦面に、平面「U」字形の浮文を貼付する。口縁端部の斜外方への張り出しが強い。212は頸部の破片で、内面に内側へ突出する断面三角形の突帯が巡る。外面には断面長方形に近い扁平な幅広の粘土帯を貼付後、ヘラによる沈線を施しているため、少なくとも3条の断面三角形の突帯を貼付したようにみえる。213は少なくとも2条の断面方形の貼

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

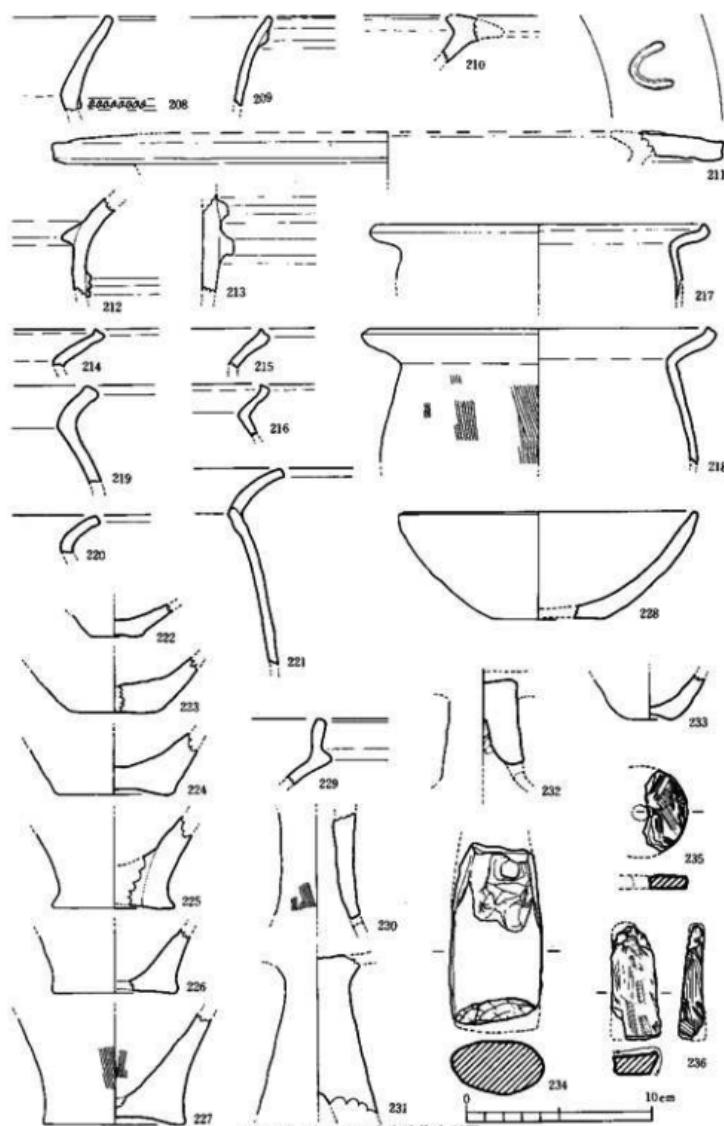


Fig. 86 トレンチ出土遺物実測図

付突帯を有する胸部の破片。208は端部内外面横ナデ、外面縦刷毛目のち横ナデ、内面横刷毛目仕上げ。211は内外面横ナデ仕上げ。212・213は突帯付近横ナデ、他はナデ調整。209・210は磨滅・剥落のため調整不明。

#### 甕形土器 (214~227)

214~218は跳ね上げ口縁をもつもので、口縁部は「く」の字状に外反するが、217は「し」字状に近く強く屈曲する。口縁端部は窪むもの(214・215)と平坦なもの(216~218)とがある。219~221は「く」の字に外反する口縁部をもつもの。219は外彎気味に短く屈曲し、胸部外面下半に煤が付着している。220は短く外反する口縁部の外面ほぼ全面に煤が付着している。221は内面に明瞭な稜をもち、外彎しながら強く屈曲する口縁部をもつ。214~220とも口縁部内外面横ナデ。内面は216~219がナデ、220が頸部付近ナデ、胸部刷毛目仕上げ。外面は217がヘラナデ、218・219・221が縦刷毛目仕上げで、216は風化のため調整不明。222~227は底部で、わずかに上げ底ないしは窪み底のものが多い。風化が著しく調整が不明瞭なものが多いが、227は胸部下半内外面を縦刷毛目、底部内外面ナデ、側面を横ナデする。223・225は内面ナデ仕上げ、224は外底部内面ナデ仕上げ。

#### 鉢形土器 (228)

浅い鉢形土器で、底部から口縁部付近まで内彎しながらほぼ同一の厚さの器壁で立ち上がる。口縁端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面横ナデで、端部付近は強くナデている。他はナデ仕上げ。

#### 高环形土器 (229~232)

229は口縁部の破片。内面への粘土帯の貼付によって口縁上半部で屈曲して上方へ立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。230~232は脚部の破片。230は長脚の円形透かしをもつもので、外面縦刷毛目仕上げを行なう。231・232は坏部へ脚柱を挿入するもので、いずれも内面ナデ仕上げを行なうが、232はヘラによる押圧整形痕が明瞭に残る。外面磨滅・剥落のため調整不明。

#### 手捏ね土器 (233)

窪み底の底部の破片。内面ナデ仕上げを行なう。

#### 石器 (234~236)

234は大型蛤刃石斧で刃・頭部を欠損する。右側面上半は自然面を残し、研磨は認められない。上半部を中心として剥落が著しい。泥質片岩製。最大幅4.9cm、最大厚2.8cm、重量224g。235は角閃石安山岩(四熊ヶ岳産)製の纺錘車で、約1/2を欠損する。正裏両面

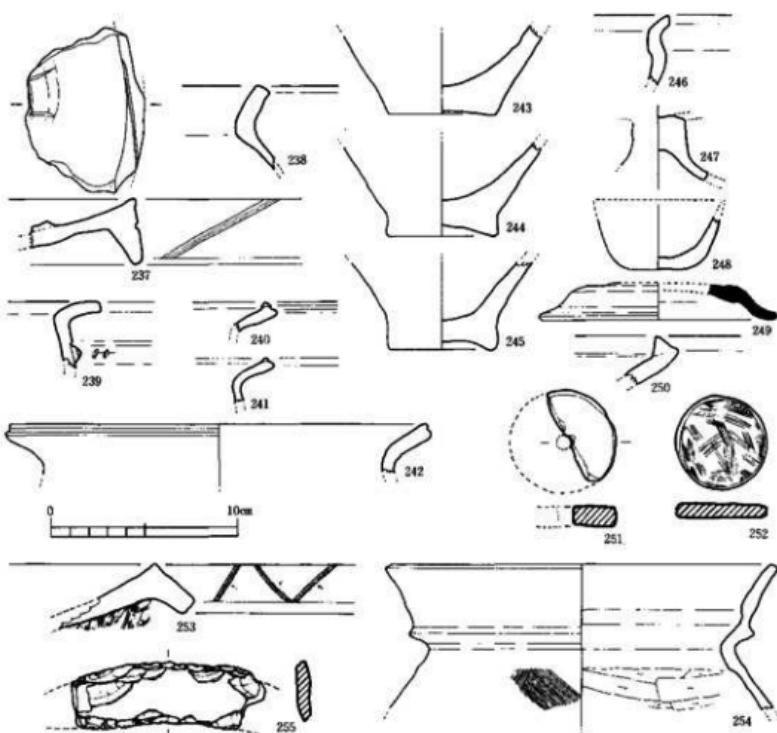


Fig. 87 トレンチおよびその他の出土遺物実測図

に不定方向からの顕著な研磨痕が認められる。復原径49.0mm、厚さ7.0mm、重量9g。236は直方体に近い形状を有する仕上げ砥と思われる砥石で、上・下両端部を欠損する。正裏両面および右側面を研砥面としている。石英斑岩製。重量22g。

2) 遺構に伴わない遺物 (Fig. 87, PL. 38-237~250+253+254·PL. 39-251·252+255)

i) 表土・擾乱層出土遺物 (Fig. 87-237~252, PL. 38-237~250·PL. 39-251·252)

a) 弥生土器

壺形土器 (237·238)

237は口部が下垂するもので、外面の平坦面にはヘラによる幅広の鋸歯文を施文する。

内面には断面台形状の扁平な円弧状の突帯を貼付する。口縁端部内外面横ナデ、以下ナデ仕上げ。238は短く「く」の字状に外反する厚手の口縁部をもつ。口縁部内外面横ナデ、外面ナデ、内面ヘラ削りを行なう。

#### 甕形土器 (239~245)

239は逆「L」字状に屈曲する口縁部をもち、頸部の下位にはヘラによる刻目を施した断面三角形の突帯が巡る。外面、口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。-240・241は跳ね上げ口縁をもつもので、240・242は端部外面が窪む。いずれも内外面横ナデ仕上げ。243~245は底部で、平底に近いもの (243) と上げ底ないしは窪み底のもの (244・245) とがある。いずれも側面横ナデ、他はナデ仕上げ。

#### b) 土師器 (246~248)

246は短く緩やかに外反する小形の甕ないしは鉢形土器の口縁部。口縁部内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。247は大きく裾広がりになる小形の高杯形土器の脚部。环部および脚部内面ナデ仕上げ、他は風化のため調整不明。248は手捏ねに近い小形の鉢形土器で、底部は不安定な平底。内外面ともナデ仕上げ。

#### c) 須恵器 (249)

口縁部が反り気味に緩やかに下降する蓋坪の蓋で、端部は丸い。口縁部内外面回転横ナデ、天井部内外面回転横ナデのち静止ナデ。

#### d) 瓦質土器 (250)

擂鉢で、口縁端部内面に断面三角形の粘土帯を貼付し、口縁端部を肥厚させる。体部内面に少なくとも2条の櫛齒状工具による擂き上げがみられる。外面横刷毛目、他は横ナデ仕上げ。

#### e) 土製品 (251)

筋錘車で約1/2を欠損しており、石製のもの (235・252) に比べてやや大ぶり厚手である。正裏両面とも焼成前穿孔がみられ、中央部に向かうにつれてわずかに山高となる。復原径57.0mm、厚さ11.5mm、重量16g。胎土に若干の微砂粒を含み、焼成良好。淡橙灰色を呈する。

#### f) 石器 (252)

筋錘車未製品と思われるもので、正裏両面に不定方向からの研磨痕が認められる。径48.5mm、厚さ8.0mm、重量23g。角閃石安山岩（四熊ヶ岳産）製。

#### ii) 出土状況不明の遺物 (Fig. 87-253~255, PL. 38-253・254・PL. 39-255)

Tab. 8 出土遺物観察表

(①口径 ②底径 ③器高) (①外面 ②内面)

法量( )は復原値

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	備考
S B - 1						
1	甕	①(18.8)	に赤い褐色 (5Y R 24)	良	好	良 好 口縁部約~%破片
S B - 2						
2	甕		淡黄褐色 (10Y R 24)	やや不良	良	好
3	甕		①に赤い褐色 ②灰色 (10Y R 24) (5Y R 24)	良	好	良 好
4	甕		に赤い褐色 (7.5Y R 24)	やや不良	良	好
5	甕		淡褐色 (2.5Y R 24)	良	好	良 好
6	甕		①に赤い褐色 ②褐色 (10Y R 24) (5Y R 24)	良	好	良 好
7	甕	②(4.6)	①に赤い褐色 ②淡黄色 (10Y R 24) (2.5Y R 24)	精	良	良 好
8	甕	②(5.6)	①(2.5Y R 24) ②(5Y R 24)	良	好	良 好 口縁部約破片
9	甕	② 7.6	赤褐色 (10R 24)	良	好	良 好
10	鉢	②(6.6)	赤褐色 (10R 24)	良	好	良 好
S B - 4						
14	甕	①(20.2)	①に赤い褐色 ②淡黄褐色 (7.5Y R 24) (10Y R 24)	良	好	良 好 口縁部約破片
S K - 1						
16	鉢	①(10.0)	に赤い褐色 (7.5Y R 24)	不	良	不 良 口縁部約破片
17	甕		赤灰色 (10R 24) ①(2.5Y R 24)	やや良好	良	好 口縁部約~%破片
18	甕	② 2.5	褐色 (2.5Y R 24)	やや不良	良	好
S K - 2						
19	甕	① 15.2	①褐色 ②淡褐色 (2.5Y R 24) (5Y R 24)	精	良	良 好
20	甕		淡褐色 (10Y R 24)	精	良	やや不良
21	甕	② 4.0	①に赤い褐色 ②明黄色 (10Y R 24) (10Y R 24)	良	好	良 好 底部約破片
22	甕	② 18.0	に赤い褐色 (7.5Y R 24)	不	良	良 好 底部約破片
S K - 3						
23	甕	①(14.2)	①褐色 ②に赤い褐色 (5Y R 24) (5Y R 24)	不	良	やや不良 口縁部約~%破片
24	甕	①(10.0)	赤褐色 (10R 24) ②黃褐色 (10Y R 24)	良	好	好 口縁部~胴部上半
25	甕	①(17.8)	に赤い褐色 (5Y R 24)	精	良	好 口縁部約破片
26	甕	①(19.4)	に赤い褐色 (7.5Y R 24)	やや不良	良	好 口縁部約破片
27	甕		①褐色 ②淡褐色 (7.5Y R 24) (10Y R 24)	不	良	良 好
28	甕	①(17.8)	に赤い褐色 (10Y R 24)	不	良	不 良 口縁部約~%破片
29	甕	①(20.6)	に赤い褐色 (5Y R 24)	不	良	不 良 口縁部約~%破片
30	甕	①(22.0)	淡褐色 (5Y R 24)	良	好	精 良 口縁部約~%破片
31	甕	①(17.2)	黄褐色 (10Y R 24) ②に赤い褐色 (5Y R 24) (7.5Y R 24)	不	良	良 好
32	甕		赤褐色 (10R 24) ②明黄色 (10Y R 24)	不	良	やや不良

(①口径 ②底径 ③器高) (①外面 ②内面) 法値( )は復原値

番号	器種	法量(cm)	色調	胎上	焼成	備考
33	壺	②(5.1)	①赤褐色 (10YR 5/6) ②明黄褐色 (10Y R 5/6)	良	好	好 底部有破片
34	壺	② 6.0	①赤褐色 (10Y R 5/6) ②浅褐色 (10Y R 5/6)	やや不良	良	好 底部有破片
35	壺		浅黄色 (2.5Y 5/6)	不良	不	良 口縁片
36	壺		に赤い褐色 (7.5Y R 5/6)		やや小良	好 口縁片
37	壺	①(18.0)	に赤い褐色 (5Y R 5/6)		やや不良	好 口縁部有破片
38	壺	①(19.3)	に赤い褐色 (5Y R 5/6)	良	好	好 口縁部有破片
39	壺	①(23.0)	①に赤い褐色 (5Y R 5/6) ②褐色 (2.5Y R 5/6)	やや不良	良	好 口縁部有破片
40	壺	①(20.6)	①に赤い褐色 (2.5Y 5/6) ②褐色 (2.5Y R 5/6)	良	好	好 口縁部有破片
41	壺	①(23.4)	褐色 (7.5Y R 5/6)	良	好	好 口縁部有破片
42	壺	① 21.0	に赤い褐色 (7.5Y R 5/6)	良	好	好 口縁部有破片
43	壺	①(27.4)	褐色 (5Y R 5/6)	良	好	精 良 口縁部有破片
44	壺	①(20.0)	褐色 (10Y R 5/6)	良	好	好 口縁部有破片
45	壺		褐色 (7.5Y R 5/6)	良	好	好 口縁片
46	壺		赤褐色 (10Y R 5/6)	良	好	好
47	壺		明赤褐色 (2.5Y R 5/6)	良	好	精 良
48	壺		に赤い黄褐色 褐色 (10Y R 5/6)	良	好	不 良
49	壺		黒褐色 (7.5Y R 5/6)	やや不良	良	好
50	壺	①(15.2)	黒灰色 (5Y R 5/6)	良	好	精 良 11縁部有破片
51	壺	①(20.0)	赤褐色 (10Y R 5/6)	良	好	好 口縁部分破片
52	壺	①(16.0)	に赤い黄褐色 褐色 (10Y R 5/6)	良	好	好 11縁部有破片
53	壺	①(23.3)	に赤い黄褐色 (10Y R 5/6)	やや不良	良	好 口縁部有破片
54	壺	①(16.0)	浅黄褐色 (10Y R 5/6)	良	好	やや不良 口縁部有破片
55	壺		暗灰褐色 (N 5/6)	やや不良	良	好 口縁片
56	壺		に赤い褐色 明黄褐色 (5Y R 5/6)	良	好	精 良 口縁片
57	壺		褐色 (2.5Y R 5/6)	やや不良	不	良 口縁片
58	壺		褐色 (10Y R 5/6)	やや不良	やや不良	口縁片
59	壺	① 22.8	明黄褐色 (10Y R 5/6)	良	好	好 口縁部有破片
60	壺		褐色 (2.5Y R 5/6)	不	良	不 良 口縁片
61	壺	①(25.7)	明褐灰色 (5Y R 5/6)	良	好	好 口縁片
62	壺		に赤い褐色 (5Y R 5/6)	良	好	好 口縁片
63	壺	①(20.6)	に赤い黄褐色 (10Y R 5/6)	良	好	良 好 口縁部有破片
64	壺	①(25.5)	褐色 (5Y R 5/6)	不	良	好 口縁部有破片
65	壺	①(13.1)	に赤い黄褐色 灰色 (10Y R 5/6)	良	好	好 口縁部有破片
66	壺		明黄褐色 (10Y R 5/6)	良	好	好 口縁片
67	壺		褐色 (2.5Y R 5/6)	精	良	精 良 口縁片

## (①口径 ②底径 ③器高) (④外面 ⑤内面)

法量( )は復原値

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	備考
68	甕	①(25.1)	褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(10Y R 5/4)	に赤い褐色 不良	良 好	口縁部汚破片
69	甕	①(25.0)	褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(5Y R 5/4)	褐色 やや不良	良 好	口縁部汚破片
70	甕		褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(7.5Y R 5/4)	に赤い褐色 不良	不 良	口縁部汚破片
71	甕		褐色 ①(7.5R 5/4)	褐色 良 好	好	口縁部汚破片
72	甕	①(24.0)	淡赤褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(7.5Y R 5/4)	に赤い褐色 不良	良 好	口縁部汚破片
73	甕	①(20.0)	明褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(5Y R 5/4)	褐色 やや不良	やや不良	口縁部汚破片
74	甕	①(14.2)	褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(7.5Y R 5/4)	に赤い褐色 良 好	良 好	口縁部汚破片
75	甕	①(14.2)	褐色 ①(5Y R 5/4) ②(7.5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	口縁部汚破片
76	甕		淡赤褐色 ①(5Y R 5/4) ②(7.5Y R 5/4)	褐色 やや不良	やや不良	口縁部上半
77	甕	②(5.0)	褐色 (10Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部
78	甕	②(6.4)	褐色 (2.5Y R 5/4)	褐色 やや不良	やや不良	底部
79	甕	②(5.0)	赤褐色 (10R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片
80	甕	②(5.6)	赤褐色 (7.5Y R 5/4)	褐色 やや不良	良 好	底部汚破片
81	甕	②(5.0)	褐色 ①(5Y R 5/4) ②(10Y R 5/4)	褐色 良 好	やや不良	底部汚破片
82	甕	②(5.6)	明褐色 ①(2.5Y R 5/4)	褐色 やや不良	やや不良	底部汚破片
83	甕	②(6.0)	褐色 ①(10R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片
84	甕	②(7.2)	浅黃褐色 ①(10Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片
85	甕	②(6.0)	褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(7.5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片
86	甕	②(6.8)	褐色 ①(7.5Y R 5/4) ②(2.5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片
87	甕	②(5.0)	褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(7.5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片
88	甕	②(6.2)	淡赤褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片
89	甕	②(5.4)	褐色 (10R 5/4) ①(7.5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	底部汚破片

## SK-4

91	壺	①(19.2)	明黄褐色 (10Y R 5/4)	良 好	良 好	口縁部汚破片
92	壺		明黄褐色 ①(2.5Y R 5/4) ②(5Y R 5/4)	良 好	不 良	口縁部下半
93	壺		褐色 ①(2.5Y R 5/4)	褐色 やや不良	やや不良	口縁部上半
94	壺		褐色 ①(5Y R 5/4)	褐色 良 好	やや不良	口縁部上半
95	甕	②(18.0)	灰黄褐色 (10Y R 5/4)	良 好	良 好	口縁部汚破片
96	甕	①(24.6)	淡赤褐色 (2.5Y R 5/4)	精 良	良 好	口縁部汚破片
97	甕		褐色 ①(2.5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	口縁部汚破片
98	甕		褐色 ①(5Y R 5/4)	褐色 良 好	やや不良	口縁部汚破片
99	甕		褐色 ①(2.5Y R 5/4)	褐色 良 好	良 好	口縁部汚破片
100	甕		褐色 ①(7.5Y R 5/4) ②(10Y R 5/4)	褐色 不 良	良 好	口縁部汚破片
101	甕	②(6.2)	褐色 (2.5Y R 5/4)	褐色 不 良	良 好	底部
102	甕	②(6.0)	褐色 (10R 5/4)	褐色 不 良	良 好	底部

## 昭和57年度の調査

(①口径 ②底径 ③器高) (①外面 ②内面)

法量( )は復原値

番号	器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	備考
103	壺	②(5.5)	①赤褐色 (10YR 5/4) ②灰色 (N 5/6)	良	好	良好 底部
104	壺	②(5.5)	①褐色 (2.5YR 5/6) ②灰色 (N 5/6)	良	好	良好 底部汚～%破片
S K - 5						
105	壺	①(10.7)	に赤い黄褐色 (10YR 5/6)	不良	不良	口縁部汚破片
106	壺	①(13.8)	①浅黃褐色 (7.5YR 4/6) ②に赤い褐色 (7.5YR 4/6)	良	好	良好 口縁部汚～%破片
S K - 6						
107	壺		①深赤褐色 (2.5YR 4/6) ②灰色 (10Y 5/6)	不良	良好	好 長頸壺側部汚破片
108	壺	② 8.0	①赤褐色 (10R 5/6) ②に赤い黄褐色 (10YR 5/6)	良好	好	良好 底部汚破片
S K - 7						
109	壺	①(19.0)	に赤い褐色 (7.5YR 5/6)	良	好	良好 口縁部汚破片
110	壺	①(22.8)	褐色 灰褐色 (5YR 5/6)	やや不良	やや不良	口縁部汚破片
111	壺		褐色 (5YR 5/6)	良	好	不良 口縁部汚片
112	壺		①に赤い褐色 (5YR 5/6) ②褐色 (2.5YR 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚片
113	壺	②(6.7)	赤褐色 (10R 5/6)	良好	好	やや不良 底部片
114	高壺		黄褐色 (10YR 5/6)	稍	良	やや不良 脚部上半
S K - 8						
115	壺		浅黄色 (7.5YR 5/6)	やや不良	やや不良	口縁片
116	壺		浅褐色 (7.5YR 5/6)	稍	良	不良 口縁片
117	壺		①浅赤色 (2.5YR 5/6) ②浅褐色 (10R 5/6)	良好	好	良好 口縁片
118	壺	② 5.6	①赤褐色 (10R 5/6) ②灰色 (2.5Y 5/6)	やや不良	やや不良	底部
S K - 9						
129	壺	①(18.0)	に赤い褐色 (7.5YR 5/6)	稍	良	好 口縁部汚～%破片
130	壺	①(18.5)	に赤い黄褐色 (10YR 5/6)	良	好	良好 口縁部汚～%破片
131	壺	①(22.0)	①に赤い褐色 (7.5YR 5/6) ②に赤い黄褐色 (10YR 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚破片
132	壺	①(24.0)	①暗灰色 (5YR 5/6) ②深赤褐色 (2.5YR 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚～%破片
133	壺	① 25.8	①に赤い黄褐色 (10YR 5/6) ②褐色 (7.5Y 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚破片
134	壺	①(23.6)	に赤い褐色 (5YR 5/6)	やや不良	良	好 口縁部汚破片
135	壺	①(20.8)	①灰褐色 (2.5YR 5/6) ②浅黄色 (2.5Y 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚～%破片
136	壺	①(27.2)	灰褐色 (5YR 5/6) に赤い褐色 (7.5YR 5/6)	やや不良	良	好 口縁部汚破片
137	壺		に赤い黄褐色 灰褐色 (10YR 5/6) (7.5YR 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚片
138	壺	①(22.2)	灰褐色 (2.5YR 5/6) に赤い褐色 (7.5YR 5/6)	不良	良	好 口縁部汚～%破片
139	壺	①(27.4)	に赤い褐色 (7.5YR 5/6) 浅黄色 (2.5Y 5/6)	やや不良	良	好 口縁部汚破片
140	壺	①(12.2)	褐色 (7.5YR 5/6) ①褐色 (7.5YR 5/6) ②褐色 (10YR 5/6)	不良	良	好 口縁部汚～%破片
141	壺	①(13.4)	粉色 (7.5YR 5/6) ①褐色 (7.5YR 5/6) ②浅黄色 (10YR 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚～%破片
142	壺	① 23.0	①灰褐色 (2.5YR 5/6) ②浅黄色 (10YR 5/6)	良好	好	良好 口縁部汚破片

## 山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

番号	器種	法量(cm)	(①口径 ②底径 ③器高) (④外面 ⑤内面)		胎土	焼成	備考	法量( )は復原値
			色調	状態				
143	壺	①(22.8)	褐色 (2.5YR 5/4)	良好	不良	口縁部分破片		
144	壺	①(15.4)	黒褐色 (2.5YR 3/4)	やや不良	良好	口縁部一部欠損		
145	壺	②(7.0)	褐色 (2.5YR 5/4) ②暗灰色 (10YR 5/4)	やや不良	良好	好	底部	
146	壺	②(7.6)	赤褐色 (10R 5/4) ②黑色 (2.5YR 3/4)	良好	良好	好	底部%~%破片	
147	壺	②(6.8)	褐色 (5YR 5/4) ②淡赤褐色 (2.5YR 5/4)	良好	良好	好	底部%~%破片	
S K - 10								
119	壺	②(7.5)	褐色 (2.5YR 5/4) ②淡黄色 (2.5YR 5/4)	やや不良	良好	好	底部%~%破片	
120	壺	②(6.4)	に赤い黄褐色 (10YR 5/4)	良好	良好	好	底部%~%破片	
121	壺		に赤い褐色 (5YR 5/4)	良好	良好	好	口縁片	
122	壺		褐色 (5YR 5/4)	不良	やや不良	好	口縁片	
123	壺	①(21.0)	淡黃褐色 (10YR 5/4)	やや不良	良好	好	口縁部分破片	
S K - 12								
124	壺	①(22.4)	に赤い黄褐色 (10YR 5/4)	良好	良好	好	口縁部分破片	
125	壺		浅黄色 (2.5YR 5/4)	良好	良好	好	口縁片	
126	壺		①灰白色 (2.5YR 5/4) ②灰褐色 (2.5YR 5/4)	良好	良好	好	口縁片	
127	壺		灰褐色 (10YR 5/4)	やや不良	良好	好	口縁片	
128	壺	①(12.8)	淡黄色 (2.5YR 5/4)	やや不良	やや不良	好	口縁部分破片	
S K - 13								
148	壺	①(32.2)	浅黄色 (2.5YR 5/4)	不良	良好	好	口縁部分%~%破片	
149	壺	①(27.0)	に赤い黄褐色 (10YR 5/4)	やや不良	良好	好	口縁部分%~%破片	
150	壺		に赤い黄褐色 (10YR 5/4)	良好	良好	好	胴部片	
151	壺	①(30.8)	灰色 (5YR 5/4) ②浅黄色 (2.5YR 5/4)	良好	良好	好	口縁部分%~%破片	
152	壺	①(22.0)	に赤い黄褐色 (10YR 5/4)	良好	良好	好	口縁部分%~%破片	
153	壺		①淡黄色 (10YR 5/4) ②に赤い黄褐色 (10YR 5/4)	良好	良好	好	口縁片	
154	壺	①(24.2)	に赤い黄褐色 (10YR 5/4)	精良	やや不良	好	口縁部分%~%破片	
155	壺		に赤い黄褐色 (10YR 5/4) ②褐色 (5YR 5/4)	良好	良好	好	口縁片	
S K - 14								
156	壺	②(6.7)	①赤褐色 (10R 5/4) ②褐色 (2.5YR 5/4)	不良	良好	好	底部%~%破片	
S K - 15								
157	壺	①(17.0)	①淡褐色 (5YR 5/4) ②淡黄色 (2.5YR 5/4)	良好	良好	好	土器口縁部分%~%破片	
S K - 16								
158	壺		赤灰色 (10R 5/4) ②褐色 (2.5YR 5/4)	良好	やや不良	好	口縁片	
159	高壺		赤褐色 (7.5YR 5/4) ②褐色 (5YR 5/4)	精良	良好	好	脚部片	
S K - 17								
160	壺		淡褐色 (5YR 5/4)	不良	やや不良	好	長頸壺口縁片	

## 昭和57年度の調査

番号	器種	法量(cm)	(①口徑 ②底径 ③器高) (④外面 ⑤内面)		胎	上	焼成	備考	法量( )は復数
			色調						
161	甕		褐色 (10Y R 5)	良 好	良 好	好	好	口縁片	
162	甕		褐色 (10Y R 5)	良 好	良 好	好	好	口縁片	
163	甕		褐色 (5Y R 5)	精 良	精 良	良	好	口縁片	
164	甕		①褐色 (7.5Y R 5) ②黃褐色 (2.5Y R 5)	不 良	良 好	やや不良	好	口縁片	
165	甕	①(21.2)	に似い褐色 (5Y R 5)	良 好	良 好	好	好	口縁部1%破片	
166	甕	②(8.2)	①に似い褐色 (10Y R 5) ②褐色 (N 3)	不 良	良 好	良 好	好	底部片	
167	甕	②(7.2)	褐色 (2.5Y R 5)	良 好	良 好	好	好	底部1%~5%破片	
168	甕	②(7.2)	褐色 (2.5Y R 5)	良 好	良 好	好	好	底部1%~5%破片	
169	鉢	② 7.8	①淡黄色 (2.5Y 5) ②に似い黄褐色 (10Y R 5)	良 好	良 好	良 好	好	底部另破片	
S K - 18									
171	壺		①淡黄色 (2.5Y 5) ②灰色 (5Y 5)	に似い青褐色 (10Y R 5)	精 良	良 好	好	制部片	
172	甕		に似い褐色 (5Y R 5)	良 好	良 好	好	好	口縁片	
173	甕		に似い褐色 (5Y R 5)	良 好	良 好	好	好	口縁片	
174	鉢	②(5.8)	淡黃褐色 (10Y R 5)	良 好	良 好	好	好	底部1%破片	
175	鉢	①(9.8)	①褐色 (2.5Y R 5) ②黑色 (N 3)	良 好	良 好	好	好	高坏坏部片	
S K - 21									
176	壺		淡黃褐色 (2.5Y R 5)	良 好	やや不良	良 好	好	口縁片	
177	壺		淡褐色 (5Y R 5)	良 好	良 好	好	好	頸部片	
178	甕		淡黄色 (2.5Y 5)	不 良	不 良	不 良	好	口縁片	
S K - 22									
179	壺		①淡黃褐色 (10Y R 5) ②灰色 (5Y 5)	②灰色 (5Y 5)	やや不良	不 良	良 好	口縁片	
180	壺	②(7.8)	①(5Y R 5) ②灰色 (7.5Y 5)	灰色 (7.5Y 5)	良 好	やや不良	好	底部片	
181	甕	② 4.6	赤褐色 (10R 5)	明褐色灰 (7.5Y R 5)	やや不良	やや不良	好	底部1%~5%破片	
S K - 23									
182	壺	①(15.0)	淡褐色 (5Y R 5)	良 好	良 好	好	好	口縁部1%破片	
183	壺	②(9.6)	淡褐色 (2.5Y 5)	良 好	不 良	不 良	好	底部破片	
184	甕	①(23.6)	①淡黃褐色 (10Y R 5) ②灰色 (N 3)	灰色 (N 3)	良 好	良 好	好	口縁部1%~5%破片	
185	甕		淡黃褐色 (10Y R 5)	良 好	不 良	不 良	好	口縁片	
186	甕		明黃褐色 (10Y R 5)	良 好	やや不良	好	好	口縁片	
187	鉢	①(15.8)	に似い黃褐色 (10Y R 5)	に似い黃褐色 (10Y R 5)	やや不良	良 好	好	高坏部	
188	高坏	①19.2	①に似い黃褐色 (10Y R 5) ②淡褐色 (2.5Y 5)	淡褐色 (2.5Y 5)	やや不良	良 好	好	坏部	
S K - 24									
189	甕		淡黄色 (2.5Y 5)	精 良	良 好	好	好	頸部片	
S K - 25									
190	甕		赤褐色 (10R 5)	に似い褐色 (5Y R 5)	やや不良	良 好	好	口縁片	

## 山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

番号	器種	法量(cm)	(①)口徑 ②底径 ③器高)		(①外面 ②内面)		備考
			色調	胎土	焼成		
191	壺		①褐色 (5Y R 5/4) に赤い黄褐色 (10Y R 3/4)	良好	良好	良好	口縁片
SK-26							
192	壺	①(11.0)	褐色 (7.5Y R 5/4)	良好	良好	良好	口縁片
193	壺	①(17.0)	浅褐色 (2.5Y 5/4)	やや不良	良好	良好	口縁部汚破片
194	壺	②(5.0)	褐色 (5Y R 5/4)	良好	良好	良好	底部汚破片
195	鉢	①(15.5)	灰褐色 (10Y R 5/4) に赤い黄褐色 (10Y R 3/4)	良好	良好	良好	口縁部汚破片
SK-41							
196	壺		褐色 (2.5Y R 5/4)	やや不良	不良	不良	口縁片
SD-1							
197	壺		に赤い赤褐色 (2.5Y R 5/4)	不良	不良	不良	口縁片
198	壺		明灰褐色 (7.5Y R 5/4) ②淡黄色 (2.5Y 5/4)	やや不良	やや不良	不良	側部片
SD-2							
199	壺		灰白色 (2.5Y 5/2)	不良	やや不良		
200	高坏	①(25.5)	淡褐色 (5Y R 5/4)	良好	良好	良好	脚部汚破片
SD-3							
201	壺		淡褐色 (5Y R 5/4)	やや不良	良好	良好	口縁片
202	壺	②7.8	①赤色 (10R 5/4) ②褐色 (2.5Y R 5/4)	不良	良好	良好	底部汚破片
柱穴							
203	壺		淡褐色 (5Y R 5/4)	良好	良好	良好	口縁片
204	壺		1.赤い褐色 (7.5Y 5/4)	やや不良	やや不良	不良	口縁片
205	壺		淡褐色 (2.5Y R 5/4)	精良	やや不良	不良	側部片
206	鉢	①6.2②2.5③5.3	褐色 (2.5Y R 5/4)	精良	やや不良		
207	壺		①淡黄色 (2.5Y 5/4) ②黄褐色 (10Y R 5/4)	良好	良好	良好	口縁片
トレンチ							
208	壺		①に赤い赤褐色 (5Y R 5/4) ②暗褐色 (2.5Y R 5/4)	良好	精良	良好	口縁片
209	壺		褐色 (2.5Y R 5/4)	やや不良	不良	不良	長頸壺
210	壺		褐色 (2.5Y R 5/4)	良好	不良	不良	口縁片
211	壺	①(36.2)	に赤い黄褐色 (10Y R 5/4)	良好	良好	良好	「U」字形の浮文貼付
212	壺		①赤褐色 (2.5Y R 5/4) ②灰褐色 (5Y R 5/4)	良好	良好	やや不良	頸部片
213	壺		に赤い黄褐色 (10Y R 5/4) に赤い褐色 (2.5Y R 5/4)	精良	精良	良好	側部片
214	壺		淡黄褐色 (10Y R 5/4) 灰褐色 (2.5Y R 5/4)	精良	やや不良	良好	口縁片
215	壺		淡黄褐色 (7.5Y R 5/4) 灰褐色 (10Y R 5/4)	不良好	良好	良好	口縁片
216	壺		に赤い褐色 (2.5Y R 5/4)	良好	やや不良	良好	口縁片
217	壺	①(17.6)	灰褐色 (5Y R 5/4) に赤い褐色 (2.5Y R 5/4)	良好	良好	良好	口縁部汚破片
218	壺	①(18.2)	に赤い褐色 (10Y R 5/4)	良好	精良	良好	口縁部汚破片

(①口径 ②底径 ③器高) (④外面 ⑤内面)

法禁( )は復原施

番号	器種	法量(cm)	色調		胎土	焼成	備考
			灰黃褐色 (10Y R 5/6)	淡黃色 (2.5Y R 5/6)			
219	甕	—	灰黃褐色 (10Y R 5/6)	良 好	精 良	口縁片	
220	甕	—	①灰黃褐色 (10Y R 5/6) ②淡黃色 (2.5Y R 5/6)	不良	やや不良	口縁片	
221	甕	—	①灰褐色 (5Y R 5/6) ②にせい青褐色 (10Y R 5/6)	精 良	良 好	口縁片	
222	甕	②(2.5)	淡 黃 色 (2.5Y R 5/6)	良 好	やや不良	鉢か、底部片	
223	甕	②(4.0)	①にせい青褐色 (10Y R 5/6) ②明黄褐色 (2.5Y R 5/6)	不良	良 好	底部片破片	
224	甕	②(5.5)	①にせい青褐色 (10Y R 5/6) ②灰褐色 (2.5Y R 5/6)	不良	良 好	底部片破片	
225	甕	②(5.8)	①褐色 (2.5Y R 5/6) ②にせい褐色 (7.5Y R 5/6)	不良	やや不良	底部片破片	
226	甕	②(6.5)	①にせい青褐色 (10Y R 5/6) ②にせい褐色 (7.5Y R 5/6)	良 好	良 好	底部片破片	
227	甕	② 7.6	①褐色 (2.5Y R 5/6) ②浅青褐色 (10Y R 5/6)	良 好	良 好	底部片破片	
228	甕	①(15.6)	浅青褐色 (10Y R 5/6)	やや不良	良 好	口縁部片破片	
229	高坏	—	①にせい褐色 (5Y R 5/6) ②浅青褐色 (10Y R 5/6)	精 良	やや不良		
230	高坏	—	にせい青褐色 (10Y R 5/6)	良 好	良 好	脚部片破片	
231	高坏	—	浅青褐色 (10Y R 5/6)	良 好	やや不良	脚部片破片	
232	高坏	—	浅青褐色 (10Y R 5/6)	精 良	良 好	脚部片破片	
233	手鉢 上鉢	② 2.0	灰 色 (5Y R 5/6)	良 好	やや不良		

表上・壊乱嘴出上遺物

237	甕	—	①明黄褐色 (10Y R 5/6) ②赤褐色 (2.5Y R 5/6)	やや不良	やや不良	口縁片	
238	甕	—	①にせい赤褐色 (3.5Y R 5/6) ②(2.5Y R 5/6)	良 好	良 好	口縁片	
239	甕	—	淡 橙 色 (5Y R 5/6)	良 好	良 好	口縁片	
240	甕	—	にせい橙色 (5Y R 5/6)	良 好	やや不良	口縁片	
241	甕	—	浅黃褐色 (10Y R 5/6)	良 好	良 好	口縁片	
242	甕	①(22.2)	にせい黄褐色 (10Y R 5/6)	やや不良	良 好	口縁部片破片	
243	甕	②(5.8)	①浅黃褐色 (7.5Y R 5/6) ②淡黄色 (2.5Y R 5/6)	良 好	良 好	底部片破片	
244	甕	②(5.6)	①にせい褐色 (7.5Y R 5/6) ②灰褐色 (5Y R 5/6)	精 良	精 良	底部片破片	
245	甕	②(5.5)	①灰褐色 (2.5Y R 5/6) ②褐色 (10Y R 5/6)	良 好	良 好	底部片	
246	甕	—	淡 黄 色 (2.5Y R 5/6)	不 良	不 良	鉢か	
247	高坏	—	浅 黄 色 (10Y R 5/6)	良 好	不 良	上部器	
248	鉢	②(3.0)	淡 黄 色 (2.5Y R 5/6)	精 良	やや不良	土師器	
249	蓋	①(12.2)	青 灰 色 (5B G 5/6)	良 好	良 好	須恵器	
250	擂鉢	—	暗 灰 色 (N 3/6)	良 好	やや不良	瓦質土器	
253	甕	—	にせい黄褐色 (10Y R 5/6)	良 好	良 好		
254	甕	①(20.0)	灰 灰 色 (10Y R 5/6)	精 良	精 良		

253は口縁部が下垂する壺形土器で、口縁部平坦面に刷毛目原体によるやや乱れた鋸歯文を施す。口縁部内外面横ナデ、内面ナデ、外面繊細な縦刷毛目仕上げ。254はいわゆる山陰系の複合口縁をもつ壺で、頸部が屈曲し、さらに外上方へわずかに外彎しながら大きく開く口縁部をもつ。口縁部、頸部内外面横ナデ、胴部外面繊細な斜め方向の刷毛目、内面ヘラ削り。在地の土器と胎土が異なり、搬入品の可能性がある。

255は厚さ0.8cmを測る薄手の石鎌で、刃・基部を欠損する。刃部の彎曲は極めて小さく、正裏両面からの粗い調整剝離によって刃部を造出する。背部は主に裏面からの粗い剝離によって素材を変形させている。正裏両面中央部は素材面をそのまま残している。緑色片岩製。重量38g。

## [2] 小結

昭和57年度の調査で検出した遺構は、上述のように竪穴住居跡7棟、土塙33基、溝3条柱穴多数である。竪穴住居跡の内訳は弥生時代中期前半～中頃1棟、中期後半2棟、後期後半～古墳時代初頭頃の3棟、および中期のものと思われるもの1棟である。

中期のものはいずれも平面形態円形で、主柱は前半～中頃のものには8本、後半のものには6～7本が配置されているものと考えられる。

中期前半～中頃の第4号住居跡は8本の主柱を有し、床面積は推定約50m<sup>2</sup>と大形である。<sup>5)</sup><sup>6)</sup><sup>7)</sup><sup>8)</sup>山口盆地内では西遺跡、堂道遺跡、朝田墳墓群第Ⅱおよび第Ⅲ地区で弥生時代の竪穴住居が検出されている。西遺跡では前期末～中期初頭の円形プランをもつ第17号住居跡の床面積は約10.7m<sup>2</sup>で、主柱6本が不規則に配置されている。中期前半のものには朝田墳墓群第Ⅱ地区、第4、5号竪穴住居跡がある。いずれも平面形態は円形で、4号住居跡は8本の主柱をもち床面積推定20.4m<sup>2</sup>、5号住居跡は7本の主柱をもち床面積推定47.2m<sup>2</sup>で、中期前半の段階で住居規模の大形化が進行している。遺跡保存地区第4号住居跡も盆地内各住居跡同様、中期前半～中頃にかけて大形化する住居の一形態と考えられる。

中期後半の住居規模は、第1号住居跡が床面積19.0m<sup>2</sup>、第2号住居跡が53.8m<sup>2</sup>である。<sup>9)</sup>主柱間床面積は、前者が10.6m<sup>2</sup>、後者が19.9m<sup>2</sup>で、床面積に占める割合は前者55.8%、後者57.2%と住居規模は異なるが、ほぼ同じ主柱間床面積を有している。考察で述べるが、佐波川流域に分布する中期後半の防府市井上山、下右田、奥正権寺Ⅰの各遺跡ではこの比率が40%以下の住居が大半で、遺跡保存地区で検出された各住居の主柱が同時期の他遺跡の住居に比べより周壁に近く存在していることを示している。

山口盆地内では他に中期後半の住居の検出例はないが、後期前半では西遺跡第16号住居跡で床面積15.4m<sup>2</sup>、堂道遺跡で床面積15m<sup>2</sup>の住居がある。また、後期末では朝田墳墓群第Ⅱ地区第1号住居跡の12m<sup>2</sup>から第10号住居跡の21.5m<sup>2</sup>までくらいの床面積をもつ一群と、西遺跡第14号住居跡のように床面積36m<sup>2</sup>の大形の一群とがある。中期後半にピークに達する床面積規模の大形化した住居の一群は、西遺跡、堂道遺跡にみられるように、方形住居が出現する後期前半以降はやや規模を減じつつも、10~20m<sup>2</sup>前後の床面積規模の一定した一群とは規模を異にする住居として、後期末まで営まれていたことが窺われる。

炉跡は遺跡保存地区では住居に付設された一般的な施設で、第1・2・3号住居跡では床面は中央、第7号住居跡では中央を外れ周壁に近い位置に営まれている。山口盆地内では西、堂道、朝田墳墓群第Ⅱ地区の各遺跡で後期前半までは炉が住居床面に造出されており、また、遺跡保存地区第2号住居跡床面で作業台と考えられる台石が出土していることから、盆地内では集落内での日常生活的な生産、消費は各住居単位で行なわれていたともみることもできる。しかし、中期後半を主体とする井上山遺跡、前期末~後期末の阿東町<sup>13)</sup>突抜遺跡では、住居内に炉が認められず、野外炊飯を行なう生活共同体としての単位集団の存在が想定されている。

いずれにしても、昭和57年度の調査分だけでは遺跡保存地区で検出されている21棟の住居の1/3にしかすぎず、遺跡保存地区集落全体の構造さらには山口盆地内の各集落との対比は、今後の整理、類例の増加を待って言及することにしたい。

土壙は弥生時代中期前半から古墳時代前期にかけてのもの33基が検出された。その内訳は中期前半~中頃4基、中期後半7基、後期前半4基、後期後半2基、後期終末(庄内併行期)<sup>14)</sup>3基のほか、中期5基、不明5基である。各時期とも平面形態長楕円形に近いものが多いが、基本的に不整形である。規則的な分布状況は示しておらず、住居跡との関係については十分な資料に乏しい。しかし、調査区北半部に集中する傾向があり、特に、後期終末の土壙は住居跡も含めて調査区北端部および西端部に集中分布している。昭和58年度<sup>14)</sup>に実施したラグビー場防球ネット設置に伴う調査でこの時期の方形竪穴住居1棟が検出されていることからも、調査区外北・西方にもこの時期の遺構が埋存している可能性が十分に考えられる。また、同一時期の他の遺構との切り合いは少なく、わずかに中期後半の第1号住居跡と第4号土壙、中期前半の第3号溝と第7号土壙、後期終末の第5号住居跡と第15号土壙が切り合う程度である。

溝は弥生時代中期中葉1条、古墳時代前期(4C後半)1条および弥生時代中期と思わ

れるもの1条の計3条を検出した。溝底レベルから判断すると、前二者は調査区東端部を南東から北西に、後者は調査区西端部を南から北に貫流していたものと考えられる。第1・3号溝とも南端部付近で南ないしは南西方向に流路を変えており、旧地形に対応した掘削の結果かもしれない。

出土遺物には弥生時代中期後半～後期前半を中心とした多量の土器・石器がある。特に、第3号土壙からは後期前半の大量の土器が出土した。壺形土器には短く緩やかに外反する口縁部をもち、わずかに肥厚させた端部外面にヘラによる凹線風の沈線を刻むものがあるが、量的に多くはなく、胸のほとんど張らない「く」の字状のやや長めの口縁部をもつものが大半を占める。逆「L」字形に強く屈曲する口縁部をもつものも若干ではあるが共伴する。壺形土器は少ないが大きく開く口縁部をもち、肥厚させた端部外面に凹線風の沈線を1条刻むものがある。また、頸部外面に扁平な幅広の粘土帯を貼付し、ヘラによる沈線を刻んで数条の突帯風に仕上げるものもある。底部は窪み底ないしはやや上げ底のものと不安定な平底のものとがあるが、前者の方が優位を占める。また、やや発達した複合口縁をもつ壺形土器も共伴しており、第3号土壙出土土器にはやや時期幅があるものと考えられる。第9号土壙からは口縁部を斜上下両方に拡張させ、口縁端部外面に幅広の施文帯を有する壺形土器があり、円形浮文を貼付している。共伴する壺形土器は後期前半の特徴をもっており、前半でも比較的古い様相を示すものと考えられる。

土器以外の出土遺物には碧玉製管玉、砥石、台石（作業台）が、中期後半の第2号住居跡から出土している。先述したように、この住居は同時期併存したと思われる第1号住居跡に比べ床面積約54m<sup>2</sup>と規模の点での大形化を指摘しうる。また、第1・2号住居跡とも炉を造出しており、共同炊飯を行なった形跡は乏しく、消費面からは各住居単位での作業が行なわれたことを暗示している。なお、遺構には伴わないが石製・土製の各紡錘車のほか、綠泥石英片岩製の石鎌が出土しており、石庖丁が出土していないことが注目される。

以上のように、昭和57年度の調査によって遺跡保存地区の集落は高地性集落として位置づけられる朝田墳墓群第Ⅱ地区での中期後半～後期末の集落を除けば、県内でも有数の低地に立地する弥生時代中期後半から後期前半を中心とする集落であることが明らかになった。しかし竪穴住居跡は第2次調査以降の対象となる遺跡保存地区南側部分を中心とした範囲でも確認されていることから、時期的な竪穴住居跡・集落の分布・構造の変遷については稿を改めて述べることにしたい。なお、調査にあたっては人文学部考古学研究室の多大な援助を受けた。記して謝意を表します。

## 4 考 察 一 弥生時代堅穴住居跡の各属性について

## はじめに

近年の相次ぐ諸開発は衰えを見せず、しかもいまだ規模・件数とも増加の一途をたどっている。こうした状況は県下においても例外ではなく、大規模開発の洗礼を受け多数の遺跡が調査されている。それに伴い弥生時代の集落遺跡の調査資料も蓄積され、県下で堅穴住居跡が検出された遺跡数も約50遺跡を数え、その棟数も約220棟にのぼる。集落の立地は低地、台地および低丘陵上に営まれるものほか、弥生時代社会の生産活動のなかで大きなウエイトを占める水田耕作や日常生活に不適な沿岸部や丘陵尾根上、山腹あるいは山頂などの高所に立地する北迫、井上山、岡山、岡原の各遺跡のような、いわゆる高地性集落（高地性遺跡）など、幾つかの類型に区分することができる。また、これらのなかには防御的施設あるいは居住区画などの機能をもつと考えられている環濠を巡らす例もあり、集落構造の要素は極めて多岐にわたっている。

小稿の目的は、弥生時代における社会の構造要素と不可分な集落類型を抽出するにあたって、その一つの手段として、大きく九つの水系単位に所在する県内の堅穴住居を概観し、その構造的属性と考えられる平面形態・主柱穴数・床面積および主柱間床面積等から、各水系単位における住居構造の時期的変遷についての問題点を整理することにある。

作業を進めるにあたって、各河川流域に分布する集落遺跡のうち、上記の堅穴住居の各属性が比較的良好な状態で検出された遺跡を中心に抽出した。すなわち、綾羅木川流域では伊倉遺跡、石原遺跡、掛淵川流域では高畠遺跡、木屋川流域では上原遺跡、坂ノ上遺跡、樅野川流域では吉田遺跡、西遺跡、堂道遺跡および朝田墳墓群、佐波川流域では右田・一丁田遺跡、下右田遺跡、大崎遺跡、奥正椎寺遺跡および井上山遺跡、末武川流域では宮原遺跡、御屋敷山遺跡、島田川流域では追追遺跡、岡山遺跡、天王遺跡、岡原遺跡に加えて熊毛半島の吹越遺跡、松尾遺跡、阿武川流域では坂手沖尻遺跡、突抜遺跡、馬場遺跡、宮ヶ久保遺跡である。なお、このうち井上山遺跡、吹越遺跡および松尾遺跡などはいずれも時間的、空間的にみて近接する各河川流域の集落と密接なかかわりあいをもっていたことが予想されるため、あえて各流域区分内に集約した。

## 各流域の集落遺跡

## ①綾羅木川流域

下関市伊倉遺跡は綾羅木川左岸に位置し、標高約139mの火の見山から北へ派生する標高約15mの低丘陵上に立地する。前面には綾羅木川によって形成された沖積低地を臨み、遺跡は低丘陵との傾斜変換点付近に所在する。過去2回の調査が実施されており、遺跡のひろがりは現在の伊倉集落を包括する範囲に及ぶものと考えられている。<sup>(15)</sup> 1970年の調査では、後期前半1棟、後半～終末4棟の堅穴住居跡に加え、中期前半を主体とする約70基の袋状堅穴が検出されている。また、1980年の調査は前回調査地点の東方約500mで行なわれ、前期末～中期初頭の袋状堅穴13基が検出されている。<sup>(16)</sup> 綾羅木川流域にはこのほか前期末～中期初頭の袋状堅穴900基以上が検出された綾羅木郷遺跡をはじめ、細形銅劍・多紐細文鏡が出土した梶栗浜遺跡などの前～中期を主体とする集落跡、埋葬跡が知られているが、当該期の堅穴住居跡の検出例はない。

下関市石原遺跡は伊倉遺跡の北東約1.5km、綾羅木川右岸の標高約11mの低丘陵上に立地する後期末の集落跡である。堅穴住居跡14棟が検出されているが、後世の削平によって壁溝のみが残存しているものが多い。

## ②掛瀬川流域

県内北～北西部の沿岸地域では弥生時代の集落遺跡の調査例が乏しく、その実態はいまだ不明瞭な点が多い。大津郡日置町高畠遺跡はそのうちの数少ない当該期の集落遺跡で、

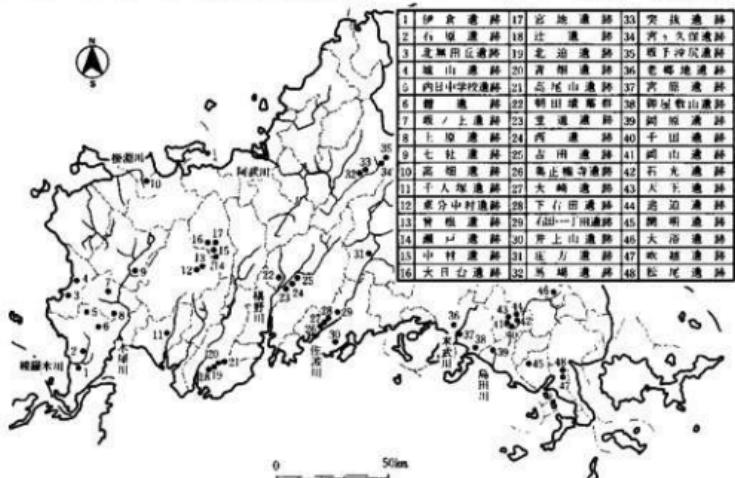


Fig. 88 主な弥生時代の堅穴住居跡検出遺跡分布図

## 考 察

掛瀬川の形成した日置平野の南部に位置し、標高約60m、周囲の扇状地との比高約5mの河岸段丘状の台地縁辺部に立地する。弥生時代の竪穴住居跡は切り合い関係が著しく、中期後半1棟、後期末～古墳時代初頭6棟、不明3棟の計10棟が検出された。<sup>20)</sup>後世の削平により周壁が消失し、壁溝のみが残存しているものが多い。なお、後期末のDW1からはガラス小玉2点とともに青銅器片が出土している。

### ③木屋川流域

上原、坂ノ上両遺跡とも、田部盆地を開拓する木屋川右岸に所在する。豊浦郡菊川町上原遺跡は田部盆地の南東端、標高約33mの洪積台地上に立地し、周囲の沖積低地との比高は約19mである。前期後半～末の竪穴住居跡4棟が検出されており、調査区内には同時期の貯蔵穴57基のほか貯蔵穴群を囲繞するかのように溝が巡っている。<sup>21)</sup>同坂ノ上遺跡は上原遺跡の北東約2km、標高約20m、低地との比高約3mの洪積扇状地に立地する前期末～中期初頭の集落跡で、土壤・溝とともに2棟の竪穴住居跡が検出されている。<sup>22)</sup>

### ④樺野川流域

標高約12.5mの沖積低地上に立地する山口市西遺跡では前期末～中期初頭1棟、後期末および後期に属すると思われるもの各1棟の竪穴住居跡のほか、前期末～中期前半の土壤30基が検出されている。西遺跡同様、樺野川左岸に位置する山口市堂道遺跡は標高約23mの洪積扇状地に立地しており、後期前半の竪穴住居跡1棟が検出されている。また、樺野川右岸の標高約40～45m、周囲の沖積低地との比高約30mの丘陵頂部から斜面にかけて立地する山口市朝田墳墓群では第Ⅱ地区および第Ⅲ地区で集落跡が検出されている。<sup>23)</sup>第Ⅱ地区では計11棟の竪穴住居跡が検出されたが、これらは丘陵斜面をL字状にカットしたのち下位を埋め立てて床面を造出するもので、その内訳は中期前半～中頃2棟、後期末7棟および後期末と考えられるもの3棟である。また、南北斜面には標高約40mの等高線に沿って幅約2～3m、深さ約1～1.5mの中期前半～中頃の溝が巡っており、内部に同時期の住居跡2棟および貯蔵用竪穴20基が分布している。さらに第Ⅲ地区の北約250mの丘陵上に立地する第Ⅲ地区では後期の竪穴住居跡1棟が検出されている。

### ⑤佐波川流域

佐波川右岸、標高約12mの沖積低地上に立地する防府市右田・一丁田遺跡では、中期前半と中期後半各1棟、後期前半2棟、後期後半～末10棟および時期不明のもの2棟の計16棟の竪穴住居跡が検出されている。また、中期後半の土壤や後期の溝も検出されているが竪穴住居跡との関連は不明瞭である。右田・一丁田遺跡の南西約300mに位置する防府市下

右田遺跡では1976年から4次にわたる調査が実施されており、遺跡の東端部を中心に弥生時代の集落遺構が分布している。堅穴住居跡は標高約10mの沖積台地上に営まれており、第1次調査で中期後半1棟、第3次調査で中期後半～後期前半4棟とともに土壙、溝が検出されている。<sup>27)</sup>下右田遺跡の西約2km、標高約20～25mの洪積台地上に立地する防府市奥正権寺遺跡では中期後半の堅穴住居跡2棟のほか、同時期の土壙、溝が検出されている。<sup>28)</sup>また、奥正権寺遺跡の南東に近接した標高約60～70m、南に開けた水田面との比高約55mの丘陵頂部には大崎遺跡が所在する。中期後半の堅穴住居跡5棟、袋状堅穴、溝が検出されており、丘陵北～南の斜面上に幅約1～3m、深さ0.5～1mの溝が巡り、環濠内外に堅穴住居跡と土壙が検出されている。環濠出土土器と環濠内に営まれた数基の袋状堅穴からの出土土器とに接合関係が認められるものがあり、同時期性が指摘できる。堅穴住居跡は環濠内に2棟、環濠外に3棟検出されているが、環濠内の住居は袋状堅穴を切って営まれており、中期後半でも袋状堅穴群よりやや新しい。しかし、環濠外のSB1～3周辺にも袋状堅穴群が大きく2グループ認められており、各グループのうちの数基から炭化材が出土している。SB2が火災住居であることを考えると、SB2が焼失した時点で数基の袋状堅穴が開口していた可能性が考えられ、環濠外の袋状堅穴と住居跡との同時併存の可能性がある。

防府市井上山遺跡は佐波川左岸、標高約57m、周囲の沖積低地との比高約50mの独立丘陵上に立地し、丘頂部を中心にA・B両地区で調査が行なわれている。<sup>30)</sup> A地区では少なくとも中期後半1棟、B地区では中期後半9棟、後期後半2棟の堅穴住居跡が検出されている。B地区の中期後半の堅穴住居跡はその切り合い関係から4～5棟の同時併存が想定されており、6基検出された中期後半の土壙との時期的関係、配置状況から各土壙が住居に個別に付属していたものと考えられている。また、7点の鉄器をはじめ、外来要素の強い遺物も出土しており、当集落構成員の様出した主体的側面を窺わせる。

#### ⑥末武川流域

標高約40～50mの洪積台地上に立地する下松市宮原遺跡では、前期後半1棟、後期末7棟の住居跡が検出されている。<sup>31)</sup>また、調査区内で弧状に巡る前期後半～末の環濠が2条検出されており、南部のみが検出された第Ⅰ環濠内には袋状堅穴、北部のみ検出された第Ⅱ環濠では堅穴住居跡1棟が認められる。したがって、前期後半～末では環濠内の標高上位に住居、下位に袋状堅穴群の存在が想定される。標高約62mの丘陵上に立地する下松市御屋敷山遺跡からは鉄鏃の出土した後期終末の堅穴住居跡1棟が調査されている。<sup>32)</sup>

## ⑦島田川流域

熊毛郡熊毛町岡山遺跡は標高約54m、比高約35mの丘陵頂部～斜面に立地する。幅約2.5m、深さ約1.2mの中後期後半の環濠内に同時期の竪穴住居跡1棟および袋状竪穴が検出されている。また、鐵鑄1点を出土した後期終末の竪穴住居跡1棟も調査されている。標高約48mの舌状台地に立地する同天王遺跡でも幅6m、深さ3mの環濠内に同時期の少なくとも2棟の竪穴住居跡および袋状竪穴が分布する。また、後期終末の竪穴住居跡も丘頂部を中心に分布しており、同時期の箱式石棺、甕棺墓も存在する。標高約38m、比高約20mの洪積台地上に立地する光市岡原遺跡では中期後半と後期後半の住居跡計10棟が知られており、岡山・天王両遺跡同様、周囲には幅2m、深さ約1.8mの環濠が巡っている。<sup>33)</sup>

吹越・松尾両遺跡は熊毛半島の基部に位置する。熊毛郡平生町吹越遺跡は標高約286m、周囲の山麓からの比高約280mの山稜線上に営まれた後期終末の集落跡で、竪穴住居跡9棟が検出され、うち4棟が調査されている。鐵鑄等の鉄製品の出土量の多さが注目されて<sup>34)</sup>いる。同松尾遺跡は標高約17mの台地南斜面に立地し、後期後葉～末の竪穴住居跡3棟が<sup>35)</sup>調査され、29点にもおよぶ鐵や刀子などの鉄器のほかガラス小玉が出土している。

## ⑧阿武川流域

徳佐盆地の中央部、標高約300mの洪積台地上に立地する阿武郡阿東町坂手沖尻遺跡では中期後半の竪穴住居跡1棟、坂手沖尻遺跡の西約300mに所在する同宮ヶ久保遺跡では<sup>36)</sup>二重に巡る環濠内に中期中葉を主体とする竪穴住居跡7棟、建物跡が検出されている。宮ヶ久保遺跡では竪穴住居跡に切り合いがあり、少なくとも中期中葉の二時期の集落が想定される。環濠からは土器、石器に加えて木工具、食器、什器、調理容器、祭祀道具、紡織具、建築部材などの大量の木製品が出土し注目された。また、宮ヶ久保遺跡の南西約8kmの<sup>37)</sup>地福盆地の湖岸段丘上には同突抜、馬場両遺跡が所在し、前期末～中期初頭3棟、中期前半7棟、中期後半1棟、後期前半2棟、後期後半13棟の竪穴住居跡が溝、土壙とともに<sup>40)</sup>検出されている。

以上、各河川流域単位での代表的な竪穴住居跡を概観した。以下では、各河川流域単位で竪穴住居の属性と考えられる平面形態・柱穴数・床面積の時期的変遷を検討する。

## 竪穴住居の各属性

## 1) 平面形態

前期の様相は資料数が乏しく十分とは言えない。しかし、③坂ノ上遺跡では隅丸方形の<sup>41)</sup>

後 期	後半	団	③ ③		③ ⑥	⑤ ⑥	⑤ ③	③ ⑪	⑨ ④
	前半	①			① ②	③ ⑪		①	① ⑪
中 期	後半		(①)		①	⑮ ③		①	②
	前半				②	①			④
前 期	後半			④ (②)	①				③
	前半								
時期		織羅木川流域	掛瀬川流域	木屋川流域	樺野川流域	佐波川流域	末武川流域	島田川流域	阿武川流域

Fig. 89 整穴住居の平面形態(○円形 □方形 数値は棟数)

住居跡が検出されており、前期末と考えられている。③上原遺跡では前期後半～末の住居跡はすべて円形で、この時期に方→円の平面形態変化の第一の画期が考えられる。円形の平面形態は④西遺跡、朝田墳墓群第Ⅱ地区、⑤右田・一丁田遺跡など中期後半までの固定的な平面形態となっている。

しかし、中期後半は平面形態変化の第二の画期にあたり、④吉田遺跡、⑤大崎遺跡、⑦岡山遺跡および宇部市北迫遺跡では隅丸方形のプランをもつ住居が出現する。佐波川流域では円形住居15棟に対し方形住居は3棟のみで、棟数的に円形住居が優勢を占めている。樺野川・島田川流域では円形住居の調査例はないが、同様の状況であったものと考えられる。これに対し阿武川流域は保守的で、この段階では方形住居は出現しておらず、他河川流域で方形住居が主体を占める後期後半～末においてもなお円形住居が優位を占めている。しかし、後期後半～末の隅丸方形の住居のなかには一辺が胴張りとなるもの（突抜遺跡D W15）や上面プランが八角形に近い円形で床面が方形のプランをもつもの（突抜遺跡D W11）など、円形から方形への過渡的な形状をもつものがある。こうした方形に近い胴張りのプランをもつものは後期前半の右田・一丁田遺跡第6号住居跡、後期末の同遺跡第3・20号住居跡でみられ、床面内部をさらに方形に掘り下げる宮原遺跡1号住居跡（後期

## 考 察

末)とともに過渡形態と考えられる。この傾向は末武川・島田川流域でも認められ、内陸部および東部地域で顕著である。一方、綾羅木川流域の石原遺跡、伊倉遺跡では後期後半の竪穴住居はすべて方形へ変化しており、掛瀬川・横野川・佐波川流域を含めた西部地域沿岸部において円形住居が優位を占めるのと対照的である。

## 2) 床面積・柱穴数

前中期～中期初頭の竪穴住居は木屋川・横野川・阿武川流域で検出されており、床面積が $10m^2$ ないしはそれ以下のものと $42$  5～6本の主柱穴をもつ $20\sim30m^2$ のものとの、規模の異なる二種の住居が営まれる。後述するように、 $10m^2$ 前後あるいはそれ以下の床面積をもつ竪

9							②									① ②			
8			①										①	①					
7			①	①			①						①	②		①			
6	①	①				②										①	①		
5	①	①		②	⑤											①			
4						④	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	⑨ ②		
3																			
2			①		①			①					①	①	①	①	①		
1	①																		
0*		①												①					
主柱穴数	木屋川流域	横野川流域	阿武川流域	横野川流域	佐波川流域	阿武川流域	横野川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域	綾羅木川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域	綾羅木川流域	横野川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域
河川流域	木屋川流域	横野川流域	阿武川流域	横野川流域	佐波川流域	阿武川流域	横野川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域	綾羅木川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域	綾羅木川流域	横野川流域	佐波川流域	島田川流域	阿武川流域
時期	前期 末 (一括早期を含む)	中期前半	中期後半	後期前半	後期後半～終末														

Fig. 90 竪穴住居の主柱数(○円形 □方形 数値は株数)

穴住居はその後も少數ながら連続と営まれ、不規則に配置された0~2本の主柱をもち、床面積は7m<sup>2</sup>が最小規模となっている。従来の居住最大人口算出法（総面積/3-1）では町住人口は1.3人となり、通常の家族共同体としての機能を持ちえない世帯となる。

こうした超小型の住居が営まれた背景には次のようなことが考えられる。まず、住居構造からは1)住居外周囲の空間をも床面とし、一定の床面積を確保したのち上屋を支えるにたる主柱を住居外の空間に配置する場合、2)本来はベッド状遺構的に床面と異なる一段高い平坦面を有していて、後世の削平により平坦面が消失した場合である。1)は現在超小型の住居外空間に柱穴が確認された事例がなく、検証が不可能である。また、2)は周辺地域で先進的にベッド状の遺構が造出される九州でも中期後半以降のことであり、前期末~

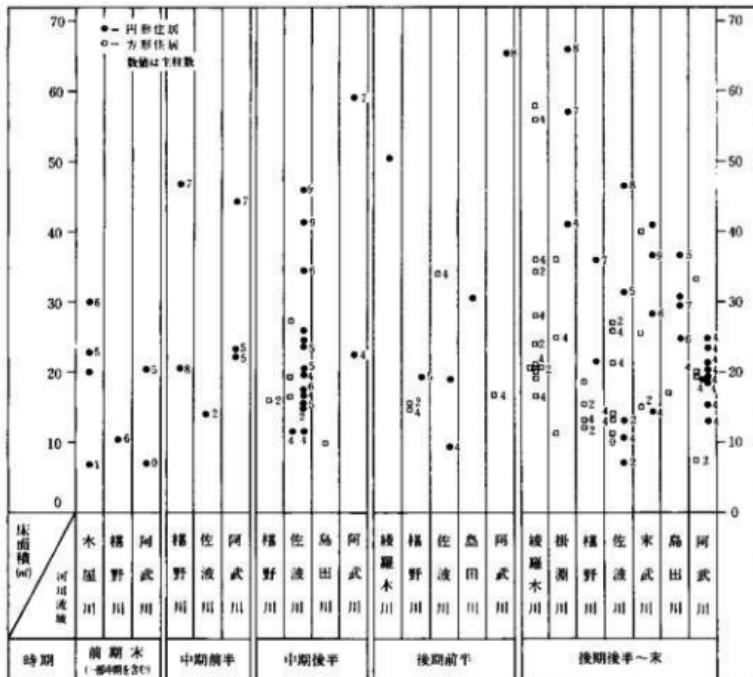


Fig. 91 穴住居の床面積

## 考 察

中期初頭との時期的ヒアタスは大きい。

また、機能的側面からは、床面積11~13m<sup>2</sup>とやや規模は異なるが、右田・一丁田遺跡第3・4・11号住居跡のように床面に作業台をもつものがあり、工房的住居の存在を想起させる。通常の規模をもつ各住居内でもこうした作業は行なわれたであろうが、広島県横路遺跡では前期の土壤から多量のめのう剥片とともに台石が据えられた状態で出土し、小型の打製石器製作跡と考えられている。<sup>(43)</sup>また、製作跡を取り囲むように上屋を想起させる1間×1間の建物跡が検出されている。<sup>(44)</sup>北九州市原遺跡でも土壤内における石器製作が想定されているが、超小型の住居跡を土壤内での製作作業のより普遍・定形化した作業跡として位置づけることも可能である。

中期後半以降は櫛野川・佐波川・阿武川流域で床面積規模の変遷を追うことができる。中期前半には、三河川流域とも前期末~中期初頭の規模を継承した約20m<sup>2</sup>前後の住居跡に加えて約45m<sup>2</sup>前後と大形化した規模のものが出現する。櫛野川流域では方形プランをもつ住居も出現する。中期後半ごろまでが大形化のピークと考えられ、それ以後、方形住居は10~20m<sup>2</sup>、円形住居も20~35m<sup>2</sup>前後と規模が固定化する。しかし、阿武川流域は異なり、後期前半に櫛野川・佐波川流域同様方形プランの住居跡が出現するにあたって規模の大形化は収束し、後期後半では20m<sup>2</sup>前後と規格化する。佐波川流域は櫛野川流域より一時期遅れており、円形・方形両住居の混在する中期後半に大形化のピークがあてられ、各流域での方形住居の出現による円形住居の規模縮小傾向とは逆に、円形住居床面積が25m<sup>2</sup>以下となる中期後半~後期後半の円形住居のなかには、やや突出した規模を持つもののが存在する。佐波川流域では後期前半の資料に乏しく、大形化のピークは指摘できないため、この傾向は集落構成員間の主体的な力量関係による住居規模の相違として捉えておきたい。

掛瀬川流域では、大形化のピークは平面形態変化の保守性と呼応して方形・円形の混在する後期後半~末以後にみられる。主柱の本数も住居の大形化に伴って増加する傾向が窺われ、したがって大型化のピーク時が最多となる。各流域とも円形住居は最多時で7~9本前後、円形・方形住居の混在する段階で円形が4~5本、方形が2ないし4本である。

住居規模の大形化はそれに伴う覆屋に対する構造力学的配慮がなされたはずで、必然的に構造材の大形化や、主柱数の増加あるいは棟持柱、支柱の新設を伴うことは容易に推定できる。また、それに伴い居住空間のより機能的な分化、ひとつには主柱に囲繞された床面空間とそれ以外の床面空間との意識的な空間分化が進展したものと考えられる。

そこで県内で検出される整穴住居において、床面積および主柱配置から住居内において

主柱間に囲繞された床面空間が床面積全体に占める割合を算出してみた。

円形住居の場合、30m<sup>2</sup>以下の床面積をもつ各時期の住居については、柱間に囲繞された床面積は全床面積の45%ないしはそれ以下のものが大半で、4～5本の主柱をもつ中期後半の佐波川流域の住居においては特に顕著である。しかし、35m<sup>2</sup>を超える床面積をもつ住居では、7～9本という主柱の増加とあいまってこの割合が45%を超え、後期後半では末武川流域の宮原遺跡で79.5%となり、主柱が周壁に近く配置されたことを示している。これらの大形住居には床面に主柱穴とは別に炉あるいは中央穴の周囲に2ないしは4本の支

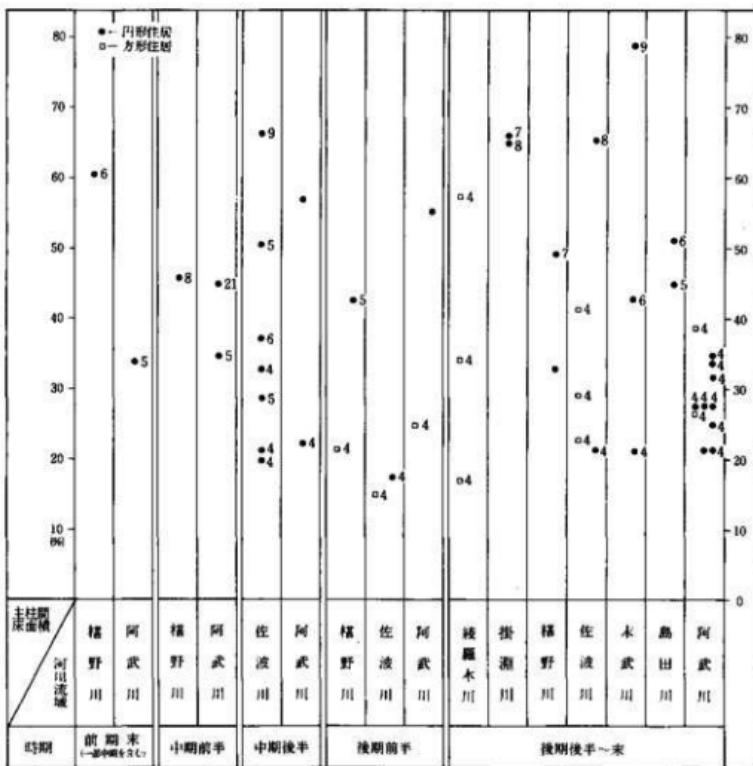


Fig. 92 床面積に占める主柱間床面積(1) (数値は主柱数)

柱穴が検出される傾向にある。したがって、床面積約35m<sup>2</sup>以上、主柱間に囲堵された床面積が床面積全体に占める割合が約50%を超えるような場合について、主柱とは別の支柱(棟持柱)を床面に配置する傾向にあることを示唆している。

方形住居の場合後期の資料ではあるが床面積35m<sup>2</sup>以下のものがすべてで、この割合は20~40%が一般的である。また円形住居のうち中期末から後期にかけては主柱間に囲堵された床面積は35m<sup>2</sup>のものと20m<sup>2</sup>のものとがあり、これは方形堅穴住居のうちの大形・小形の各グループの床面積全体に対応している。したがって、大形円形住居の主柱間に囲堵された床面積は方形住居の全床面積に対応していることになり、円形住居においては方形住居では確保できない空間利用の方法が採用されている。

#### おわりに

県内における弥生時代前中期～後期の堅穴住居を、平面形態・床面積・柱穴数による構造的侧面からその特質を概観した。しかし、炉・壁溝の有無、ベッド状遺構の出現時期とその機能など、他にも堅穴住居の属性と考えられる要素があり、床面空間利用法とあいまって、住居構造による集落内での世帯の位置づけ、各集落相互の結びつきも検討する必要があろう。

なお、小論は昭和61年度文部省科学研究補助金（一般研究C）「防長における律令国家成立以前の集落構造の変遷と推移に関する研究」の研究成果の一部を含んでいる。

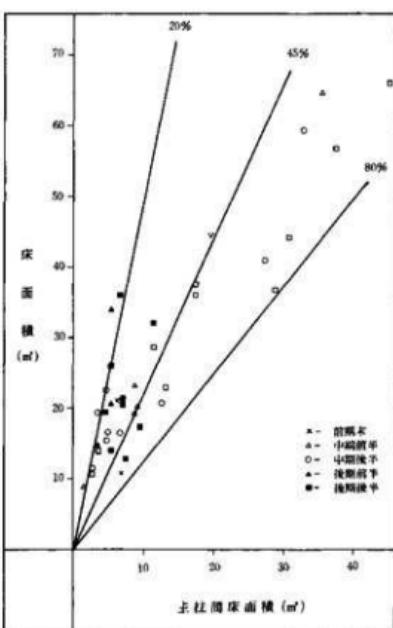


Fig. 93 床面積に占める主柱間床面積 (2)

Tab. 9 県内の主な弥生時代窯跡検出遺跡地名表

遺跡名	住居番号	時間	平面形態	規 模 (m)	長軸 幅軸	剖面 (m)	柱面積 (m <sup>2</sup> )	柱高 (m)	壁 厚	出土遺物	備 考
伊倉遺跡	D.M. 2号住居跡	後	円	10 (7.6)	10 (7.6)	—	—	—	—	—	—
3号住居跡	後・側平	円	400	40 (50.6)	—	—	—	—	—	—	3号住居跡に切られる
11号住居跡	後・長手	楕丸方	655 (50+e)	15 (34.1)	—	—	—	—	—	—	—
10号住居跡	後・後手・末	楕丸方	470 (10+e)	10 (23.9)	—	—	—	—	—	—	—
11号住居跡	後・末	楕丸方	430 (20+e)	35 (20.5)	—	—	—	—	—	—	—
石原遺跡	日向地区 第1号住居跡	後・末	楕丸長方	620 (430+e)	465 (430+e)	18 0	36.0 21+e	4 0	—	陶片・石斧・石	11号住居跡に切られる
C地区	第1号住居跡	後・末	方	500 (430+e)	0	21+e	—	—	—	—	—
第2号住居跡	後・末	方	470 (260+e)	0	21+e	—	—	—	—	—	—
第3号住居跡	後・末	方	510 (300+e)	0	30+e	—	—	—	—	—	—
第4号住居跡	後・末	方	340 (220+e)	0	?	—	—	—	—	—	—
第5号住居跡	後・末	方	560 (160+e)	0	21+e	—	—	—	—	—	—
第6号住居跡	後・末	方	430 (200+e)	0	16.9	9.22	57.6 (4)	—	—	—	—
第7号住居跡	後・末	方	340 (220+e)	?	0	?	—	—	—	—	—
第8号住居跡	後・末	方	500 (230+e)	0	24+e	—	—	—	—	—	—
第9号住居跡	後・末	方	240 (130+e)	0	?	—	—	—	—	—	—
D地区	第1号住居跡	後・末	方	230 (200+e)	0	?	—	—	—	—	—

番号	井名	付状番号	時	層	平均形態	長軸 幅員 (m)	深さ (m)	年齢層 (m)	主柱輪郭 (m)	柱穴数 (個)	年 代	付状番号	層 号	地質	
石原道路	D地区 第2号住居跡	(後・末)	方	565	284+0	15	284+0			(4)	X	○	新・中 央	新・中 央	
新3号住居跡	後・末	方	810	284+0	50	564+0			(4)	○	○	新・中 央	新・中 央	新・中 央	
新4号住居跡	後	方	540	284+0	30	564+0			?	○	○	新・中 央	新・中 央	新・中 央	
城山道路	尾穴住居跡	中・中 央	円	540	20	21.2	8.75	41.3	10	X	X	見・岩	見・岩	見・岩	
高畠道路	DW 1	後・末	円	930	20	57.0	37.80	66.0	7	○	X	見・中 央	見・中 央	見・中 央	
3	(後平~古輪切)	隅丸方	(550)	10	(25.0)			(4)	○	○	X	新	新	新	
4	(後平半~古輪切)	やや幅円	970	10	66.0	43.0	65.2	8	○	X	見・砾石	中央	中央	DW 1に切られる 性あり	
5	(後平~古輪切)	円	800		41.0			(4)	○	○	X			新	
6	(後平~古輪切)	方	(630)		(36.0)			?	○	X	X	新	新	新	
7	(後平~古輪切)	(7)	(480)		(11.5)			?	○	X	X	新	新	新	
8	?	(4)	(780)		?			(7~8)	?	?	X				
9	中-後平	(7)	(660)		?			(7)	?	?	X				
10	?	(19)	(800)		?			?	?	?	X				
上原道路	DW 7	前後平~末	円	640	30	(23.0)			(5~6)	○	○	見・基・砾石	見・基・砾石	見・基・砾石	
8	前後平~末	円	580	10	(20.0)			(6~7)	X	X	X				
50	前後平~末	円	706	14	(30.0)			(6)	○	X	X				
58	前・末	円	325	280	30	(7.0)			1	X	X	見・岩	見・岩	見・岩	
瓦上原跡	新1号住居跡	前・末	隅丸方	270+	264+0	10	(5.8+0)			(2)	○	X			

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

大類	小類	出土地點	備考	年 代	出土物	備 考	年 代	出土物	備 考	年 代	出土物	備 考	
6													
6	2 住居跡	日高区高見町 新ノ上曾根	前室・中室	平塗引漆 漆丸方	200 230+e	10 (8.1+e)	朱面漆 漆丸方	2	○	×			
7	2 住居跡	日高区高見町 新2号住居跡	中・後半	磨丸力	257	270 15	8.2		?	×	×	火災住跡	
7	2 住居跡	日高区高見町 新3号住居跡	?	(P)	500 600	?	?	?	?	×	×	火災住跡	
7	2 住居跡	日高区高見町 新1号住居跡	中・後半	円	530	26	15.9	15.06	94.7	9	○	中央 壇・甕	
8	2 住居跡	日高区高見町 新2号住居跡	中・後半	方	350	350 (750)	20 (900)	10.1 (35.8)	?	0	×	?	甕・磨石 ベッキ連続
8	8	S B 8	?	円 or 指円	(500)	20	19.6	19.6	0	×	?	?	SRに切られる
8	9	S B 9	後・前半	円	(670)	(17)	(32.1)	(8)	1	○	?	?	
9									2	×	?		周辺の一帯に陪塚の墓なり
10	2 住居跡	日高区高見町 新1号住跡	後・末	開丸方 or 長方	(365)	(340) (12)			2	○	?	?	火災住跡
10	2 住居跡	日高区高見町 新2号住跡	後・末	(P)	360	135+e 35	(5.5以上)		2	×	?	?	火災住跡
10	2 住居跡	日高区高見町 新3号住跡	?	(P)	360	9	53 ?		231上	×	?	?	火災住跡
10	2 住居跡	日高区高見町 新4号住跡	中・前半	円	520	500 (800)	22	(20.4)	9.40	46.0	8	○	甕・壇・石 ベッキの平凹面
10	2 住居跡	日高区高見町 新5号住跡	中・前半	円	48	(47.2)			7	×	?	?	火災住跡
10	2 住居跡	日高区高見町 新6号住跡	中	開丸方 or 長方	360	240+e (430)	48	(9.5)	1	×	?	?	甕・土塙跡 ベッキの平凹面
11	2 住居跡	日高区高見町 新7号住跡	?	開丸方	230	145	98	3.4	0	×	?	?	甕・壺
11	2 住居跡	日高区高見町 新8号住跡	?	方 or 長方	440	325	60	(19.6)	?	?	?	?	土器片
11	2 住居跡	日高区高見町 新9号住跡	後・末	開丸方 or 長方	430	180+e (430)	38	(18.5)	?	?	?	?	甕・壺・甕

通路名	住保番号	時 間	平面形態	延長 (m)	幅員 (m)	高さ (m)	底面積 (m <sup>2</sup> )	主計面積 (m <sup>2</sup> )	柱穴数	壁 位置	上部物	壁 位置	備考	X座標
明田堵塞性 第1号	第10号 壁穴住居跡	後・木	円	580	530	60	21.5	7.00	32.6	4	○	×	善安・休憩室 中央穴・ベッド用	11
明田堵塞性 第1号	第11号 壁穴住居跡	後・木	隅丸長方	470	370	21	15.3		2	○	×	×	善安・休憩室 中央穴	12
明田堵塞性 第1号	第12号 壁穴住居跡	後	円	690	550	19	36.0	12.70	42.3	5	×	○	善・休・蓄電池 清石製造品	13
④ 通路	第13号住居跡	後・前半	隅丸方	440	380	18	15.0	3.24	21.6	4	○	○	善	
西 通路	第14号住居跡	後・米	円 (椭円)	720	590	6	36.0	17.80	49.5	7	○	×	善・石屋 清石製造品	14
	第15号住居跡	後・前半	隅丸長方	480	320	15	15.4		2	○	×	○	善・石子・砾石 圓錐する二辺に住居外へのチ ラス状の通路	
	第16号住居跡	前・中・間	円	370	320	12	10.7	6.44	60.2	6	×	○	善	
夷正道字 通路1	第17号 壁穴住居跡	中・後半	円	580	460	38	16.5	6.20	37.5	6	×	×	善・善・海平 付近に磚十種	
	第18号 壁穴住居跡	中・後半	円	480	370	28	11.6	2.40	21.1	4	×	×	善・休	
	S B 1	中・後半	隅丸方	410	157+4	23	11.1+4		(4)	×	?	○	大沢(白灰)・二回調査り。かき ほさんで。柱穴	
	S B 2	中・後半	隅丸方	580	362+4	62	15.6+4		3	×	○	○	善・土質・底 石・作業台 北壁	
	S B 3	中・後半	隅丸方	514	210+4	36	7.1+4		3	×	?	○	善・善・石塊	
	S B 4	中・後半	円	552	235+4	21	7.5+4		3	×	○	○	善・金善(白土質) 分離地盤	
	S B 5	中・後半	円	510	340	32	8.3+4		2	×	○	○	善・善・底 石塊・作業台	
下右田通路 第1次調査	壁穴住居跡	中・後半	円	445	422	10	14.7		2	×	○	善	住居外に調査に沿って11柱穴	17
下右田通路 第2次調査	D W - 1	中	円	450	440	9	16.0		2	×	○	○		
	D W - 4	中・後	円	440	400	9	21.0	4.21	20.0	4	×	○	善	
	D W - 5	後・前半	円	520	470	9	19.0		?	×	○	○	善	

## 山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

遺跡名	住居番号	時	期	平面形態	施 設 (m)	施 設 長軸 幅 高 さ 深 さ	施 設 面積 (m <sup>2</sup> )	柱 頭 部 (mm)	柱 頭 部 面積 (mm <sup>2</sup> )	柱 穴 地 径 (mm)	壁 厚 (mm)	地 盤 位置	出土遺物	備 考	
下村遺跡 第3次調査	D W - 6	中・後半	円	490	490	15.9	4.53	26.5	5	X	○	○	○	○	18
石田遺跡 第1回調査	1号住居跡	後・後半	円	350	350	6	10.6	2.29	21.7	4	○	○	○	○	18
石田遺跡(2)	2号住居跡	?	円	780	780	20	46.6	30.50	65.5	8	X	○	○	○	19
石田遺跡 (3)工事区	1号住居跡	後・後半	円	640	622	14	31.2			5	X	○	○	○	19
3号住居跡	後・末 方	320	320	10	27.0			2	○	○	○	○	○	○	19
4号住居跡	後・後半	圓角方 (長方)	370	370	10	13.7		2	○	○	○	○	○	○	19
5号住居跡	後・後半	円	425	385	30	13.2		2	X	○	○	○	○	○	19
6号住居跡	後・前半	圓角方	590	580	18	34.0	5.22	15.4	4	X	○	○	○	○	19
8号住居跡	後・後半	円	320	280	10	7.0		2	○	○	○	○	○	○	19
11号住居跡	後・後半	圓角方	387	386	13	4.6		0	○	○	○	○	○	○	19
13号住居跡	後	円	(580)	(500)	70	(19.6)		?	X	?	?	○	○	○	19
14号住居跡	後・前半	円	370	350	30	9.3	1.62	17.4	4	○	○	○	○	○	19
15号住居跡	中・前半	円	420	(420)	25	(14.0)		2	X	?	?	○	○	○	19
16号住居跡	中-後・前半	円	(590)		22	(19.6)	10.45	50.2	?	X	?	○	○	○	19
17号住居跡	中・後半	円	520	500	15	20.8	5.80	22.3	5	X	○	○	○	○	19
20号住居跡	後・末 方	520	510	22	26.0			4	X	○	○	○	○	○	19
井上山遺跡 A地	1号住居跡	中・後半	470	42	37	5.60	33.9	4	○	X					20
2号住居跡	(後)	(17)	(616)	70	17.3+e			4	○	X					20

遺跡名	位置番号	時 期	平面形態	面	幅 (m)	深さ	主な遺物		位 置	出土地點	備 考	文獻
							床面積 (m <sup>2</sup> )	柱間距 (m)				
井上山遺跡 1号住居跡	中・後半	(?)	(650)	?	6	(24+e)			?	○	?	2号住居跡に切られる
2号住居跡	中・後半	円	(400)	40	(11.6)				(4)	×	?	壁と他の可塑性あり
3号住居跡	(中・後半)	円	(520)	35	(9.6)	3.92	20.0	4	○	×	?	壁と他の可塑性あり
4号住居跡	(中・後半)	円	780	720	50	41.3	27.4	66.3	9	○	×	土器片
5号住居跡	後・後半～末	方	480	470	20	21.1	6.12	29.0	4	○	?	土器片・板石
6号住居跡	(後・後半～末)	方	(400)	490	20	14	5.77	41.2	4	×	?	土器片
7号住居跡	(中・後半)	円	(880)	30	(46)				(9)	×	?	土器片・板石・陶器品
8号住居跡	(中・後半)	円	(600)	20	(21)				(5)	×	?	土器片
9号住居跡	中・後半	円	(780)	50	(34.2)				6	○	?	土器片・板石・陶器品
10号住居跡	(中・後半)	円	(680)	40	(26)				?	×	?	土器片
11号住居跡	(中・後半)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	9号住居跡に切られる
宮原遺跡												
1号住居跡	後・末	隅丸方	420	250+e	50	(15.0)			1	○	?	壁張り・ベッド状構造・住居外に土器片が散在する
2号住居跡	(後・末)	円	(690)	15	?				?	×	?	住居内に脚型に沿って4柱穴
3号住居跡	(後・末)	隅丸方	520	380+e	40	(25.6)			1	○	?	壁・床・石繩
4号住居跡	(後・末)	円	450	28	(14.1)	3.04	21.6	4	○	○	?	中央穴・ベッド状構造
5号住居跡	(後・末)	円	610	30	(28.3)	11.96	42.3	6	○	○	?	火光石柱。床面に多量の小柱穴
6号住居跡	後・後半	?	?	10					(5)	○	?	火光石柱
7号住居跡	後・末	円	780	32	37.8	29.00	79.5	9	○	×	?	壁張り・ベッド状構造・床面に土器片・井戸跡

## 山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）

遺跡名	住居番号	時・期	年輪測定	基盤 (cm)	長軸 幅	短軸 幅	南北面積 (m <sup>2</sup> )	東西面積 (m <sup>2</sup> )	柱穴数	壁厚 cm	炉 位置	出土物	備考	文献	
瓦張遺跡	8号住居跡	(後・末)	円	800	40	(41.1)			?	○	?	瓦	柱外にのがれ跡	31	
輪瓦山 遺跡	壺穴住居	後・末	方or長方	550	370+50	(25.9)			6	○	○				
瓦辺遺跡	壺穴住居跡	後・後半	円	760	750+26	36.6	16.36	44.7	5	○	○		火災住居	22	
瓦越遺跡	壺穴住居跡	後・末	不整円	(700)	50	(24.6)	12.54	51.6	6	○	×	瓦・土器・漆器等 瓦片	遺構の邊りに柱跡。ベット付通路 中央部に小柱穴多数。	23	
住居区 第1号住居跡	(後・末)	(楕丸方)	(45)	?	(17.0)				?	×	?	瓦	瓦・火葬灰	24	
C施設 第1号住居跡	後・末	(楕円)							0	×	×	石・竹筒台			
住居遺跡	1号住居跡	後・末	円	810	40	45.6			○	○	?	瓦・土器・漆器等 瓦片	窓跡	25	
	2号住居跡	後・末	円	(700)	30	(33.4)			○	?	?	土器片・陶器	窓跡	26	
	3号住居跡	後・末	円	(1000)	?	22			×	?	?	土器片・ガラス小片			
実験遺跡	D W 1	後末~中初	円	517	27	30.7	6.99	33.8	5	×	×	瓦・鐵	中央穴		
	D W 17	前末~中初	(楕)	?	?	20	?		?	×	×	瓦	中央穴		
	D W 23	前末~中初	円	300	12	7.45			0	×	×	十脚片	DW1の實験施設の可能性あ り		
	D W 18	中・前半	円	590	50	23.3	8.11	34.8	(5)	×	×	瓦・石斧			
	D W 20	中・前半	円	560	50	19	22.1		(5)	×	×	石器・精耕車	中央穴		
	D W 21	中・前半	円	?	?	10	?		?	?	?	瓦・土器			
	D W 22	中・前半	円	750	12	44	19.96	45.2	7	×	×	瓦・土器・石斧			
	D W 19	中・後半	円	870	860	25	59.4	33.70	56.7	7	○	瓦・土器・石斧	中央部のぐらむ4柱穴 中央部は二往六脚車跡等		
	D W 8	後・後半	円	900	910	10	65	35.94	55.3	8	○	×	瓦	一部なし	

測量名	柱頂番号	時	間	平均形狀	規 長軸 幅	規 高さ 厚さ	中面積 (cm <sup>2</sup> )	主規断面積 (cm <sup>2</sup> )	主規断面積 率(%)	柱穴数	壁 厚	柱上物 位置	備 考	丈 尺	
実状調査	D W 9	後・前半		隅丸方	480	475	8	20.4	5.06	24.8	4	X	X	要・砾石	
	D W 3	後・後半~末	円		496	20	19.3	4.12	21.3	4	○	X	要・砾石 品・スラグ	DW 4に切られる。中央穴。	
	D W 5	後・後半~末	円		546	10	23.4	5.70	24.4	4	X	X	要	DW 4に切られる	
	D W 6	後・後半~末	円		445	20	15.4	5.25	24.1	4	○	X	要・鉢・高环	中央穴	
	D W 10	後・後半~末	円		540	490	15	20.8	5.38	25.9	4	X	X	要・砾石	中央穴
	D W 12	後・後半~末	円		500	20	19	6.05	31.8	4	X	X	要・鉢・スラグ	中央穴	
	D W 2	後・後半~末	梢円		495	490	15	19.1	4.08	21.4	4	X	X	要・鉢	中央穴
	D W 4	後・後半~末	円		580	20	25	8.40	33.9	4	○	X	要・鉢	要・石片・竹葉 竹子	
	D W 11	後・後半~末	円	(6.8)	410	350	25	13	3.59	27.6	4	X	X	要・高环	大災害時。中央穴、正面さら に一方間に割り込まれる
	D W 13	後・後半~末	円		530	510	30	21.2	5.90	27.8	4	X	X	要・砾石	中央穴
	D W 14	後・後半~末	隅丸方		480	450	35	19.2	4.36	25.3	4	○	X	要・鉢	中央穴。削張り
	D W 15	後・後半~末	隅丸方		700	640	40	33	12.93	39.2	4	○	X	要・鉢	要・石片・竹葉 竹子
	D W 16	(後・後半~末)	隅丸方		450	30	(20)			?	X	X	鉢付		
	D W 24	後・後半~末	隅丸方		310	275	15	7.0		2	X	X	要・スラグ		
馬場遺跡	D W 1	中・前半	円		460	35	(14)			?	○	?	要・鉢		
	D W 2	中・前半	円		560	7	(20)			?	X	?	要・砾石	中央穴	
	D W 4	中・前半	円		486	15	(17)			?	?	?	土器片		
瓦手神社 遺跡	6分辺尾跡	中・後半	円	530	20	22.1	4.88	22.1	4	○	X		中央穴	27	

## 5 保存地区環境整備に関する一試案

遺跡保存地区の概要、調査・保存に至る経過は先に述べたとおりである。昭和42年以降の統合移転に伴う施設整備のさなかにあって、当地区に埋存する遺跡が現地保存されたことは遺跡保存地区の教育・研究資料としてもつ固有な学術的価値が強く認識され、教育・研究機関である大学の社会的責任の一端が果たされた結果でもあった。

しかし、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての21棟の堅穴住居跡を中心にした各遺構は、調査後再び埋め戻しを行ない保存されているが、活用・公開はほとんどなされていないのが現状である。<sup>45)</sup>本稿は、こうした保存・活用・公開に向けての遺跡整備に関する一試案である。

遺跡の現地保存はそれ自身、保存措置として極めて重要である。また、それとともに学内の環境整備の一環として遺跡の構成要素である各遺構を修復し、遺跡本来の機能を表現できるように整備することによって大学独自の積極的な遺跡の利用形態を図ることも、ひとつの効果的な保存・活用措置といえるのではないであろうか。そのためには現在の文化創造の基盤となった歴史的遺産を適切な方法で保存・活用し、後世に継承するために公共施設として整備し、歴史を追体験できる新しい現代的な付加価値をもった歴史ゾーンとして公園化するのも一つの手段であろう。

それにはまず、歴史的理解の一助として住居の構造、形式の時間的な変遷過程が臨場感をもって歴史的に認識できるように、堅穴住居を数棟復原するなどの立体的な整備方法が考えられる。あわせて、教育・研究にふさわしい快適な居住空間を確保するために、遺跡が立地した往時の生活環境の復原を含めた植樹・植栽などの環境整備によって、想いの場としての機能をもたせることも必要であろう。さいわい、当地区は食堂および運動場等の共同利用施設に隣接しており、遺跡に立って往時を回想する想いの場的機能は十分果たしうるものと考えられる。

また、歴史的認識を助ける表示板、ベンチ等を公園内の要所に設置し、遊歩道による散策コースも造出することによって、復原した堅穴住居が身近に学習できるようにする開放的な配慮も必要になるものと考えられる。

つぎに、堅穴住居等の平面プランを明示するなどの平面的な整備方法が考えられるが、遺跡を利用する側にとっては、ともすれば遺跡公園としての十分な歴史的理理解が伴わない恐れがあり、立体的な整備方法には劣るであろう。

以下、想定される遺跡整備の方法を述べることにする。

保存地区環境整備に関する一試案

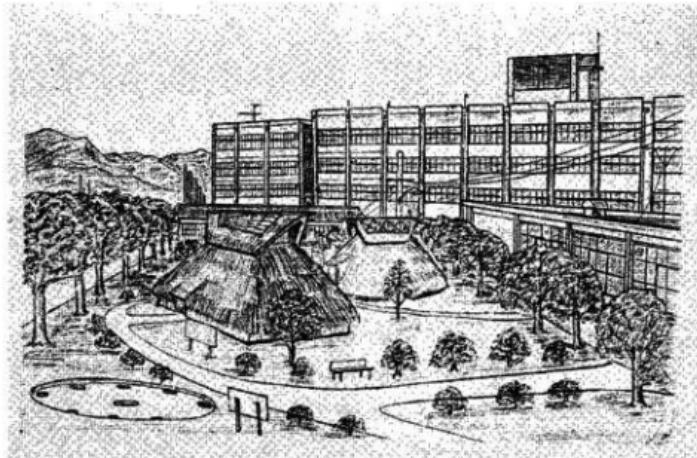
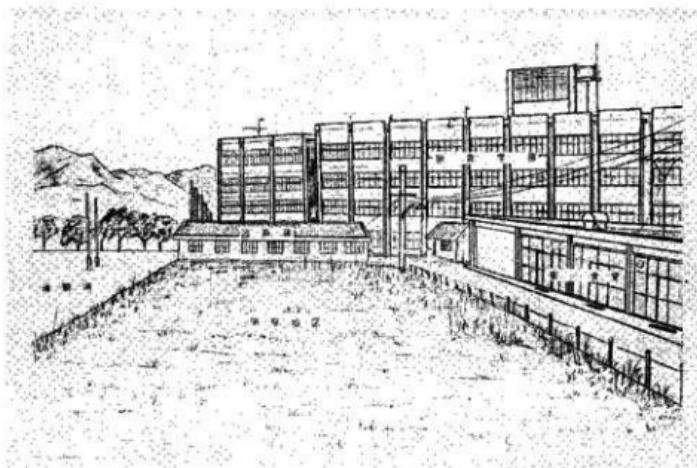


Fig. 94 保存地区環境整備後の想像図(上 現状 下 整備案)  
(図 森田幸一)

## 1 整備案

施工にあたっては遺構面への盛り土を行ない、地下遺構を損傷する恐れのある掘削は行なわない。また、各遺構は集落内でそれぞれ有機的なかかわりをもって生活の場を構成していることから、発掘された原位置に復原することが望ましい。

### 1) 積穴住居跡

#### a) 家屋復原住居（1）(Fig. 95)

積穴住居を当初の姿で立体的に復原するもので、カヤなどで屋根を葺き、上屋を支える柱や梁、棟木、垂木などを木を用いて復原する。その際、見学者が積穴住居内に入つて住居構造や内部施設が効果的に学習できるように配慮する。定常的な保守管理が十分に行なえる体制が整えば、往時の住居を視覚的に実体験できる最も望ましい復原方法である。

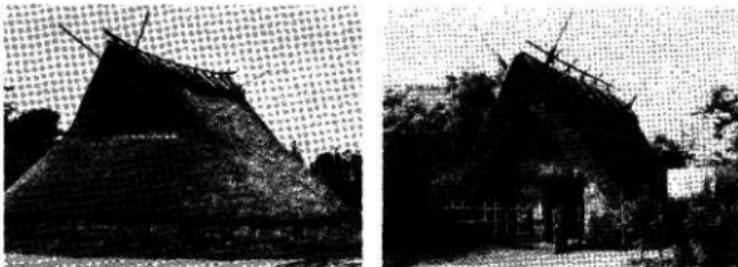


Fig. 95 家屋復原住居（1）例（左 大中遺跡 右 伊能遺跡）

#### b) 家屋復原住居（2）(Fig. 96)

上屋を葺く前段階のもので、住居の骨組み状況を示すものである。柱や梁、棟木、垂木などの構造材に木を使用する場合と類似材、模造材あるいは鉄骨等を使用する場合とが考えられる。家屋復原住居（1）と比較して防災などの点では維持管理は容易であるが臨場感に乏しい。

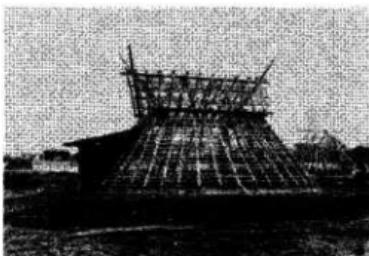


Fig. 96 家屋復原住居（2）例（登呂遺跡）

## c) 家屋復原住居（3）(Fig. 97)

家屋復原住居（1）をモデルにして家屋をモルタル、柱や梁、棟木、垂木などを鉄筋構造で復原するものである。具体的な整備例はないが、Fig. 97に示した出雲玉作跡で試みられている住居跡復原を参考にすれば整備は十分に可能であろう。家屋復原住居（1）、（2）と比較して防災などの維持管理面では効果的であるが、遺跡公園として歴史的環境を修景するうえからは素材のもつ固さがマイナスイメージとなるおそれがある。

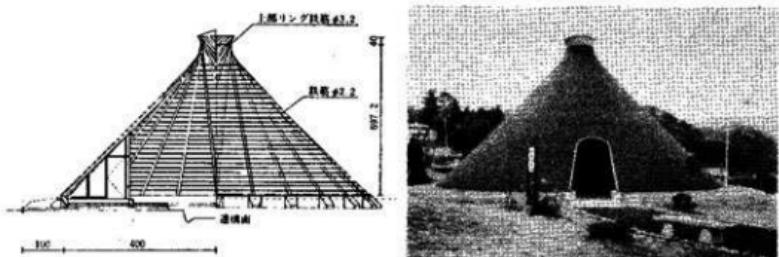


Fig. 97 家屋復原住居（3）例（出雲玉作跡）

## d) 積穴住居プランの復原 (Fig. 98)

上記したa)～c)三例が立体的な復原方法であるのに対して、積穴住居の平面形態や規模、柱や炉跡の位置などを平面的に示す復原方法である。また、住居を床面まで掘りこんでモルタルやコンクリート、張り芝などで整備し、柱はコンクリート柱等で立ち上がらせ理解を容易にする方法も考えられる。家屋復原住居に比べ経済性に優れ、平面的な広がりは理解できるが、立体的な規模や住居構造が十分に認識できないデメリットがある。

## e) 覆屋による検出住居遺構の表示 (Fig. 100)

発掘調査で検出した住居跡をそのままの状態で表示するものである。しかし、保存の上から露天させることはできず、覆屋と遺構の保存処理が不可欠であるとともに遺跡から住居跡が隔離され、遊離してしまう危険性がある。

## 2) 河川跡 (Fig. 99)

保存地区東部には南から北に流れる古墳時代後期の河川跡が検出されている。その流れを示すため、平面的ではあるが小割石やレンガなどで表示する。また、園路として

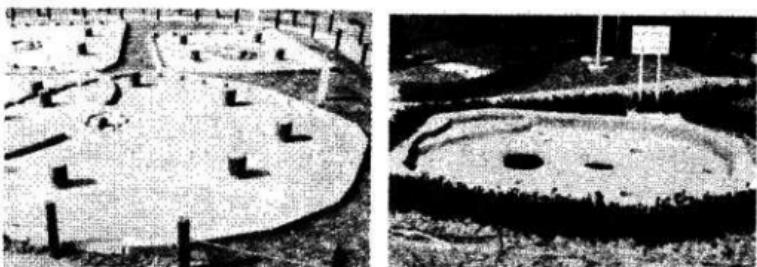


Fig. 98 住居プラン復原例（右 近野遺跡 左 御経塚遺跡）

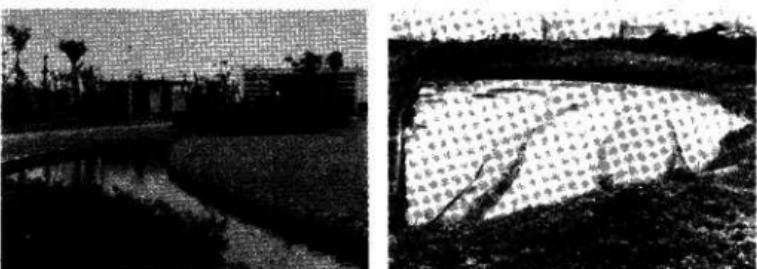


Fig. 99 溝、河川跡復原例（右 伊場遺跡 左 田能遺跡）

の活用方法も可能である。

### 3) 植栽

整備計画上最も広いスペースを必要とするもので、見学者の休息、歴史を回想する広場として、また、学内のコミュニティ活動や文化活動の場所として多目的な利用が考えられる。

### 4) 植樹

遺跡公園としての環境整備には不可欠な要素である。ただし、樹木の配置においては遺跡公園としての歴史的環境にふさわしい配置が必要であろう。また、樹種の選定は発掘調査での種子が出上し、往時この地の植生を構成していたオニグルミ、モモ、シイなどを植樹し、古環境を復原する方法も考えられる。なお、施工にあたっては地下の遺構に影響のないよう配慮することが肝要である。

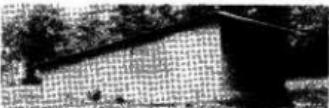


Fig. 100 覆屋復原例（分動尼模道跡）

## 2 各地の遺跡整備例

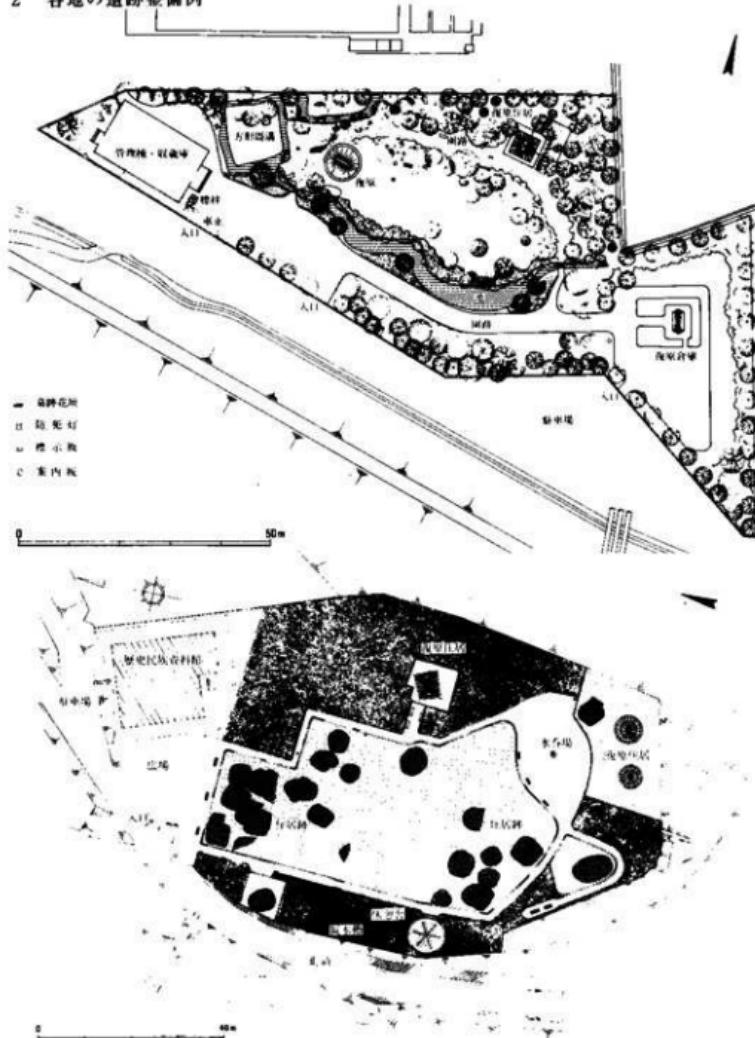


Fig. 101 各地の遺跡整備例 (上 田能遺跡 下 堂之上遺跡)

### 3 各地の復原住居設計例

#### 1) 円形竪穴住居跡

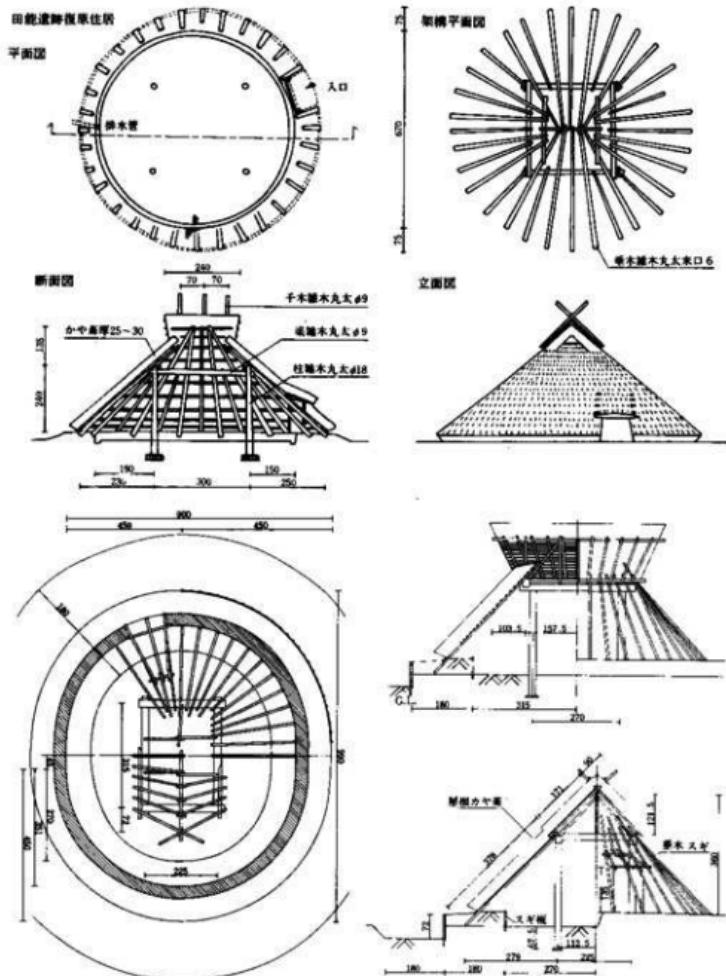
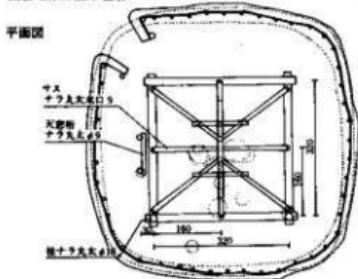


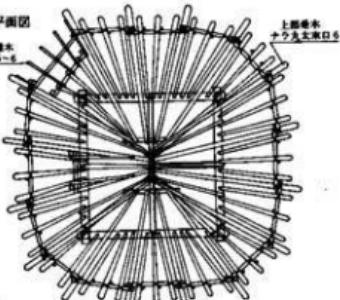
Fig. 102 円形竪穴住居跡設計例 (田能遺跡)

## 2) 方形竖穴住居跡

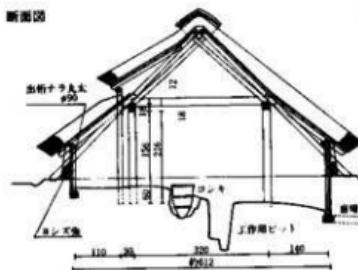
出露玉作跡復原住居



第四章



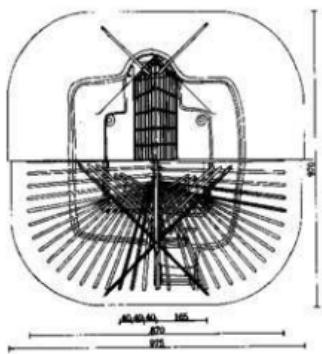
新編



立画图



本中間層側面化學平面・無機平面・断面50



A technical diagram of a building's roof structure. It features a central vertical column labeled '柱' (Column) at the bottom. Above the column is a triangular truss system with a grid-like pattern of beams. The top edge of the truss is labeled '屋面梁' (Roof Beam). The entire structure is supported by a foundation line at the bottom.

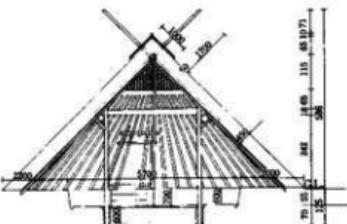


Fig. 103 方形堅穴住居跡設計例（上 出雲下作跡 下 大中遺跡）

4 住居プラン復原例

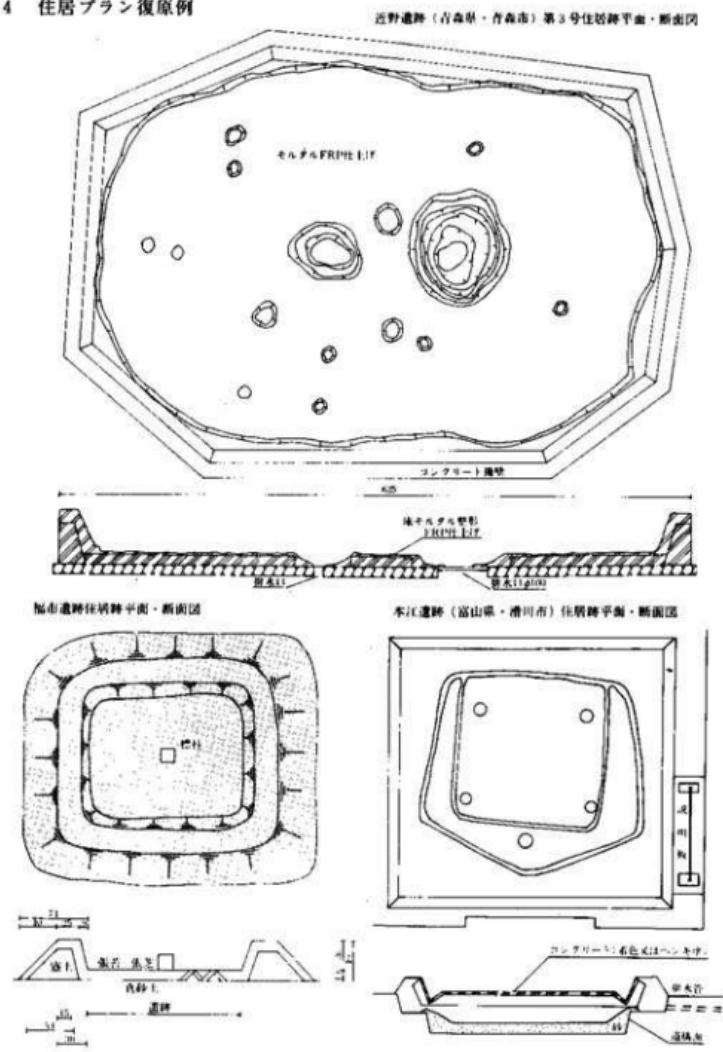


Fig. 104 住居プラン復原例 (上 近野遺跡 下右 本江遺跡 下左 福市遺跡)

## 保存地区環境整備に関する一試案

[注]

- 1) a 小野忠應「山口大学古田遺跡」(『考古学ジャーナル』第9号、ニューサイエンス社、1967年)。  
b 小野忠應「山口大学構内吉田遺跡の性格」(『学園だより』第6号、山口大学、1970年)。
- 2) 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)。
- 3) 造構の切り合ひ関係は昭和42年の吉田遺跡調査団による調査資料および、各造構からの出土遺物により新旧関係を決定した。しかし、昭和42年に調査されている各造構のうち、切り合ひ関係に明確な記述がなく、遺物出土量が少なく時期が困難を場合を除くと同時期の遺物が出土している場合は切り合ひ関係不明とした。
- 4) 山口県教育委員会『伊倉遺跡』(1973年)。
- 5) 山本一朗『防長の土師器』(『山口県の土師器・須恵器一集成と編年』、周陽考古学研究所、1981)。
- 6) 山口市教育委員会『西遺跡』(1986年)。
- 7) 山口県教育委員会『堂道遺跡』(『堂道・五反地遺跡』、1973年)。
- 8) a 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅴ』(『朝田墳墓群Ⅴ・鴻ノ峰1号墳』、1977年)。  
b 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅵ』(1983年)。
- 9) 床面に中央穴を除いた3本以上の主柱を有する堅穴住居について、柱穴心-心間を結んだラインで開拓された床面中央部分の面積を示す。
- 10) 井上山遺跡発掘調査団『井上山』(1979年)。
- 11) a 山口県教育委員会『下右田遺跡第1・2次調査概報』(1978年)。  
b 山口県教育委員会『下右田遺跡第3次調査概報』(1979年)。
- 12) 三戸田見司・山本源太郎編『奥正権寺遺跡』(山口県教育委員会、1984年)。
- 13) 渡辺一雄・中村徹也『よみがえる先史のムラ・突抜・馬場遺跡』(山口県教育委員会、1985年)。
- 14) 鐘部貴文・河村吉行『吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査』(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
- 15) 前掲注3)に同じ。
- 16) 山口大学人文学部考古学研究室『下関市伊倉遺跡の発掘調査』(『西部圏内における弥生文化の研究』、1984年)。
- 17) 下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡』(1981年)。
- 18) 下関市市史編修委員会『櫛栗浜遺跡』(『下関市史 原始一中世』、下関市役所、1965年)。
- 19) 山口県教育委員会『石原遺跡』(『坂本古墳・秋振遺跡・石原遺跡』、1974年)。
- 20) 渡辺一雄『たかはた』(『御山口県教育財团・山口県教育委員会、1986年)。
- 21) 富士埜勇『上原遺跡』(明川町教育委員会、1976年)。
- 22) 山口県教育委員会『板ノ上遺跡』(1974年)。
- 23) 前掲注5)に同じ。
- 24) 前掲注6)に同じ。
- 25) 前掲注7)、8)に同じ。
- 26) 山口県教育委員会『右田・一丁田遺跡』(1973年)。
- 27) 前掲注11)に同じ。
- 28) 前掲注12)に同じ。
- 29) 三戸田見司・山本源太郎編『大崎遺跡』(『奥正権寺遺跡』、大崎岡古墳群・大崎遺跡、山口県教育委員会、1985年)。
- 30) 前掲注10)に同じ。
- 31) 山口県教育委員会『宮原遺跡』(『宮原遺跡・上広石遺跡』、1973年)。
- 32) 山口県教育委員会『御屋敷山遺跡』(1973年)。
- 33) 小野忠應編『岡山遺跡』(『鳥田川』、山口大学鳥田川遺跡学術調査団、1953年)。
- 34) 小野忠應編『天王遺跡』(『鳥田川』、山口大学鳥田川遺跡学術調査団、1953年)。
- 35) a 小野忠應編『岡原遺跡』(『鳥田川』、山口大学鳥田川遺跡学術調査団、1953年)。  
b 小野忠應編『岡原遺跡』(『山口県文化財概要第4集』、山口県教育委員会、1961年)。
- 36) a 小野忠應他『吹越遺跡予備調査概報』(平生町教育委員会、1970年)。

山口大学吉田構内道路保存地区の発掘調査（昭和57年度）

- b 小野忠熙他『吹越遺跡第二次調査概報』（平生町教育委員会・山口県教育委員会、1972年）。
- 37) 山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」（『西部瀬戸内における弥生文化の研究』、1984年）。
- 38) 村岡和雄「坂手沖尻遺跡」（『坂手沖尻・惣の尻遺跡』、山口県教育委員会、1978年）。
- 39) 村岡和雄・藤本嘉明・中村徹也「宮ヶ久保遺跡」（『山口県文化財』第7号、1977年）。
- 40) 前掲注13) に同じ。
- 41) 各遺跡に冠する番号は各流域の集落遺跡で付した流域番号に一致する。
- 42) 北九州市北方遺跡9号緊穴住居跡、筑紫野市野黒板遺跡31・46号住居跡など前期末には10m<sup>2</sup>前後の方形に近い小規模な住居跡が知られている。  
a 上田住典編『北方遺跡』（北九州市教育文化事業団、1986年）。
- b 松岡史也「野黒板遺跡」（『福岡南北バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集、福岡県教育委員会、1970年）。
- 43) 横路遺跡調査団『横路遺跡』（1982年）。
- 44) 小田富士雄編『原遺跡』（北九州市香月地区埋蔵文化財調査会、1971年）。
- 45) 具体的な整備例については奈良国立文化財研究所『遺跡整備資料Ⅲ 集落遺跡・製作遺跡』（1984年）より転載した。

文献)

- 1 山口県教育委員会『伊倉遺跡』（1973年）。
- 2 山口県教育委員会『石原遺跡』（1973年）。
- 3 富士堂勇『豐浦沿岸の高地性集落—山口県豊浦町所在・城山遺跡』（『高地性集落と倭國大乱』、吉川弘文館、1984年）。
- 4 渡辺一雄『たかはた』（御山口県教育財團・山口県教育委員会、1986年）。
- 5 富士堂勇『上原遺跡』（萬葉町教育委員会、1976年）。
- 6 山口県教育委員会『坂ノ上遺跡』（1974年）。
- 7 小野忠熙『北追遺跡』（『宇部の遺跡』、宇都宮市教育委員会、1968年）。
- 8 宇都宮市教育委員会『北追遺跡調査報告』（1982年）。
- 9 富士堂勇編『青畠遺跡調査概報』（阿知須町教育委員会、1983年）。
- 10 山口県教育委員会・建設省山口工事事務所『朝田墳墓群V』（1982年）。
- 11 山口県教育委員会・建設省山口工事事務所『朝田墳墓群VI』（1983年）。
- 12 山口県教育委員会・建設省山口工事事務所『朝田墳墓群II』（『朝田墳墓群II・鶴ノ峰1号墳』、1977年）。
- 13 山口県教育委員会『堂道遺跡』（『堂道・五反地遺跡』、1973年）。
- 14 山口市教育委員会『西遺跡』（1986年）。
- 15 三戸田見司・山本源太郎編『異正椎遺跡』（山口県教育委員会、1984年）。
- 16 三戸田見司・山本源太郎編『大崎遺跡』（山口県教育委員会、1985年）。
- 17 山口県教育委員会『下右田遺跡 第1・2次調査概報』（1978年）。
- 18 山口県教育委員会『下右田遺跡 第3・4次調査概報』（1979年）。
- 19 山口県教育委員会『右田・一丁目遺跡』（1973年）。
- 20 井上山遺跡発掘調査団『井上山』（1979年）。
- 21 山口県教育委員会『宮原遺跡』（1973年）。
- 22 山口県教育委員会『御屋敷山遺跡』（1973年）。
- 23 山口県教育委員会『追越遺跡』（1978年）。
- 24 小野忠熙他『吹越遺跡予備調査概報』（平生町教育委員会、1970年）。
- 小野忠熙他『吹越遺跡第二次調査概報』（平生町教育委員会・山口県教育委員会、1972年）。
- 25 山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」（『西部瀬戸内における弥生文化の研究』、1984年）。
- 26 渡辺一雄・中村徹也『よみがえる弥生のムラ・突抜・馬場遺跡』（山口県教育委員会、1985年）。
- 27 村岡和雄「坂手沖尻遺跡」（『坂手沖尻・惣の尻遺跡』、山口県教育委員会、1978年）。

## 山口県内の弥生時代貯蔵穴について

森下 靖士\*

### 1はじめに

近年発掘調査の増加に伴って、県内においてもいわゆる貯蔵穴（穴倉）と呼称される遺構の発掘例も急増しつつあり、管見では現在25遺跡をかぞえる。山口大学構内遺跡の発掘調査においても、このたび大学会館前庭部の調査で弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴と思われる一基の袋状堅穴を検出した。これを機会に、本稿では県内においてこれまでに検出された、特に弥生時代に属する貯蔵穴について整理、分類を行ない、それによって導

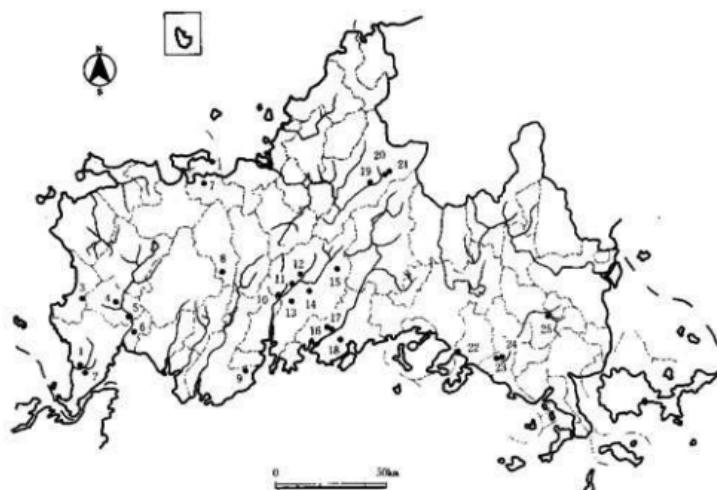


Fig. 105 県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡分布図

\* Yasushi MORISHITA 山口大学大学院人文科学研究科

## 山口県内の弥生時代貯蔵穴について

Tab. 10 県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡地名表

遺跡名	所在地	時期	数	型式	出土食料植物種子類 (出土遺構)	備考	文献
1 純羅木郷	下関市	前期後半 中期初頭 中期後半	900基以上 (積合)	I, II, V	炭化米、リコトウ、ア スキー、堅果類(イナガ シ、スダジイ)	植物性食料出土遺構多 数	11, 12, 23
2 伊倉	下関市	前期末 中期初頭	82基	I		複式土壙を含む	13, 24, 35
3 城山	春浦町	中期前半	3基	I			16
4 坂ノ上	菊川町	前期後半 中期初頭 中期後半	正確な数 不明	II, V			27
5 上原	菊川町	中期初頭	44基	I, V		地上、灰を含む。床面に 焼けた痕跡	9
6 常ノ尾山	下関市	前期末 中期初頭	2基	I			23
7 湯免	三隅町	中期後半	1基	II	堅果類(ドングリ、シイ、 クリ新苗地区上層)		29
8 松ヶ追	秋芳町	中期前半 中期後半 中期初頭	3基	I			26
9 引野	阿知須町	中期前半	10基	I			2, 3, 4
10 朝田塙墓群	山口市	中期前半 中期後半	20基	I	炭化米、穀物(16, 20号新苗上層)、 アズキ(12, 13, 15, 17号新苗上層) 30, 31, 32, 33, 35, 36, 37号新苗上層)		30
11 下東	山口市	前期末 中期初頭	20基	I, V	炭化米(YP 17, 27)	堅果類(シイガシ、アラ カシ YP-1)	10
12 萩崎	山口市	前期末	1基	II			10
13 吉田	山口市	前期末 中期初頭	1基	I			本古
14 大内氷上古墳	山口市	中期後半	1基	I			33
15 丸山	山口市	中期後半	1基	I			34
16 墓正権寺	防府市	中期前半	1基	I			31
17 大崎	防府市	中期前半	28基	I, II	炭化米(SK 9, 15, 17, 30, 31)堅果 (コナラ SK-5, 31, クヌギ SK 17, 20, 31, ツバキ SK 31)	褐色の土、層をなす(SK 9, 15)十番内より出土 (SK 30, 31)	31
18 井上山	防府市	中期後半	19基	I, II, V			5
19 突抜・馬場	阿東町	前期末 中期後半	200基以上	II			32
20 坂手沖尻	阿東町	中期後半	正確な数 不明	I, II, V			28
21 懸ノ尻	阿東町	前期末 中期前半 中期後半	正確な数 不明	IV, V			28
22 宮原	下松市	中期後半 中期初頭 中期前半	36基	I, II, V	炭化米(11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31)堅果 (コナラ SK-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31)		25
23 天王	熊毛郡	中期後半 中期初頭	9基	I, II	堅果類(シイ、カシ、4号 堅果)		36
24 因山	熊毛郡	中期前半 中期後半 中期後半	2基	II	炭化米、アズキ、リコトウ、 ダイズ(いずれも A 地区堅穴 住居床面検出堅穴)		36
25 河池	周東町	中期後半	1基	I			14

### 貯蔵穴の分類

きだされる問題点について考察を試みる事にしたい。

なお、その作業に伴い県内の弥生時代貯蔵穴検出遺跡地名表（Tab. 9）及び分布図（Fig. 105）を作成した。今後の参考となれば幸いである。

## 2 貯蔵穴の分類

現在まで県内で検出されている貯蔵穴には、現状での認識のされ方から大別して三種類のものがあると思われる。第一は袋状堅穴、ドングリピットといった定形的で貯蔵穴として使用されたことが実証されており、かつ、貯蔵穴としてかなり明確な定義付けがなされているものである。岡山遺跡、天王遺跡においてみられるように壁面が垂直で袋状を呈さない点を除けば、立地、規模、出土遺物（特に当時の食料とみられる食用植物種子類）等袋状堅穴に類似し、貯蔵穴であることが実証できるものもこれに含める。第二は、出土遺物の点からは貯蔵穴であることが実証されえないが、立地、規模、形態から推測して貯蔵穴の可能性をもつものである。突抜・馬場遺跡においてみられる、平面長楕円形、断面矩形の深い土壙はこれにあたる。第三は、従来貯蔵穴として認識されていなかったが、筆者が貯蔵穴として扱う必要のあると考える堅穴遺構である。宮原遺跡、上原遺跡などにみられる平面方形ないしは長方形で、断面が矩形（壁面が内傾気味でごく弱い袋状のものも含む）を呈する一群の堅穴遺構がこれにあたる。ここでその形態も考慮に加え県内出土の弥生時代の貯蔵穴のうち、第一とした袋状堅穴をⅠ類、袋状堅穴に準ずるが断面が袋状をなさないものをⅡ類、ドングリピットをⅢ類、第二とした平面長楕円形、断面矩形の

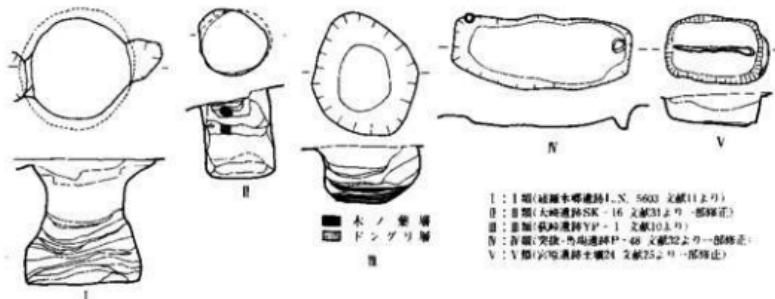


Fig. 106 県内の貯蔵穴の分類

ものをⅣ類、第三とした平面長方（方）形、断面矩形のものをⅤ類とする（Fig. 106）。

以上、県内の弥生時代の貯蔵穴を主に形態と從来の認識のされ方からⅠ類～Ⅴ類に分類したが、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類については貯蔵穴であることに議論をさしはさむ余地はなく、問題となるのはⅣ類およびⅤ類であろう。しかし、Ⅳ類については類例も少なく、また、貯蔵穴としての機能を有することを実証するに足る資料にも乏しいため現状ではこれについて論ずることは困難である。従って、以下本稿ではⅤ類に分類した貯蔵穴について筆者の考えるところを述べてゆくことにしたい。

### 3 V類の貯蔵穴について

前節では、県内の弥生時代貯蔵穴をⅠ類～Ⅴ類に分類した。そのうちのⅤ類は、従来は貯蔵穴として認識されていなかった竪穴遺構（以下竪穴と略す）である。本節ではこの種の竪穴について県外の類例もまじえて、その機能、使用方法を検討してゆくことにする。

まず、この種の竪穴（V類貯蔵穴）について現在知られていることを概観しておこう。  
 文獻12) 文獻11)  
 この種の竪穴は県内では宮原遺跡、上原遺跡の他、綾羅木郷遺跡、同遺跡上ノ原地区、  
 下東遺跡<sup>文献10)</sup>に類例がある。県外の類例は福岡県板付遺跡、宝満尾遺跡、合田遺跡、北内  
 煙遺跡、小郡正尻遺跡などに求められ、板付遺跡をはじめとして袋状竪穴として報告さ  
 れていることが多い。壁面が弱い袋状を呈するものがあるためであろう。

形態は平面長方形ないしは方形（隅丸のものを含む）で前者のものが多い。断面形は矩形ないしは弱い袋状を呈し、前者が多い傾向にある。規模は方形のもので床面の一辺1～1.6m前後、長方形のもので長辺1.3～2.2m前後、短辺0.7～1.3m前後を計る。長方形のものについては長辺と短辺の比がほぼ2：1となるものが多い。深さは削平により上半部を欠失するものが多いが、遺存状態の良い例から推測すれば0.7～1.3m前後となるだろう。  
 一般的に袋状竪穴と比較して浅いのを特徴とする。その他の形態的特徴として、付属施設がある。床面の溝、柱穴状ピット、入口部蓋受けがその主なものである。柱穴状ピットは床面にあるものと、竪穴周辺にあるものがあり、前者は綾羅木郷遺跡上ノ山地区P46  
 (Fig. 107-1)、後者は宮原遺跡土壌23、24などに見られる。前者については、床面四隅及び壁際に2～8個設けられ、県外、特に板付遺跡に例が多い。蓋受け (Fig. 107-3)、床面の溝はいずれも宮原遺跡で見られる。

土層の堆積状況を見てみると、そのほとんどが水平または地形の傾斜に沿った自然堆積の状況を示し、人為的に埋没が行なわれたと思われる堆積状況を示すものはない。宮原遺

V類の貯蔵穴について

跡においては特にそれが顕著に認められる (Fig. 107-1, 2, 3, 4)。

出土遺物は土器及び石器といった生活遺物がその主なものであるが、完形で出土することはごく稀で、破片であることがほとんどである。しかもその出土状況を見ると、床面より浮いて出土するが多く使用状態、例えば床面に据えられた状態で出土することはほ

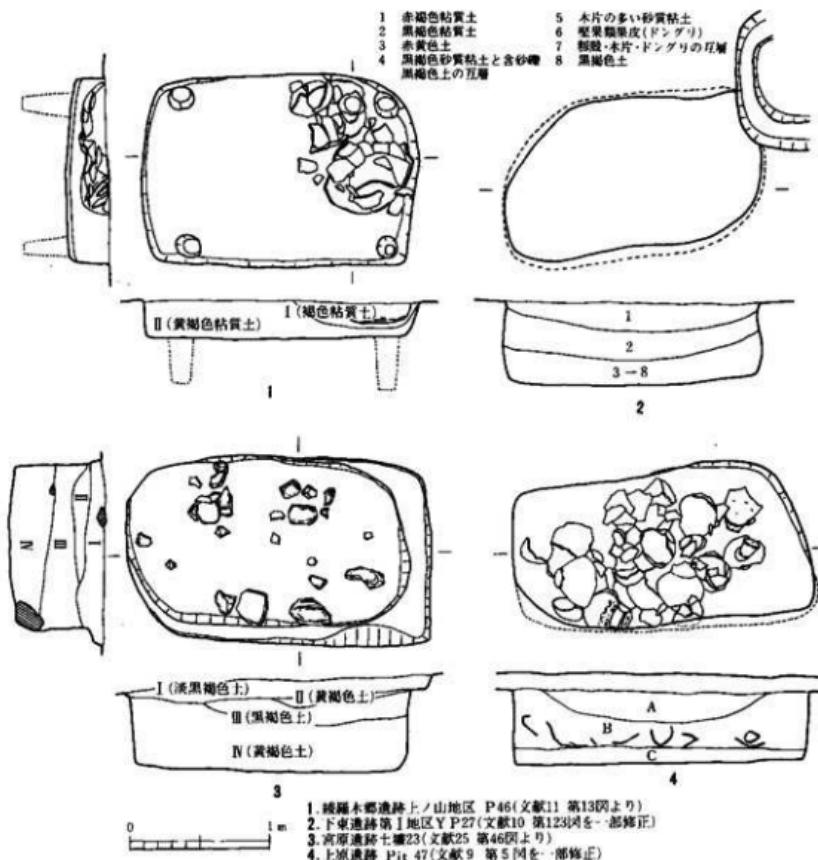


Fig. 107 各遺跡のV類貯蔵穴 (1/40)

とんどない。これらの遺物は堅穴の機能停止後、ごみ穴として使用された際に投棄されたか、あるいは埋没過程での流れ込みと思われる。その他に自然遺物として、食料植物種子類、すなわち、炭化米（宮原遺跡、板付遺跡）、炭化麦（宮原遺跡）、堅果類（北内畠遺跡）等がある。出土状況には大量に層をなして出土する場合と、散在してあるいは単独で出土する場合の二種類があるが、前者はごく稀である。県内例では宮原遺跡で両様の出土状況が見られる。また、焼土、灰、木炭が出土する事がある。床面、あるいは床面近くで層をなして出土する場合と、床面から浮いてブック状になって出土する場合がある。<sup>註3</sup>

時期についてみると、最古のものは板付遺跡に見られる。夜臼式土器及び板付I式土器が共伴して出土する弥生時代前期前半のものである。県内における最古例は綾羅木郷遺跡に見られ、綾羅木I式土器を出土しており、前期後半でも古期に位置付けられる。時期の新しいものとしては宮原遺跡、上原遺跡に中期初頭に位置付けられるものがあるが、中期前半まで下る例はない。県外、県内を通じてその時間的分布は前期に集中しており、特に前期後半から末にかけてのものが多い。前期前半に位置付けられる例は現在のところ板付遺跡以外では認められない。

さて、この種の堅穴の持つ機能（用途）について、従来幾つかの推論が行なわれてきた。宮原遺跡の調査報告書において、報告者はその機能について貯蔵穴、墓壙（土壤墓）の可能性をあげているが、前者については否定的で、墓壙の可能性が高いとし、その根拠として副葬品と見られる完形の小壺、石劍や、壺棺と見られる大型壺の出土すること、他遺跡における同様の遺構より木棺跡、人骨が検出されること、蓋受けが土壤墓、木棺墓に見られる二段掘りの墓壙に類似することをあげている。また上原遺跡の報告書中、富士整勇氏は、宮原遺跡の報告をふまえ、床面で完形に近い土器が出土するものがあること、床面に火を受けた痕跡を残すものがあることを根拠として、墓壙としての機能を否定し、土器焼成場の可能性を論ぜられた。また性格不明の土壤としてされているもの（綾羅木郷遺跡ノ山地区）もあり、貯蔵穴として扱われているのは綾羅木郷遺跡等数例にすぎない。

以上のように、この種の堅穴は従来その機能として貯蔵穴を当てられることは少なかつた。しかし、筆者はこの種の堅穴の機能として、貯蔵穴が最も妥当なものと考えている。

この種の堅穴の機能を墓壙と見る場合、形態の点ではそれを肯定できるものの、土層の堆積状況から見ると、それは全く否定的であるといえる。何故ならば、墓壙とすれば、その土層堆積は一括で埋められるため单一層となるはずであるのに対して、この種の堅穴は、報告書に示された土層図を見る限り明らかな自然堆積を示すものがほとんどである。

また、黒褐色土、茶褐色土の層をはさむことは、これらの層が一定期間地表に露出していたことを暗示させ、この種の堅穴が自然堆積による埋没過程をたどったことを裏付ける。遺物の出土状況はそれらが廃棄されたことを示すが、墓に対してそのような行為が行なわれるとは考えにくい。従ってこの種の機能として墓壙は不適当である。次に、土器焼成壙と仮定してみると、床面及び壁面に火を受けた痕跡を残すこと、灰、焼土、木炭の出土することからはこれを否定できない。形態上からも同様なことがいえる。<sup>115</sup>とはいって、この種の堅穴すべてから以上の諸特徴が見い出されるわけではなく、現状ではその幾つかがこの機能を有する可能性を持つといえるにすぎない。

最後に貯蔵穴としての機能を有すると仮定した場合、この種の堅穴に見られる諸特徴に最もよく合致する。まず、堅穴内から当時の食料に供されたと思われる植物種子類が出土することが挙げられる。遺跡において、これらの食料植物種子類が遺物として見い出される可能性が高いのは、それらが貯蔵された場所、食された場所、廃棄された場所であろう。遺構にそれをあてれば、貯蔵穴、高床倉庫、住居跡、ごみ穴がそれにあたる。なかでも貯蔵穴は、地下に掘り込まれるという点から、内部に収納された食料植物種子類が残される可能性が他よりも高いといえる。この種の堅穴の機能として、住居はその規模の点から除外される。ごみ穴としてこれらの定形的な堅穴を掘ることはないというごく常識的な仮定を認めるならば、その機能もやはり除外される。そうすると、これらの堅穴の機能として残されるのは貯蔵穴である。宮原遺跡における炭化種子類の出土状況をみると、床面から浮いて、あるいは一ヶ所に偏在して廃棄を思わせる出土状況を示すものもあるが、大半は床面か、あるいは床面に近い層からの出土である。このことは、貯蔵されていた食料植物種子類が何らかの理由で堅穴内に残されたことを思わせる。

次に、堅穴内からの焼土、灰、木炭、などの出土及び床面、壁面に見られる火を受けた痕跡について考えてみる。堅穴は地下に掘り込まれるという性格上、内部の湿度が高いことは避けられない。袋状堅穴を用いて内部の温度及び湿度の計測実験が試みられているが<sup>116</sup>その結果、堅穴内部の湿度は 100% 近いものになることが確認されている。この湿度の高さが、堅穴内部に貯蔵された食料、特に、米、麦などの穀類の保存に大きな影響を与えるであろうことは想像に難くない。防湿のため何らかの処置が取られたことが想像される。焼土、灰、木炭、火を受けた痕跡は、堅穴内部の乾燥を目的として内部で火がたかれたものと見ることができる。

また、床面及び入り口周辺の柱穴状ピット、入り口部の蓋受けといった上屋施設、ある

いは被覆施設の存在を示唆する付属構の存在することも、貯蔵穴としてこの種の堅穴の機能を示すものであろう。何故ならば、屋外に貯蔵穴が構築される場合、上屋もしくは被覆施設の存在なしには、日本という湿润な気候風土を持つ地では到底その機能を果たしえないと考えられるからである。

以上の点から、この種の堅穴の機能として貯蔵穴が最も妥当であると考える。

それでは、貯蔵穴の使用法としてどのような方法が考えられるであろうか。貯蔵穴内に食料を貯える際には次の二通りの方法が考えられる。すなわち、1、容器を容器にいれて堅穴内に収納する、2、容器を用いず直に収納する、の二通りである。現在までのところ、どちらの方法が用いられたかを直接に示す資料はないが、上原遺跡において、完形あるいは完形に近い土器が、あたかも床面に据えられていたかのような状態で出土していることからみて (Fig. 107-4)、前者の方法が行なわれていた可能性がある。とはいって、後者の方法が行なわれなかつたとは必ずしもいえない。宮原遺跡においては炭化米に混じて多量の有機物を含む層が観察されており、また、下東遺跡 Y P 26 (Fig. 107-2) において、床面近くで木の葉、木片、炭化糧が互層となって堆積しているのが観察された。後者の方法を用いる場合、床面及び壁面には防湿を目的として例えば藁、糧穀といったものが充填されたと考えられるが、有機物を含む層や木ノ葉の層はその名残りとも考えられる。

最後に県内におけるこの種の堅穴の系譜について述べておきたい。この種の貯蔵穴の最古の例が板付遺跡環濠内の方形堅穴に求められることは前述したが、それと同時に、板付遺跡の方形堅穴は弥生時代の貯蔵穴としても最古例である。<sup>註11</sup> 県内においても、綾羅木郷遺跡をはじめとして弥生時代前期後半に位置付けられるものも最古例とし、綾羅木郷遺跡に見られる平面方形の袋状堅穴を除けば、この時期には他の形態の貯蔵穴は存在していない。下限については、宮原遺跡、上原遺跡での中期初頭に位置付けられる少数例を除けば、ほぼ前期に取まる。県内における袋状堅穴が、中期に至ってボビュラーとなるのに対照的である。上原遺跡においては、この種の貯蔵穴以外に、平面円形の袋状堅穴があるが、遺構の切り合いで出土土器の検討から、前者が後者に先行することが報告されている。県内におけるこの種の貯蔵穴の祖形はやはり板付遺跡の方形堅穴に求められ、弥生文化の流入に伴って県内にも流入定着したものであろう。ほぼ同時期に袋状堅穴も流入したが県内においてまず受け入れられたのはこの種の貯蔵穴であった。そして時間の経過と共に袋状堅穴に取って代わられていったものと思われる。

#### 4 おわりに

以上、県内出土の貯蔵穴をⅠ類～Ⅴ類に分類し、特にⅤ類の貯蔵穴について筆者の考えるところを述べた。とはいっても、この種の貯蔵穴については、特にその機能や使用法を論ずる際に、それらを直接に示す資料に欠けるため、その多くの部分を土層堆積状況、出土遺物などの間接的な資料に基づく推測に頼らざるをえず、隔靴搔痒の感があるのは否めない。本稿において筆者の述べたことも、その意味ではこの種の堅穴（筆者の貯蔵穴Ⅴ類）の機能についてのありうる可能性に新しく一項を付け加えたにすぎない。新資料の増加を待つて、改めて論ずる必要があるだろう。また、本稿では筆者の力不足により論ずることができなかったが、Ⅳ類に分類した貯蔵穴についても同様のことを感じている。

最後になりましたが、本稿執筆の機会を与えて下さった山口大学埋蔵文化財資料館館長近藤喬一先生、並びに河村吉行氏、森田孝一氏（現山口県埋蔵文化財センター）には心から感謝する次第です。

〔注〕

- 1) 日本考古学協会による板付環濠遺跡の調査（文献17）、福岡県教育委員会の市街住宅建設に伴う調査（文献21）、福岡県教育委員会の県道505号線新設改正工事に伴う調査（文献22）で検出されている。
- 2) 形態上袋状堅穴と区別されるのはこの点である。袋状堅穴は床面の一辺あるいは床面径と深さがほぼ一致するものが多く、従って、浅いものでも深さ1mを越え、深いものは3m以上にも達するものがある。断面形態においても、袋状堅穴が入り口部に比べて床面が著しく広いのに対して、この種の堅穴は、袋状といつても、入り口部と床面の広さはほとんど変わらない特徴とする。
- 3) 焼上、灰、木炭は、袋状堅穴から頻繁に出土することが知られており、この種の堅穴からこれらが出土することは注目される。
- 4) 時期区分の表記については、前期を前半（板付I式並行期）、後半（板付II式並行期）、末（板付II式並行期）中期を初頭（城ノ越式並行期）、前半（須恵I式並行期）、後半（須恵II式並行期）とする。山本一朗氏の編年では、防長I式及びII式が前期後半、III式が前期末、IV式が中期初頭、V式が中期前半、VI式が中期後半に対応する（文献37）。山本氏は防長I式が板付I式後半期にあたるとし、前期前半に当てておられるが筆者はその考え方にはならない。
- 5) 近年各地で土器焼成壙が検出されているが、形態は様々であり、形態上の特徴からその機能を論ずることは困難である。
- 6) 土壙16及び24では大量の炭化物が出土しているが、土壙16では床面から浮きかつ東壁中央部の壁際に集中して、土壙24では床面出土ではあるが西壁の壁際から上壙中央部にかけて、壁際には厚く中央部にゆくにつれて薄く堆積して出土しており、貯蔵状態での出土とは考えにくい。何らかの理由で食用に適さなくなつたものが廃棄されたものと考えられる。
- 7) 袋状堅穴を用いての内部の温度及び湿度の計測実験は、福岡県門出遺跡（文献18）、鳥取県丸山遺跡（文献15）で試みられている。
- 8) 中国にあっては、穀物貯蔵施設として、高床倉庫の施に資（とう）、窖（こう）と呼ばれる貯蔵穴が使用されたことが元代の農学書『農書』（文献8）の記事にあり（卷十百載譜十一）、また、これらの貯蔵穴は掘削されたあと内部で火がたかれ、内部を乾燥させたあとに使用されたという記事がある（卷十六農器

## 山口県内の弥生時代貯蔵穴について

- 諸十)。地面に掘った整穴を貯蔵用施設として使用する場合、掘削直後の整穴内部が湿っていることは当然であり、何らかの処置によって、内部の乾燥が行なわれたことは想像に難くない。
- 9) 袋状整穴においては両者いずれの方法も行なわれていたようである。署名有福岡県津古内燃道跡(文献6)では後者が、県内では、防府市大崎遺跡(文献31)で両者の例が見られる。
- 10) やはり、「農書」に、資の床面及び壁面に縫をいれて、貯蔵する穀物を囲ったという記事がある(巻十六農國諸十)。
- 11) 袋状整穴にも板付遺跡(文献17)で、夜臼式、板付土式土器を伴う例があるが、少數例であり、この時期の貯蔵穴としてはこの種のものが主流を占める。

### 参考文献

- 1) 赤村教育委員会「合田遺跡」1985年
- 2) 阿知須町教育委員会「引野遺跡・丸塚古墳群」1977年
- 3) 阿知須町教育委員会「引野遺跡・丸塚古墳」1978年
- 4) 阿知須町教育委員会「引野遺跡」1981年
- 5) 井上山遺跡発掘調査団「井上山」1979年
- 6) 小郡町教育委員会「津古内燃道跡」1970年
- 7) 小郡町教育委員会「北内燃道跡」1981年
- 8) 王祐「農書」中華書局出版1956年上海
- 9) 萩川町教育委員会「上原遺跡発掘調査報告書」1973年
- 10) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡・荻町遺跡」1975年
- 11) 財團法人山口県教育財團・山口県教育委員会「萩羅木郷台地遺跡(上ノ山地区)」1986年
- 12) 下関市教育委員会「萩羅木郷遺跡」1981年
- 13) 下関市教育委員会「伊倉遺跡」1984年
- 14) 周東町教育委員会「河池遺跡」1982年
- 15) 熊取県三朝町教育委員会・花岡大学考古学研究室編「丸山遺跡発掘調査報告書」1984年
- 16) 直瀬町教育委員会「城山遺跡」1986年
- 17) 日本考古学会編「日本農耕文化の生成」1961年
- 18) 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第7集」1978年
- 19) 福岡県教育委員会「九州新幹線自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-7-」1986年
- 20) 福岡市教育委員会「宝満尾遺跡」1974年
- 21) 福岡市教育委員会「板付一市営住宅建設に伴う発掘調査報告書-1971-74」1976年
- 22) 福岡市教育委員会「板付一県道505号線新設改良工事に伴う発掘調査報告書(1)」1977年
- 23) 山口県教育委員会「山口県文化財概要第4集 種族文化財」1961年
- 24) 山口県教育委員会「伊倉遺跡」1973年
- 25) 山口県教育委員会「宮原遺跡・上広石遺跡」1973年
- 26) 山口県教育委員会「幸崎古墳・松ヶ瀬遺跡」1973年
- 27) 山口県教育委員会「坂ノ上遺跡」1974年
- 28) 山口県教育委員会「坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡」1978年
- 29) 山口県教育委員会「園場整備事業に伴う発掘調査報告書下関市寺秋遺跡・三橋町湯免遺跡」1979年
- 30) 山口県教育委員会・建設省山口工事事務所「朝田耕墓群」1983年
- 31) 山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「奥正惟寺遺跡・大崎岡古墳群・大崎遺跡」1985年
- 32) 山口県教育委員会「よみがえる弥生のムーラ交換・馬場遺跡-」1985年
- 33) 山口県教育委員会「大内永上古墳」1986年
- 34) 山口市教育委員会「丸山遺跡」1983年
- 35) 山口大学考古学研究室「西部灘戸内における弥生文化の研究」1984年
- 36) 山口大学島田川遺跡学術調査団「島田川」1953年
- 37) 山本一朗「防長の弥生式土器」周陽考古学研究所「山口県の弥生式土器-集成と編年-」1979年

—館蔵資料紹介—

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器

杉原和恵

はじめに

ここに紹介する資料は、響灘に浮かぶ小島、六連島（山口県下関市）において、昭和33年3月、当時山口大学教育学部助教授であった小野忠熙氏が下関市教育委員会の委嘱を受けて発掘調査を行なった際に出土したものである。現在は、他の出土遺物とともに当山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている。

いわゆる朝鮮系無文土器の日本国内における出土が留意され報じられるようになったのはここ十数年のことであるが、以来、既出の資料についても再確認が行なわれ、九州北部を中心<sup>1)</sup>に次第に出土例・確認例を増しつつあり、近年では近畿からの報告も聞かれる。

本資料は、調査報告で弥生土器に包括して記載されたため、後の文献にもそのまま引用・転載され、今日までその存在が知られなかった。当館では、人文学部考古学研究室学生諸氏の協力を得つつ、1985年度より館蔵品の把握と公表を目的として収蔵遺物を整理しているが、その作業に伴い、本資料が朝鮮系無文土器であることが確認されるに至った。弥生時代日韓の併行関係を立証する上でこの種の土器の存在意義は特に高いが、その類例はまだ充分と言える段階ではなく、<sup>2)</sup>

山口県内では下関市綾羅木郷、同<sup>3)</sup>市秋根、宇部市沖ノ山、阿知須町<sup>4)</sup>引野、山口市西、防府市大崎の6遺跡からの出土が知られるにすぎない。六連島遺跡は小島の砂嘴に立地するため、波浪による擾乱を受け遺構や遺物の共存関係は判然としないが、同形態の口縁をもつものの出土例が少ないともあり、既出資料の再検討を啓發する意味も兼ねて特に紹介することとした。

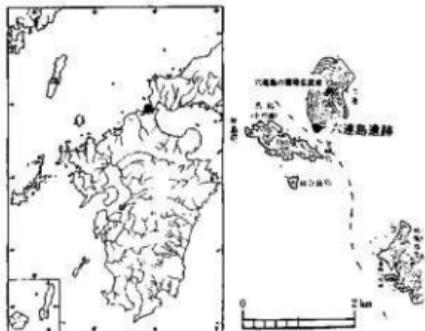


Fig. 108 六連島遺跡位置図



Fig. 109 朝鮮系無文土器実測図

## 朝鮮系無文土器 (Fig. 109)

2点とも甕であるが、胴部下半、底部を欠き、全体の形状は不明である。

1は復原口径15.2cmを測り、内外面とも淡橙色を呈する。胎土には1~2mmの石英・長石を多く含み、焼成は良好。器面は残存部を見るかぎりすべてナデ調整。形態の特徴は、頸部が、やや甘いが明確に稜をもって「く」字状に屈曲すること、そして口縁を外面に平たく折り返して粗雑にナデつけ、口縁の断面が細長い三角形になることである。この折り返しは、表面を強く指で押さえて器表に密着させた後に横ナデして整えており、そのため中央が凹みやや下ぶくれの感がある。

2も基本的には1と同様の手法を用いているが、1よりも内傾し脇が張るようである。口縁の折り返しは1ほど中央の凹みがなく扁平であるが、部分的にはかなり中央の凹む箇所もあり、胎土、焼成、色調とも1に酷似するところから、少し歪みのある同一個体である可能性も捨てきれない。

韓国本土では、口縁に粘土紐を巻きつけたり口縁を外面に折り曲げたりする特徴をもつ無文土器を、一般に「粘土帯土器」と呼称している。本資料は、そのなかでも後藤直氏が口縁断面が円形を呈する「粘土紐甕」と一線を画して「粘土帶甕」と呼び、より後出する形態であるとしているもので、同氏編年の後期第三期に比定される。<sup>10)</sup> 口縁部断面が三角形で、頸部の屈曲するものは、秋根、沖ノ島社務所前、対馬の芦ヶ浦第一洞穴とオテカタの各遺跡で出土しているが、秋根のものは折り返した粘土帯表面に押さえによる凹みがなく、沖ノ島・芦ヶ浦のものは押さえの後の横ナデ調整に受け指頭痕を顕著に残す。粘土紐を強くナデたり押さえたりという手法だけならば、他に宍戸の原ノ辻、小郡市横隈鍋倉遺跡などにも類例があるが、口縁内面の屈曲度や口縁の断面形は、「粘土紐甕」の域を出ない。本資料のような手法・形態をもつものは、むしろ直接韓国南東部の洛東江流域に多くの出土例を見ることが近年の韓国側の調査により確認されつつあり、現状で韓国本土の「粘土帶甕」に最も近似するのが本資料であると言える。これと対照的に、口縁断面円形の「粘

「土紐壺」は朝鮮半島中部の漢江流域にその分布の中心をもつのは興味深い事実である。無文土器の日本における受容形態は、断面円形のものが、先進地域であろう福岡平野とさらに内陸の筑紫平野北部を中心に、ややまとまって出土するのに対し、断面三角形のものは朝鮮寄りの島嶼、山口県海岸部で散見される程度である。日韓両国内において、無文土器の地域差と時期差の関係を追求してゆく必要がある。

#### 出土弥生土器の検討 (Fig. 110~112)

<sup>180</sup> 報告によれば、トレンチ内で検出された数枚の包含層は、相互に若干の混入はみられるもののほぼ一定の文化期ごとの堆積を示していたという。がそれは、縄文、弥生、土師須恵の各土器層という大枠での見解であり、各時代のなかでさらに土層の細分ができるほどに整然とした堆積状況ではなかった。よって本稿では、出土した弥生土器のうち図化可能なもののほとんどをともに紹介し、無文土器の帰属時期推定のための検討に供する。

1~11は壺。壺に比べて壺の出土は少ないが、1~4と5~10との2時期に分けられるようである。1・2は口縁部片で、1はかなり頭部が内傾し、内面上部に平坦面を有する。2は頭部との境にやや甘い段をもつ。3、4は胴部片であるが、同一個体の可能性がある。3は頭部との境に段を有し、ヘラ描きの沈線と方向を変える有輪羽状文を施文。4は3より下部にあたる破片で、截頭山形文の上を沈線で画し、その上に何らかの文様をもつ。

5は端部に平坦面を作り、頭部は直立するようである。6は端部が丸く、器壁が厚い。7はラッパ状に聞く口縁の内面を貼り付けにより肥厚させ、その上に円形浮文を貼り付ける。端部はやや下垂気味に面を作り鋸歯文を配するが、その施文は未だ類例を見かないトゲ状の突起をもつ工具の押圧による。横ナデ仕上げであるが、頭部近くは刷毛が残る。8は胴部最大径に尖頂突帯を貼り付け、その下方を指圧する。内面刷毛、外面ミガキ。

9は長頸壺の口縁部片で、口縁下にM字状突帯を2条貼り付け、全面に赤色顔料を塗布する。10も長頸壺の可能性がある。頭部屈曲部外面に突帯を貼り付け、その上に刻みを押圧するが、この施文具も類例を見ない形態である。11は穿孔を有する無頸壺の口縁部片。

12~41は壺で、12~26が前期、27~35が中期、36~41が後期に比定できる。

12~20・22・23は刻みをもつ口縁部片で、21のみが刻みをもたず他に比べ弱い。12~16・23は平坦な端部を作らず、ほぼ端部の上下に渡って刻むもの。12・13はランダムに刻みを押圧する他の個体と異なり規格的な押圧刻みを行なう。16は刻みがやや下端に寄り、口縁内面が内彎気味につまみ上げられている。23は頭部内面に棱をもち、かなり張る胴部に少

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器

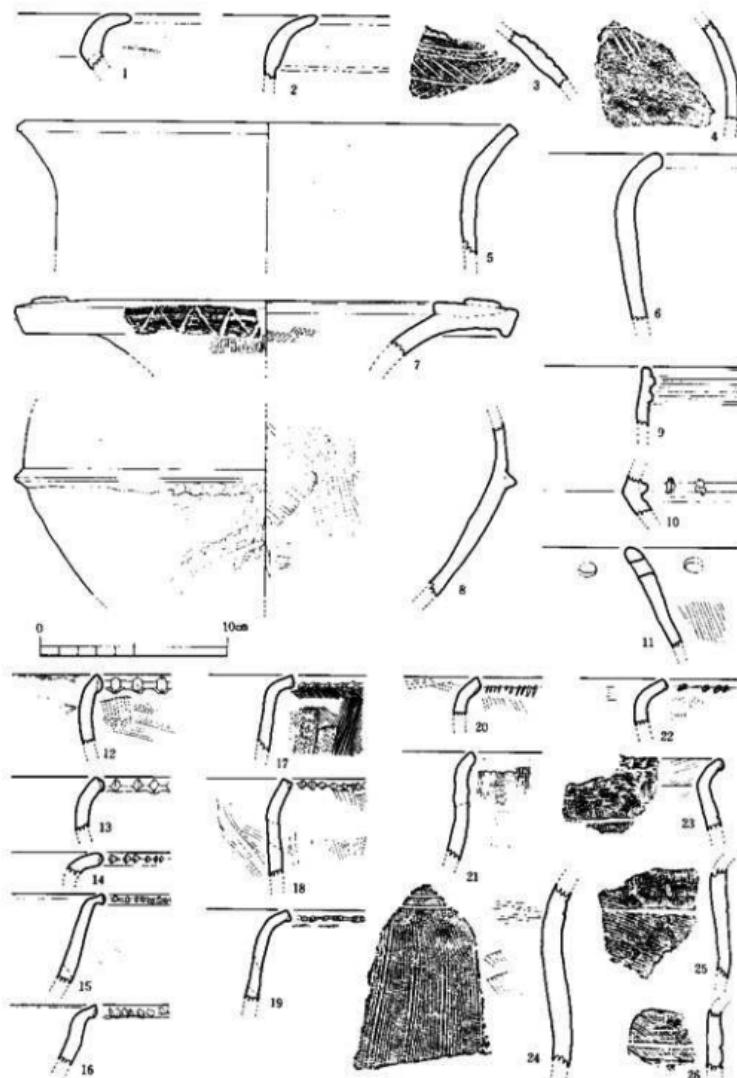


Fig. 110 弥生土器実測図 (1)

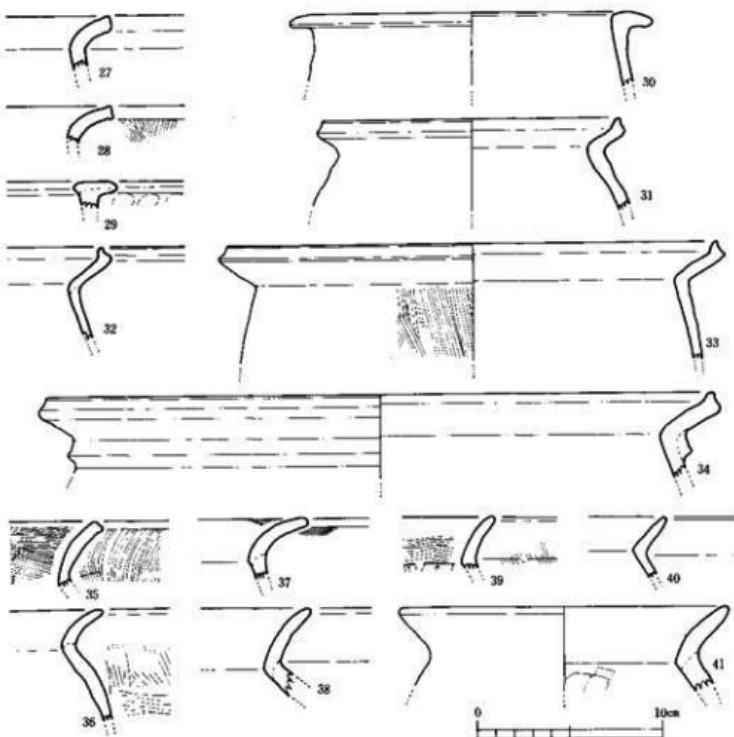


Fig. 111 弥生土器実測図（2）

なくとも 1 条の沈線を施す。口縁の刻みは刷毛原体による。17~20・22は端部をきちんと面取りした後、その下端を刻むもの。20は刻みが細く退化している感を受ける。22は脛が張り、刷毛原体で刻みを施す。25・26はこれらに伴うとみられる脛部片で、ともに口縁部との境で欠損し、25は 1 条、26は少なくとも 2 条の沈線を有する。24も脛部片で少なくとも 2 条の沈線を有するが、胎土・焼成良好で器壁が厚く、前述の二者とはかなり異なる。

27・28は口縁端部に面を作り、内面がわずかに内弯気味になるもので、27は頸部内面に明確な稜をもつ。29・30は強く短く屈曲する口縁をもち、硬質の焼成。29は頸部外面に指圧痕を残す。31~34は遠賀川以東で普遍的に出土する跳ね上げ口縁をもつもので、どの個

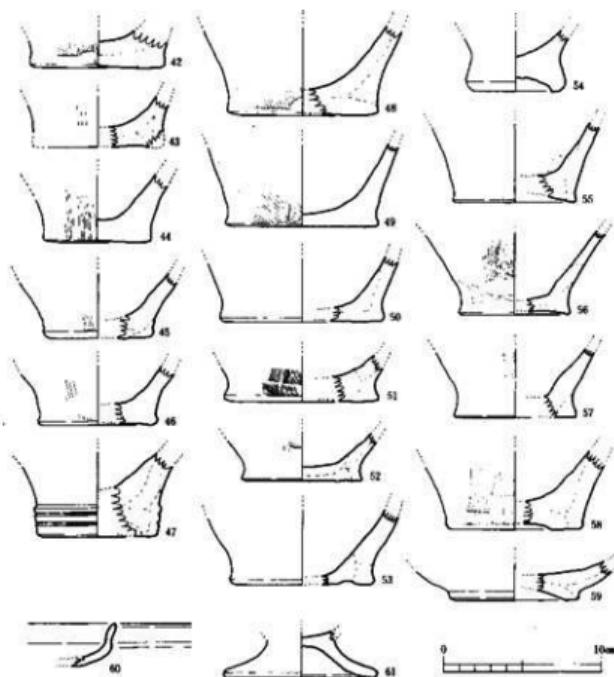


Fig. 112 余生土器実測図（3）

体も端部外面をヘラ状のもので横ナデして凹ませており、跳ね上げの部分が外反するような印象を与える。33の外面には煤が多量に付着。34は頸屈曲部外面に1条の突帯を貼り付ける。35は時期がやや降ると思われるが、硬質で、外轉した口縁の端部に面を作る。

36~41は、明らかに時期の異なる一群である。37・39・41は内面頸部以下はケズリ。40もその可能性がある。39・40は胎土・焼成良好で、40は端部にわずかに面を持つ。

底部は、やはり甕が多数を占めるようである。

平底には、底径7~8cmの小型のもの（42~47・52）と、10cm前後の大型のもの（48~51・53）とがあるが、そのうち52・53は薄手で底面の外側近くに凹みが巡る。47は、厚く円板状に削り出した底部の外周に刷毛原体による2条の沈線をもつ甕。

54～59は上げ底のものであるが、57は平底の可能性もある。底面外側に平坦面を作らずすぐに上げ底になるものの（54～56）と、外側に平坦面を残して中央部を凹ませるもの（58・59）がある。54は硬質だが底部外面の調整が粗い。55は縦刷毛の後外面を縦方向に強くナデしている。56は外面に顕著な指圧痕を残す。59はあまり類例を見ないが高台状の底部をもち、胴下部がかなり内彎する。

60は高坪の环部片。61は脚台付きの鉢または壺の脚部と思われる。

以上の土器の検討により、六連島遺跡の弥生時代は、ある程度の空白期間をはさみながらほぼ4時期に区分できるように思われる。

**弥生Ⅰ期** 前期中葉から後半にかけての時期。1～4の壺やFig. 110の壺のほとんどはこの時期に属するものであろうが、むしろ3・4の壺の文様や、壺の胴が張らず鉢形になるものが多いこと、沈線が少ないとことなどから、やや古い要素をもつものの方を主体とするであろう。

**弥生Ⅱ期** 前期終末から中期前葉にかけての時期。23・27・29・30の壺口縁や47の壺底部、54の壺底部がこの時期にあたると思われるが、この時期にあたる特徴的な壺が47以外に認められないため、生活の一時期として成立させるにはやや根拠が弱い。<sup>(19)</sup>九州北部の中期土器は遠賀川を境としてその東西で系譜を異にするとされるが、六連島の場合は前期末には在地（遠賀川以東）の特色が濃く、中期に入ると遠賀川以西の直接の影響が汲み取れる。

**弥生Ⅲ期** 中期後半を中心とする時期。壺・壺とともに径を復原できる程度の破片が残っている。7～9の壺や31～34の壺などが典型的なこの時期のものである。中期前葉とは違い遠賀川以東系の土器を主体とするが、7の壺は瀬戸内と九州との文化の折衷形態として興味深い。8はやや遅るかもしれない。

**弥生Ⅳ期** 後期後半を中心とする時期。量は少ない。36～41がこれにあたるが、布留系統の土器類も数個体存在しており、むしろ古墳時代の方に重心があるようである。

以上の4時期のなかで、特にⅠ期とⅢ期に属する遺物が多く、弥生時代の六連島はこの2時期を中心に営まれたものと思われる。Ⅱ期は、当遺跡が暖季のみの季節的移住によって成り立つ漁村であるならば、付近にその母集落となるであろう綾羅木郷、伊倉、原、長行、馬場山などこの時期の遺跡が多く存在する以上、大盛行したはずの施文壺や厚い上げ底の壺底部などの欠落する点はうなづけない。Ⅳ期の存在についての疑問は、同時に、Ⅱ期が無文土器の帰属時期として成り立つかどうかという不安となって残る。

## 無文土器帰属時期の推定

福岡平野や筑紫平野ではかなりの数の「粘土縦壺」が出土しており、弥生土器との共伴関係が知られるが、この系譜のものは口縁部形態がさらに細分できるようである。

口縁断面が完全な円形で卵形の胴部をもつ「直輸入」の形態は前期後半期に主に福岡平野と筑紫平野北部に現れ、中期半ばまで存続する。<sup>21)</sup> 六連島対岸の綾羅木郷遺跡や長行遺跡では鉢形の「粘土縦壺」が出土している。

口縁断面が完全な円形でなく上部に平坦面を作ったり「コ」の字形にしたりするものは、

やや遅る時期（中期初頭～前葉：城ノ越～<sup>22)</sup>

須玖工式共伴期）に出現し、土生遺跡のようにより内陸に分布するようである。この口縁部形態は城ノ越式の壺に近似しており、中期になるとともに弥生土器の影響を受け変化した可能性が高い。

これに対し、「粘土帶壺」は出土量が少なく、そのなかでも単に口縁外面に扁平な粘土を巡らせるだけではなく頸部を確かに「く」字状に屈曲させる属性をもつものは、前述のとおり芦ヶ浦、オテカタ、沖ノ島、秋根、六連島からの出土品のみであり、これらは金海式土器との頸部屈曲の類似性から、無文土器文化の末期に現れる形態として理解されている。弥生土器との共伴による推定時期は、報告者に従えば芦ヶ浦が後期中葉、オテカタが中期後半～後期前半、そして秋根が中期初頭であり、遺跡によてかなり時期差のあることがわかる。

近年韓国では調査が進み、特に南端部地域を中心に、無文土器と弥生土器との共伴<sup>23)</sup>が確認されてきている。それによると、慶州の朝陽洞遺跡下層で、牛角形把手や典型



Fig. 113 朝鮮半島における無文土器壺の分布

的な口縁断面三角形の「粘土帯壺」に、城ノ越～須玖Ⅰ式の弥生土器壺が伴出したという。三千浦市の勒島遺跡でも、当六連島遺跡出土のものに酷似する「粘土帯壺」が、城ノ越～須玖Ⅰ式の土器多量とともに表探されており、牛角形把手と「粘土帯壺」の単純遺跡であることから、これに伴うとしてまず間違いないとされる。ただし勒島遺跡では須玖Ⅱ式と思われる高环片も採集されており、「粘土帯壺」の下限が弥生中期後半以降に下がる可能性のあることが指摘されている。そして釜山市朝島1区貝塚Ⅲ層では、把手は組合せ牛角形と牛角形の両方が、壺は「粘土縁」から「粘土帯」への過渡的形態のものが存在し、これらに城ノ越式と思われる壺が伴出することから、「粘土帯壺」の上限が弥生中期初頭に比定されている。

述べてきたとおり、日本と韓国とでは「粘土帯壺」に共伴する弥生土器の時期が必ずしも一致していない。より韓国に近い対馬の芦ヶ浦やオテカタでは完全に時期が遅れており、かえって日本本土の秋根遺跡例のほうがほぼ韓国と一致した時期のものとみられるのは、一考を要する問題である。

六連島遺跡の「粘土帯壺」の時期は、以上のことより弥生Ⅱ～Ⅲ期の範疇にはおさまりそうである。韓国本土での共伴例や周辺の綾羅木郷・秋根・長行の各遺跡での出土例を考慮すると、そのなかでもⅡ期の後半（中期前業）の可能性が高いが、秋根遺跡例を出土した溝には中期後半に降ると思われる土器も含まれておらず、さらに後期中業の壺を伴ったとされる対馬の芦ヶ浦洞穴例や、韓国勒島遺跡の須玖Ⅱ式土器の存在などから、「粘土帯壺」の時期幅を認めるるとすると、Ⅲ期に属する可能性も大きくなってくる。

日本では今のところ、完全な口縁断面円形の壺と「く」字状に折れる頸部をもつ口縁断面三角形の壺との共伴例はもとより、同一遺跡からの時期を異にする検出例も報告されていない。これは、この2者の流入時期だけではなく、それを受け入れた地域が異なっている



Fig. 114 九州・山口地方における無文土器壺の分布

たということを示す。福岡平野、筑紫平野を中心に、まとまった量の「粘土紐壺」が貯蔵穴などより出土するという事実は、朝鮮半島からの移住集団がこの地で定住的な生活を営んだことを物語るが、異文化が異文化として成り立っていた期間は短く、土生遺跡に典型をみると、瞬く間に弥生文化に統合・吸収されている。ただし、先進地域を外れると、遅くまでその形態を残す例がみられる。

一方「粘土帶壺」は、資料が少なく即断しがたいが、東寄りの経路をとって日本に到達したようにみえる。これは、韓国本土で「粘土帶壺」に共伴する弥生土器が遠賀川以西系であることと矛盾する。韓国で中期前半の福岡平野系土器と共に立っていたながら、当の福岡平野では中期前半のみならずその後もずっとこの「粘土帶壺」を受け入れていないことに留意すべきであろう。これは、無文土器の系譜や時期の差違のみでなく、弥生文化先進地域における朝鮮文化の受容体制の一端を物語っていると思われるからである。

#### おわりに

六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器を、同出土の弥生土器とともに紹介した。良好な一括資料が増加している「粘土紐壺」に比べ、「粘土帶壺」は日本での出土例に乏しい上に共伴土器に時期幅があり、ましてや包含層出土の本資料をもって年代を取りざたすることが無謀であるのは言うまでもない。御叱正を乞う。また、本稿を含め無文土器の研究が壺の口縁部形態の特異性にのみ依存し、壺全体の形状やセット関係にある他の器種に対する関心に希薄である点が、その検討に耐えうる良好な資料の蓄積とともに解決されるよう望みたい。

六連島遺跡の文化期は弥生時代のみに限られない。当館所蔵のものだけでも、弥生土器の他に、かなりの量の繩文上器（後・晩期）、古墳時代の土師器、古墳～歴史時代の須恵器、龍泉窯系の青磁などがあり、様々な時代を通じて断続的に営まれた複合遺跡であることが知れる。加えて、製塙に伴う容器とされ当遺跡名を冠する六連式土器や、棒状土錘、人骨、獸・魚骨など、注目すべき遺物が保管されており、これらは今後、館蔵資料目録という形で紹介してゆくつもりである。

なお末尾ではあるが、整理・執筆にあたって資料館長近藤喬一先生をはじめ、河村吉行、森田孝一、古賀信幸、吉田寛、菅波正人、久野孝一、柏木秋生、南時夫の各氏に、懇切な助言・協力を賜ったことを明記し、謝辞に代えたい。

Tab. 11 九州・山口地方の無文土器出土遺跡地名表（参考資料）

No	遺跡名	所 在 地	無 文 土 器				文 献
			粘土質	砂土質	砂質	他 器 种	
1	芦ヶ浦第1洞穴	長崎県下島郡美津島町 鷺居瀬寺越	—	1	1	—	・注13) 文献
2	オチカタ	長崎県下島郡原町 豆飯	—	○	—	—	・注14) 文献
3	原 の 辻	長崎県佐世保市西触	2	—	1	—	・注10) 文献 ・長崎県教育委員会「原の辻遺跡」(長崎県文化財調査報告書第37集、1976年)
4	土 生	佐賀県小城郡三日月町 大字久米宇土生	—	—	○	門形器、磨光牛角形 手刀形、鋸齿、石器	・注22) 文献
5	江 津 潟	熊本県熊本市篠原町 苗代津	2	—	—	—	・注10) 文献
6	御 幸 木 部 町	熊本県熊本市御幸木部 町加勢川河床	3	—	—	—	・注10) 文献
7	沖 ノ 島	福岡県宗像郡 大島村沖ノ島	—	2	—	—	・注12) 文献
8	三 雲 香 川	福岡県糸島郡前原町 三雲	—	—	—	鉢1	・福岡県教育委員会「三雲遺跡」(福岡県文化財調査報告書第33集、1980年)
9	石 嵐 曲 り 田	福岡県糸島郡大町 大字石崎曲り田	1	—	—	磨光牛角形把手1	・福岡県教育委員会「石崎曲り田遺跡」(福岡県文化財調査報告書第31集、1983年)
10	有 田	福岡県福岡市 早良区有田	—	—	1	—	・注10) 文献
11	板 村	福岡県福岡市 博多区板村	2	—	1	—	・福岡市教育委員会「板村一帯古坟埋設遺 跡」(もとなり福岡県古墳一(福岡市埋設文化財調査報告書第35集、1976年)
12	諸 国	福岡県福岡市 博多区諸国	47	—	—	壹山縄芯3、鉢 合牛角形把手1	・福岡県教育委員会「諸国遺跡」(板村周 辺遺跡調査報告書12)、福岡市埋設文化 財調査報告書第1集、1975年)
13	門 田	福岡県春日市大字 上白水字門田・辻田	—	—	2	—	・福岡県教育委員会「門田遺跡・辻田遺跡」(仙 臺新幹線開拓埋設文化財調査報告書第7集、1978年)
14	横 縱 山	福岡県小郡市三沢	2	—	—	—	・注10) 文献
15	横 縱 鍋 舎	福岡県小郡市横隈	36	—	5	壺組合牛角形把 手1(底部12)	・注16) 文献
16	三 沢 蓬 タ 潟	福岡県小郡市三沢	—	—	1	—	・福岡県教育委員会「三沢蓬タ潮遺跡」(福 岡県文化財調査報告書第66集、1984年)
17	北 丰 田	福岡県小郡市三沢	—	—	1	—	・福岡県教育委員会「北丰田遺跡」(北丰田周 辺遺跡調査報告書12)、福岡市埋設文化 財調査報告書第1集、1975年)
18	みくにの東	福岡県小郡市横隈	3	—	—	壺組合牛角形把 手2	・注10) 文献
19	長 井	福岡県行橋市長井	—	—	1	—	・行橋市教育委員会「長井遺跡」(行橋市 文化財調査報告書第37集、1985年)
20	長 行	福岡県北九州市 小倉南区長行	—	—	—	鉢1	・注21) 文献
21	六 連 島	山口県下関市大字 六連島字各次郎	—	2	—	—	・注2) 文献 ・本書
22	被 織 木 鳥	山口県下関市波羅木	1	—	—	鉢5	・注4) 文献
23	秋 枝	山口県下関市秋枝	—	1	—	—	・注5) 文献
24	沖 ノ 山	山口県宇部市大字 沖ノ山字松浜	—	—	1	—	・注6) 文献
25	引 野	山口県吉敷郡阿知須町 引野	—	—	2	—	・注7) 文献
26	内	山口県山口市大字里川 字平木	—	—	1	—	・注8) 文献
27	大 島	山口県防府市大字大崎 字東谷・南長尾	—	—	1	—	・注9) 文献

## 〔注〕

- 1) 田代弘「畿内周辺部における「朝鮮系無文土器」の新例」〔『考古学と移住・移動』、同志社大学考古学シリーズⅡ、1985年〕。
- 2) 小野忠熙「六連島遺跡」〔『山口県文化財概要』第4集、山口県教育委員会、1961年〕。  
49ページ第47図の2が今回紹介する資料にあたると思われる。
- 3) 吉村次郎「原始・古代」〔『下関市史』原稿一中世、下関市役所、1965年〕。  
小野忠熙「山口県の考古学」(1985年)。
- 4) 下関市教育委員会『波羅本郷遺跡発掘調査報告第1集』(1981年)。
- 5) 下関市教育委員会『下関市秋根遺跡』(1977年)。
- 6) 小田富士雄「山口県沖ノ山見先の漢代銅鏡内藏土器」〔『古文化談叢』第9集、九州古文化研究会、1983年〕。
- 7) 阿知須町教育委員会「貝塚を伴う高地性集落引野遺跡」〔『引野遺跡・九塚古墳』、吉敷郡阿知須町引野遺跡・九塚古墳第二次発掘調査報告、1978年〕。  
阿知須町教育委員会『引野遺跡』(山口県吉敷郡阿知須町引野遺跡第三次発掘調査報告、1981年)。
- 8) 山口市教育委員会『西遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
- 9) 山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」〔『奥正椎寺遺跡』、大崎岡古墳群・大崎遺跡・山口県埋蔵文化財調査報告書82集、1985年〕。
- 10) 後藤直「朝鮮系無文土器」〔『三上次男博士頃奇記念東洋史・考古学論集』、1979年〕。  
以下、「粘土帶變」という場合は、口縁断面三角形でかつ頭部が「く」字状に屈曲するものをさす。
- 11) 前掲注5)に同じ。
- 12) 宗像大社復興期成会「社務所前遺跡」〔『宗像沖ノ島』、1979年〕。
- 13) 長崎県教育委員会「芦ヶ浦地区の調査」〔『対馬一浅茅溝とその周辺の考古学調査』、長崎県文化財調査報告書第17集、1974年〕。
- 14) 下條信行「オチカタ遺跡」〔『日本考古学年報』28、1975年度版、日本考古学協会、1977年〕。
- 15) 前掲注10)に同じ。
- 16) 小都市教育委員会『横隈鍋倉遺跡』(みくに野第二土地区調整事業関係埋蔵文化財調査報告書-2-、小都市文化財調査報告書第26集、1985年)。
- 17) 中敬謙「熊川文化期紀元前上限説の再考」(後藤直証、『古文化談叢』第8集、九州古文化研究会、1981年)。  
18) 前掲注2)に同じ。
- 19) 田崎博之「須玖式土器の再検討」〔『史道』第122輯、九州大学文学部、1985年〕。
- 20) 前掲注2)に同じ。
- 直良信夫氏の魚骨鑑定により春から秋にかけて捕獲される魚のみが確認されたことから、小野氏がこのような見解に至っている。
- 21) 前掲注4)に同じ。
- 御北九州市教育文化事業埋蔵文化財調査室「長行遺跡」(北九州市埋蔵文化財調査報告書第20集、1983年)。
- 22) 佐賀県教育委員会「上牛遺跡群」〔『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告書』、佐賀県文化財調査報告書第37集、1977年〕。
- 23) 前掲注17)に同じ。  
以下、韓国遺跡についての記述は当文献による。

# 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵資料目録

Tab. 12 山口大学埋藏文化財資料館所蔵資料目録

No	遺跡名	所在	地	内 容
1	自行道跡	阿武郡阿東町地佐貢		弥生土器・土師器・瓦質土器・土鏡
2	前尻原遺跡	むつみ村高佐下		弥生土器
3	通柵ヶ原遺跡	村造組ヶ原		弥生土器・須恵器・網片
4	海上路遺跡	岩国市海上路町		貝殻 瓦質土器・貝殼
5	室の木貝塚	室の木町		瓦質土器・貝殼
6	北迫遺跡	宇部市大字川上字施原		骨片・貝殼
7	月崎遺跡	大字東城波字月崎		縄文土器・朱生土器・石斧・石鏟・海石 土師器・須恵器・製壺土器・貝殼
8	波羅ヶ浜遺跡	大島郡大島町大字日比居字香松		縄文土器・瓦質土器
9	中須賀遺跡	字中須賀		十輪器
10	特世寺遺跡	字特世寺		
11	松古塙	大島郡大島町大字日比居字香松		弥生土器・須恵器・骨片
12	一本堂古塙	大津郡油井町向津貝字一軒堂		弥生土器・土師器・須恵器
13	南方古塙	字南方		須恵器
14	臼田古塙	萩河郡芳野町白田		丸質土器
15	大伴古塙	下谷津伴人伴		弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器
16	千束遺跡	千束		弥生土器
17	掛掛山遺跡	谷津		弥生土器・スラグ
18	桜井山遺跡	"		弥生土器・土師器・須恵器
19	柳井田遺跡	柳井田		
20	米川遺跡	大字米川字下差川		弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器
21	宮瀬遺跡	"		土師器
22	大元古塙	大字高森上久原大元		須恵器
23	白山遺跡	字下久原		土師器
24	用田遺跡	字用田子方		網片

No.	遺跡名	所在地	内容
25	御屋敷山古墳	下松市人字河内丁跡敷地	弥生土器・土師器・須恵器・鉄剣?
26	御屋敷山遺跡	◆ ◆ ◆	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器
27	尾尻遺跡	◆ 大字末武下字尾尻	弥生土器・土師器・鐵片・スラグ
28	天王森遺跡	◆ ◆	弥生土器・土師器・須恵器
29	宮ノ州古墳	◆ 人字裏井字宮ノ州	土師器
30	圓河内遺跡	熊毛郡上間町大字長崎字門津	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器
31	八島(櫛)遺跡	◆ ◆ 大字八島字櫛	縄文土器?
32	石光遺跡	◆ 熊毛町大字小松原字石光	弥生土器
33	広末遺跡	◆ ◆ ◆ 字広末	縄文土器・土師器・石斧・制片
34	近遺跡	◆ ◆ ◆ 字兼近	須恵器
35	兼清遺跡	◆ ◆ ◆ 宇兼清	土師器
36	川尻遺跡	◆ ◆ ◆ 字川尻	弥生土器
37	岡山遺跡	◆ ◆ 大字安田字岡山森河内	弥生土器・土師器・陶器・石斧・石施・制片・分綱形土製品・土製瓶造品・鉄劍・木炭
38	天王遺跡	◆ ◆ ◆ 宇天王道追	弥生土器・土師器・須恵器・要棺・壺棺・石斧・石器・磁石・骨片
39	奈良二ツ池遺跡	◆ 田布施町大字麻那奥字奈良	弥生土器
40	深田古墳	◆ 大字下田布施字深田	土師器・須恵器・円筒埴輪
41	百原古墳	◆ 幸平町大字大野南百原	須恵器
42	神花山古墳	◆ ◆ 大字佐賀田名	弥生土器・土師器・瓦質土器・埴輪
43	岩田遺跡	◆ ◆ ◆ 字岩田	門石
44	白鳥古墳	◆ ◆ ◆ 了森の下	円筒埴輪
45	綾羅木郷遺跡	下関市大字綾羅木字郷	弥生土器・石盤・凹石・石劍
46	伊倉遺跡	◆ 人字伊倉	須恵器・石斧
47	潮待貝塚	◆ 大字當任字正町	縄文土器・土師器・須恵器・石盤・貝塚・貝殻
48	神田遺跡	◆ ◆ 宇神田	石棒
49	宮ノ原遺跡	◆ 大字深島字宮ノ原	縄文土器・弥生土器・須恵器・瓦・制片
50	佐石遺跡	◆ 人字臺并島字佐石	弥生土器・須恵器・縄文土器・石棒
51	六連鳥遺跡	◆ 人字六連鳥字齊次郎	縄文土器・弥生土器・須恵器・瓦質土器・輸入陶器・輸出土器・土器・制片・人骨・獸骨

No.	遺跡名	所在	地	内 容
52	日天寺占塚群	巣市大字久米		円筒埴輪
53	老郷地遺跡	。	。字老郷地川の口	弥生土器・土師器・陶器・鉄片・木炭
54	久米市遺跡	。	。字久米市	弥生土器・土師器
55	耳取古墳	。	。字耳取	円筒埴輪(須恵質)
56	田島丘遺跡	豊浦郡志賀町大字川柳字田島		弥生土器・土師器
57	泊ノ鼻遺跡	。	。大字室津字泊ノ鼻	弥生土器
58	土井ヶ浜遺跡	。豊北町大字江底下字沼田		弥生土器・土師器
59	沖の田遺跡	。	。大字角島字元山	弥生土器
60	中津江遺跡	萩市大字椿東字中津江古瀬		弥生土器・土師器・須恵器・石斧・鉄石・鉄片・土埴・防護柵
61	見島ジーンボ古墳群	。	。大字見島字本村古山・中山・美御畠	弥生土器・カクス王・鎌形刀・刀子・耳環・鉢・灰陶・人骨・獸骨
62	南家遺跡	光市大字南家字南家宮尾		弥生土器
63	岡原遺跡	。大字三井字中三井小字岡原		弥生土器・須恵器・鉄片
64	楊口遺跡	。 。 小字楊ノ口		弥生土器
65	天符遺跡	。大字光井字天符		土師器
66	林ヶ峰遺跡	。 。 『竹森ヶ峰』		弥生土器
67	女台場遺跡	。大字官橋象鼻ノ岬		弥生土器・土師器
68	月待山遺跡	。 。 字御手洗		土師器
69	郷手洗遺跡	。 。	。	石斧
70	市尾遺跡	。大字半領字市尾		弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・土錐・鉄片・貝殻
71	新開遺跡	。 。 字新開小字宮元		須恵器
72	東之庄神田遺跡	。 。 字東之庄神田		土師器
73	奥正林寺遺跡	防府市大字大崎江島東比佐寺		縄文土器・弥生土器
74	鶴居八幡宮遺跡	。 大字小字鶴居		弥生土器・石斧・鉄片
75	井上山遺跡	。 。 鹿町		弥生土器
76	多々良寺山遺跡	防府市国分寺町多々良寺山		土師器・須恵器・瓦
77	周防國府跡	。 国施1丁目～5丁目		土師器
78	台ヶ原遺跡	。 大字佐野字台原		縄文土器・瓦質土器

## 山口大学理藏文化財資料館所蔵資料目録

No.	遺 調 名	所 在 地	内 容
79	萬 井 山 古 遺	防府市大字萬井山寄 跡	弥生土器・土師器・須恵器・瓦・石器・剣片・鏡片
80	右 戸 通 遺	大字右田 跡	弥生土器・石斧
81	楠 戸 通 遺	美祢郡秋芳町大字秋古宇瀬戸 跡	弥生土器・須恵器・石器・剣片
82	真 木 通 遺	大字別所字真木 跡	瓦質土器
83	秀 十 通 遺	大字豊万字秀十 跡	須恵器
84	茶 白 山 古 墳	柳井市大字柳井字向山 跡	埴輪片
85	幸 岐 通 遺	山口市長地「馬字幸岐 跡」	土師器・瓦質土器
86	長 浜 通 遺	大字長浜 跡	弥生土器
87	英 漢 通 遺	大字漢 跡	弥生土器・須恵器・土師・石製纺錘車
88	朝 倉 通 遺	朝倉町 跡	弥生土器・土師器・須恵器
89	糸 米 通 遺	糸米二丁目 跡	弥生土器・土師器・須恵器・瓦
90	剛 堀 通 遺	大字大内御堀 跡	弥生土器・土師器・須恵器・瓦
91	剛 堀 石 宿	大字大内御堀 宿	弥生土器
92	山 岐 通 遺	大字大内矢田長野 跡	弥生土器・土師器・須恵器
93	長 野 通 遺	大字大内矢田長野 跡	須恵器・瓦質土器
94	長 葦 ハ 原 通 遺	大字大内矢田長野 跡	須恵器・石器・剣片
95	後 河 内 通 遺	大字上宇野今守松井 跡	绳文土器・弥生土器・土師器
96	龜 山 通 遺	大字龜山 跡	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・土器
97	馬 木 通 遺	大字黒川馬木 跡	土師器・須恵器
98	佐 岛 通 遺	大字下宇野今守豪作 跡	弥生土器・土師器
99	茶 日 山 古 墳	大字茶日山 跡	土師器・須恵器・人骨
100	高 上 通 遺	大字陶字島上 跡	弥生土器
101	長 津 池 通 遺	大字鍋残司今宿 跡	弥生土器
102	上 由 原 通 遺	大字仁保上郷宇石田 跡	弥生土器・瓦質土器・石斧・剣片
103	高 野 台 通 遺	大字仁保下郷高野 跡	弥生土器・土器
104	小高野岡の原 1 口通 遺	字丸山 跡	绳文土器・弥生土器・須恵器・石斧・石器・骨片
105	宮 の 馬 場 通 遺	字宮の馬場 跡	绳文土器・弥生土器・土師器

No.	遺跡名	所在地	内 容
106	じ 保岡の原遺跡	山口市大字上保丸山園の原	弥生土器・土師器
107	福 遺跡	福生土平井櫛	瓦質土器
108	正 良 遺跡	大字平下字板角	弥生土器
109	吉 古 墳群	百野下字板角	制片
110	石 通 遺跡	大字吉田 吉敷郡秋穂町大河内	縄文土器・弥生土器・須恵器・鉈片・土器
111	大 河 内 遺跡	大河内	弥生土器
112	芳 谷 古 墳	大字古谷	陶器・金環・銅鏡・銅刀・刀子
113	引 野 遺跡	阿知須町字堀野・南山	弥生土器・土師器・須恵器
114	中 球貝 遺跡	小郡町大字上郷字中野	弥生土器・獸骨・貝殻
115	角 蔵貝 遺跡	愛知県名古屋市瑞穂区高崎町	弥生土器
116	安 国 寺 遺跡	大分縣東国東郡安國寺字前田	弥生土器
117	国 分 台 遺跡	香川県綾歌郡綾歌町国分台	原石
118	桑 貝 遺跡	熊本県宇土市宮ノ庄	縄文土器
119	スクモ塚 古 墳	鳥取県益田市久城町須入高原	埴輪片
120	広 谷 遺跡	福岡県北九州市小倉南区大字新道寺	弥生土器・石器・鉈片
121			新羅系陶質土器

1. 本目録は、山口大学埋蔵文化財資料館が収蔵している埋藏文化財資料のうち、山口大学構内遺跡出土資料以外のものについての総合帳である。出土地不詳の資料は今回原則的には除外したが、今後の整理により詳細が判明すれば隨時追加登載し、補足訂正を加えて、本目録の充実を図りたい。

2. 本目録登載資料の具体的な内容については、その一部分ずつをまとめ、館蔵品の図版目録として刊行してゆく予定である。

3. 本目録作成のための整理にあたっては、山口大学人文学部考古学研究室の吉田寛氏をはじめとする学生諸氏の全面的な協力を得た。

4. 本目録には、文部省科学研究費による一般研究（C）河村吉行「防長における律令国家成立以前の豪族構造の変遷と推移に関する研究」の成果の一部を含んでいる。

# 山口大学構内遺跡調査要項

## 山口大学埋蔵文化財資料館規則

### (設置)

第1条 山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

### (資料館の業務)

第2条 資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

- 一 山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収藏・展示および調査研究
- 二 山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行
- 三 その他埋蔵文化財に関する必要な業務

### (運営委員会)

第3条 資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会に関する規則は、別に定める。

### (館長)

第4条 資料館に館長を置く。館長は委員会に議を経て学長が委嘱する。

2 館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 館長は、資料館の業務を掌理する。

### (調査員)

第5条 資料館には調査員若干名を置く。

2 調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3 調査員は、資料館の業務を処理する。

### (特別調査員)

第6条 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2 特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

### (雑則)

第7条 この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

## 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

### (趣旨)

第1条 この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に關し、必要な事項を定めるものとする。

### (審議事項)

第2条 委員会は次の事項を審議する。

- 一 山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。
- 二 資料館の管理運営に關すること。
- 三 資料館の整備充実に關すること。
- 四 資料館の運営に要する経費に關すること。
- 五 その他必要な事項

### (組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 資料館規則第4条第1項の館長
- 二 各学部および教養部の教育各1名
- 三 事務局長

2 前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

### (任期)

第4条 前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

### (委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

### (幹事)

第6条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

### (委員以外の出席)

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

### (事務)

第8条 委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

## (雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 13 山口大学理蔵文化財資料館運営委員会委員

(昭和60・61年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄基雄	教授	60. 4. 1~62. 3. 31	委員長
人文学部	近藤喬一	教授	59. 4. 2~62. 4. 1	館長
人文学部	中村友博	助教授	60. 5. 29~62. 5. 28	
教育学部	三浦肇	教授	60. 4. 1~62. 3. 31	
経済学部	及川順	教授	60. 4. 1~62. 3. 31	
理学部	岩田允夫	教授	60. 4. 1~62. 3. 31	
工学部	島敷史	教授	60. 4. 1~62. 3. 31	
農学部	西野武藏	教授	60. 4. 1~62. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教授	60. 4. 1~62. 3. 31	
事務局	五田次雄	事務局長	60. 2. 1~60. 11. 30	
事務局	大谷巖	事務局長	60. 12. 1~	

Tab. 14 山口大学理蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻科目等	備考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	昭和60・61年度
教育学部	三浦肇	教授	地理学	昭和60・61年度
理学部	富阪武士	教授	鉱物学	昭和60年度
理学部	松本徳夫	教授	岩石学	昭和60・61年度
農学部	勝本謙	助教授	植物分類学	昭和60・61年度
工業短期大学部	池谷元伺	教授	年代測定	昭和60・61年度

## 山口大学構内の主な調査

- 旧調査区名は吉田遺跡調査団使用のもの
- 41年から57年までの調査は全て吉田地区
- 地点は吉田構内 Fig. 115、小串構内 Fig. 116、常盤構内 Fig. 117、亀山構内 Fig. 118、光構内 Fig. 119 を参照

Tab. 15 山口大学構内の主な調査一覧表

調査年度	旧調査地区名 又は調査名	学内地区別 地点	担当者	調査区分	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	備考	
昭和41年	第I地区 A・B区	L-M-15	1 小野忠熙	事前	30?	龜穴堅穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第1次発掘調査	
	第II地区家畜病院新館 S-T-19区 S-20区	2 小野忠熙	事前	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器	吉田第2次発掘調査		
	第II地区	P-Q-19-20区	3 小野忠熙	試掘			弥生土器、土師器	吉田第3次発掘調査	
	第II地区牛舍新館	S-10区	4 小野忠熙	事前	300	弥生溝・土壤、古墳結合部、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器	吉田第4次発掘調査	
	第II地区	S-T-10-13区	5 小野忠熙	試掘				吉田第5次発掘調査	
昭和42年	第IV地区 松列区	E-20区	6 小野忠熙	事前	1,100	柱列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、尖板状木枕	吉田第6次発掘調査	
	第IV地区南区	G-H-22-23区	7 小野忠熙	事前		河原跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	吉田第7次発掘調査	
	第IV地区北区	I-J-20-21区	8 小野忠熙	事前	1,400	堅穴住居・溝、土壤、住火		吉田第8次発掘調査	
	第IV地区東南区	H-23区 I-J-K-24区	9 小野忠熙	事前		弥生堅穴住居	弥生土器	吉田第9次発掘調査	
	第IV地区野球場	I-22-23区 J-21-22-23区 K-22-24区	10 小野忠熙	試掘		中世柱穴	瓦質土器	吉田第10次発掘調査	
	第V地区学生食堂	I-J-19-20区 J-20区	11	事前		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土師器	吉田第11次発掘調査	
	第V地区	I-J-K-L-M-18-19-20区	12	山口大学 吉田遺跡 調査団	試掘	河原跡、柱穴、土壤	弥生土器、土師器	吉田第12次発掘調査	
	第I地区C区 大学本部新館	K-L-14区	13	◆	事前	600	堅穴住居・溝、土壤	土師器、須恵器、瓦質土器	吉田第13次発掘調査
昭和44年	第V地区教育学部		◆	試掘		河原跡	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第14次発掘調査	
昭和46年	第I地区D区第1地点	L-13区	14	◆	試掘	溝	弥生土器、木灰層	吉田第15次発掘調査	
	第I地区D区第2地点	*	15	◆	*		弥生土器、土師器、瓦質土器	吉田第16次発掘調査	
	第I地区D区第3地点	M-13区	16	◆	+	堅穴住居・土壤、住火	土師器	吉田第17次発掘調査	
	第I地区D区第4地点	M-N-13区	17	◆	+	弥生堅穴住居・溝、土壤	弥生土器、土師器、石器、瓦質土器	吉田第18次発掘調査	
	第I地区D区第5地点	L-13区	18	◆	+	弥生溝	弥生土器	吉田第19次発掘調査	
	第I地区D区第6地点	M-13区	19	◆	+	古墳堅穴住居・弥生溝	弥生土器、土師器、石器	吉田第20次発掘調査	
	第I地区D区第7地点	*	20	◆	+	溝	弥生土器	吉田第21次発掘調査	
	第I地区E区 第2学生食堂新館	N-O-15区	21	◆	事前	900	弥生・古墳堅穴住居・土壤、溝、住火	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	吉田第22次発掘調査

調査年 度	旧調査地区名 又は調査名	学内地区割 り	地点	担当者	調査区分	面積 (m <sup>2</sup> )	遺 墓	遺 物	備 考
昭和 50年	第一地区			*	試掘			弥生土器	吉田第23次発掘調査
昭和 51年	第二地区			*	*		堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第24次発掘調査
昭和 53年	人文学部校舎新宮	M・N-21区	22	近藤西一	試掘	180			吉田第25次発掘調査
	教育学部附属新宮	A・B・C・D- 20・21・23・24区	23	山口大学 附属新宮 教育委員会	*		溝、土壤	縄文土器、弥生土器	吉田第26次発掘調査
昭和 54年	理学部校舎新宮	O-19区	24	山口大学 附属新宮 教育委員会	*	250			吉田第27次発掘調査
	農学部動物舍新宮	P-18区	25	*	*	380			吉田第28次発掘調査
	本部管理棟新宮	L-14区	26	*	事前	740	溝、土壤、柱穴、 中世井戸、土塁基、 瓦跡路	弥生土器、土師器、 石製品	吉田第29次発掘調査
昭和 55年	経済学部校舎新宮	K・L-21区	27	*	*				吉田第30次発掘調査
	農芸学部農業施設新宮	Q-15区	28	*	*	50	溝、土壤		吉田第31次発掘調査
	本部	F-20-21区 G-19区 H-20区	29	*	立会				工事施行 吉田第1次立会調査
	農芸学部	P-Q-17-18区	30	*	*				吉田第2次立会調査
昭和 56年	教育学部校舎新宮	H-19区	31	*	事前	400	弥生堅穴住居、 土壤、溝、柱穴	弥生土器、石製品	吉田第32次発掘調査
	教育学部音楽棟新宮	H-16区	32	*	*	100	溝		吉田第33次発掘調査
	教育学部美術科・技 術科実験室新宮	J-19-20区	33	*	*	130	白河川、溝、 柱穴	縄文土器、弥生土 器、須恵器、土師器	吉田第34次発掘調査
	正門構脚新宮	H-11区	34	*	立会				工事施行 吉田第3次立会調査
	時計塔埋設	H-14区	35	*	*				工事施行 吉田第4次立会調査
	本部構内構築	K-14区	36	*	*				工事施行 吉田第5次立会調査
	教養部構内構築	I-17区	37	*	*				工事施行 吉田第6次立会調査
	構内舗装道路舗装	吉田構内	38	*	*				工事施行 7次立会
	農芸学部中庭整備	O-17区	39	*	*				工事施行 8次立会
	職務施設改修	O-16区	40	*	*				工事等実施 9次立会
	学生部文化会館新宮	L-8区	41	*	*				工事等実施 10次立会
	学生部馬場整備	M-N-8-9区	42	*	*				工事施行 11次立会
昭和 57年	附属医療施設整備	M-16区	43	*	事前	600	弥生・古墳溝、 土壤、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	吉田第35次発掘調査
	大学会館新宮	M-14-15区	44	*	試掘	130	弥生堅穴住居、 溝	弥生土器	吉田第36次発掘調査
	教育学部附属農業施 設新宮	M-22区	45	*	立会				吉田第12次立会調査
	放射性同位元素結合 実験室新宮	O-18区	46	*	*				吉田第13次立会調査
	教育学部自転車置場 昇降口新宮	K-L-17区	47	*	*				吉田第14次立会調査
	農芸学部中庭整備	J-K-16区	48	*	*				吉田第15次立会調査
昭和 58年	大学会館新宮	M-N-12区	49	*	事前	2,000	古墳井戸、土壤、 柱穴、中世井戸、 獨立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入陶器、 白河川、瓦質 瓦器、柱穴、柱脚陶 器、木構、石器	吉田第37次発掘調査
	ラグビー場 陸上競技場新宮	G-H-19区	50	*	*	120	弥生溝、弥生・ 古墳堅穴住居、 土壤	弥生土器、土師器、 石製品	堅穴住居は「法安寺 により現地保存 吉田第38次発掘調査

調査年度	田園地地区名又は調査名	学内地区別	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和56年	教育学部附属光小学校白軒車置場新宮		1	山口大学埋蔵文化財資料室	試掘		近世-近代石垣	陶磁器、瓦質土器、瓦	光第1次発掘調査
	工学部校舎新宮		1	*	*	70		須恵器	遺構、遺物包含層なし 含む第1次発掘調査
昭和58年	工学部図書館増築		2	*	試掘	70			遺構、遺物包含層なし 含む第2次発掘調査
	医学部体育館新宮		1	*	*	260		土師器、瓦質土器、石器	小中第1次発掘調査
	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備		1	*	*	60	古墳堅穴住居、埴溝造構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	龜山第1次発掘調査
	理学部大学校舎新宮	M-N-20区 O-20-21区	51	*	立会	410			工事施行 吉田第16次立会調査
	正門・南門二輪車置場 および正門花壇新宮	I-12-13区 J-13区 H-23区	52	*	*	180			工事施行 吉田第17次立会調査
	学生部アーチェリーアー場の台・電柱設置	M-8区	53	*	*	30			工事施行 吉田第18次立会調査
	学生部職員室整備	L-1区	54	*	*	2			工事施行 吉田第19次立会調査
昭和59年	学生部野球場敷地 水栓取扱	J-K-21区	55	*	*				工事施行 吉田第20次立会調査
	教養部環境整備	I-16-17区 J-17区 K-L-17-18区	56	*	*	80			工事施行 吉田第21次立会調査
	学生部テニスコート修復	C-17-18区 D-16-17区 E-16区	57	*	*	12			工事施行 吉田第22次立会調査
	医学部附属骨盤増築		2	*	*				小中第1次立会調査
	医学部体育館新宮		3	*	*				工事施行 小中第2次立会調査
	医学部浄化槽新宮		4	*	季翁		近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	記録保存 小中第2次発掘調査
	医学部体育館新宮		5	*	*	65		土師器、瓦質土器、磁器	小中第3次発掘調査
昭和60年	大学会館ケーブル布設	N-12-14区	58	*	*	160	佐牛土壤、柱穴	佐牛土器	吉田第39次発掘調査
	大学会館排水管布設	K-L-13区	59	*	*	180	佐牛一中井遺物 古墳、古墳上壙、柱穴	佐牛土器、土師器、瓦質土器、青磁、白磁、瓦質土器、柱穴	記録保存 吉田第40次発掘調査
	医学部基盤整備 (特高受電線改設)		6	*	試掘	28		動物遺体(只数)	小中第4次発掘調査
	医学部臨床講義棟・病理理解研究新宮		7	*	*	38			小中第5次発掘調査
	学生部テニスコートフェンス改修	C-17-18-19区 D-15-16-17区 E-16区	60	*	*	25	古墳以前の遺物 包含層	土師器	工事施設内埋蔵文化財支障なし 吉田第41次発掘調査
	経済学部樹木移植	K-19-20-21区	61	*	立会	8			工事施行内埋蔵文化財支障なし 吉田第42次立会調査
	工学部附属山宿舎 同水管布設				*	20			常盤第1次立会調査
昭和61年	教育学部附属光小・中学校地却場新宮		2	*	*				光第1次立会調査
	学生部ポートガラス台・研磨所整備			*	*	0.5			宇都部小野瀬
	学生部ヨット艇庫合宿研修所整備			*	*				吉敷郡秋田町

調査 年度	旧属地地区名 又は調査名	学内地区割 合	地点	担当者	調査区分	面積 (m <sup>2</sup> )	遺 墓	遺 物	備 考
昭和 60年	医学部外木路櫛新宮	8	山口大学 地域文化 財資料館	試掘	409			土師質土器、丸質 土器、陶磁器	小中第6次発掘調査
	大学会館環境整備	L-14区 L-M-N-15区	62	*	*	592	弥生-中世遺物 含古墳、弥生多 穴住居、防護穴、 土塁、古代-近 代、柱、柱穴	縄文土器、弥生土 器、土師器、須恵 器、瓦質土器、輪 盞、土製品、石斧、 原石、鐵器、黒曜	吉田第42次発掘調査
	医学部基礎研究地新宮	9	*	*	11			近世陶器	小中第7次発掘調査
	医学部看護師宿舎改修	10	*	*	25			近世陶磁器	小中第8次発掘調査
経済学部環境整備 (樹木移植)	K-21区 L-20区	63	*	立会	5				吉田第24次立会調査
農学部附属農場創立 園芸系水道排水整備	R-16-19区	64	*	*	30	古代末-中世河 川跡	須恵器、土師器、 輸入陶磁器、輪11、 石器、鐵洋	吉田第25次立会調査	
農学部附属農場農道改 修	V-15-16区	65	*	*	325				吉田第26次立会調査
教育学部附属環境整備 (樹木移植)	I-J-19-20区	66	*	*	430				吉田第27次立会調査
中央ボイラーライ車止 設	O-P-16区	67	*	*	2.5			須恵器	吉田第28次立会調査
大学会館環境整備 (樹木移植)	L-M-15区	68	*	*	9			弥生土器、土師器 須恵器、石鏡、瓦 石、鐵達	吉田第29次立会調査
交通標識設置	J-20-N-14区 O-18区	69	*	*	3				吉田第30次立会調査
農学部附属農場改良整備 (樹木移植等)	P-Q-17-18区	70	*	*	16				吉田第31次立会調査
理学部環境整備(施 設)	N-20-21区	71	*	*	4				吉田第32次立会調査
農学部附属獣医学病院整 備	S-T-19区	72	*	*	270				吉田第33次立会調査
医学部看護師宿舎改修		11	*	*	20				小中第3次立会調査
医学部環境整備 (樹木移植)		12	*	*	40				小中第4次立会調査
工学部尾山宿舎掩壁等 設			*	*	65				常磐第2次立会調査
工学部受水槽改修		3	*	*	1.5				常磐第3次立会調査
教育学部附属山口小 学校敷水盤改修		2	*	*	1				龜山第1次立会調査
教育学部附属山口中 学校球技コート整備			*	*	2				龜山第2次立会調査
教育学部附属幼稚園 環境整備(樹木移植)		3	*	*	1				龜山第3次立会調査
教育学部附属光中 学校外灯改修		3	*	*	1			上耕器	光中第2次立会調査
熊野莊給湯機器取扱			*	*	7				山口市熊野町

\* 昭和41年以降、吉田境内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の古田遺跡調査時の調査分については調査名をすべて把握しているわけではなく、注意されたい。

## Summary

This report accounts the results of archaeological researches in twenty-four excavated areas located on campus in 1985.

As Appendix, it carries another report of excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 1982, and also carries two papers, Pits for the preservation of food in Yamaguchi Pref., and Plain coarse-pottery originated from Korea excavated from Mutsurejima site.

Yamaguchi University Archaeological Research was established as part of the cross-faculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Management Committee first and gain approval. We then carried out the research in relation to the construction work on campus.

The current year we carried out researches as follow:

### 1. Researches on the Yoshida campus

#### (1) Soundings in relation to the environmental adjustment at the University Hall's garden

We found many pit holes and some ditches. In particular a pit for the preservation of food and a dwelling pit were discovered with some remains. The one had functioned since the early till the middle Yayoi period, the other in the late Yayoi period. And the manure jars in the Edo period were set up.

Some layers contained many objects dating from the late Jomon to the middle Kamakura period. A Jomon bowl and sherds tell us human beings have existed since earlier time in this area. As specially important objects, stone of obsidian and talc were discovered. The one was not apply work at all, the other was worked by human skill. We got valuable materials in knowing the relation of demand and supply.

Making allowance for the result of this soundings, we decided to carry out each environmental adjustment in this area from now.

#### (2) Examinations under construction

As for the repairs a sewer on University Farm, we found a river dating from Nara to Kamakura period. In it, there were some remains connected with the iron manufacture. For the environmental adjustment on the Faculty of Education, we confirmed a small valley.

When they planted some trees at the University Hall's garden, we examined making allowance for the result of the foregoing soundings. As a specially important object, a sue bowl with writing in ink was discovered. It is material evidence offering a proposal there was a government office from the late Nara to the early Heian period around here.

## 2 . Researches on the Kogushi campus

- (1) Soundings in relation to the constructions of a new university hospital and a new building for the fundamental study at the School of Medicine

Speaking of the one, We confirmed a layer containing some relics dating from the Medieval age to the Modern, but didn't find any features in the said ages. For the other, though the same layer was discovered, it contained no remains. We need to examine into this point at the center of the campus.

- (2) Soundings and examinations under construction in relation to the repair of the Nurse Dormitory, and to the environmental adjustment around it at the School of Medicine

We found some pieces of modern porcelain, but couldn't guess all underground cultural properties in this area.

## 3 . Researches on the Tokiwa campus

According to the examination under construction in relation to the repair of a tank for accumulation and circulation of water, we knew this area used to be a part of a hill, and to fall steeply toward the west valley. So we guessed most of this hill to have been scraped and leveled on the large scale.

The examination under construction around the Oyama Dormitory told us the land had sloped toward the south valley in this area.

## 4 . Researches on the Kameyama campus, Hikari campus and Kumano Dormitory

At Yamaguchi Junior High School, Yamaguchi Elementary School and Kindergarten, Hikari Junior High School, and Kumano Dormitory, we made examinations under construction, but couldn't get any obvious objects of study.

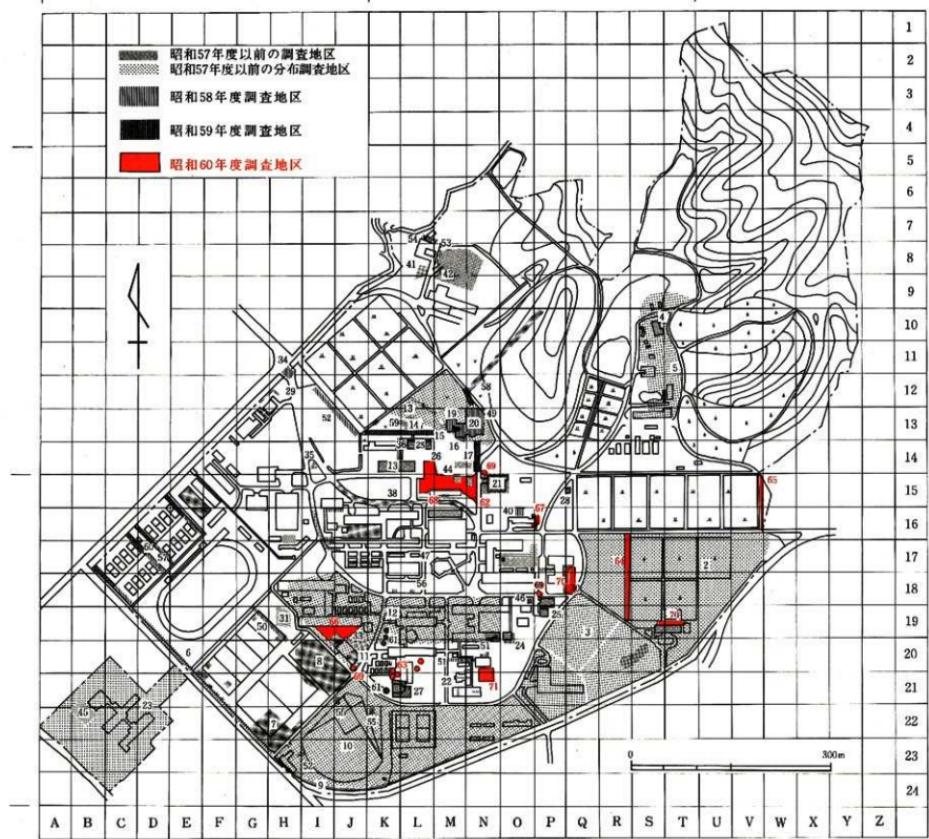


Fig. 115 山口大学吉田構内地区別および調査区位置図

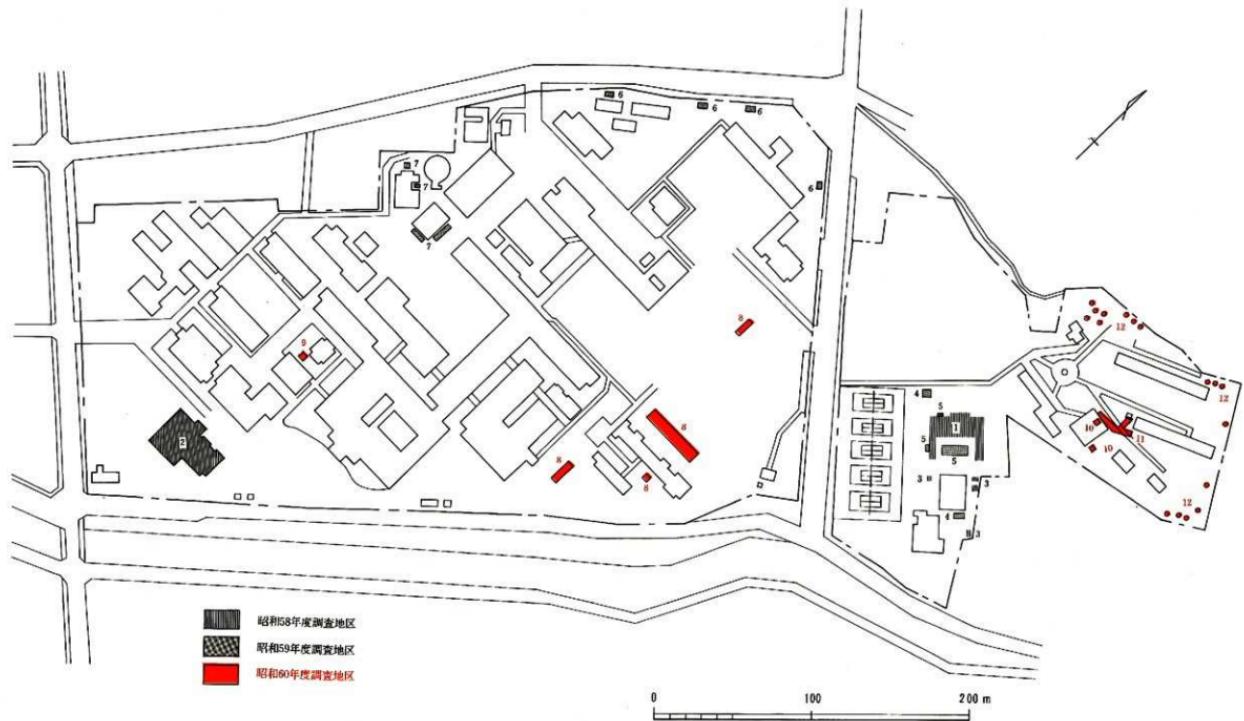


Fig. 116 山口大学小串構内調査区位図

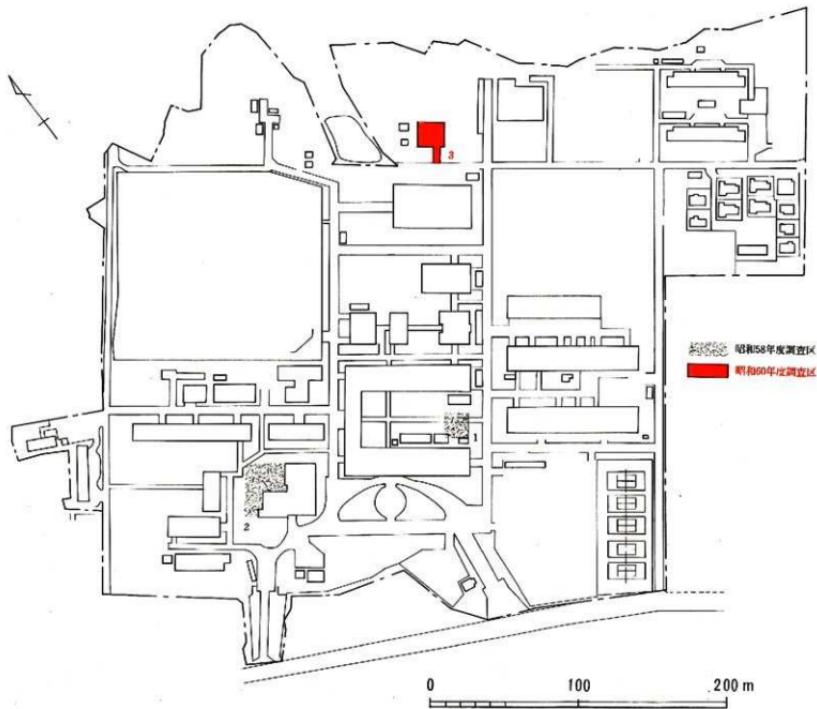


Fig. 117 山口大学常盤構内調査区位置図

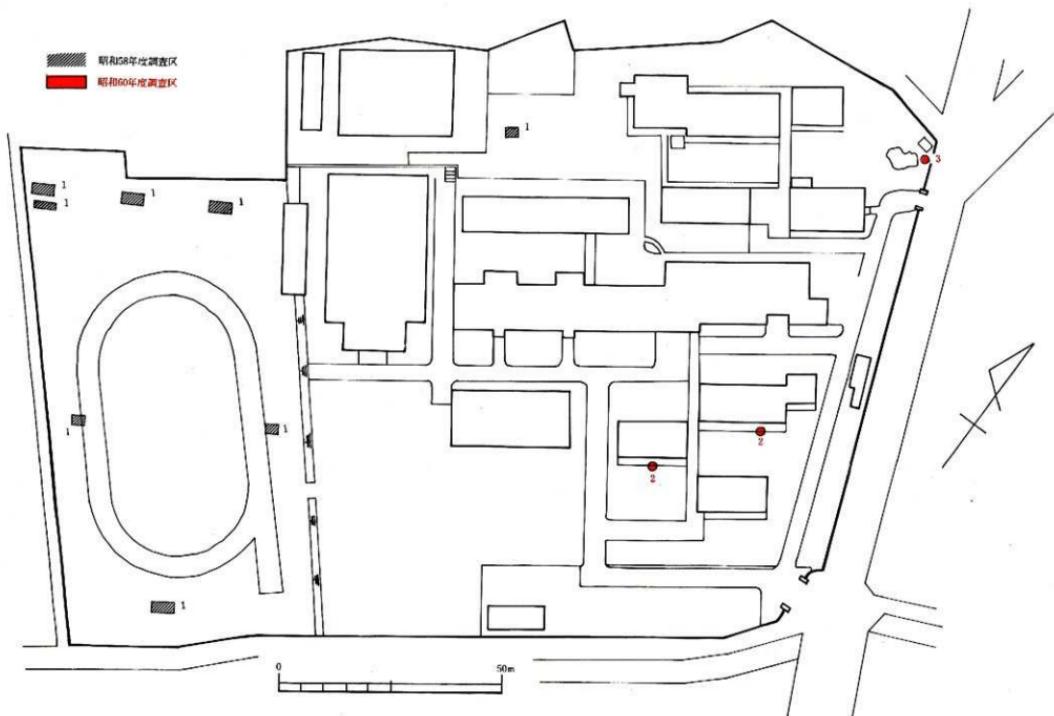


Fig. 118 山口大学龜山構内(幼稚園・小学校内)調査区位置図

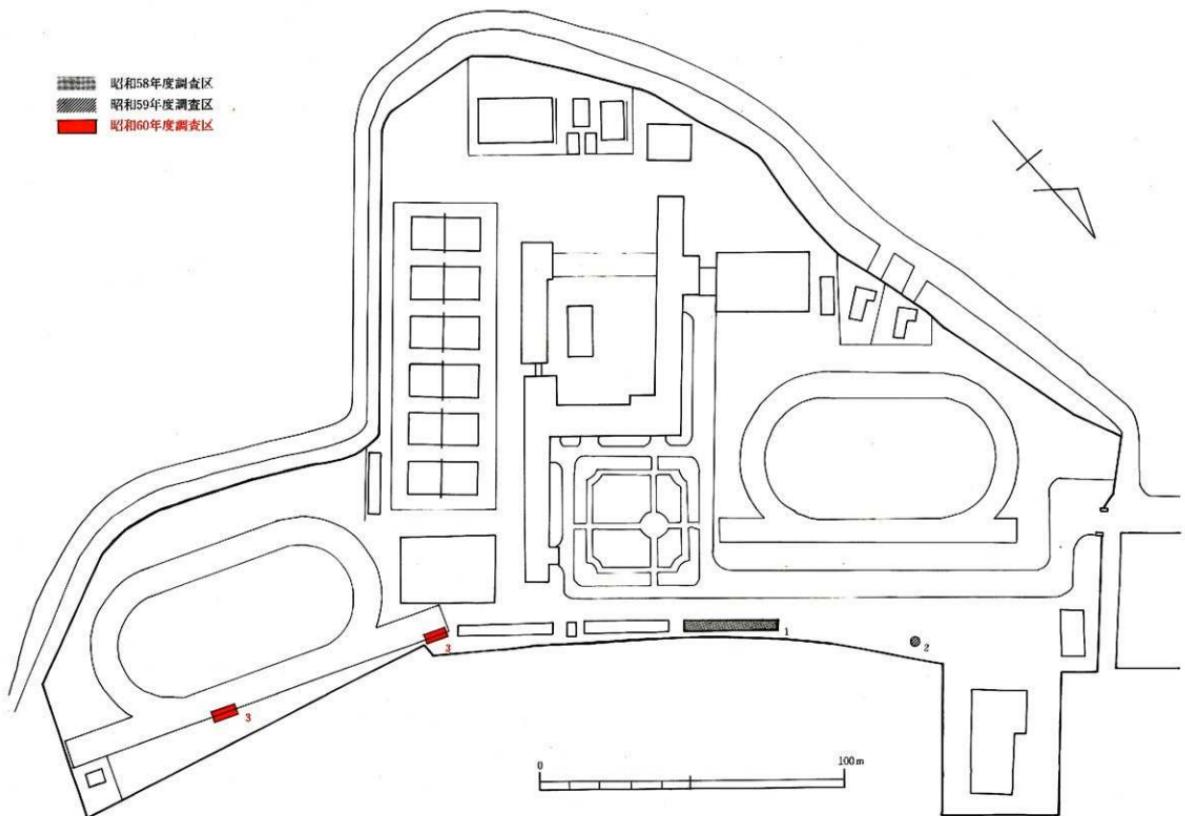


Fig. 119 山口大学光橋内調査区位置図

## **PLATES**



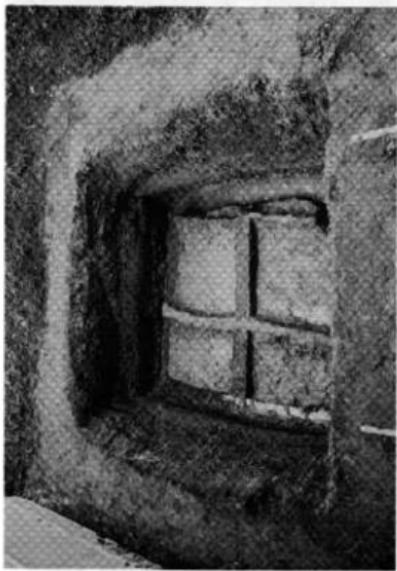
小串構内（医学部・医療技術短期大学部キャンパス）全景（南西から）

PL. 2

小串構内医学部外来診療棟新嘗に伴う試掘調査  
(1)



(1) A トレンチ全景(東から)



(2) B トレンチ全景(北から)



(3) B トレンチ西壁土質断面(東から)

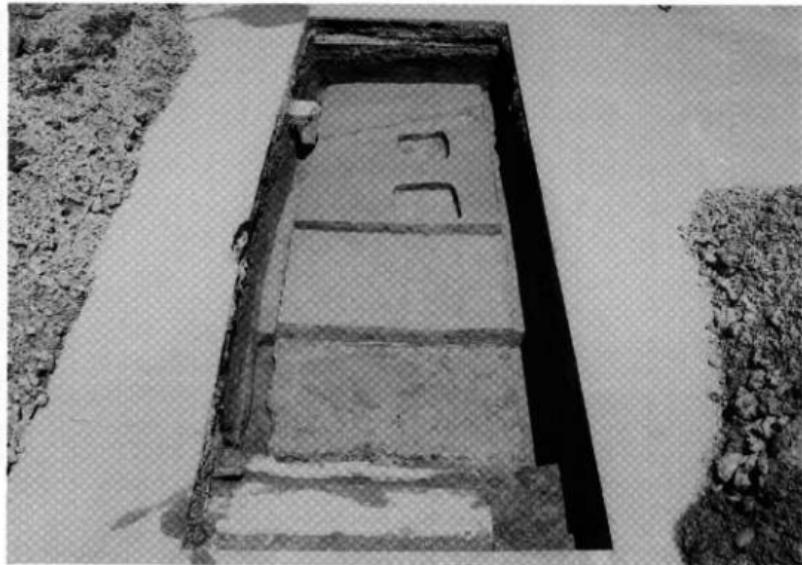


(1) Cトレンチ全景(東から)

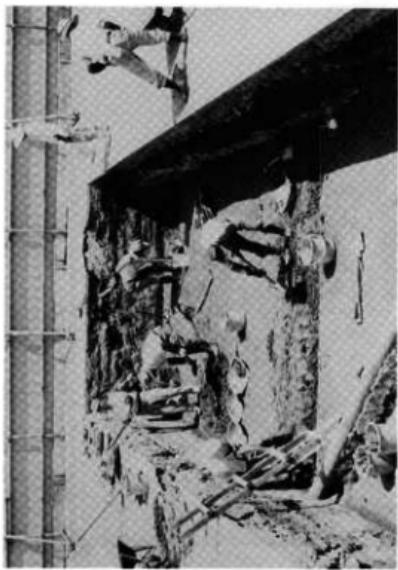


(2) Cトレンチ土器溜状遺構(北から)

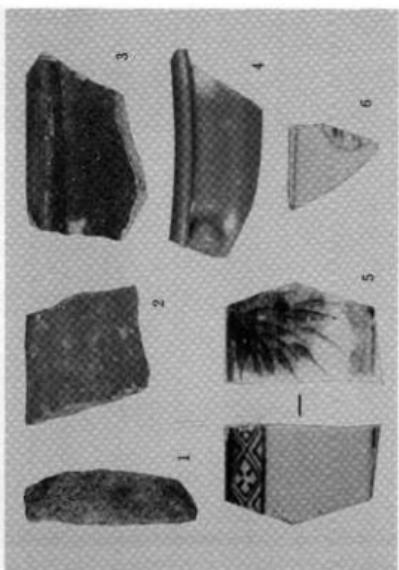
小串構内医学部外来診療棟新嘗に伴う試掘調査  
(3)



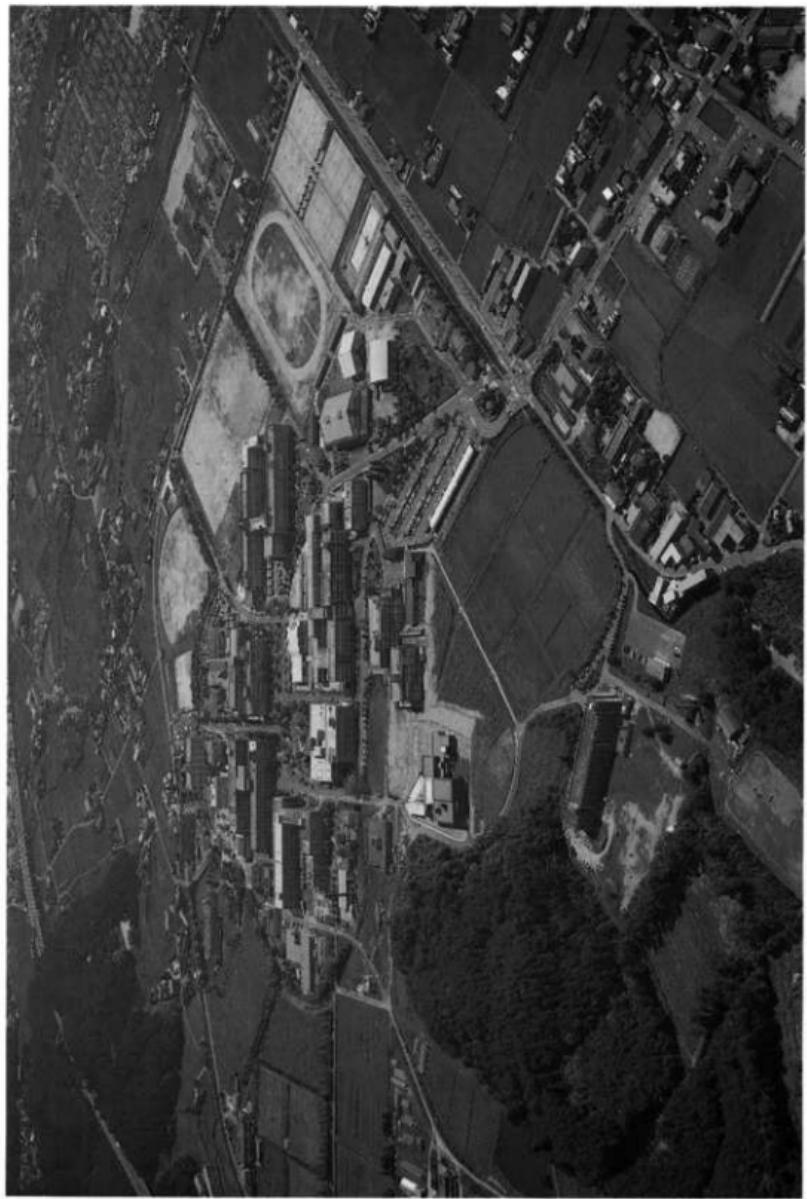
(1) Dトレンチ全景(南から)



(2) Aトレンチ作業風景(南から)



(3) 出土遺物



吉田機場内全景(北西から)

PL. 6

吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査(1)



(1) 調査地域全景(西から)



(2) A トレンチ全景(南から)



(1) Bトレンチ全景(北から)

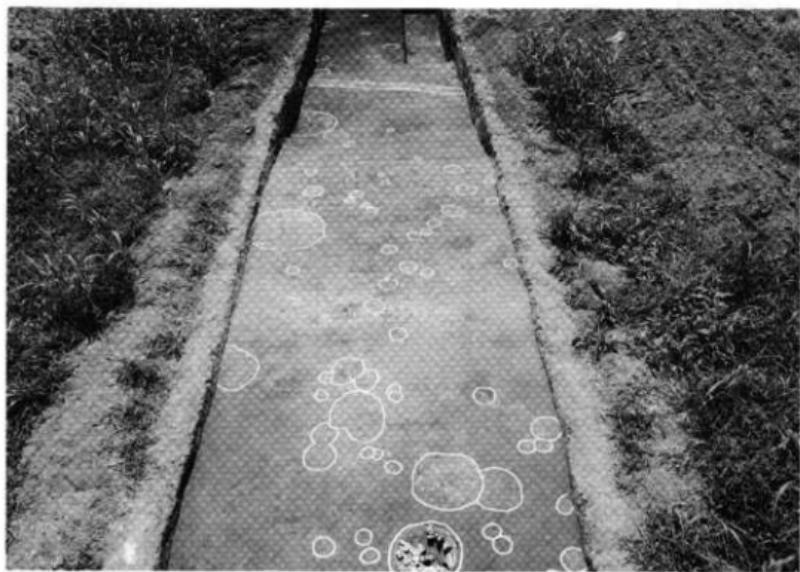


(2) Cトレンチ北半部全景(北から)

吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査(3)



(1) C トレンチ南半部全景(北から)



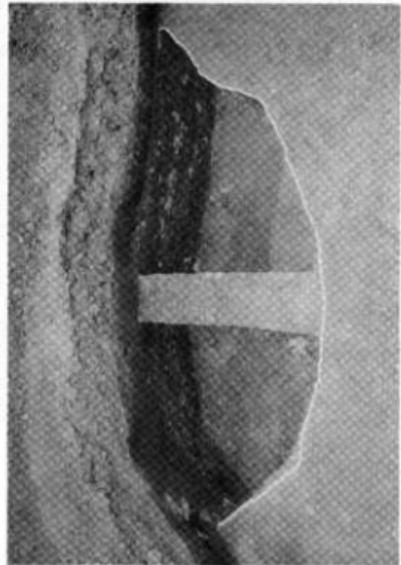
(2) D トレンチ全景(北から)



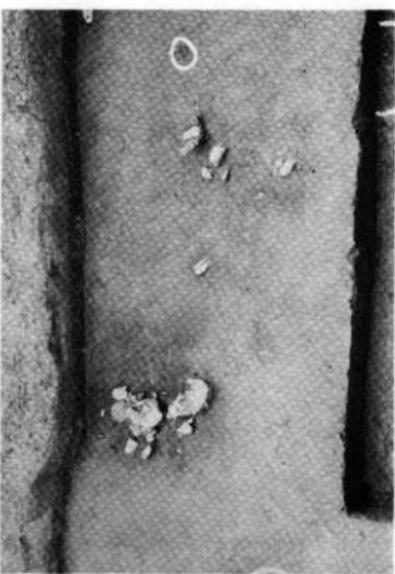
(1) E トレンチ全景(北から)

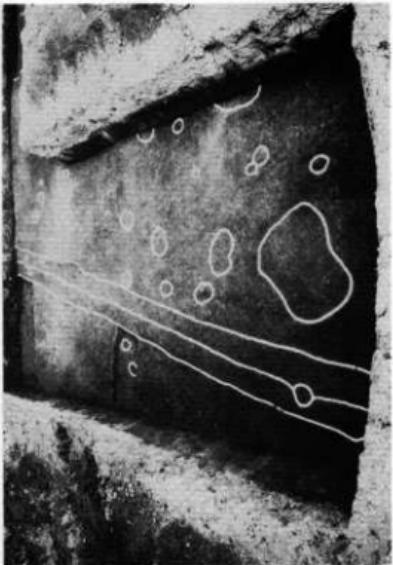


(2) F トレンチ全景(北から)

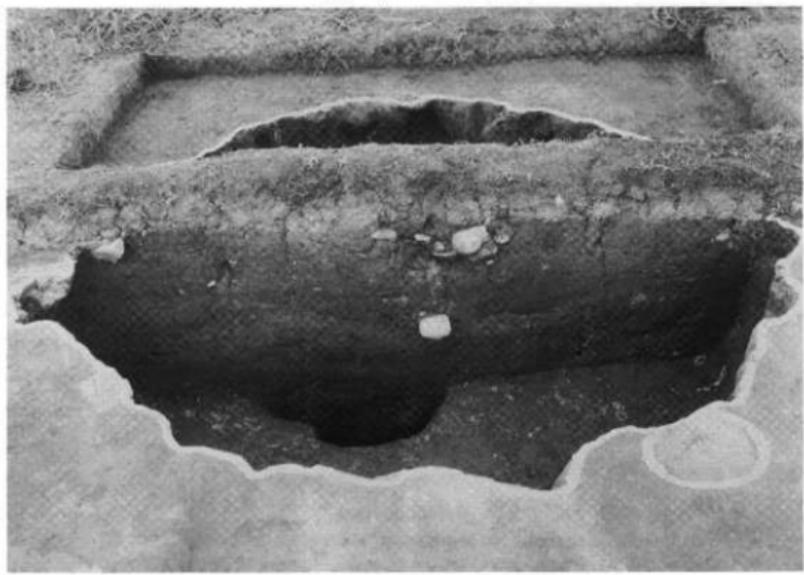


(1) Aトレンチ第1号土壤(南から)

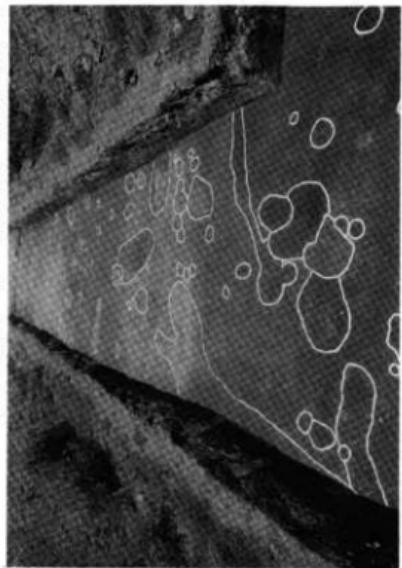
(2) Aトレンチ第1号土壤遺物出土状況  
(南東から)(3) Bトレンチ第1号基礎構造物分布状況  
(北から)(4) Bトレンチ第1号居住跡  
(西から)

(1) Bトレンチ第1号堅穴住居跡遺物出土状況  
(南から)

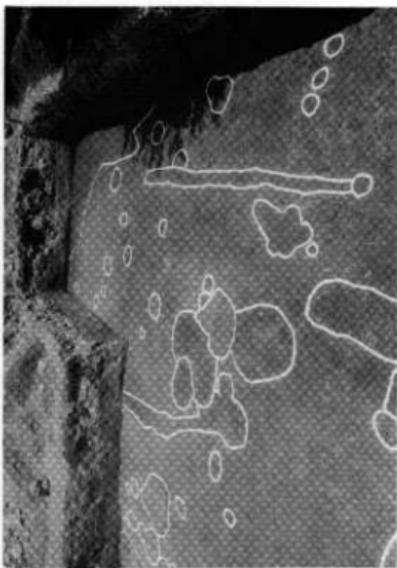
(2) Bトレンチ拡張部遺構分布状況(東から)



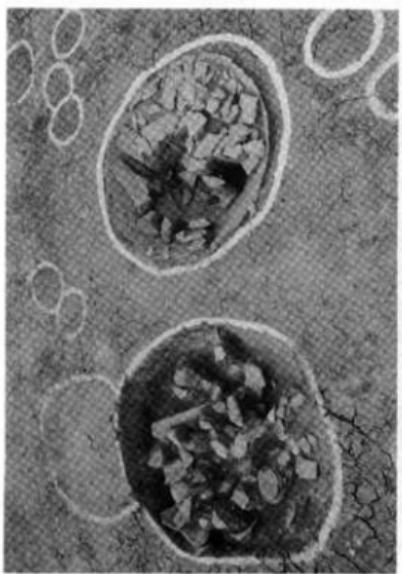
(3) Cトレンチ第3号土壤(南から)



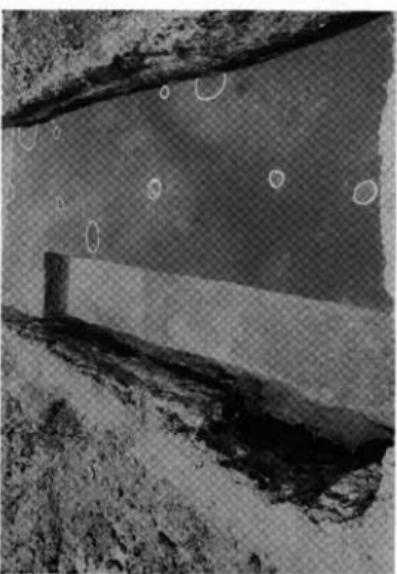
(1) Cトレンチ南端部遺構分布状況(南から)



(2) Cトレンチ東端部遺構分布状況(西から)



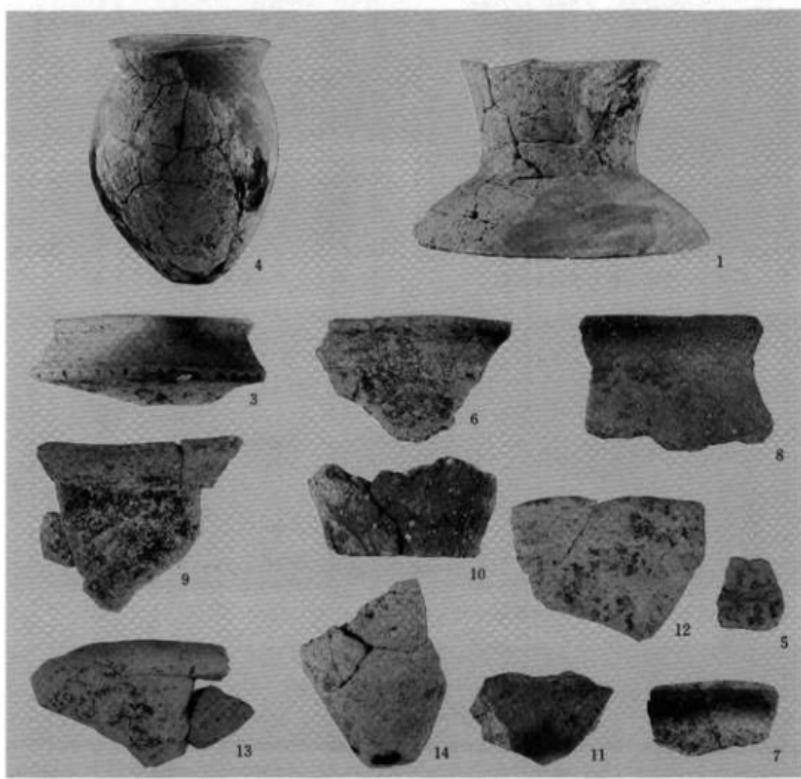
(3) Dトレンチ第4・5号土壠(東から)



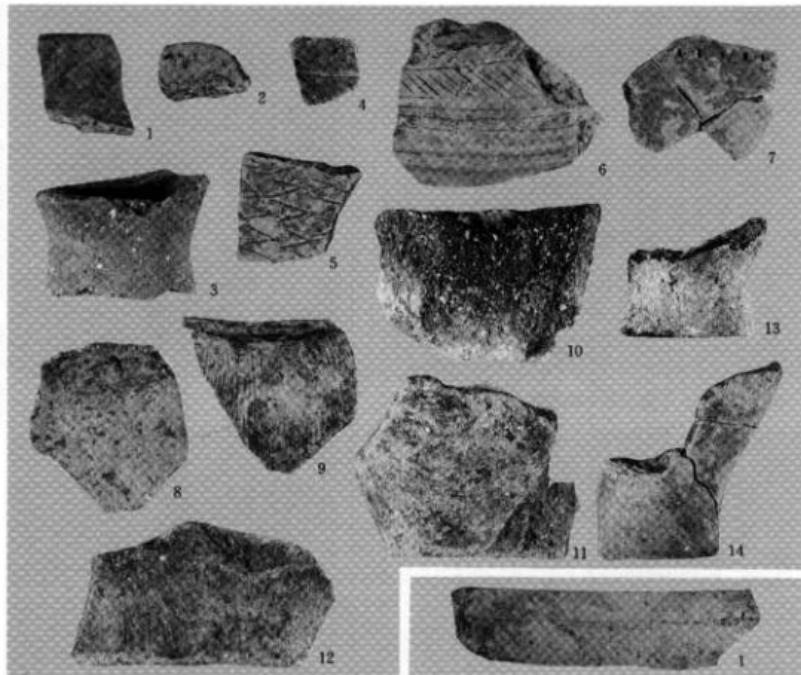
(4) Dトレンチ南半部地山落ち込み状況(北から)



(1) Aトレンチ第1号土壌出土土器



(2) Bトレンチ第1号堅穴住居跡出土土器



(1) C トレンチ第3号土壤出土土器

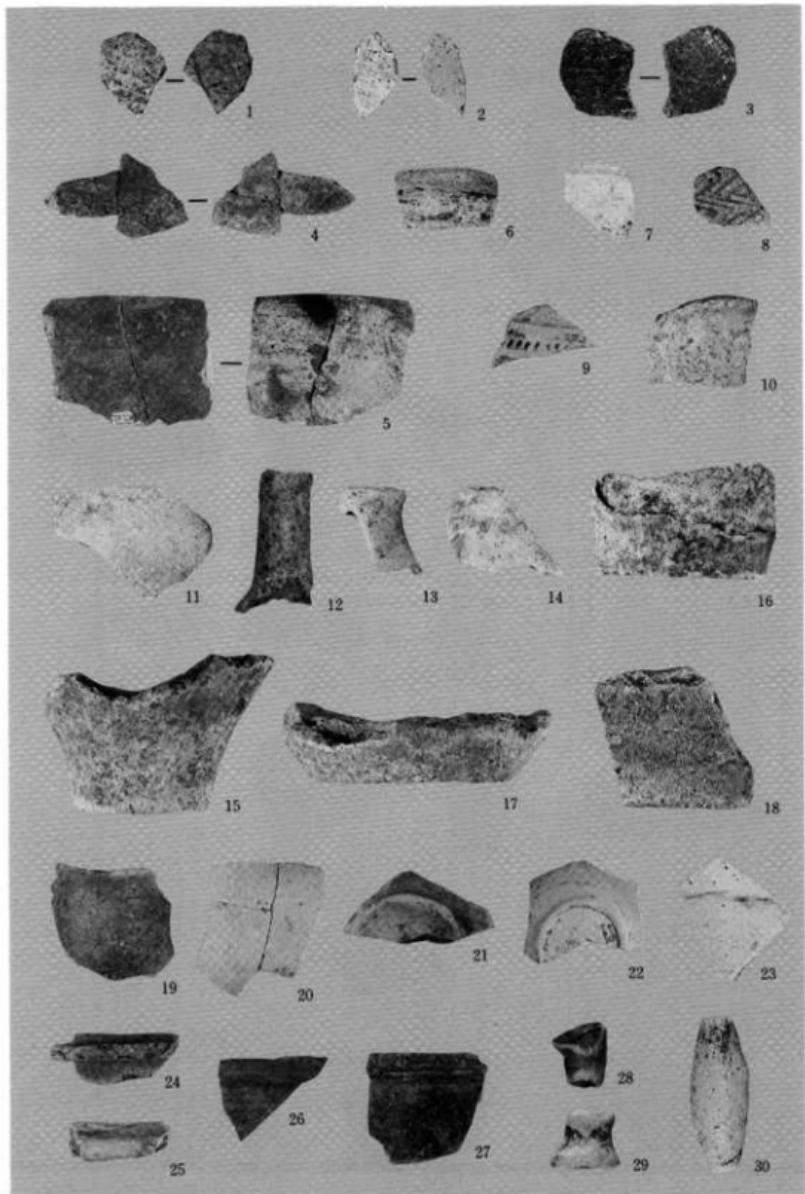
(2) D トレンチ第4号土壤出土土器



(3) D トレンチ第5号土壤出土土器



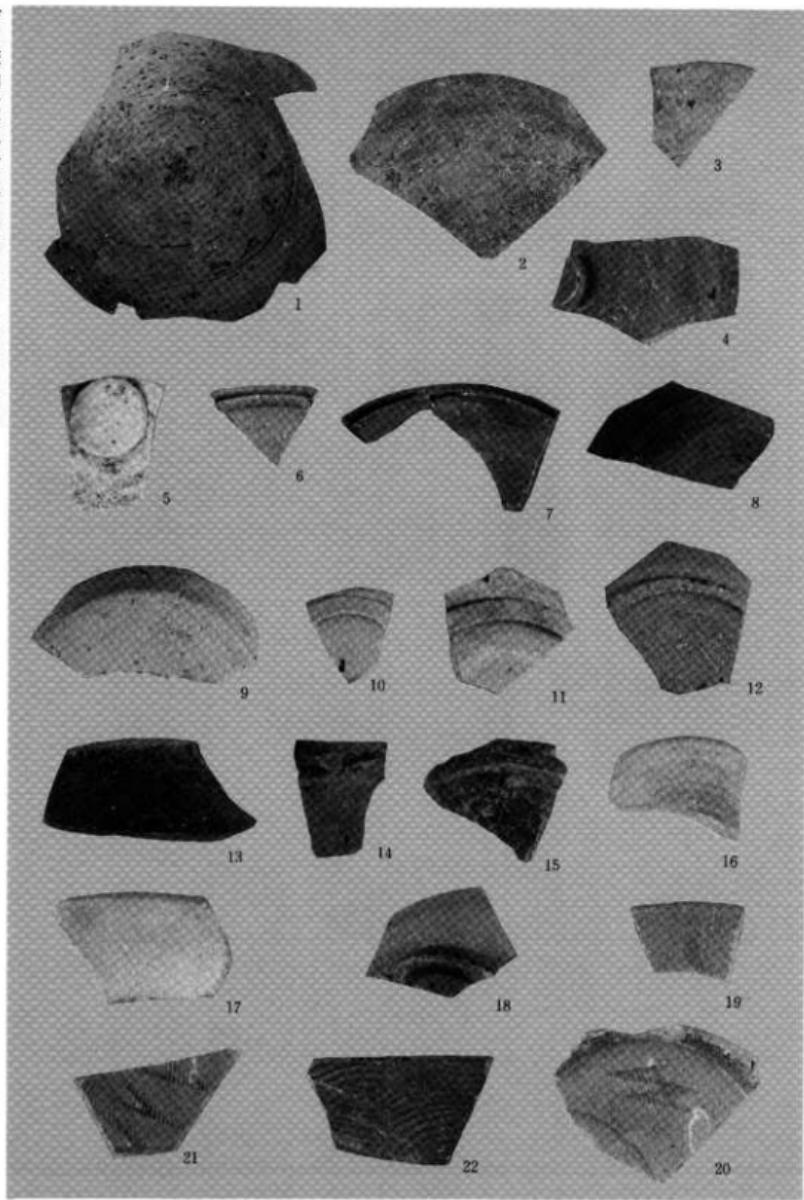
(4) F トレンチ柱穴出土土器



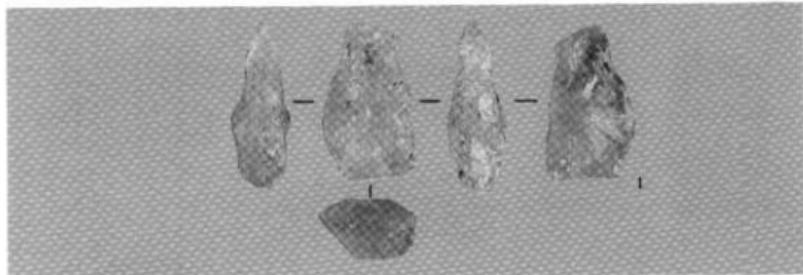
包含層出土土器(縄文土器・弥生土器・土師器・瓦質土器)

PL. 16

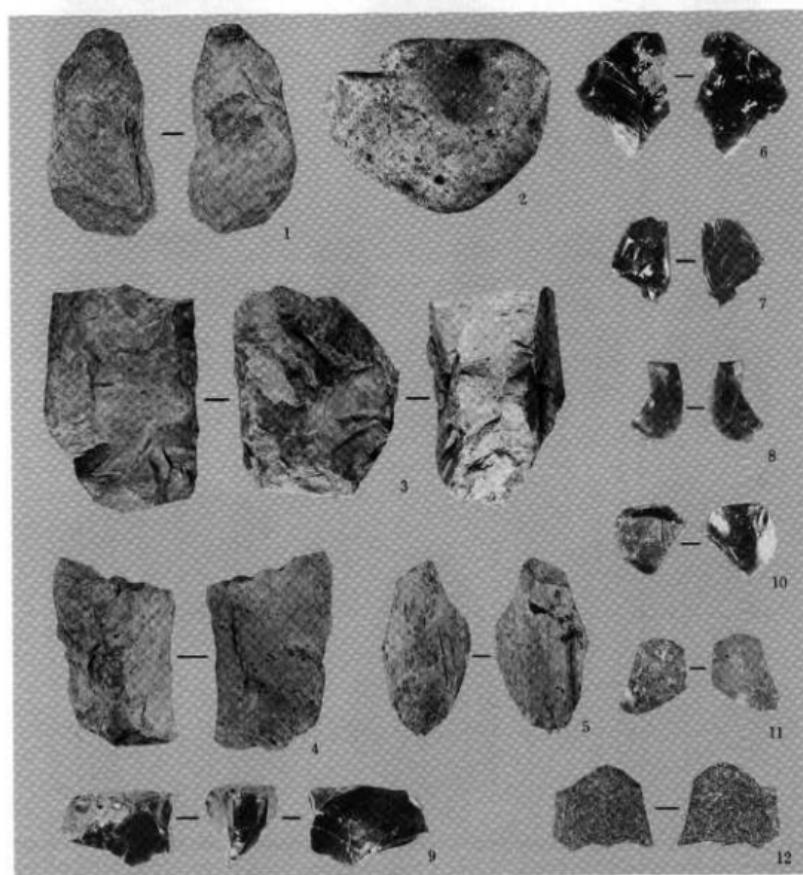
吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査(II)



包含層出土土器(須恵器・磁器・陶器)



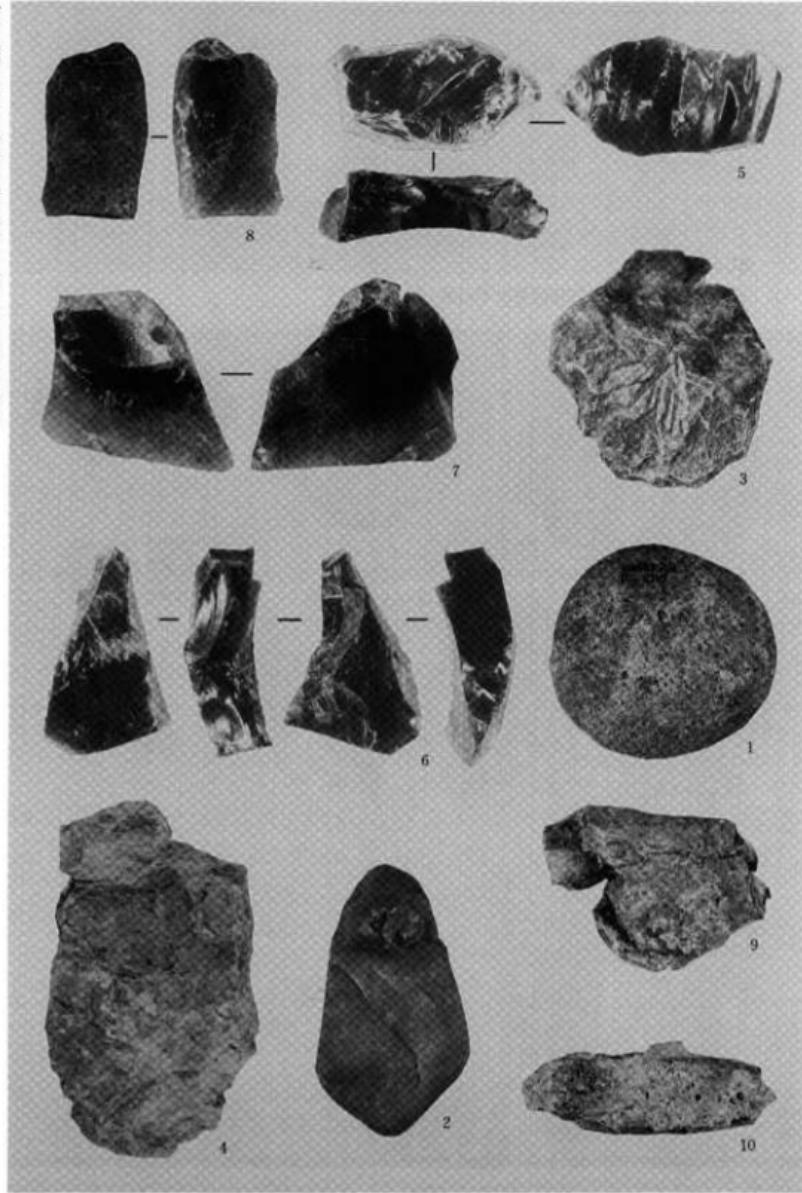
(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡出土石器



(2) Cトレンチ第3号土壤出土石器

PL. 18

吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査(13)



包含層出土石器・鉄器・その他



(1) トレンチ全景(南から)



(2) 北壁土層断面(南から)

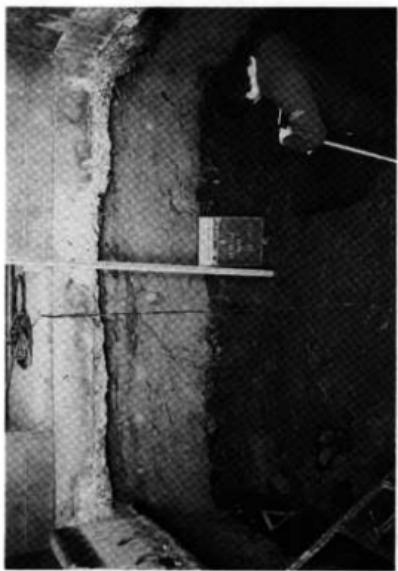
小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査



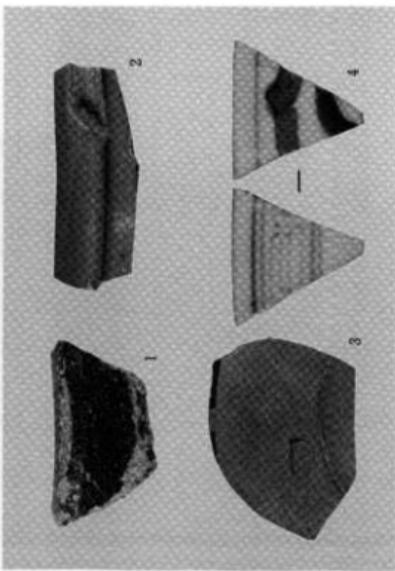
(1) 第一地点全窓(北から)



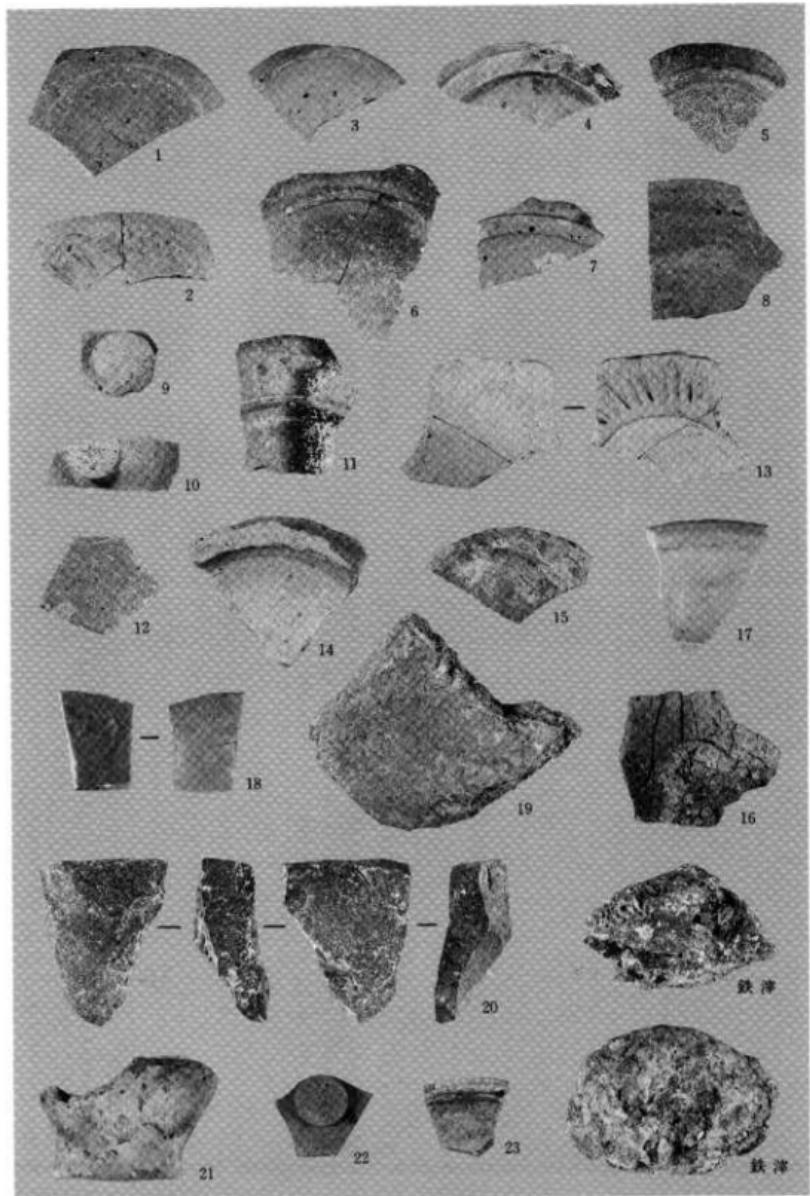
(2) 南壁土層断面(北から)



(3) 第二地点土層断面(北から)



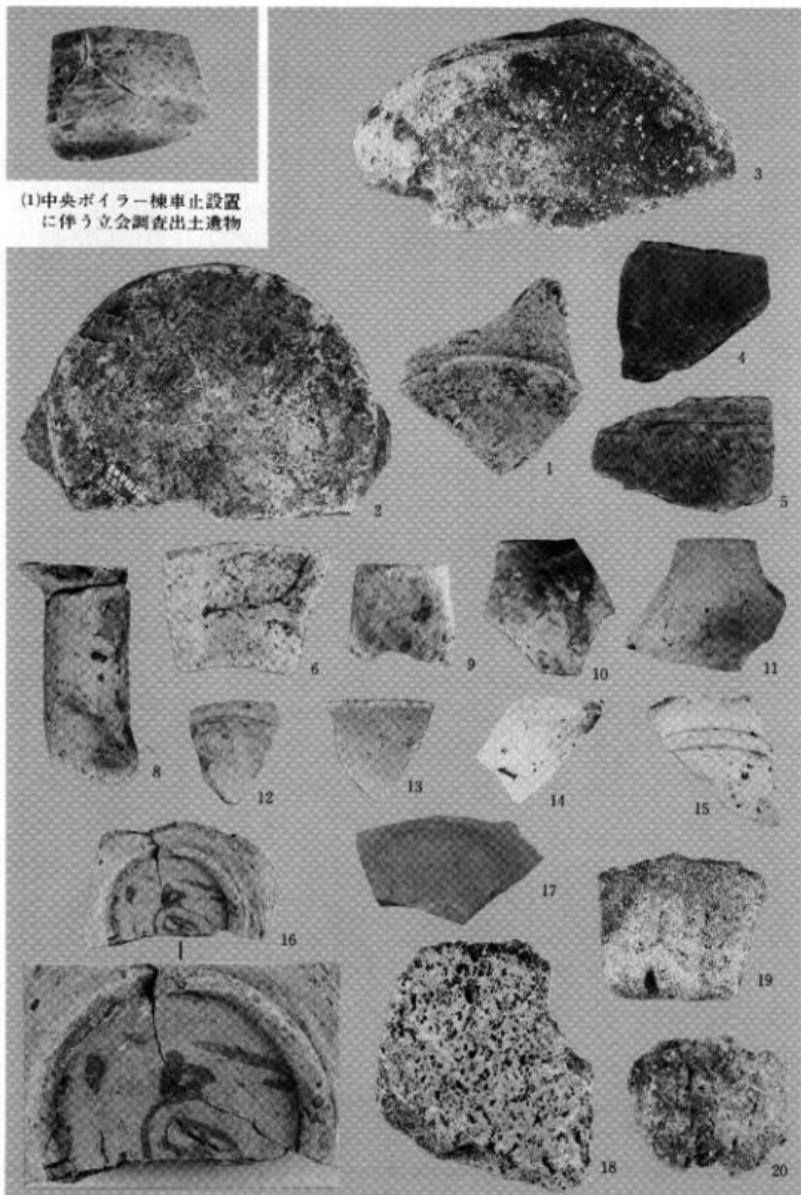
(4) 出土遺物



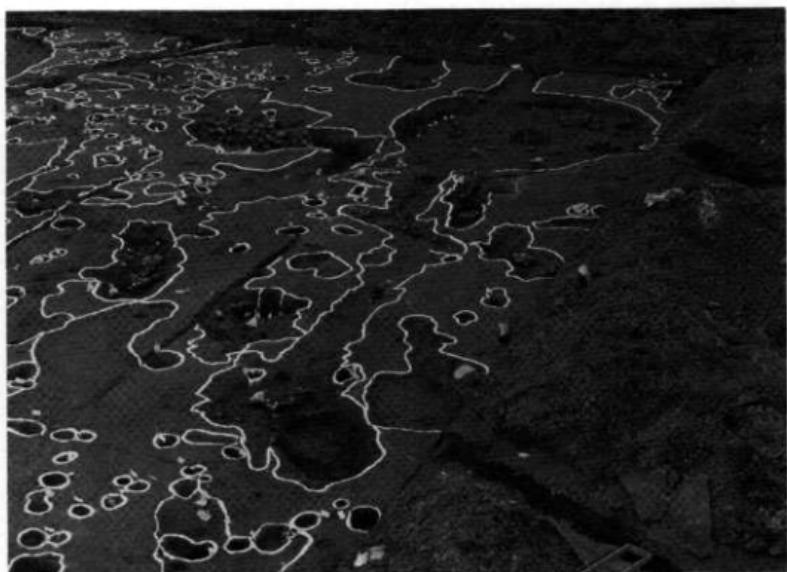
農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査出土遺物

PL. 22

昭和60年度山口大学構内の立会調査  
(2)



(2) 大学会館環境整備に伴う立会調査出土遺物

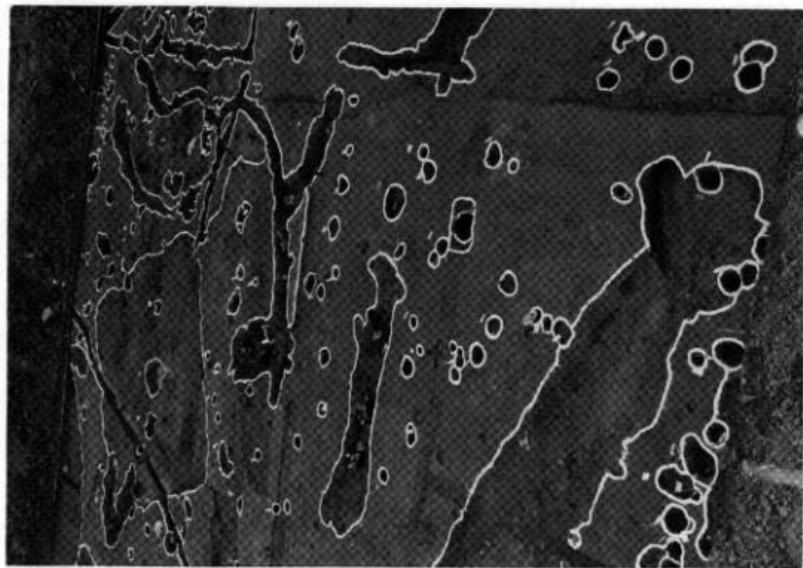


(1) 昭和57年度調査区北端部全景(東から)



(2) 昭和57年度調査区西端部全景(東から)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)  
(2)



(1) 昭和57年度調査区南端部全景(東から)

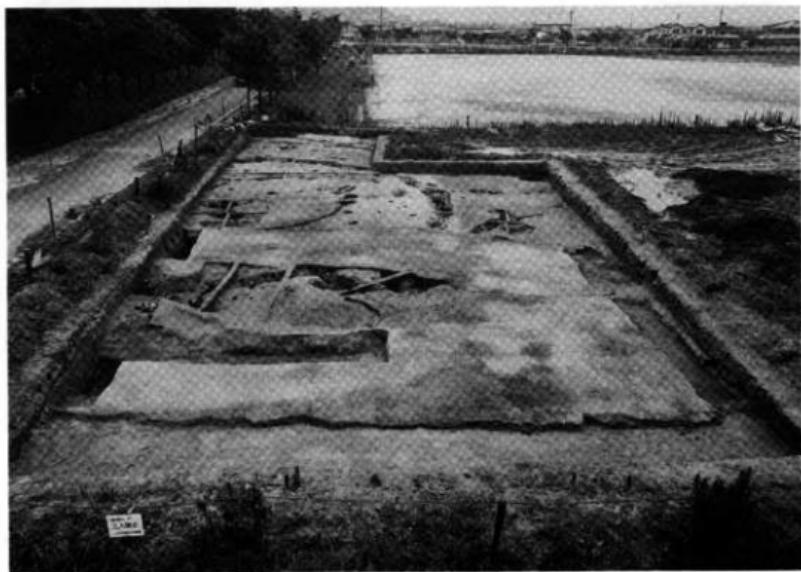


(2) 昭和59年度調査区全景(東から)

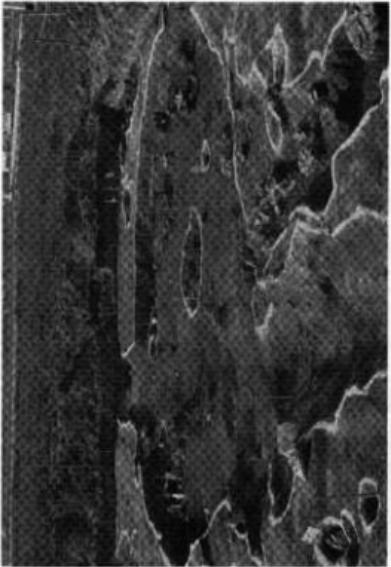
山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度) (3)



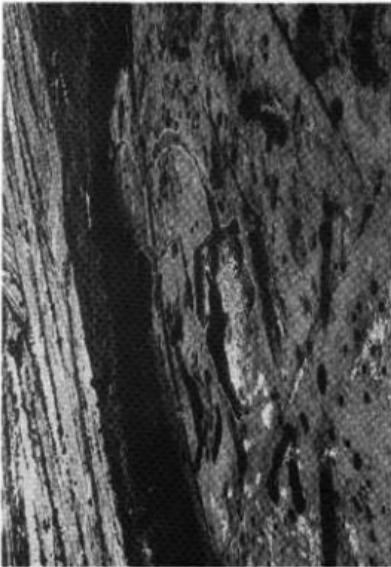
(1) 昭和60年度調査区全景(東から)



(2) 昭和61年度調査区全景(東から)



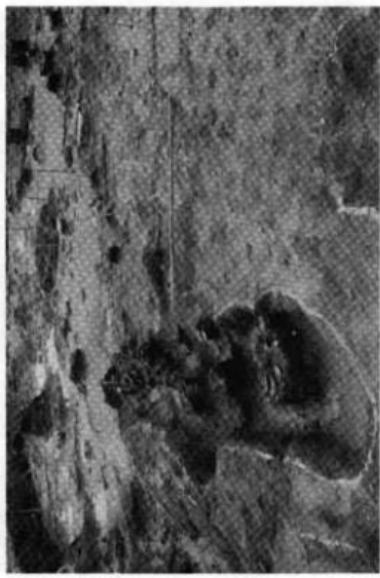
(1) 第1号竪穴住居跡(東から)



(2) 第2～4号竪穴住居跡(東から)



(3) 第7号竪穴住居跡(東から)



(4) 第4号土壙(南から)



(1) 第5号土壠(南から)



(2) 第8号土壠(南から)



(3) 第9号土壠(北東から)

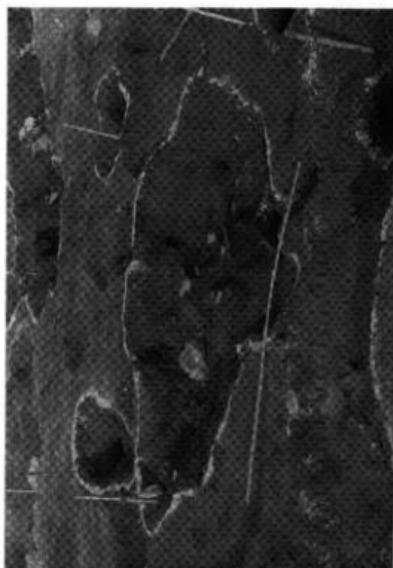


(4) 第17・18号土壠(北東から)

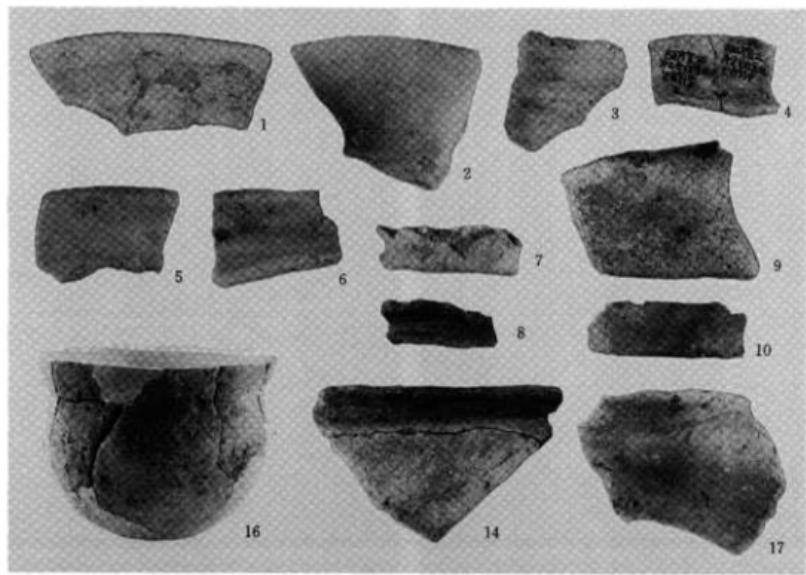
山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)



(1) 塚古墳土器(採石場)

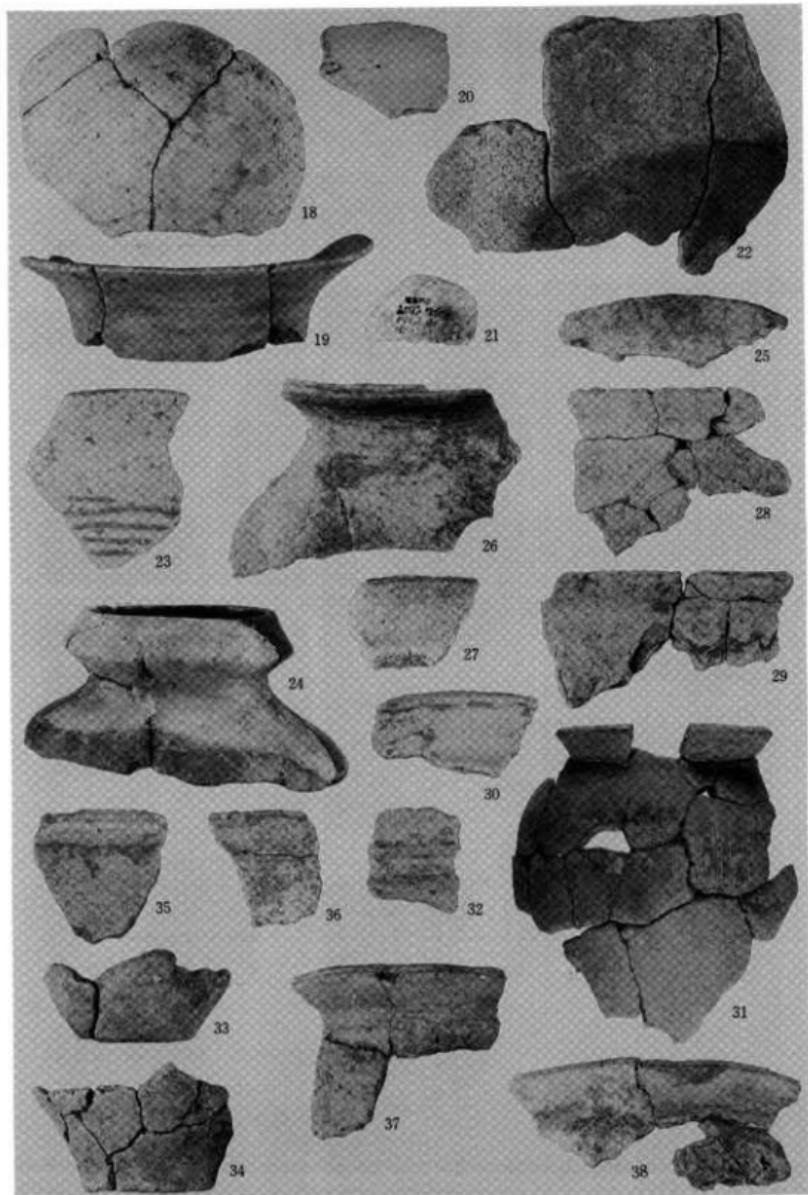


(2) 塚古墳土器(採石場)



(3) 出土遺物 (1)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)  
(7)

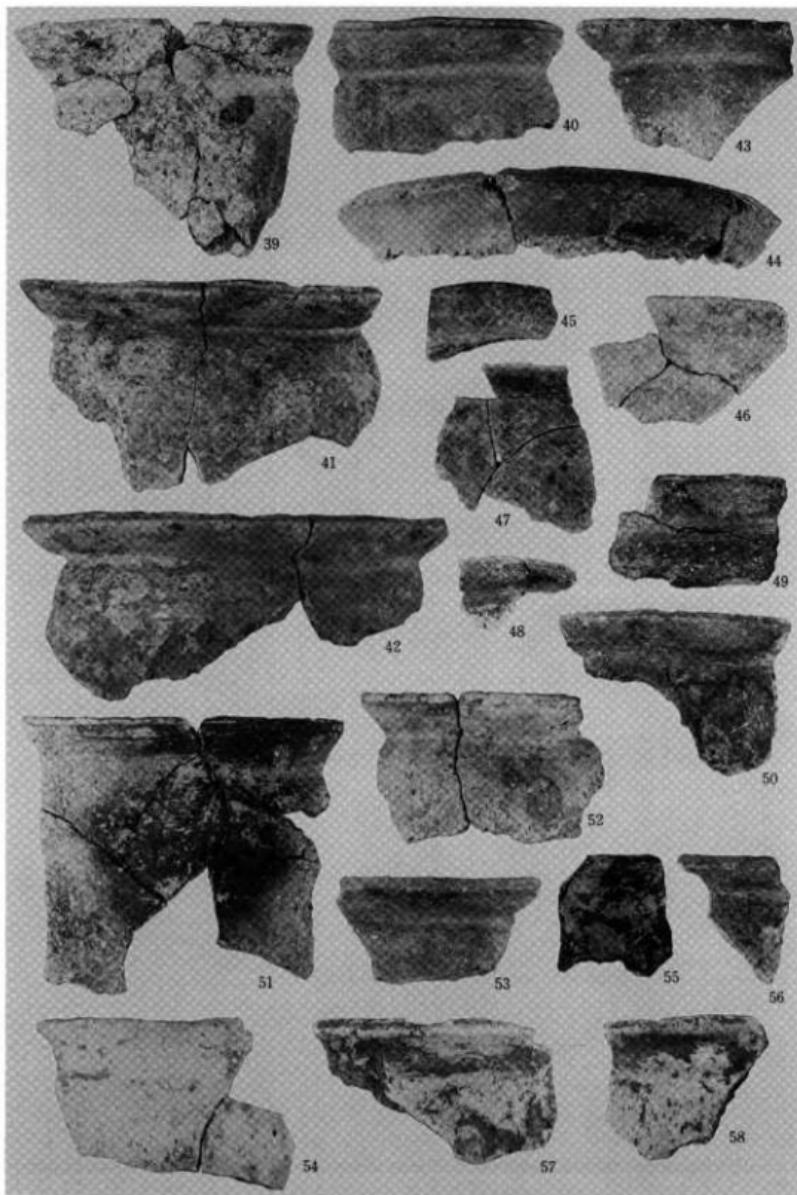


出土遺物 (2)

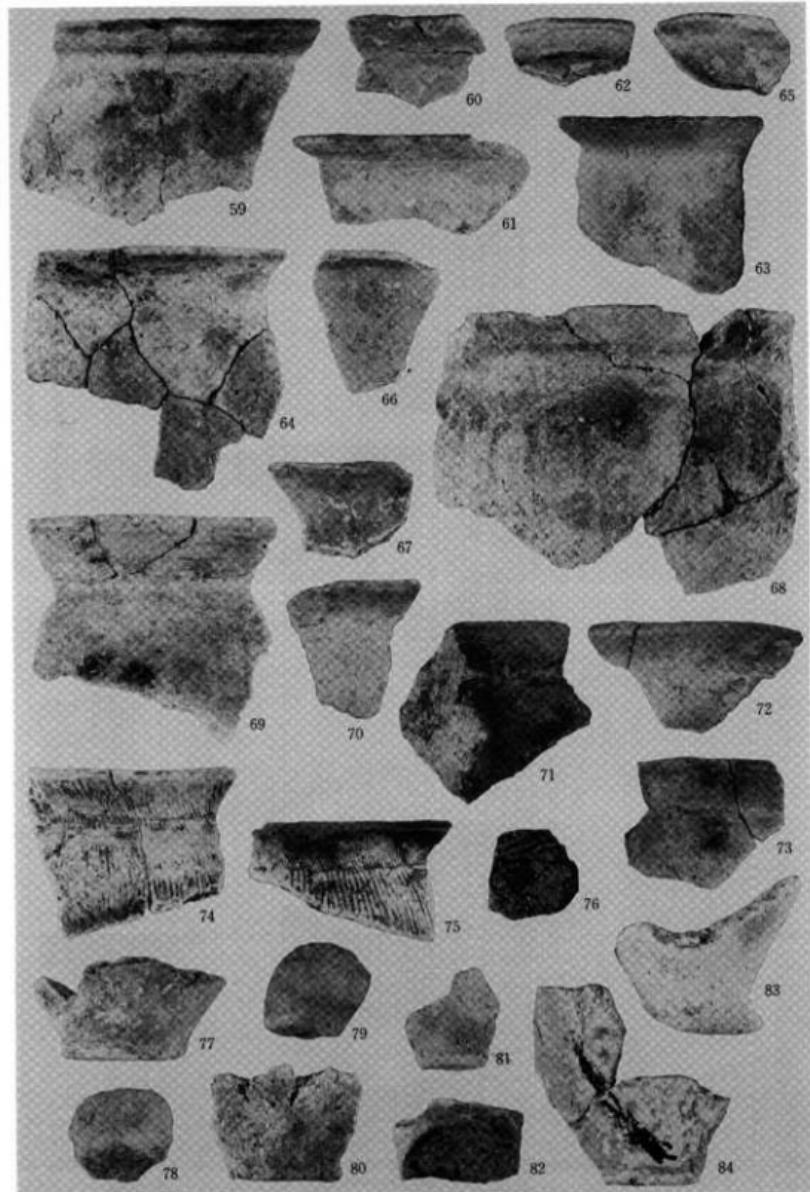
PL. 30

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

(8)



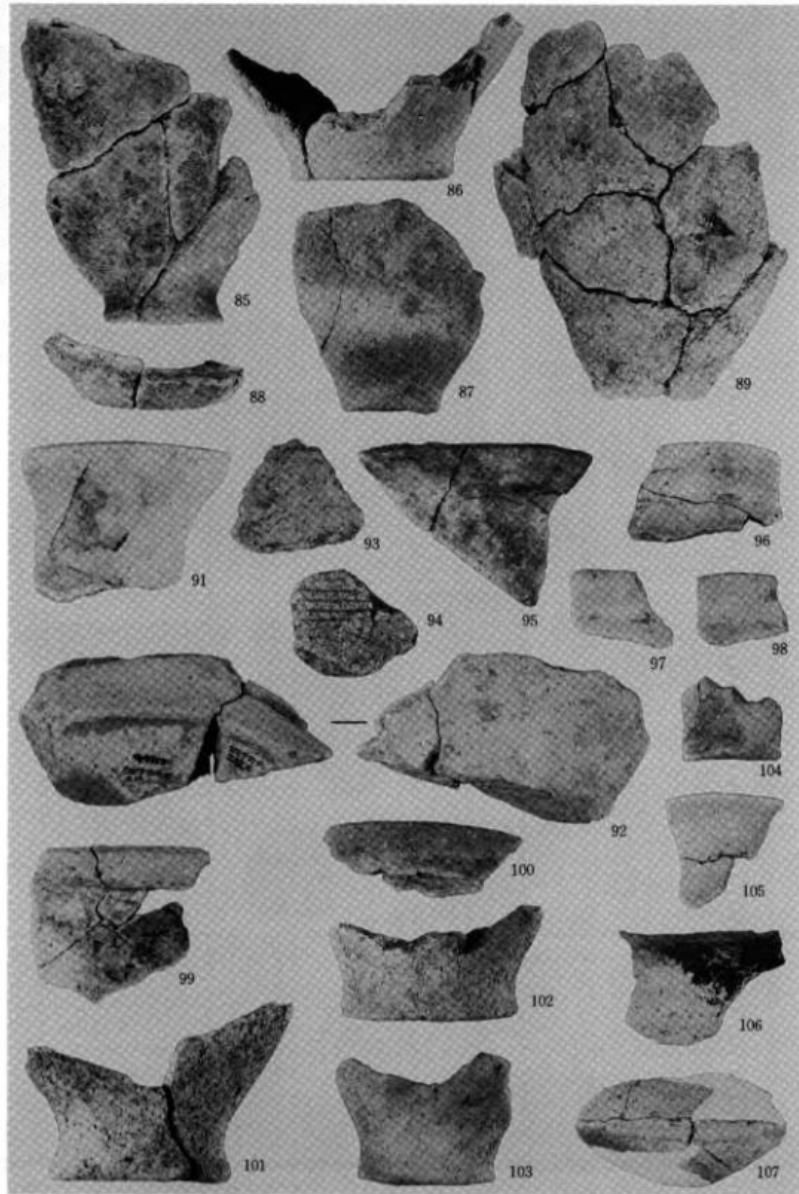
出土遺物(3)



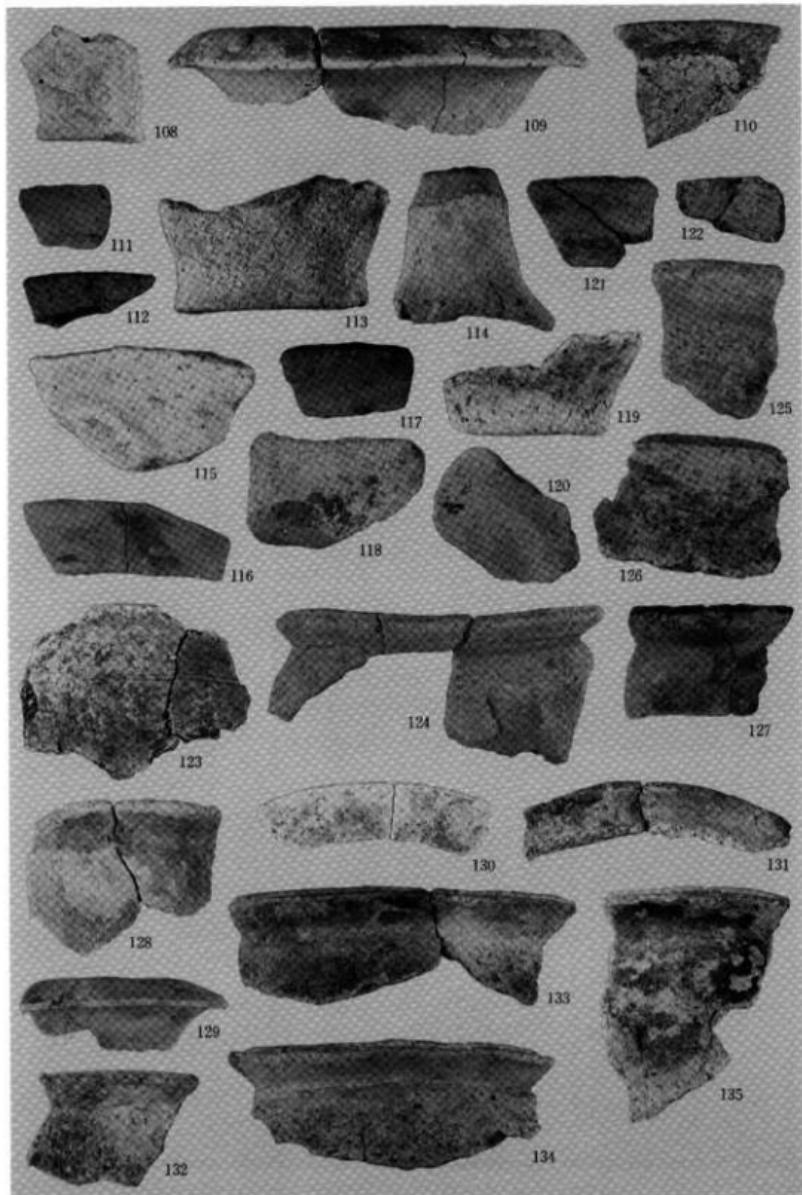
PL. 32

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

(10)



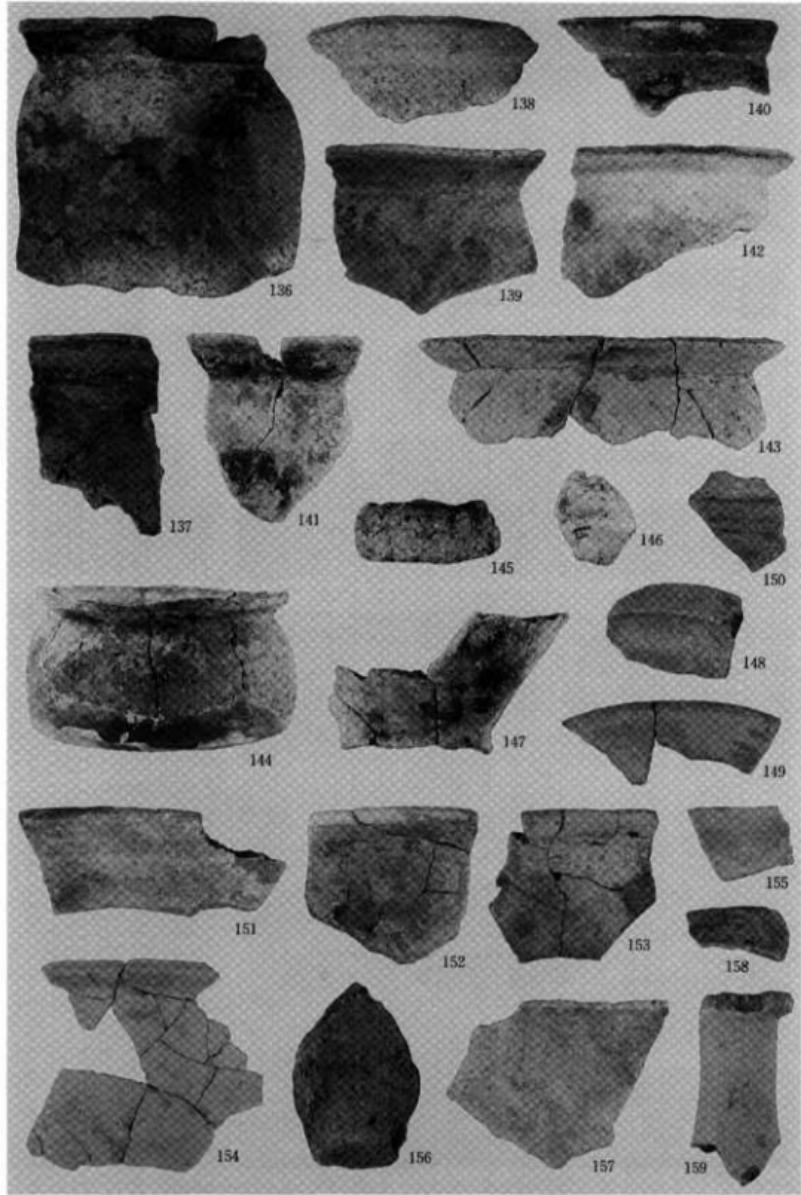
出土遺物 (5)



PL. 34

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

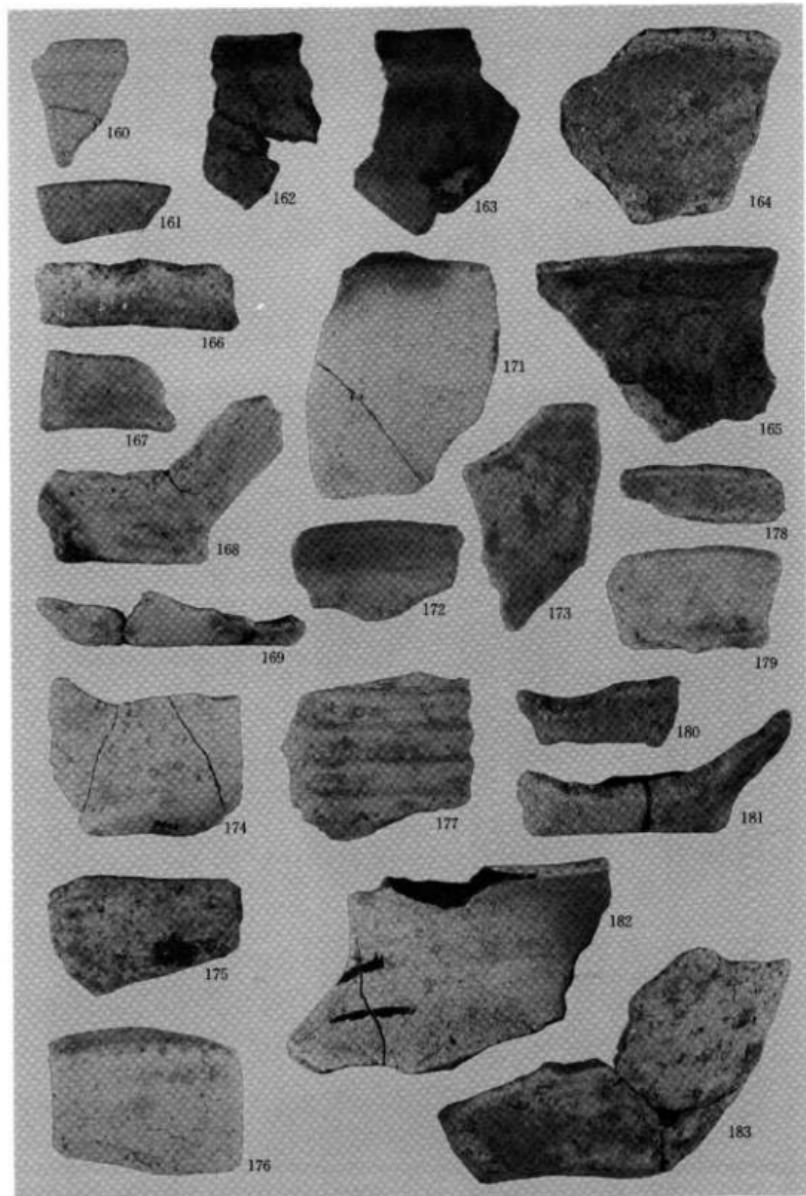
(12)

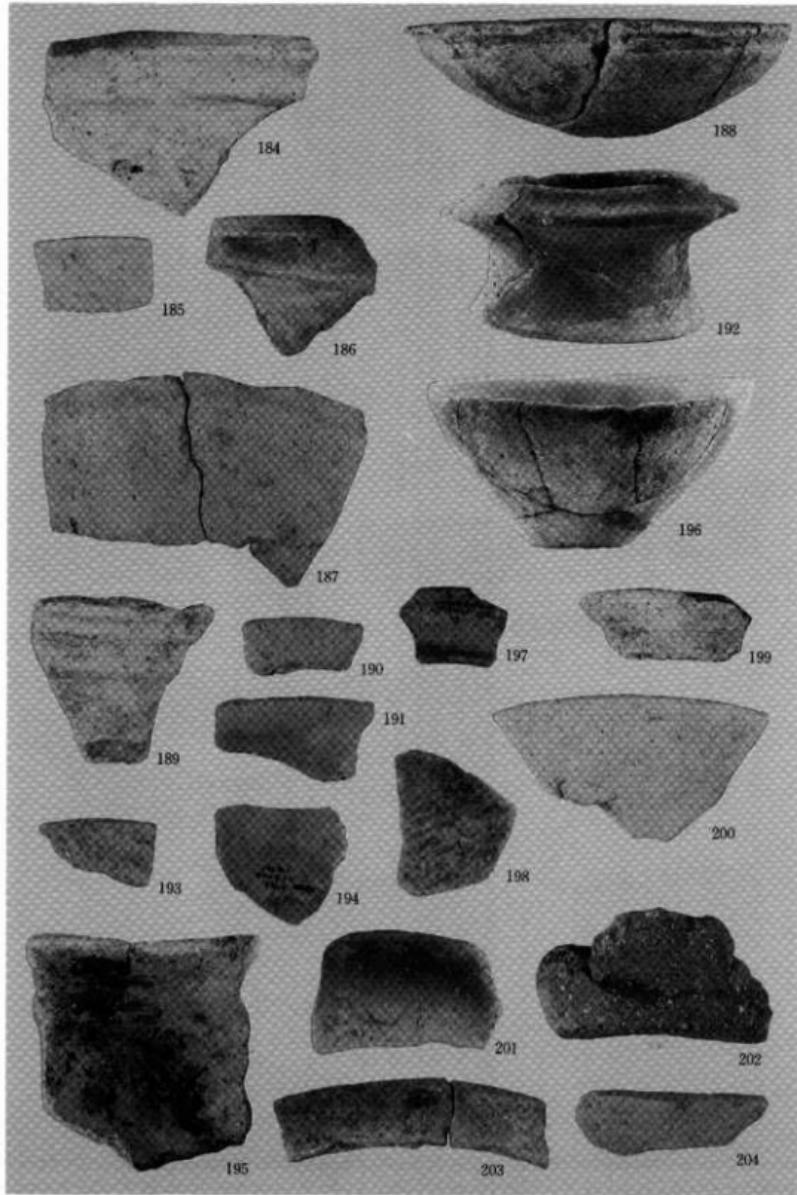


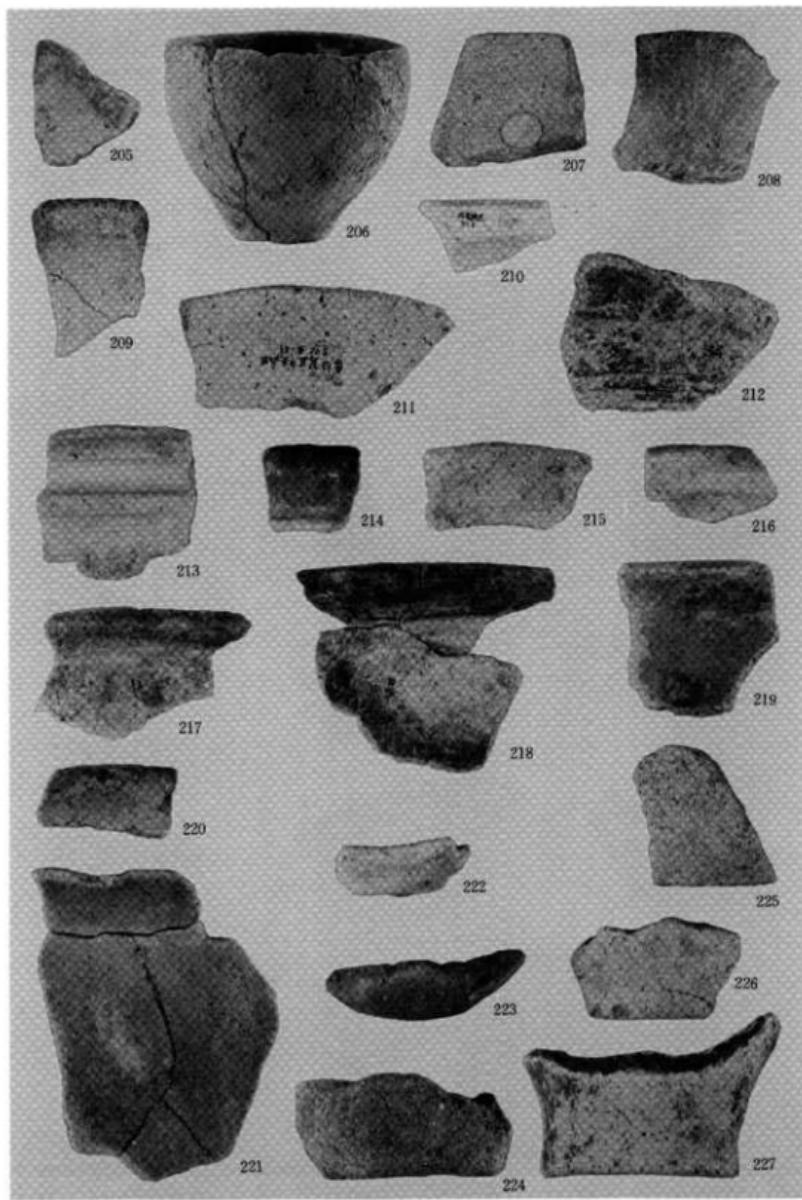
出土遺物 (7)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

(13)



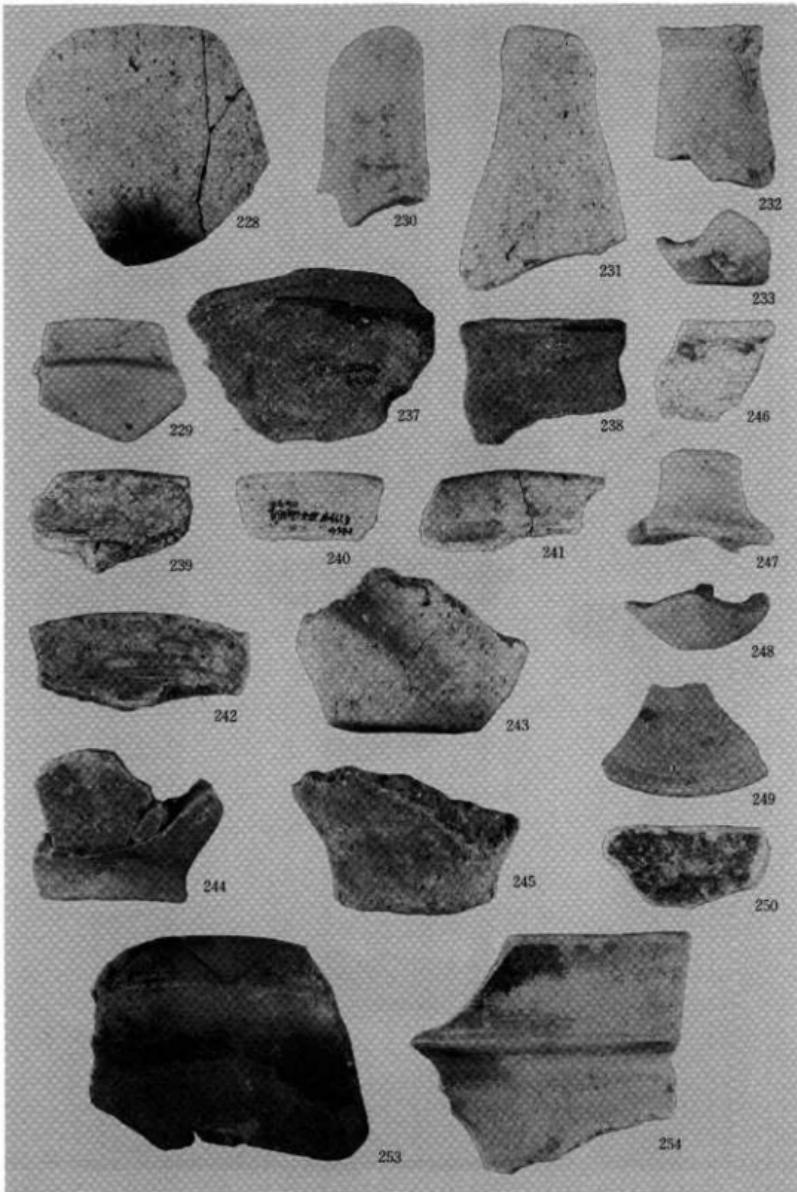




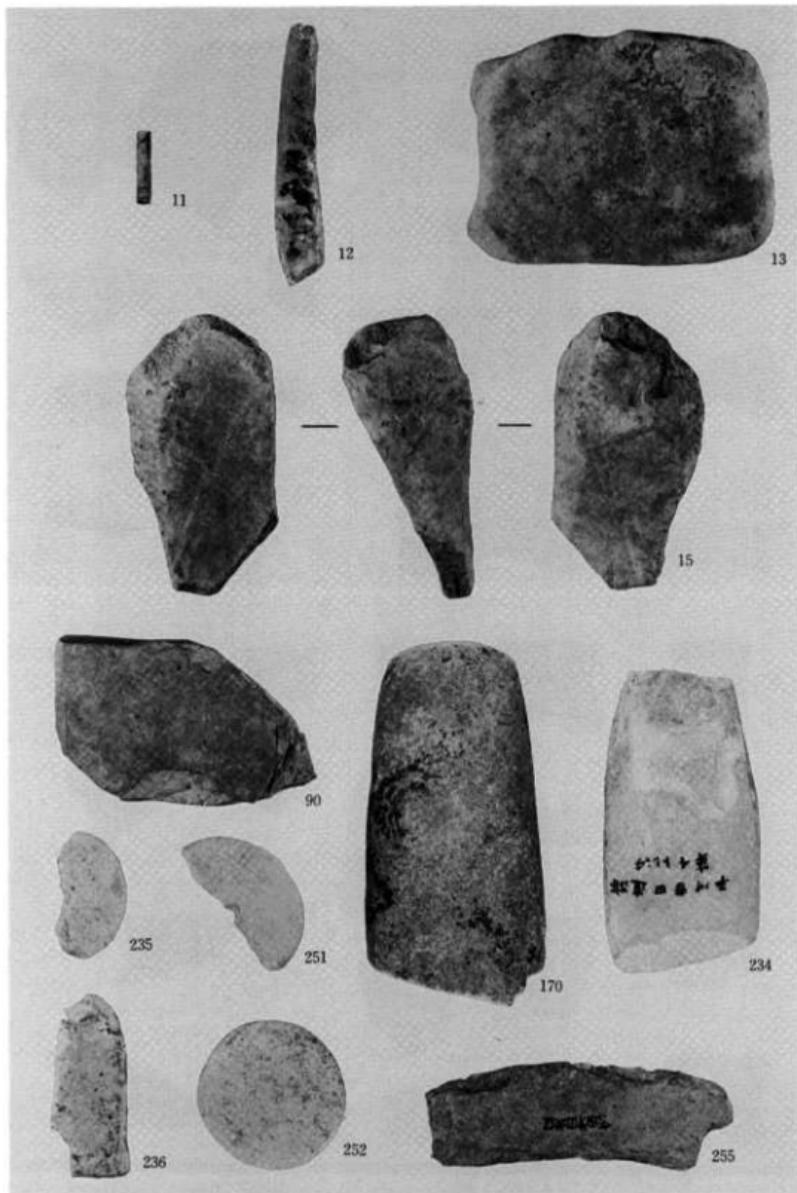
PL. 38

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)

16

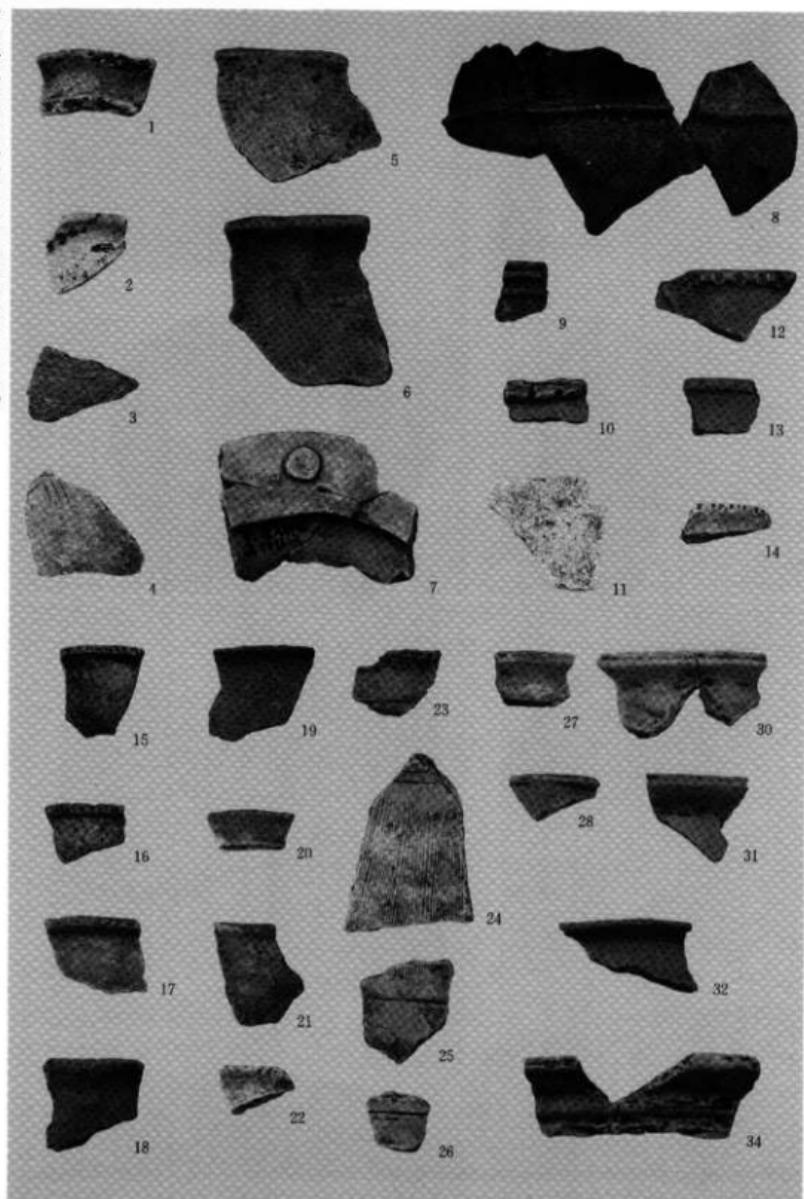


山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)  
(17)



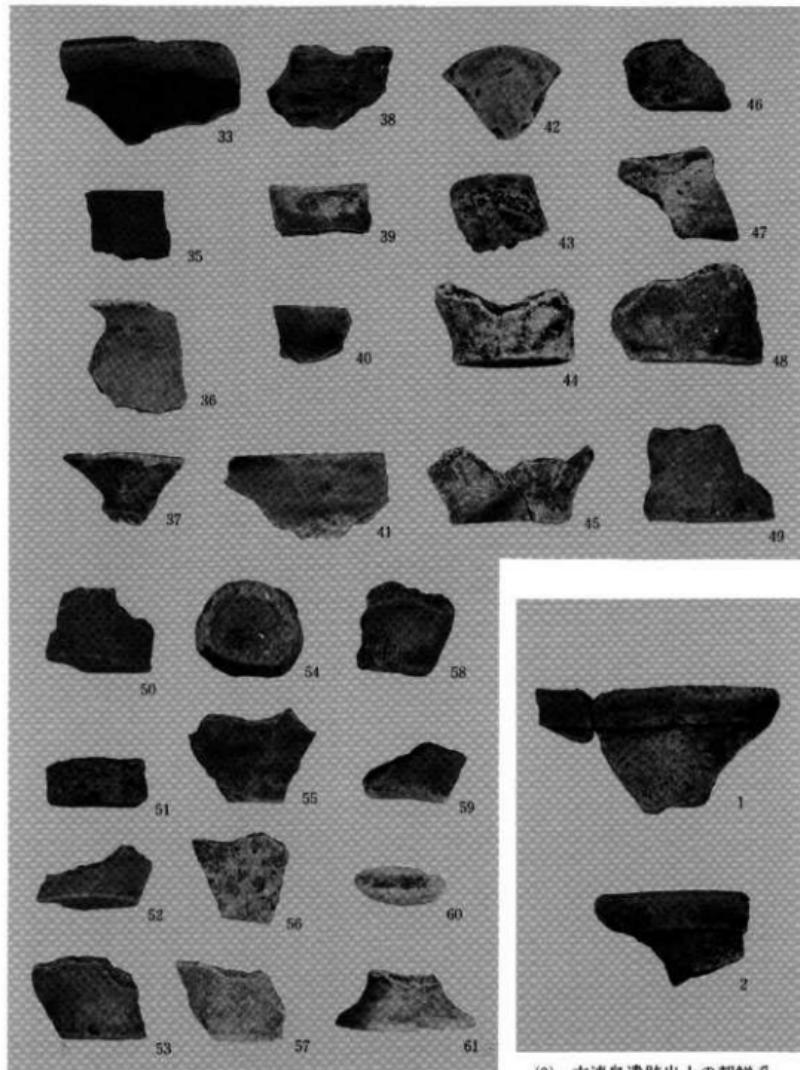
PL. 40

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器(1)



六連島遺跡出土の弥生土器(1)

下関市六連島遺跡出土の朝鮮系無文土器(2)



(1) 六連島遺跡出土の弥生土器(2)

(2) 六連島遺跡出土の朝鮮系  
無文土器

# 山口大学構内遺跡調査研究年報V

昭和62年3月

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753山口市大字吉田1677-1

印刷 桜プリント(企)

〒753山口市旭通り1-1-6

# ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol.V

## CONTENTS

### Chapter

I	General outline of the project on Yamaguchi University campus in 1985 .....	1
II	Soundings in relation to the construction of a new university hospital at the School of Medicine on the Kogushi campus .....	5
III	Soundings in relation to the environmental adjustment at the University Hall's garden on the Yoshida campus .....	11
IV	Soundings in relation to the construction of a new building for the fundamental study at the School of Medicine on the Kogushi campus .....	49
V	Soundings in relation to the repair of the Nurse Dormitory at the School of Medicine on the Kogushi campus .....	51
VI	Examination under construction performed on Yamaguchi University campus ..	55

### Appendix I

The report of the Excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 1982 .....	81
------------------------------------------------------------------------------------------	----

### Appendix II

Pits for the preservation of food in Yamaguchi Pref. .....	175
Plain coarse pottery originated from Korea excavated from Mutsurejima site .....	185
Lists of archaeological remains owned by Yamaguchi University Archaeological Research .....	197
The gist of researches and studies at Yamaguchi University .....	202
Regulations of Yamaguchi University Archaeological Research .....	202
Regulations of Yamaguchi University Archaeological Research Management Committee .....	203
Lists of Researches in Yamaguchi University .....	205
Summary .....	209

Published by

Yamaguchi University Archaeological Research

Yamaguchi, 1986